
訳有りの記憶喪失でも生きていける

駄作工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

訳有りの記憶喪失でも生きていける

【Nコード】

N8335V

【作者名】

駄作工場長

【あらすじ】

全身を大怪我した状態で発見された少年。そんな彼は記憶喪失だった！？しかも気づけば貴族の屋敷で執事になっていた……。唯一残されたのは名前だけ、今、前代未聞の物語が始まる……。かもしれない。現在、解雇中……。

独自設定、原作改変などが含まれます。ご注意ください

タイトルが違いますが旧題「執事にされた記憶喪失少年」です

番外編は幻想入り・・・？

プロローグ（前書き）

どうも、過去から学べない馬鹿、駄作工場長をしている者です。今回もいつもの発作が起きて完結できるはずの無い新作……。もうさ、寛大な人だけ読んでください。私はもう知らない！

プロローグ

「君、大丈夫！？今手当てするからね！」

綺麗なブロンドの女性が大怪我をしているらしい俺を抱きかかえる、
どうやら近くにいる人間に指示を飛ばしているらしいが・・・そこで視界が真っ暗になった。

「う、ん？ここは・・・」

次に目覚めたのは薬品の匂いが充満する場所、白い天井には蛍光灯が設置されており部屋を明るく照らしていた。おそらく病院なのだろうが・・・如何せん身体が痛い、すぐに動けるような状態では無かった。

「あら、起きたみたいね。気分はどうかしら」
「あなたは？」

見覚えが無い、まあ当たり前ではあるが・・・。

「私はミリア・オルコット、あなたは？」
「ご両親に連絡しなくちゃいけないのよ」

「・・・・・・・・・・」
「どうしたの？」

わからない、自分が何者なのか。記憶を探っても何も出てこない、家族も、思い出も。

「お、思い出せないです。なにもかも・・・」

「あらあら、それは大変ね。名前はどうか？」

どうにか探る、それだけはすぐに出てきた。

「き、如月音羽きつるぎおとのは」

「如月君ね、あとは覚えてないのね？」

「は、はい。それ以外は・・・あの、俺はどうなるんですか？」

一番気になることを尋ねる、おそらく孤児院行きだろうと思っていた俺の耳に驚くべき言葉が飛び込んできた。

「家で働いてみない？ 孤児院に行くよりは良いと思うわよ」

ブログ（後書き）

なんかさ、一巻から読み返したら衝動的に書きたくなったというww

今までもこうやって始めてさ、何回も失敗してるのにね。やっと「IS・ゴースト」で克服できたと思ったのに・・・orz

多分、向こうで行き詰ったときにこっちを更新すると思います。

過去から学べない私を誰か許して！

1 始まり（前書き）

ゴーストが投稿の一手手前で消えたショックから立ち直れないままです

1・始まり

「は？」

わけがわからない、ただそれだけだった。普通ならば見ず知らずの子供などを面倒みるよりは預けてしまったほうが良い。まして働かせるなど……果たしてそこまでの余裕があるのか？

「簡単な話、執事をやってほしいのよ」

「いや、正直俺はまだこんなですし」

事実、10歳程度なのだ。どうやら知能レベルは高いみたいだが……できるのだろうか？

ポケットに入っていた身分証らしきものには11歳とあったが、戸籍記録に俺の存在は無いらしい。

つまりは「存在しない人間」ということだ、はっきり言って面倒ごとなのは目に見えている。

「細かいことは気にしなくても良いわよ、まあ執事と言うよりは護衛だけだ」

む、むう。ここは好意に甘えさせてもらうのが得策なのか？戸籍が無いんじゃない孤児院にも預けられないし、この人にも要らぬ迷惑を掛ける。

「やります」

「はい、よろしくね」

こうして、俺、如月音羽の新たな生活が始まった。

1・始まり（後書き）

原作5年前からです、えっと・・・セシリアは10歳ですね

2 初仕事（前書き）

短い！

2・初仕事

「もしもの為に私の娘を守ってほしいのよ」

そうして連れて来られた場所は大きな屋敷、門の前にいるのだが・
・外壁の端が見えないとはどういうことなのだろう？まあ、気にしている暇は無いのだが・え、娘・・そりゃあ、11歳には自分の身を任せられないだろうけども。

「今日から配属になりました、如月音羽です。よろしく願いします」

ひとまず、最初の挨拶は大事だよね。これから世話になるんだ、助けてもらった恩もある、全力で頑張ろう。

「軍隊みたいね、その挨拶」

「ふへ？ああ・・・そうですね、以後気をつけます」

うゝむ、一体以前の俺は何をしていたのだろうか？気になるなあ・
・まあ、気にしても仕方ないか。

「・・・・・・・・・・」

なんなんだ、この俺をじゅつと見つめてくる金髪の娘は？「この娘をお願いね」ええっ！？

すごい警戒されてるんですが、軽く睨まれてるし・・・やっていけないのかなあ。

「お、お嬢様でよろしいでしょうか？」

「セシリアと付けるのをお忘れなく、あなたが執事ですの？」

「はい、全力で仕えさせて頂きます。音羽とお呼びください」

く、年下にとは・・・いや、仕事だから仕方ないか。ああ、こんなきつい感じの子を相手にか・・・。

旦那様は媚売ってるような感じだし、そうならば自然にこうなってしまうか。女尊男卑の社会の極端な例か。

「では、紅茶を」

「！はい」

移動するセシリアお嬢様（なんか抵抗が・・・）を確認しながら専属メイドのチエルシーさんをお願いし、自身はテーブルの準備を・・・！ああつ、もう座ってる！つと、運んで・・・。初日でこんなにできるかああああ！！

「はあ、はあ、はあ。・・・ふう」

「もう少しゆっくりでも良いですわよ？」

「はい、善処致します」

う、恥ずかしい・・・むう、だって早く出したかったし。どうせならすぐにできたてを出したいじゃないか、息をぜえはあやってたら意味無いが。

「あなた、名前は？」

「は、如月音羽でございます」

「そう、ではこれからよろしくお願い致しますわ」

「は！なんなりと申しつけください」

うん？好感触・・・なのかな、そうだったらいいなあ。

2 初仕事（後書き）

多分、次の更新は遅くなります

3・初日終了

「は~~~~」

どうにか初日の仕事を終えて、入浴中。え、早いつて？そんなの知るか、俺は疲れたの！

「はああ・・・なんとかやれたけど明日からが本番か」

今の時間は午後11時、もう既にほとんどの人は就寝している。早く俺も寝なくてはいけないな。
明日は6時から起こしに行つて・・・学校に送つて・・・その間にまた色々をやつて。

「・・・銃器の携帯は強制って言われたしなあ、そこまでなんかなあ」

どうやらオルコット家はその筋では有名ならしい、ミリアさんは大企業の社長だつて言うし。なんでそんな人が道端に倒れていた人間を見かけたのかはわからないが、まあ、感謝はしてる。でも、全身が赤く染まつてるほどの怪我だったのに俺が目覚めますまでの数時間でほぼ完治してしまつていたらしい。

「まあ、気にしてもしょうがないか・・・？」

なんかカラカラって音がしたぞ、誰か来たのか。こんな時間にとは誰だろうか。

「お疲れ様、どうだった？」

「ミリアさん、まあ、なんとかです」

なんとかとしか良いようが無い、なにせほとんど30点（自己評価）だったからなあ。まだまだ改善すべきところはある、仕える主に心配されるようでは意味が無い。というか笑い者だ。

「って、まだ起きてるんですか？」

「さっき片付け終わったところでね、社長は大変なものよ」

まあ、有名な大企業レベルだとそうなのだろう。まあ、上に立つ人間ができる奴じゃなければ成り立たないとは言っし……。俺って記憶喪失なんだよな？

「そうだ、音羽君の記憶喪失って全生活史健忘みたいよ」

「自分に関することだけ思い出せないって言うタイプですか？」

全生活史健忘（Generalized Amnesia）

発症以前の出生以来すべての自分に関する記憶が思い出せない（逆方向性・全健忘）状態。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ？ 私は誰？」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態である。「記憶喪失」と同視されている。障害されるのは主に自分に関する記憶であり、社会的なエピソードは覚えていることもある。

多くは心因性。まれに、頭部外傷をきっかけとして発症することがある。発症後、記憶は次第に戻ってくることが多い。治療としては、催眠療法で想起を促すことなどが行われる。

（Wikipediaより抜粋）

「やっぱりね、てか詳しいのね」

「うーん、もどかしいなあ」

「時機に戻るわよ、それまではここで頑張ってみなさい。あなたならできるわ」

はい、まあ、やってみるしかないよね。もし戻らなかったらここで正式に雇ってくれるって言うてくれたし。

「じゃあ、おやすみなさい」

「はい」

「どうか、セシリアをお願いね」

それが何を意味しているのか、その時の俺には想像もつかなかった。

3・初日終了（後書き）

もう少ししたら飛びます

4・とあるいつもの

「お帰りなさいませ、セシリアお嬢様」

一年も経てば仕事も身に着く。え、時間経過が早すぎる？誰が自分の醜態なんか晒したいんだよ。

笑われたんだぞ年下に！まあ、一つ下くらいどうってことは無いけどさ。

「さてと、チエルシーさん浴場は？」

「いつでも入れます！」

最近風呂に帰宅後すぐに入るようになったセシリア、うん、風呂は良いよ！疲れがとれるからね。

ちなみに、俺は名前や見た目からして東アジア系。おそらく風呂好きから日本人らしい。というかDNA検査で日本人に一番近かったらしいが。

「音羽」

「はい」

最近だったらこれだけで何を要求されているか一発でわかる、今は『風呂上りのアイスティー』だ。

個人的にはアイスボックスなのだがなあ、まあ意見はしないけど。

「やはりこれに限りますわ、ねえ？」

「個人的にはピノですがね」

「それは何ですか？」

「日本で販売されている氷菓です」

やっぱり意見する、うん、雪見大福も良いよね！アイスが好きなんですか？もちろん！

「そのうち食してみたいものです」

「そうですね」

「結局執事らしくありませんわね、音羽」

勝手に言ってくれ、自分でもわかるけどさ。まあ、仕える身なのに敬語使わないとかは納得だけど。もっとフリーダムでも良いと思うんだ、やるときはやるけども。

「あ、そういえばアイスクリーム店ができたらしいですね」

「早速休日に向かいますわよ！」

なにぶん、甘いもの・アイス好きってことで打ち解けたのも大きい。最初に比べて結構話すし。

最近では暇な時間にちよつとしたお菓子を作って出すこともある、しかも中々に好評だ。

ミリアさんもこの前はサンドイッチを持っていったし。作った甲斐があるというものだ。

「その前にヴァイオリンです、あともう少しですからそんなに落ち込まないでください」

「はあ、やらなくてはいけないと分かっているても憂鬱ですわ」

まあ気持ちはわかるけどさ、どっちかって言ったら俺だってやらせたくないよ。

オルコット家が舐められるのが嫌だって気持ちは同じだから仕方ないけどさ。

「そついえば来年の6月にはもうリニアトレイン開通ですね」

「お母様が招待されていますわ、本来ならばわたしも行きたかったのですが」

まあ、企業トップとか代表に対してのお披露目式だからなあ。いくら娘でも無理だろう、その日は確か運動会だったっけ。

4・とあるいつもの（後書き）

やべえ、フラグや（両親の）

5・いつもなオルコット家

もはや日常と化した燕尾服執事が掃除機片手に歩き回る光景・・・俺だよ。

なんかこう座ってらんないんだよね、お掃除ロボットと一緒に掃除機を走らせる。

「~~~~」

え、係の人に任せろって？俺の暇つぶしを取らないでくれ、後は全クリアしたP。P版IS/V5くらいしか無いんだ。何もすることが無いときに裏ルートとかまで行っただし。することが無い。

「ん？ありや、壊れてんのか」

突然その場で回転・・・わ、ここまで高速で回転できるものだっけか？何故か独楽のように回り始めたお掃除ロボットを掴み自室に向かう。暇人の力をとくと見よ！

「ふむ？ああ、シャフトが曲がってるのな」

暇すぎた結果身に着いた器用さでドライバーやピンセット、ペンチを動かす。手先が器用になったは良いけどこれが暇人の末路と思うと空しい。普通は暇だからって専門書を読まないと思うが・・・それしか無かったという現実。身に着いて損はしないけどさ、なんか悲しいのは俺だけか？

「マスター、お嬢様が呼んでいます」

「え、そう？わかった」

絨毯が敷き詰められた廊下を先導して走るのはサポート用ロボット
のメタルギアmk?。いや、できるかな? って休暇のときに2日
でMGS4をクリアし、3日で急造したんだ。女尊男卑の世の中
でもああいうゲームがあるのは嬉しいところだ。

「ただいま来ました」

「音羽、ちよつと相手になつてくれませんか?」

そう言つて手渡されるのは一本のラケット、セシリアの手にはラケ
ットとシャトルが握られていた。

mk?はなんか得点板の近くに移動してるし、バドミントンしろと?

「まず着替えさせてくれ」

「すでに準備していますマスター」

ワイヤー状のアームには運動用のジャージが握られている、なんで
ここまで完成度高いんだろうか。

というかこの光景が普通になっているのだから凄い、セシリアに至
つてはお気に入りらしい。

「つと、その前にお客さんか?」

「そうみたいですわね、数は「7」です」そうですか」

名家である以上その遺産は莫大なものになる、無論それを狙う輩は
必ずいる。その令嬢となれば狙われるのは当たり前である、人質と
しての利用価値に奴隷としても。そんな奴らからの守護を命じられ
ているのが俺なんだがな。

「mk?、セシリアを連れて中へ」

「了解です」

「音羽、頼みましたわよ」

「終わったら続きをしましょう」

足元に敷き詰められたタイルの一つ、注視しなければわからないレベルで飛び出ているそれを踏む。オルコット家本邸に設置されている自衛用のガンストックの一つ。それが目の前に音を立てて展開される。

「守られる」のではなく「攻める」

これが長い間オルコット家が生き残ってきた理由らしい、ミアさんも一度組み手してもらったけど強かったし。そのときに銃器の扱いも基本から叩き込まれた……。

「とはいえ、まだ11の子供には撃たせられないよなあ」

俺は12だが……。

ストックに立て掛けられているM4カービン（硬化ゴム弾）を構える、なあと精々痛いだけだよ。当たり前所悪いと骨にヒビ入るけど。

「もらい！」

特注のドラムマガジンからゴム弾が絶え間なく供給され、木の陰や柱の上などあちこちの侵入者の額を撃ち抜く。流石に子供に人殺しはさせない、というか殺さずに撃退できるのならばそうする。

「ぴぎゃ！」

「ふみゃ！」

「んのわあ!？」

「ぎゃあ!？」

「ぬぶ！」

「ウゾダンドコードン！」

あゝあゝ、どさどさと地面に落っこちてくる侵入者（笑）。そりゃあ額に大きい衝撃が走れば普通にはしてられないよな、なんか聞こえたが無視するけど。

「さてと、そろそろ来たらどうだい？」

「素晴らしいな、流石オルコット家のと言ったところか」

拍手をしながらこちらへ歩いてくる男、身長は高すぎて俺じゃあ頭は触れられないか。というか2mは普通に超えてるよなあ・・・正直そんなでマッチョとか気持ち悪い。さっさと倒してしまおう、うん、そうしよう。

「マスター、こいつら纏めておきます」

「ああ、わかった。セシリア、もうちょい待ってな」

「はい、急いでくださいね？」

「りょーかい」

え、大男空気って？知るかそんなもん、勝手に入ってきて邪魔しやがった奴に平等に対応すると思ったら大間違いだ。

「無視すんなコラー！！！」

「はいはい、逆ギレ乙！っ」と

ベキゴスドゴ！

ラリアットをしゃがんでかわし、隙を見つけたらそのまま足を引っかけ転ばせる。もちろん足首の関節は外して、じやなきや逃げる

からね。ついでに後頭部を肘で殴りつける、はいおしまい。

「いつ見ても上手くやりますわね」

「ははは、じゃあmk?頼む」

「はい」

気絶した大男をmk?が引きずっていく、ちなみにこれも日常の一部だったりする。いや、普通じゃないだろうけどさ。

「じゃあ、やりましょうか」

「ええ、負けませんわよ!」

今日もまた賑やかなオルコット家です、と。そういや明後日はリニアラインの記念式典だったけか、今日から1週間はミリアさんがいないから俺が管理してる。といっても全部の指揮権はセシリアにあるんだがな、なんでも有事のさいは全て任せるんだとか。やっぱ出来る人は考えが違うね、用心にこしたことは無いってことだよ。

「さあ、手加減しませんよ?」

「勝つたら今日はわたくしが夕食作りますわよ!」

え、それは防がねば!

5・いつものオルコット家（後書き）

あゝ、両親フラグ！

ちなみに名前呼びしてるのは仕事振りが認められたから・・・
と言う名の実はフラグ立ってた（展開の都合上によりまだ見せません）

6・とある朝の風景（前書き）

のどかだねえ・・・

6・とある朝の風景

「ふああゝゝゝ、朝か」

午前5時、俺の一日の始まりだ。いつもはもう少し寝てるんだがミリアさんが式典参加で不在のために俺が実質仕切らねばならない。

「mk?、皿並べておいて」

「はい、マスター」

あゝ、午前の仕事終わったらmk?の整備しよう。もしもの為にREXみたいにしよう、うん。

つてその前に窓開けなくちゃならないな、雇ってる人員が少ないし他の人は休ませたいから俺が率先してやる。

「それにしてももう二年ちよつとになるのか、早いなあ」

俺がボロボロの状態で病院に運ばれ、ミリアさんに雇われて執事兼護衛をしてもう二年。思い返せば言葉にできないほどに助けてもらった。

「一生かかっても返せないなこれは、つてやべもう七時だ!」

八時にはセシリアを学校に送らねばならない、しかも俺が起こすことになってるんだよ!遅刻なんてさせられない、いや、いつもこんな時間だけでもさあ。

「おっはようゝ、朝だぞ。起きろゝ!ふぐわ!」

「五月蠅いですわ、もう少し静かにできませんの!?」

うん、騒がしく起こしたから枕を投げつけられた。当たり前か、朝から元気が出るようにと思ったんだがなあ。

「ホント、執事らしくない執事一位も領けますわ」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてませんわ！まあ、護衛としては優秀ですが」

とふざけている暇も無いか、さつさとしなければ遅刻してしまうし。それにそんなことがあれば帰ってきたミリアさんにボコられる。それだけは勘弁したい、なにせ娘のことになるとあの細身の体からは想像できない力出すから。

「さあさ、今日は味噌汁に納豆とたくあんに卵焼きとほうれんそうのおひたしですよ」

「あゝ、今日は納豆ですか」

誰だ、貴族らしくない朝食だ！って言ったやつは、いくら資産があつてもいちいち高級なものばかり食べるわけないだろ。それに日本食ブームらしいから良いんだよ、味噌汁は気に入ってるらしいし。納豆が苦手らしいけど。

「好き嫌いはダメだぞ、綺麗でいたいならしっかり食べる。いいな？」

「わ、わかってますわ。まったくもう、卑怯ですわその言い方」

「なんか言ったか？」

「なんでもないですわ！」

なんだろうか、ここ数ヶ月俺と会話してるはずなのに語尾が小さくなることがある。今時はそういうのが淑女のたしなみなんだろうか、

俺はわからないから指摘しないけども。

「今日は音楽発表会が9時からなんですから、急いでください」

「8時には会場入りでしたわね、音羽、車の準備を」

「はいさ〜！」

え、なんで未成年が運転できるって？するわけないだろ、mk？に任せるんだよ。一応AI載せてるからそれくらい簡単だし。

「マスター、準備終わりました」

「行きますわよ！」

「おし、mk？出してくれ」

向かうは音楽発表会が行われるエルウィンホール！

6・とある朝の風景（後書き）

あと2・3話で急展開の予定

7・日常への亀裂

さて、到着したはいいが・・・Dの35つてどこだ？親の代わりとして入ったはいいが、広すぎてわからん。

というか小学生レベルの奴が親代わりに観客席にいるってのも不思議な話だが。なにに、案内板によると、おおすぐそこだ。

「ふう、これで落ち着いて見れる」

ふかふかの座席に座り、腕時計を確認する。そろそろだな、確か合奏でヴァイオリン演奏だったっけか？

いまだにこういう高級椅子には慣れない、気持ちよくて寝ちゃうんだよな。今日は寝る暇なんて無いけども。お、始まったみたいだ。

中学クラスのグループの次に小学生クラスの順番だ、流石中学生と言ったところだった。

「それでは最後に『チゴイネルワイゼン』です」

確かサラサーテ作曲1878年の作だったか、ギャグマンガから舞台まで幅広く使われる誰もが一度は聞いたことがあるはず。mk？
にアラームで鳴らされたときは驚いたけども。

た~~~~~~~~

特徴的な始まり、う~~~~んなんともサスペンス劇場な感じ。おお、手さばきが上手くなってる。俺の場合はPCかmk?で弾くから全然弾けない・・・別にいいさDTMで。

「お疲れ様、良かったよ」

「と、当然ですわ!」

帰りの車の中で向き合いながら談笑する、付き添いで練習して良かったな。終わったあとは拍手喝采の嵐だったし、できたらミリアさんにも聞いてほしかったな。まあ、録音はバッチリだしあとでメールで送ろう。うん、そうしよう。

「よし、じゃあ今日は久しぶりに腕振るっちゃうかな」

「お母様にも聞かせてあげたいですわ」

「ん、じゃあさっさとメール送るか、ちょい待ってな」

ケータイを胸ポケットから取り出す、このときほどこの行動を後悔したことは無かった。

緊急ニュース速報が画面の下を流れる、そこに表示される『リニアトレイン試乗車事故、生存者不明』の文字。

「どうしたのです、そんな蒼白にして」

「まあ、待て。まずは戻ろう。mk?、急いでくれ」

落ち着け、まだ詳細は分からないんだ。いや、おそらく信じたくないという拒否反応からなのか、それとも突然すぎて感覚が麻痺していたのか。

「お嬢様！音羽さん！」

「わかってる。セシリア、早く来い」

「なにが……」

客間に入った瞬間、その場にいる誰もが口を閉ざした。テレビ中継される悲惨な事故現場を、陸橋の一部が砕けリニアトレインが地上13mから転落。炎上している光景を。

「そ、そんな……お母様……」

「待て、セシリア、気をしっかり持て。まだ決まったわけじゃない」

いや、誰もがこの映像を見て生存者がいると言えるわけがない。画面いっぱい火の赤が広がり、今まさに燃えているのだから。車両は炎に包まれて黒煙だけが立ち上っている。

「チエルシーさん、セシリアを向こうへ」

「はい、確認をお願いします」

結果は悲惨だった、1週間後に届いたのは両親の遺体が見つかったとだけ。確認には俺だけで向かった、無論、セシリアに見せられる状態ではなかった。おそらく、一番大変なのは明日からだろう。

「ただいま戻りました」

重苦しい空気が客間を埋め尽くす、もう誤魔化せない。言うしかない。

8・離別・決意・出発

「そう……ですか」

オルコット家本邸はいつも以上に暗い雰囲気が充満していた、だが、泣くことは許されない。

目の前のテーブルにはミリアさんの自室にひっそりと仕舞われていた遺書がある。そしてその内容は思いもよらないものだった。

「もし、これが読まれているのなら私はこの世にいないでしょうね
おそらくこれを読んでいるのはセシリアとチエルシー、音羽君でしょうね。」

あれこれ書く前に言うておくわ、ここに書かれたことは絶対に行くこと。

例え不満があっても必ず。

まずはセシリア、あなたはもう十分自分で立つて生きていけるはず。
勿論、まだ子供のあなたには大変かも知れない。

それはわかってる、でも一つだけ。あなたの名、オルコット家を守り抜いてちょうだい。

おそらく遺産目当ての親戚が大勢来るでしょう、いや、もう来たかな？

ただ、あなたの帰る場所をあなたが守ってちょうだい。これが母である私からの最初で最後のお願ひ。

チエルシー、幼馴染であるあなたにはセシリアの傍にいて支えてあげて。

酷かもしれないけど、あなたに教えたことを使つて。
メイドであるあなたに頼むのは正直悪いと思つてる、だけど、どうかお願い。

音羽君、あなたは拒否してしまうかも知れない。

あなたの気持ちもわかるけど、残念ながら私が残したものではない。
たのことを守りきれない。

私が生きていたなら護衛を頼めたのだけれど、右目のこともあるから。

あなたがこれを見た翌日、あなたを解雇して日本に移住させます。
あなたには生きていてほしい、そのための手段なの。
許してちょうだい、今のあなたを守るほどの力が無いの。

「そ、そんな」

「まあ、そりゃそうか。戸籍無し・記憶無し・右目は軍の兵器、隠すのが難しいか」

つまり、俺は無理をして守られていたということ。俺という一人の人間のために。

一年前にあつた誘拐事件、その時に発現した右目の擬似ハイパーセンサーらしきもの。

ドイツで生み出された技術らしい、そんなモノを持つてる人間を秘匿するなど普通の人にはできるわけがない。

「わかりましたお母様、音羽、チェルシー。わかりましたわね」
『はい』

もし、俺が残ればオルコット家が危険に晒される。結局は俺が出て

行くしかない。

俺ができる恩返しはそれしかない、まだ幼いセシリアを置いて出て行くのは気が引けるが。

「気に病む必要はありません、あなたには生きていてほしい。それだけです」

「ッ・それ言ったら卑怯だよ、わかったよ。ただし、ここを頼むぞ」

「わたしもいます、心配しないでください」

手続きや屑な親戚を脅してスッキリしたとある9月の朝、場所はロンドン・ヒースロー空港第三ターミナル。一応あれこれやっている内にあつと言う間に三ヶ月、まあ親戚共は掃除できたし大きい心配事は無い。頑張っ^{クス}てイギリスの代表候補生になってやるって言ってたし、あの目は本気だ。

「じゃあ、セシリアのことお願いします」

「お任せください、何があっても大丈夫です」

チエルシーさんがいるし、もう大丈夫か。あとは俺が生きていけるかだ。

「じゃあ、セシリア」

「ええ、でも、たまには連絡くださいね」

「わかってるって、元気だな」

「はい！音羽もお元気で！」

搭乗口へと歩く、振り返ると涙目のセシリアが手を振っていた。俺も振り替えず、おそらくもう二度と会えないだろう。二年という短い間だったが、一生俺はあそこで過ごした思い出を忘れないだろう。最後にセシリアへ向けて敬礼をする、さようならセシリア。そして、ありがとう。

俺を乗せたジェット機が名残惜しそうに飛行機雲を作りながら空へと飛んでいった。
救ってもらったこの命、絶対に無駄にしない。必ず生き延びる！そう決意した俺を乗せ飛行機は遙か遠くの日本へと向かっていった。

8・離別・決意・出発（後書き）

次回から新生活の始まりです

9・主人公設定

きんぐおとけ

如月音羽

年齢（原作開始時）・17歳（年上）

性別・男

容姿・灰色がかった肩までかかる黒髪（変装のつもり）そのため
女子と間違えられることがある。赤いフレームのスクエアレンズの
眼鏡をかけている。基本的に左サイドテール。

身長・176cm

体重・測定不可

全身に怪我をし路上に倒れていたところをオルコット家当主、ミリア・オルコットに保護される。

身の安全のために匿われ娘であるセシリア・オルコットの執事兼護衛として暮らす。

二年後、セシリアの両親がリニアラインの事故で還らぬ人に。

音羽自身とオルコット家の安全のために遺書によって解雇、日本へ移住。

隣家の織斑家とは親しく、一夏やその友人の弾に音兄と慕われる。プレイしたゲームに登場したメタルギアmk?を実際に作ってしまったなど手先が器用だが、曰く「暇人の末路」らしい。

護衛をしていた経験から銃器の扱いに長けている。また、素手での格闘戦も得意で1対多は特に強い。

執事兼護衛を始めて一年経ったところにセシリアとともに誘拐された

時に、右目の空間展開型擬似ハイパーセンサーが発現する。（イメージは無音ゼロのあれ）

オルコット家に保護される以前の記憶が無く、今でも戻っていない。明るい性格だが、今でもオルコット家の墓には毎年墓参りしている。経験から人を助けることに躊躇が無い。セシリア曰く「執事らしくないですが頼りになる」らしい。

藍越学園受験予定（執事教育の結果中1時点で中学内容はクリアさせられたため余裕）

偶然か織斑家の隣家を借りて住んでいる。

9・主人公設定（後書き）

原作開始三年前です

10・出会い・邂逅・物忘れ

「（、'、D）」

日本に着いてから2週間、そこまでは良い。俺今いくつだ？・・・14だ。中1だな、うん。

なんで顔文字かって？餞別として極秘ルートで配送され昨日届いたアタツシケースにうん千万と入っていたからさ。現在間借りした一軒屋の居間にて荷物を片付けたところだ。

「そりゃあ、なにかと中1は金がかかるだろうけどもさあ。こんなには必要無いんじゃないかな」

いやまあ、未成年の生活だから金が必要になるけどさ。ちなみに転校生として近所の中学校に入ることになっている。まあ、今は先に今日の夕食を作らねば。現金は隠して・・・と。

「マスター、不審な動きはありません」

ちなみにmk？は足が着かないようにとオリジナルは持ってきた、もう一台は置いてきたが。

流石に一人では状況把握ができないのでスパコン並みの性能を持っってしまったmk？に監視や調査は任せてる。例えば町内の監視カメラにハックして見張りしたりなど。

「ふう、あ、やべ」

考え事をしながら野菜を炒めていたらなにか焦げた匂いが・・・うわわわわ。

「あゝ、勿体無い」

「考え事をしているからです」

う、痛いところを突きやがって。その通りだけでもさあ、誰がこういう性格にしたんだか。

ああ、俺か。まあいいや、明日から学校か。執事の教育で中学レベルを制覇させられた俺はどうしろと？

ピンポン

インターホンだ、この時間に誰だろうか。

「はい、どちら様でしょうか？」

玄関の扉を開けると一人の見知った小学生がいた。名は織斑一夏、有名な初代ブリュンヒルデの弟だ。

だが最近姉の千冬が帰ってくるのが少なく、一人でいることが多い。

「多く作っちゃったから、おすそわけ」

「ん、またお姉さん帰ってこれないのか。だったら上がりな」

そのため、お隣さんということだたまにこうすることもある。昨日は鈴音^{リンイン}って言う女の子と一っしょだった。彼女の家が定食屋ってことでたまに世話になることもある。

「ふん、そうか。そりゃあ良かったな」
「うん！」

夕食を終えてソファーに座りながら談笑する、そっぴーや一夏たちは来年中学生になるのか。そのときもこの町で暮らせてたら良いなあ。

「あ、もう9時だ。じゃあおやすみなさい！」
「おう、おやすみ」

一夏が帰る、俺も明日への支度を終わらせて眠りについた。

翌日、朝7時。

「よし、制服もよし。さあて、頑張りますか」

鞆に道具を詰めて戸締りを確認し玄関の扉を開ける、陽光が筋になつて足元を照らす。

目指すは徒歩15分の並木野中学校。

「あら、あなた見ない顔ね」

「ん？この人か、今日からなんだ」

「転校生なの？」

曲がり角で会ったこの青い髪の少女、どうやら並木野中の生徒らしい。というか日本で青い髪とか、見たことないな。

「俺は、如月音羽。君は？」

「私は更識楯無、ところであなた男なの？」

う、それを言われるとなあ……。流石に本当のことは言えないが。

「まあな、髪型は……。訳あつてな」

「そう、よろしくね」

そのまま握手をする、はて、更識……。何か忘れてるような。まあいいか。

こうして、俺の中学生生活が始まった。

11・女尊男卑・立体機動

「初めまして、如月音羽です。こう見えても男です、よろしく願います」

並木野中学校1年3組、教壇の前で俺は自己紹介をしていた。担任は岸川頼子先生、なんか今時の女性臭がするのは気のせいだろうか。

「如月君は・・・更識さんの隣で良いかしら？」

「はい、構いません」

む、朝に会った女の子か。まあ良い子そうだし問題無いか、さあて早速授業を。

「ふふふ、改めてよろしくね楯無でいいわ」

「おう、よろしく。音羽でいいぞ」

うん、更識でなにか忘れてるような。別にそうでも無かったような、いいや、授業に集中しよう。

やあ、二時間目の数学が終わったところだよ。正直に言おう。

「（簡単すぎるう！）」

簡単な話、高校生に小学一年生の問題をやれって言われてるようなもの。執事教育恐るべし、そして退屈だ。

「音羽、いつしょにお昼食べない？」

「ああ、良いぞ」

どうやら並木野中は昼食を持参の弁当か食堂で済ませるらしい、普通は給食じゃなかったか？

しっかり準備はしてきたが楯無さんはどうなんだろう。

「友達もいつしょで良い？」

「ああ、できればたくさんの人と友達になりたいしな」

屋上に移動すると眼鏡をかけたポニテ女子が楯無さんの後ろを歩いてきた、何、眼鏡かぶってるだど・・・！？

「布仏虚です、以後よろしくお願いします虚とお呼びください」

「こちらこそ、虚・さん。如月音羽です。気軽に音羽って呼んでください」

やはりかしこまられると呼び捨てできん、流石に癖は簡単には抜けないか・・・。

「・・・ちよいと昔の癖だ気にしないでくれると助かる」

「わかりました」

おお、虚さんは話がわかる方のように・・・なんかお嬢様の付き人みたいに思えるのは気のせいかな？

「あ、もう午後の授業始まるんじゃない？」

「げ、あ、虚がない！」

気づけば虚がない、屋上に取り残されたのは俺と楯無だけ。ええい、背に腹は変えられぬ！

「I c a n F r y！」

楯無を左腕で抱え、屋上のフェンスを飛び越えてダイブ。

「え、ちょ、きゃあああああああ！！！」

地上20mからの降下、パラシュート無し、女の子抱えて。やれる、このワイヤーアンカーがあれば！

バシユンッ！！

「でえい！！！」

降下、もとい落下しながら校舎の反対側。窓が開いている場所にアンカーを突き刺し、滑空移動。

いつ作ったそんなもの？暇なときに決まってる、というか授業に遅れるわけにはいかん。

楯無曰く「あの国語教師、遅刻したら放課後に教育的指導と言つ名の組み手なのよ」「らしい。

「俺に構わず先に行け！」

「・・・わかった！」

いやまあ、楯無を先に入らせなきゃ俺が入れないからってだけなんだよね。

というか、そのノリの良さ。嫌いじゃない。

その後、どうやら俺だけ遅刻だったらしい。0・1秒の・・・ま
あ遅刻だけどそれに気づくってどういうことだよ。

11・女尊男卑・立体機動（後書き）

こんなの出してっという機械があったら感想やメッセージでどうぞ

ちなみに今回は「立体機動装置」

12・腕(ココ)が違っんだよ(前書き)

スポーツと実戦は違っって話

12・腕(ココ)が違っんだよ

「さあて、如月。初日から授業に遅刻とはわかってるだろうな？」

体育館(6時間目が終わり畳が出されたまま、柔道やってたみたい)で俺は教育的指導を始められようとしていた。

「今後気をつけます、申し訳ありませんでした」

ちなみにこの国語教師(名前は知らん)は生徒内でも嫌われている、教師内でもあまり良い評価ではないらしい。噂だが前の勤め先でやらかしたとか……。そして女は偉いから男は言うこと聞けって思考。

「さて、では始めようか」

「倒せたら帰って良いんですよね？」

今まで勝てた人がいないらしいが、ギャラリーでも「勝てるわけが無いYO!」とか聞こえる。

なんでも性格には難有りだが格闘技の実力はそれなり、高校時代には全日本で2位だったとか。知らんけども、これは言える。

「それだけの技術をこういうところで使うなんてね」

「ええい、教師に楯突くとは!」

って直線的に突っ込んできたところを右サイドへ避けてそのまま足払い

「のああ！？ぐふう！？」

倒れこんだところを後ろから首筋に3連続で肘を叩き込む、もつとでかい大男と戦ったときより随分と楽だ。

『おおおー！』

いつの間にか大勢になっていたギャラリーから歓声が聞こえる一応手を振り替えてみよ、って岸川先生がすげえ手を振ってる。思ってたより良い人か？というか目で「もつとやれ」って言わないでくれませんか、一応教師でしょ。悪い気分じゃないけどもさあ。

「ま、まだまだあああああー！」

「俺に勝てたら言うこと聞いてやりますよ」

久しぶりに身体を動かすからなあ、ウォーミングアップも兼ねてやろうかな。

え、失礼だつて？教師として外れてる三流に真面目に相手するかよ、まあ遅刻したのは悪いと思うけども。

「っでつやあああああー！！」

ラリアットをしてくるが、その腕を始点にし肩車状態になる。

「ごめんね〜」

「な、うおぎやあー！？」

体重をかけ、振り子のように揺れて反動でバランスを崩させて倒す。あれだよ、バイオ5のジル戦でシェバがやる体術。名前知らんけど。あの乗っかってバタンのやつ。

「ふう、もう良いですか？」

正直疲れた、精神的に。というか中1に負ける元有段者って……いやまあ、俺が教わったのが全部実戦用のばかりだからかも知れないが。

「如月君かつこいい！」

「転校生すげえええ!!」

「けしからん、もつとやれ！」

なんか混じってる気がするが、まあいいか。さあて、勝ったんだし帰ろうかな。そろそろ一夏を迎えにいかねばならん。

「はい、さようなら」

後ろから飛び掛ってきた先生（笑）を両腕を掴み目の前の床（木製）に勢いを殺さずに叩きつける。もとい突き落とす。どうやらそれがトドメになったのか動かなくなった……あ、気絶してる。

「……じゃあ、みなさんさようなら。また明日ね」

さあて、一夏を迎えに行くか。確か買い物するって言ってたけど荷物持つの大変だろうし。

このときの俺はある人物に尾行されているとは思ってもよらなかった。

13・追跡者と食堂と俺の奢り

「音兄、手伝ってくれてありがとう」

「なあに、お前がいつも頑張ってるからだよ。じゃあ気をつけてな」

近所のスーパーに学校を終えた一夏と鈴音ちゃんを迎えに行き、一夏の買い物に付き添った俺は一夏と別れて空き地へと向かっていた。それにしても鈴音ちゃんは可愛いねえ、いやけしてそういう趣味じゃないよ。

元気にしている子を見れるってのは平和な証だからねえ、あ、今日の夕食は鈴音ちゃん家に行こう。

あそこのチャーハンは格別なんだよね。

「さあて、そろそろ出てきたらどうかね？」

学校を出てからずっと尾行されていた、気づかないフリをするのは中々に骨が折れたが。

俺の言葉に反応したのか人影が壁から出てきた。意外な人物・・・では無かった。

なにせ予想はしていたからな。

「ひとまず話は飯食いながらにしないか？楯無」

「あはは、それもそうね」

鈴音ちゃんの家、中華料理店「鳳凰」は俺のお気に入りだ。安くて量も多く、しかも家から近いときた。さらには通学路の途中だから忙しいときに下校中に寄れるという。

「おっちゃん、チャーハンと天津飯一つずつお願い」

「あいよ、ちよい待ってな」

「ご飯系はもう、某コーポレーション会長みたいに「素晴らしい！」って言えるくらい美味い。」

「で、なんで尾行したんだ？」

「いや、まあ。なんで強いのかなあって気になったから、あの子って弟？」

厨房から中華鍋が振るわれる音がする、中華は火力だよな。

「隣の家の弟さん、お姉さんが忙しいらしくてたまに世話してる」

「そう、ところでさあ「逸らすな」もう、連れないわね」

もしかしたら・・・もしかして・・・というかやつぱり更識で何か忘れてるような。

「いや、なんであんなに強いのかなあって」

「え」

「どうしたの？」

「それだけ？マジで？」

え、え、ヲイ。なんだよ、警戒するほどのことじゃなかったのかよあゝあ。そうだよなあ、普通の中学生のレベルじゃないものなあ。この世界のどこに大人と張り合える中学生が居るんだよ。

ああ、俺か。ってそれじゃ意味無いじゃん・・・てか、墓穴掘っちゃったよ。

「本気と書いてマジと読む、あ、この天津飯美味しい！」
「だろ、ここはお気に入りになんだよ」

興味本位ならば別に警戒しなくていいや、あ、チャーハン美味い。
おまけのわかめスープがまた良いんだよね。

「そつえば音羽君って、何かスポーツしてるの？」
「ん、ちょい前まではバイアスロンやってたな」

バイアスロン

バイアスロン（biathlon）とは、二種競技のこと。ラテン語で「2」を意味する接頭辞bi-にathlon（競技）を合成した造語。一般にはクロスカントリースキーと、ライフル射撃を組み合わせた冬の競技が有名だが、ランニング・自転車・ランニングを通して行う夏の「バイアスロン」（デュアスロン）も存在する。

（Wikipediaより抜粋）

「え、すごい！ってことは海外にいたの？」
「まあな、英語くらいならペラペラだぞ」

事実、二年イギリスで暮らせば英語はできるようになる。できなきや生活できないもの、まあISがあるからこそ日本語通じて良かったってのもあるけども。

「それにしてもやり過ぎたなあれは」

確実に学校内で話題になるだろ、なぜにあれだけ生徒が集まったのかは不明だが。

というか、教師数人で「もっとやれ」のアイコンタクトはダメだろ。

「あはは、頑張ってね」

楯無が笑いかけてくるが・・・俺の心はブルーだった、別に水色の髪だったからかけてるわけではない。

「ごちそうさま、じゃあまた明日ね」

「おう、おっちゃん勘定お願い！」

「あいよ」

さて、明日も頑張るかな（目立たないように、手遅れな気がするが）

13・追跡者と食堂と俺の奢り（後書き）

次々回はちょっと飛びます

14・同性の友人・・・求む（前書き）

オリキャラ登場！

14・同性の友人・・・求む

「おっはよう！」

「おはよう・・・」

目の前にいるショート朱髪、身長は俺より下の少女。ジャクリーヌ・ウエルキン、一学年生徒会書記だ。なぜか一昨日のあれを見て勝負を挑まれて返り討ちにしたら、懐かれたっぽい。

曰く「強い人には惹かれるものだよ」らしい、ふうん。

「でだ、ジャック。なんで俺は1学年生徒会副会長やってんだろかね？」

「初日で日本馬鹿（あの国語教師のこと）を倒しちゃったからじゃない？」

なんでも岸川先生の話によると、「生徒からの要望が多くて、ごめんね」らしい。

まあ、あんなの見ればそうなるのも仕方ないのか・・・うん。どうやっても目立たずに暮らすのは無理らしい。

「別に受験有利になるから良いんじゃない？」

「ああ、そりゃあそうか」

ちなみに俺は将来が約束された学び舎《藍越学園》を受験する予定だ、卒業後には地元密着の関連企業に就職できるという。中二っぽい言い方するなって？気にしたら負けだ。

「さあ、一時間目は体育よ。頑張ってね」

「楯無・・・おまえなあ」

ところでジャック（そう呼んでつて言われた）から聞いたところによると、楯無は一学年生徒会長らしい。道理で他の女子が憧れの視線の集中砲火をしているわけだ、その中に俺も追加されたいが（主に男子から、あんまし嬉しくない）

「で、来週の中学校説明会に出ると。まあ副会長なら当たり前か」
「うん、司会やってくれないかな？」

来年入学する小学校6年生に親に対する説明会、その時に必要な書類や体操着などの注文書なども渡される。つまりは来なきゃダメですよ！って奴だ。

「別に良いけども、お前は何するんだ？」

司会なんて夜会で十分経験があるから問題ない、あくセシリア分が足りん。

膝枕して撫でてたあのが懐かしい、まだ少ししか経ってないが。

「私は挨拶と受付「あたしは雑務」そんな感じ」
「で、決めることはあるのか？一年が」

普通は二学年か、三年がやるものじゃないのか？聞いたことないぞ、というかジャック・・・俺の上に乗っかるな。書記が記録取らないなんてどういうことだ。だから俺が今話しながらメモってるわけだ

が。

「以外に万能ね、音羽」

「できることしかできないよ、てか読心術使うな」

そっぴいや一夏も何気に鈴音ちゃんに考えてること読まれてたなあ、まあ顔に出てるからだけでも。

たまに俺も読まれたりする、なんでだかなあ？

「大丈夫よ、セシリア分が足りないとかは言いふらさないから」
「だゝ、もう言ってるじゃんかよ・・・」

あ、つまりは一夏や鈴音ちゃんが来るのか。せつかくだしいいところ見せなきゃいけないな、後輩になるんだし。

「おし、じゃあささと決めること「特になし」は？」

「仕事決めるだけだもの、はい、計画表」

手渡されたのは薄い10ページあるかといつくらいのプログラム表、
m j k

そのためにわざわざ集まったのかい、まあいいや。

「んじゃ、また明日」

「私もついてくゝ」

「勿論私も」

「わかったからジャックは乗らないでくれ」

なぜかジャックが俺の上に乗るんだよ、まあ重いつて言ったら血の雨が降りそうだから言わないけど。

あゝ今日は夕飯どうしようかな。

「そうだ、今日は音羽ん家にお邪魔しよう」

「ちょ」

「あ、それは興味深いわね。そうしましょう！」

その後、両腕を掴まれて強制送還された。その後なにがあったか
つて？

お察しください

14・同性の友人・・・求む（後書き）

そのうちキャラまとめやらねば

あ、こんなキャラ出してほしいという方はどうぞ感想でもメッセージでもどうぞ

15.ここからは音羽の提供でお送りします（前書き）

まともにシリアス書けない

15・ここからは音羽の提供でお送りします

「あはは、凄かったね」

「一人暮らししてるなんてね」

この時期に転校してきた人物として情報収集を続けていたが、一向に出てこない。

一般人ならば個人情報などが出てきてもおかしくは無いのだが、そのデータも全て架空の物だった。

「じゃあ、また明日ね、たてちゃん」

「うん、じゃあね」

ジャックと別れ、再び音羽の自宅へ向かう。あの戦闘能力は一般人が手に入れられるものではない。

まして、あの反応速度。もし敵に回れば更識にとって脅威になる、情報が無いというのが余計にそれを暗に示していた。

「よお、どうした？忘れ物か」

「あ、うん」

買い物袋を持った音羽が近づいてくる、いつもの笑顔だが。今はそれすらも怪しく感じた。

不思議そうに自分を見つめてくる、けして敵意を感じないのだが。

「あちゃ、なら仕方ないか」

難なく音羽の自宅へ再度入る、普通ならば空き地など目立たない場所なのだが。

生憎、近所に空き地は無かった。楯無自身が焦っていたのもあるが。

「ふう、お茶で良いか？話はそれからだ」

すぐにわかった、見透かされていると。まだ未熟とはいえ暗部としての技術を身につけたのだが、それを音羽は難なく見破っていた。やはり、只者ではない。自分の本能がそれを告げていた。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」
「ふにゃあ！？」

楯無が「忘れ物」と言って戻ってきた、忘れ物なんてしていないのだが。遂にか、とは思ったが正直ほとんど心配はしていなかった。まあ、ビビッているのを見て内心こちらが心配させられたが。そついや、まだ16代目が実質仕切ってるんだったか。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」
「ふにゃあ！？」

目の前で緊張して今にも爆発しそうな17代目を落ち着かせようとしたら、なんか可愛らしい声出して驚いていた。もしかして、本番はこれが始めてなのか？

「まったく、せめてもう少し鍛えてから挑めよな」
「くう、いつから気づいたの？」
「ん、昨日くらいに更識のこと思い出した」

これは事実だ、というかもやしてたから本気で2時間くらい考

え続けて「ああ、あれか」ってスッキリしたかったのが強いんだがな。良くあるよね、もう少しで思い出せそうなのに思い出せないもどかしさ。

「先に言っておくけども、俺自身自分が何者かわからないんだよな」「え？どういうこと」

「簡単に話せば、道端に倒れていたところを保護されて育てられて今は手がかりがありそうな日本に住んでるってとこだ」

未だにミリアさんに助けられる前の記憶が無い、ミリアさんがあれこれ調べていたけども有力な情報も無かったって言ってたし。ただ、右目のこともあるしなにかしらあるのは確実。まあ、過去なんてあそこで暮らしたことだけあれば十分だがな。

「じゃあ・・・」

「だから保護してくれた人が架空の戸籍を作ってくれた、もちろん迷惑かからんように繋がりには消したからな。調べても意味無いのは当たり前だ、これでわかった？」

正直なところ、相手が「更識」だからここまで言っただよな。敵視されたら敵わないからな、これで16代目にでも「安全」ってのが伝われば良いんだがな。もしダメならこの町から出なければいかん。

「寂しくないの？」

「寂しくないと言ったら嘘になるが、まあ、今は楽しいからな」

事実、日本に来てからは普通の中学生として生活ができた。イギリスでの生活も楽しかったが、一般人としての生活も中々だ。たまに変装してセシリアの様子を見に行くがな。誰だ、シスコンとか言っただ奴。

「普通に接してくれるなら、嬉しいんだがな。悪いが俺が教えらるのほこれだけだ」

「ああ、そう。わかったわ、まあそれだけで十分よ。邪魔しちゃったわね」

「別に、心配事が無くなったから問題無い」

さあて、にんじん買いに行かなくちな。

16・説明会だつてさ

あゝ、楯無に俺の素性説明おおまかなをしてから1週間。

「みなさん初めまして、並木野中学校説明会の司会を勤めさせていただきます。如月音羽です」

並木野中学校の学校説明会だ、もちろん司会は俺。結構な重大な役回りだが、これも経験だ。

お、一夏と鈴音ちゃんがかっこいいな。あ、五反田食堂の息子お気に入りさんも来てる。

「さて、それではまず最初に紹介ビデオを見ていただきますよう」

さあて、と。スイッチはこれだっけ？えいや。

～上映中～

なんか「楽しい学園生活、やらないか？」とか聞こえたのは気のせいだ、きっと幻聴でも聞こえたんだよ。

良かった、ネタに気づいてる人いないや。

「さて、来年の春に来る皆さん。新たな学校生活はとても楽しめか
と思います」

てか、さっきから一夏がすげえキラキラした目で見てくるんだが。
千冬さんが真剣な顔でガン見してきてる、正直怖いんだけども。

「是非、並木野中学校で楽しい三年間を過ごしてくださいね!」

これは正直な気持ちだ、そのためなら全力で働こうと思ってる。どうせなら全員で笑って過ごしたいじゃない?

「はい、こちらで運動着の採寸と注文書書いてください」
「靴はこっちですよ」

説明が終わり、ジャージや内履きの採寸などが始まった。ここから教師の仕事だ、やっと終わった・・・まあ達成感あるから良いか楽しんでくれたみたいだし。

「音兄、すげえ!」
「中々だったぞ」

荷物を纏めていたところに一夏と千冬さんが来た、一夏の頭を撫でる。

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。一夏、待ってるからな?」
「おお、音兄といっしょの学校だから絶対行く!」
「こいつを頼む、また忙しいものでな」

やっぱり姉弟では大変だよな、ましてまだこの年。俺だってあそこで暮らしてなきゃ無理だしな、まあ、一夏相手ならいくらでもするけどな。

「任せてください。あ、もう手続き終わりました?」

「まあな、もうお前は終わりか？」

「ええ、機材は明日も使うんでこのままです」

「えへへ」

「うお、あんまし動くなって。まったく」

一夏が肩車を要求してきたので、まあ、仕方なくやりながら帰路に着く。笑顔はやっぱり良いものだなあ、千冬さんも微笑みながら見つめてるし。傍から見れば仲の良い家族かもな。

「あ、そつだ。サラミ多く買っちゃったんで。貰ってください」

「そつか、すまんないつも貰ってばかりで」

明日も良い天気だと良いなあ

16・説明会だってさ（後書き）

ストックー日目です

次回はちょい飛びます

17・温泉つていいな（前書き）

そのうちにタイトル変えます、執事してる期間短いので

17・温泉つていいな

「ふは〜」

「ん〜」

お寒い季節になりました。え、飛びすぎだ？苦情はこっちじゃないよ。

「温泉はいいね〜」

「そうだね〜」

現在、雪が降る12月。近場の温泉に来ている、いや〜銭湯が温泉つてのは嬉しいよな。

暖まるなあ、そうは思わないかね？あ〜、そういやセシリアも温泉好きだったな。

『はっふう〜』

お約束でタオルを頭の上に乗せて湯船でくつろぐ、今頃は千冬さんも女風呂でゆつくりしてるだろう。

いや〜、温泉に入ってゆつくりできるって良いねえ。誰だ、爺くさいって言った奴。表に出ろ。

「音兄？」

「ん？どうした」

そういや楯無は冬休み中にロシアで特訓って言ってたなあ、なんでも最近聞いたんだが「国家代表候補生」らしい。もちろんISの、なんで日本にいるのかって聞いたら、「早いうちに日本に慣れてお

くためよ」らしい、てかその年で候補生とか凄いな。

「音兄の首のバーコードって何なの？」

「ん、ああ。ちよつと落書きされてな、中々取れないんだよ」

これは嘘だ、流石に普通の子供に俺の身体のことを教えるわけにもいかん。というか絶対に教えられないだろ常考。一回スキャンしたら「キャベツ日替わり特価 一玉58円」って出てきて凹んだが。まあ、右目が関わってるのはわかるけどなあ。

「あはは、油性ペンでやられちゃってね」

「音兄、油断するからだよ」

いや、これは見せないようにしなければなあ。そういやmk?にメール来てたんだよな。「候補生の養成学校に入りましたわ! by セシリア」って、元気そうで良かったなあ。

「そろそろ上がるぞ、俺がコーヒー牛乳を奢ってやるう」

「やったあ」

「おいおい、走らなくてもいいぞ」

はしゃいで更衣室に走る一夏を追いかける、滑るから危ないぞ。俺だって一回経験がある、あれは痛い。

「ああもう、こら、大人しくしろ」

「はい」

バスタオルで一夏の髪を拭く、この年の子供ってのは元気なものだからな。はしゃぎたいのはわかるが風邪ひいたらいかん。以外に体力持って行かれるからなあ、一人暮らしの場合は致命傷だし。った

く、動くなつてのに。

「おばちゃん、コーヒ―牛乳一つ」

「あいよ」

番頭のおばちゃんに100円を渡し、それを受け取る。他の銭湯は120円だけどこは安いんだよね、しかも温泉だから一石二鳥。身体も暖まつたし、一夏は着替えて俺の隣にいる。

「ほい、あつちに座つて飲めよ」

「うん、ありがとう！千冬姉、音兄がくれた」

休憩室のソファ―に座っている千冬さんへと寄つていく一夏、千冬さんも嬉しそうな一夏を撫でていた。

減多に帰つてこれないし、帰つてきても数日でまた仕事に行つてしまふ。千冬さんも中々の苦勞人だ、その分生活スキルが欠如しているのも仕方あるまい。

「いつも済まないな、音羽」

「いえいえ、俺が好きでやってるんですし。気にしないでください」

「ぶは、美味かつた」

「ふふ、そうか良かったな。では帰るか」

「そうですね、一夏。荷物纏めておきな、ビン置いてくるから」

「うん、わかつた！」

場所は変わり、雪が降る帰り道を三人で手を繋いで歩いていた。真ん中に一夏、右に俺、左に千冬さんだ。楽しそうに話す一夏の話聞きながら俺達は雪景色の中を帰宅した。

17・温泉つていいな（後書き）

あ、タイトルとか良い案あつたら教えてくださいね！

18・見知らぬ女子には二度会つ(前書き)

短いです、はい

18・見知らぬ女子には二度会っ

あれから三日、千冬さんはまた仕事へと出かけていった。ドイツから帰ってきてても一夏を養うために大変みたいだ。

「うゝ寒い」

昨日は冷え込んだおかげで道路は凍りついていて転ぶし、それを近所の子に見られて笑われるし。

正直、冬爆発しろな感じ。いや、鍋が美味いから無くなったら困る。

「イギリスよりやっぱ日本は寒いわ、あゝ冷える」

イギリスは気候の関係で暖かいんだよね、その分日本は四季がはっきりしてるからめっさ寒い。

いくら上着着てても慣れなければきついなあ。

「わっ、避ける！危ない！」

「は？何？」

いきなり横から同い年くらいの子が道路を、滑ってきた。いや、正確には転んで滑ったが正しいか。

って、危ない！

「きゃあ！」

「ふぬわあ！？」

真横から来たため、どうにか受け止めようとするも結構な加速だっ

たためにそのまま倒れこむ。

うわ、背中が冷たい。なんとか受け止められたけど、これ、やばくね？

「む、むう」

「だ、大丈夫か？」

俺が押し倒されている格好なんだよね、って早く起きねば。誰かに見られたら色々終わる。

「す、済まない」

どうにか二人揃って立ち上がる、どうやら雪が付いているのは俺だけみたいだ。

怪我も無いみたいだし、まあ、結果オーライか。

「別に、怪我なくて良かったよ」

長い黒髪、すらつとした肢体。どこか格好良い女の子っていうのがその子の第一印象。

ちなみに俺は髪を切って短髪だ、って誰も知ったところで嬉しくないか。

「た、助かった。ありがとう」

「いやいや、俺は如月音羽。君は？」

見たことない制服だが、どこの学校の人だろうか？

「私は・・・雅^{みやび}、いきなりぶつかって済まない」

「良いつて、じゃあ俺はここで。雪道は気をつけてな」

慣れないと転んで骨折つてのもありえるからな、町内会長のおばさんもそれで今病院通いだし。

「ま、待ってくれ。礼をさせてくれないか、流石にあれだけしておいてそれではどうもあれだ」

「気持ちだけで十分だって、どうしてもってんなら誰か他の困ってる人を助けてあげて」

善意というか、俺の癖というか。困つてたりしたら誰でも助けに入ってしまう、それこそヤから始まる職業の人が相手だろうが。まあその時は銃だされたけど、軽い脅しに引っかけられて助かったが。

さあて、買い物行かねば。

今午後9時、買い物を終えて公園の前を通りかかると、雪がかかった椅子に座っている雅を見つけた。
絵になるなあ、と思いつつ通り過ぎようとしたら。いきなり雅が目の前で倒れた。

「おい、大丈夫かよ？」

「あ、音、羽・・・」

それきり口を閉じ、意識を失った。額に手を当てると熱い、これは・・・まったくもう。

気を失った雅を抱きかかえて、俺は一目散に自宅へと走った。

「まったく、熱あるなら言えよな！」

「む、くう。・・・ここは？」

「俺の家だ、熱あるんならなんで歩き回ってるんだよ」

寝言だろうか、「亡国」だのなんだの喋ってたが。というか、親は何してんだ。具合悪い娘を出かけさせるなんてなあ。

「お前ん家ってどこだ？電話かけて連絡するから」

「私に、親はいない。迎えは1週間後に来るが」

つまりは、昔の俺みたいなもんか。ずっとは無理だけどしくらいなら大丈夫かな？

「だったら、それまでここで休んでろ。その様子だと今帰るとこ無いんだろ？」

「いや、だが」

「病人は素直に言うこと聞きなさい、安静にしてろ。いいな？」

「わかった、二度もすまん」

その後、おかゆを食べさせ。寝かせた。既に時計は10時を回っていた、まあ、着替えさせて薬飲ませてとかやってればこうなるか。さあ、俺も寝るか。ベッドに寝かせてるから俺はソファーだが。

「おやすみ」

あ、明日の朝食の準備忘れた・
・
・
・
Z
Z
Z

18・見知らぬ女子には二度会っ(後書き)

オリキャラではありませんよ、しっかり原作キャラです。

ストック・・・そろそろやばし

19・結構落ち着かない

「む・・・朝か」

「おう、おはよう」

え、もう8時なのに学校はつて？12月、しかも気づけば27日。冬休みだから別に大丈夫なんだよね、しかも生徒会の仕事は無いし。それ以前に年越しで忙しい、雅がいるがこの時期だし、どうせなら迎え来るんだつたら一緒に鍋でも囲もうかと思ってる。

「具合はどうだ？」

「まあ、なんとかな」

顔の赤みも引いて元気そうだ、医療用のナノマシンが効いたかな？
(錠剤薬型という素晴らしい仕様)

ちなみにこれも暇を持て余した結果だったりする、暇人って凄いね。ウイルスや細菌を直接特殊磁場で倒すというもの。海外企業にライセンス生産させたら金が凄い入って来てるんだよね、まあ余裕で一人くらい養えるくらいに。

「あゝ、こたつは良いねえ。はい、あゝん」

「確かに良いものだな、つておい」

「まだちゃんと治ってないんだから、ほら」

「む、むう・・・あ、あゝん・・・／＼」

ふむ、素直でよろしい。なんで顔が赤いんだ、熱はもう下がってるはずなんだがな。

まあ、卵かゆでも食べてれば大丈夫だろ。栄養付ければおのずと元気になる。

「美味いな」

「そうか、そりゃあ良かった」

料理作ってる人間にとって、美味しいって言われるのを見るのが一番幸せなんだよね。また作ってあげたいって思うし、嬉しいし。

「さてと、大掃除しないとな」

「ならば私も手伝う」

「そうか？無理しなくても良いぞ」

「無理などしない、せめてそれくらいはやらせてくれ」

どうやら、引かないみたいだな。仕方ない、はたきでもやってもらうか。見せられない物もあるからな。ずっしりと重いあれとか、リ
ンゴとか。炭素に4がつくのもあるんだよねえ。

「じゃあ、これではこり落としてくれ」

「わかった」

それで、さつきから「ふん！」とか「てやあ！」とか言っってはたきを振り回す雅。めっさ元気になってるなあ、良い事だ。

「~~~~~」

掃除機で落ちた埃を吸い取る、荷物とかもそう無いからすぐに終わるんだけどね。男の一人暮らしなんてそんなものでしょ、俺の場合は工具とかが結構あるけども。

「ふっ、こんなものか」

「そうだな、お疲れ様」

気づけば家の中の掃除終了、やっぱ二人だとすぐに終わるものか。一軒屋に一人で住んでるつてのも結構大変なものだろうが、ああ、今は雅もいるな。

「これほどまでに家事は大変なものなのか」

「いや、掃除だけだし。それ言ったら他のどうなるよ」

炊事・洗濯・買い物・税金・家賃・学費・・・まだまだあるぞ、この程度で大変とか言ったら生活できないんだけど。主に俺が、まああそこでの生活スキルを身につけてたから問題無いけどさ。

「む、そうか。他にすることはあるか？」

「いや、あ、風呂入る？まだ入ってないだろ」

汗かいてたし、いくら着替たとはいえ身体は洗ってないからなあ。え、服はって？お察しください。

「私と一緒にか？」

「な、なんでそうなる。使い方わからないとか？まさか」

いや、今の時代使い方分からない人はいないと思うが。アフリカの極地でも普通に使えてるご時勢なのに。

「ふっ、そのまさかだ！」

「そこ誇れるとこじゃないからな！？なんでそんなに自信満々なんだよ！？」

しかも言い感じのどや顔っていう・・・分からないのなら仕方ないかってんなわけあるか！

「はあ、使い方教えるから一人でできませんかね？雅さんや」

「残念ながら機械音痴でな、別に襲いもせんだろ」

「いや、信用してくれるのは嬉しいけど。それとこれとは違うからな？」

カポーン、ガラガラ

「ほら、動くな」

「か、かけるなよ？いきなりザバーはダメだぞ？」

無視、あの頭につける皿っぱいのを貰う必要なんてないんだ。我慢すれば良いし、それ以前にあの爽快感は捨てがたいからなあ。え、無理な奴は無理だって？家は家、よそはよそだよ。

ザバー

「ふみやああ！！！」

「おし、綺麗になった」

俺自身、偽装のために髪を長くしている分。人の髪を洗うのは結構得意だ、なにせサイドテールにしてるからな。雅も負けないくらい長いが。というか、結局俺が入浴してる最中に入ってきたから結果的にいっしょだよ。

「ううう、やめると言ったのに・・・」

「こうしなきゃ泡残るだろうが、少しでも残ってたら大変なんだぞ？」

セシリアもそれで苦勞してたからなあ、たまに一緒に入れて「主人命令」でやらされたが。

「はふう、良い物だな」

「そうだろ、風呂はやっぱり良いよなあ」

一夏も風呂好きなんだよなあ、そのうち温泉巡りでもできたら良いなあ。あいつが高校生くらいになってからだが。

その後、風呂上りにアイス食べたりしてゆっくり過ごした。だってすること無いんだもの、他にどうしろと？ 買い物も済ませたし、年賀状は裏ルートでオルコット家に送ったし。二人でおこたにたれてるしかないじゃないか。

「zzzz・・・」

「ははは、寝ちまったか。俺も寝よ・・・zzzz」

ちなみに今、午後2時である。

19・結構落ち着かない（後書き）

まさかの風呂シーン・・・こんな頭で大丈夫か？

A・大丈夫じゃない、問題だ。

と言う話は置いておいて、はい、まだストックです。体調は良くな
ってきているので日曜にはゴーストも更新できるかと。

あ、タイトル案は募集してるので。良いアイデアあったらお願いし
ます

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ(前書き)

えゝ、リア充爆発しろ回です

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ

「あ、朝？あれ、もしかしておこたでそのまま寝ちゃった？」

しかも雅がなぜか抱きついてきてるし、どうしてこうなった。

おこたの別方向で座ってたはずだが、いつのまにか雅が俺の方に・・・熟睡してたから良かったが。なあ？

「性欲を持て余す」

まあ、それが言いたいだけだ。というか、動けん。暑いし。うあゝ。

「すう、くう」

「・・・・・・」

しかも俺の自慢のサイドテールを枕にしてるし、動けないんだが。てか今何時？・・・・・・おわあ、一晩あけたのにもう11時だつてさ、何時間寝てたんだよ。

「おゝい、雅。起きろゝ」

「むにゅ・・・む」

眠そうに目をこすりながら雅が目覚めます、できればもっと早く起きてほしかった。

というか息がかかる距離だから、無駄にドキドキしてしまう。俺に某流さんみたいな耐性は無いよ！？

「おはよう」

「ああ、おはよう。そんな時間では無いみたいだな」

ささつと朝食（昼食と兼用になった）を済ませて、居間のカウンタ―に鏡餅を乗せる。

これくらいしか年越しの準備ですることが無い、あ、雅の服が必要か？いつまでも変装用の服を着せてもらえないし。

「私は要らん」

女の子なのに興味ないとはこれいかに、ジャックや楯無だつて校外の仕事のときは結構可愛いの着てたぞ。まあ、俺は機能性重視だからわからんが。それでも執事をやってた身だ、仕立てくらいはできるぞ。

「ま、それずつつてわけにもいかないだろ。さあ行こう、今すぐ行こう、もう行こう。というか、行くぞ！」

「待て、いいから、私は・・・うにゃああああああ！！」

雅の手を取り、なんでも揃うと有名な駅前ショッピングモール「レゾナンス」へ向かう。

日用品からアウトドア、ブランドにスイーツ、家具や雑貨まで多種多様な店があるんだ。

昔から言うじゃないか「可愛い娘にはおしゃれをさせろ」って、違う？細かいことは気にするな。

「わかったから、速度を落とせ！地面に足を付かせてくれ！！」
「急がなきゃ、年末だから物が無くなるんだよ！」

それ以前に、モノレールの発車時間がギリギリなのもあるけどね。
どこかの借金執事が自転車ですに追いつくなら、俺は生身で追いつけるんだよ！気合があれば！

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ（後書き）

す、ストックです。そろそろマジでやばい

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（前書き）

明日くらいにタイトル変えます

21・考察したっていいじゃない、人間だもの

あれから2日、え、レゾナンスでどうなったって？似合うの買ってあげただけだなにか？

飛んでる？知るか、個人情報に関わるので（ry

「イエーイ、ハッピーニューイヤー！！」
「い、イエーイ！」

なんか雅もノリが良くなってきた、まだまだ硬いけどもね。というか、引越してから初の年越しじゃね？

まさか見知らぬ少女と迎えることになるとは誰が予想できただろうか、俺は無理だ。

「ふむ、これが雑煮というものか」
「そうだ、といっても俺流だけだな」

そういや、同じ雑煮でも地域で違うらしいな。餅の形からだしまで、ちなみに俺は塩味にしてる。

餅と塩が合うと思うんだが、なぜか一夏は好かないらしい。ジャツクは美味しい美味い言って10杯くらい平らげていたけども、それを見て楯無と苦笑いしていたのは忘れられないな。

「塩か、なるほど。さっぱりして丁度良いな」
「だろ？他の家では白味噌だったりするみたいだけどな」

調味料は基本的なものから地方のものまで揃ってたりする、もし転居することになったらなんて考えていないくらいに。もしそうなら

たらどうしようとしてるんだろっね。

そっついや、俺が訳ありの身体のはずなんだがここに来てからも三ヶ月過ぎたんだよな。

「うっん、まあ良いか」

「？」

まあ、今はこの平和な時間を享受できれば良いか。

「おかわりを要求する」

「普通に言えば良いんじゃないか？別にいいけど」

たまに軍みたいない言い方を雅がしてくる、一体どこに所属してんだこいつは？仲間とやらを一度見てみたいものだ。まあ、野暮な真似はしないけども。

「そっついやどこで仲間と待ち合わせなんだ？」

「あの公園だ、財布を落としたのは不覚だったがな」

だからなのか、ってすっかりしてるイメージだったけど以外にうつかりなんだな。

「何か失礼なことを考えていないか？」

「いんや、何にも・・・ひとまずその拳を下ろしてくれないか」

俺、何もしゃべって無いんだがなあ。たまに一夏も考えてること読まれてるけども、俺も顔に出てるのか？このポーカーフェイス（自称）は意味無いのか・・・、今はやってないがな！

「自称では意味無いと思うが」

「俺って顔に出やすい？」

「ああ、見事にな」

まあ、仕事モードに切り替えないとそりやそうか。だって普通にしたら思考垂れ流しだもの、まあ困らないけどな。

「それはそれでどうかと思うがな」

なんか雅が言っているが、だって常時仕事モードだと疲れるんだもの。たまには休みたいじゃん、今は仕事モードになるときは少ないけどさ。

「そーいや、雅は俺的に理想の女性かもな」

「はひ！？ど、どういうことだ！？」

「いや、最近の勘違い女みたいじゃなくて対等に接してくれるからさ」

なんでそこで顔を赤くするのかわからん、最近は多いからなあ。ISを動かせる女性が偉いわけではなくて、ISが動かせる性別だから優遇されているだけだし。

まあ、世界中にたった467機しかない兵器のおかげで女尊男卑社会になるのもおかしいが。

60億超えた人類の半分、その中のたった467人しか乗れないんだ。しかも研究用に使われてるコアが多いから実働数はもっと少ない。それなのに女性だからって偉ぶる人が多い、百歩譲っても優遇されているならばそれなりの行動も求められるはずだ。

「なんだ、そういうことか。ドキドキして損した」

「ん？なんか言ったか」

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（後書き）

さあ、飛びます！飛びます！

22・早い別れ（前書き）

ふうへへへい、完全復活！

22・早い別れ

「ん、あの人が仲間さん？」

「ああ、なにかと世話になっている人だ。不器用だがな」

1月3日、雅が言っていた「仲間が迎えに来る日」。彼女を助けたあの公園のベンチに新社会人くらいのロングヘアのスーツを着た女性が缶コーヒを傾けながら座っていた、女性なのに堂々と足を広げているのはどうかと思うが。しかもスカートなんだし。

「礼子、来たぞ」

「あら、早いね。ん、その子は誰？」

この人が雅の仲間か、というか何故俺が着いて来ているかと雅に「方向音痴でな、案内してくれないか？」と言われたんだ。まあ、こ近辺は地図見ても入り組んでわかりにくいからな。最初にぶつかったときも片手に地図持ってたし、俺だって最初にここに越してきたときは迷ったんだよねえ。

「ああ、命の恩人だ。倒れてしまったところを助けてもらい、今日まで世話になった」

「ふふふ、お優しいのね。礼を言うわ」

そう言って名紙を差し出してくる、え〜と・・・IS装備開発企業『みつるぎ』の渉外担当の巻紙^{まきがみ}礼子^{れいこ}さん。企業の人か、道理でスーツがビシッと決まっているわけだ。さっきの大股開いてた人と同一人物とは思えないほどに。

「あ、いえ。当たり前のことをしたまでです、これ名紙です」

名紙を出されたら交換するのが一流のビジネスマンの常識だ、自然にできるようにならなきゃ後々の商売にも影響が出るからな。ちなみに俺が出したのは海外の企業にライセンス生産させている医療用ナノマシンのオーナーの証明書を兼ねている。ちなみにオーナーとしての俺に手を出すと、委託先の企業の私兵が地の果てまで追いかけてくる。

「まあ、あなたが！人は見かけによらないわね」

「案外そんなものですよ、さてと。それじゃあ俺はこのへんで」

あんまし長い時間も居られないでしょ、企業の人だったし。どうやらいつしよに鍋を囲むこともできないだろう、企業は24時間365日止まらないからね。個人経営ならば別だろうけどな、まあ学生程度が社会人を誘うのもおかしい話だから自重しよう。

「お、音羽。その、これ」

「ん？」

なにか恥かしげに雅が青い菱形の宝石が付いたペンダントを渡してきた、これって雅がずつと身に着けてたものじゃないか。なんでそれだけ大切にしているものを俺に？

「私の、感謝の気持ちだ。受け取ってくれないか」

「……わかった、元気でな」

「勿論だ、それではな」

「おう、さよならは言わないぞ。またいつか会おう」

まさか俺が見送る側になるとはな、いつの間にか公園の入り口に横付けされていた高級車（あんまし詳しいの知らないんだよね）に雅

が先導されて乗っていく。礼子さんが何回も頭を下げている、中学1年に頭を下げる社会人って……俺も返しはするけどな。

「ありがとうございます、それでは」

雅が車内から名残惜しそうに見つめてきていた、なに泣きそうになつてんだか。いつもみたいに気が強そうにしてるよな、そんな顔されると調子狂うよ。仕方ないので笑顔で手を振る、どうせなら笑顔で分かれたいじゃないか。

「（音羽、ありがとう。絶対にお前のことは忘れない！）」

「（俺だって忘れないさ）」

読唇術で最後の会話を終えた瞬間、雅を乗せた車が発車する。短い間だったけど、俺は楽しかったぞ雅。

走り去る車を見送り、俺は踵を返して家路へと向かった。

22・早い別れ（後書き）

さあさ、飛びますよ

23・中生活ってそんなもの(前書き)

飛びました、以上、報告終了

23・中学生活ってそんなもの

そついえば気づけばもう中2である、中学は早いと聞くが本当だったな。転校してきたと思ったらすでに一年経過している……。いくらなんでも早くね？とは思うが、そんなものだろう。まあ、一夏や鈴音ちゃんが入学式で可愛かったとだけ言っておこう。

「でだ、なんで俺が生徒会長になってんだ？お前だろ常考」

「まあ、投票結果がそうだったんだし。良いじゃない」

そう、並木野中学校の生徒会役員はどこぞの私立学園のように一般生徒の投票で決められる。もちろん自分から立候補することもできる、俺はしなかったけども。だって、面倒なもの。それに教師からの要請で生徒会在籍も一年の間という期限付きだったからな、それが過ぎたのだから特に用事は無いし。

「それなのにお前が他薦するしさあ、俺、お前に立場説明してるよな？」

「そうね、でもただの一生徒を他薦しちゃいけないなんて規則に無いわよ」

こいつは何かと穴見つけて俺に何かやらせようとしてくる、ちなみに楯無は副会長だ。ついでにジャックは書記……。なぜ一年のときと同じメンバーなのかまったくもって不思議である。というか、一夏がフラグメーカー過ぎて困る。今は関係無いか。

「（・ω・）」

「m9（＾Д＾）」

A Aで表示したら余計イラついたが、いつものことでもあるため諦める。某炎の天使が言っているが人生諦めも大事だと思っただ俺はすでにこいつが何か笑っているときは特に。今までそれで何回も巻き込まれた・・・なんか数年後に今と同じようにため息ついている未来が見えた気がする。そんな未来幻想、俺が打ち砕く！無理っぽい気もするけども。

「まあ、良いんじゃない？身の安全は確保されてるし」
「そりゃあ、な」

生徒の長になったことでもし何かしらの組織が俺を襲撃しようものなら、委託企業から極秘に派遣されている屈強な兵士さんが見事なまでに撃退してくれる。まあ、警備員が丁度配置換えのときに入ってきたわけなんだがな。もしかしたらISでも使われないかぎり無理かもしれないな。

「さあて、書類も書き終わったし。帰るか」
「ホントに作業早いわね」

楯無が呆れた顔で言うてくるが仕方ないだろ、イギリスに居たときは書類20枚分とかを5分で片付けるとかしなきゃいけないかったかな。今となつては役に立つ技能だけど、習得するための地獄は思い出したくない。

「そうだ、今日は五反田食堂月1サービスの日だ！じゃあな！ふぎや」
「どうせなら私も連れていきなさいよ、私だってお腹空いたんだから」

楯無は何かと俺に着いて来る．．．．別に悪い気はしないが、と
いうか窓からダイブしようとした人間の首を片手で掴むって、く、
苦しい。

「わ、わかったから。ぐ、ぐるじい」

いくらなんでも首を掴まれてぶら下げられている状況ではどうしようもない、く、苦しい．．．．酸素が足りない！酸素．．．

「そ、そう？やったあ．．．．あ」

「のうあああああああ！！」

ちなみに生徒会室は、三階である。嬉しそうに両手を楯無が合わせたと同時に音羽が落下していったのは言うまでもない。

「．．．．お前なあ．．．」

生徒会室から突き落とされた後、奇跡的に怪我することもなく復活した俺は仕方なく楯無の手を引き歩いていた。確実に18mは落ちたと思うんだ俺は。

「ごめんね」

「お前絶対反省してないだろ！」

まあ、今から飯だつてのに本気で怒ることも無いけどさ。それに楯^こ無^いのイタズラ好きは今に始まったことではないし、その度に俺が被

害こうむってるがな。本気で人が嫌がることはしないから嫌いでは無いがな。

「親父イ、業火野菜炒め定食二つ頼む」

「あいよう、ありや。彼女かい？」

「学校の友人ですよ」

何故そうなる、てか楯無はどうして顔を赤くして・・・なんだろうか？まあ良いや早く丁度いい席に座ろうか、ちなみに月1のサービスデイには全てのメニューが30%増量という素晴らしい日だ。まあ、それ以外の日でも良く来るけどな。何気に雅はかぼちゃ煮定食が大好きだったんだよね。

「あ、音羽さん」

「ホントだ！音兄」

声がしたほうを向くと座敷席で一夏と弾が丁度夕食を食べていた、仲良いなお前ら。弾ってのは一夏の中学でできた友人で、俺が気に入っているこの五反田食堂の長男である。家族揃って綺麗な赤髪である、弾は将来有望だな良い旦那さんになれるはずだ。

「おう、お前らは飯か」

「音兄も飯？楯無さんもいつしよなんだ」

「まあな」

そのころ楯無は

「楯無さんもしかして？」

「そつなのよ弾くん、でも、ねえ？」

「あゝ、頑張ってくださいね。応援してますよ」

なんか二人が揃ってため息をついていたが一体どうしたんだろうか、一夏も俺と同じく首をかしげる。

まあ、さつさと配膳されたこれを食べるとしましょうか。冷めるといけないしな。

何故か弾が俺と楯無をなにか優しげな目で見てくる………？

「いただきます」

「いただきます♪」

なんで楯無は俺の隣に座ったんだか、向かいの席で良いだろうに。お、やっぱ美味しいなこれは。

24・王室認定騎士（前書き）

初・・・・・・・・・・なにがかはご自身で確認ください

ちよいグロ注意

24・王室認定騎士

P L L L P L L L

とある平日の放課後、居残りで会計事務をしていた俺・・・別に何かしら狙ってるわけではないが・・・こういうのって男の仕事だろ？あゝエクセルめんどい、便利だけどもめんどい。

P L L L P L L L

そりゃあ、与えられた命令しか実行できないから自分で操作しなきゃダメだもんなあ。まあ、mk？はアメリカの軍事衛星乗っ取れるくらいの性能あるけども・・・ああ、疲れた。

P L L L P L L L

「ああもつ、さつきからなんだよ！もしもし？」

通話ボタンを押し込み耳に当てる、このものつそい大変な時間に楯^あ無^いは何の用なんだよ。

いやまあ、残ってた仕事を引き受けたのは俺なんだけどもね。はて、何用か？

『更識楯無は預かつt』

ツー ツー ツー

さて、作業再開するか。えゝと遠征の費用は野球部とサッカーな、バス代が一人・・・。

PLLL PLLL

「だからなんだよ、仕事の邪魔すんな。くだらん冗談言つ暇あったら通常業務に戻れ」

『冗談ではn』

ブツ ツー ツー

あいつは何してんだ、更識の使用人に演技させるなんてな。暇なら簪ちゃんと遊んであげろつての、あ、簪ちゃんってあいつの妹な。同じ水色の髪で、女子には珍しくヒーローアニメが大好きな子だ。IS/VISで引き分けたのは記憶に新しいところだ。

PLLL PLLL

「ああもう！いい加減に『パンツ！きゃああ！』・・・何？」

電話越しに聞こえる銃声、演技でもなんでもない楯無の本心からの恐怖が込められた悲鳴。反響して響く音、錆びついているのだろうか、換気扇の動作音が聞こえる。

『早く来ないと嬢ちゃんの頭の風通しが良くなっちゃうよ？』

「どこだ、金はいくらでも出す。教えろ」

どうやら、ガチであいつは誘拐されたらしい。不意打ちでもされただろうか、それにいくら更識の者であってもあいつはまだまだ発展途上だ。銃まで持ち出されたら下手な真似はできないだろうしなあ。

『8億だ、東野第三倉庫に來い、サツには知らせるなよ?』

「わかった、約束するから手を出さないでくれ」

まあ、交渉相手が俺だつて時点で結末は見えてるんだがな。すぐさま窓から飛び降り、一路、自宅へと走った。渡すわけないが、一応持つていく必要はあるからな。

「来たぞ」

場所は東野第三倉庫、昔はかつての大企業の製品流通の拠点のひとつだったらしいが今ではその面影も無くさびれたただの建造物に成り下がっている。目の前の貨物出入り口の大きな鋼鉄製の扉がところどころ腐食して穴が開いているのが証拠だ。

「おや、マジでこいつ来たぜ。よし、金寄越しな」

「先にそいつを返してもらおうか、10億持つて来たんだ。それくらい良いだろ」

テンプレないかにもな格好の男が5人リーダーの女が1人か、その内の2人の間に手足を鎖で拘束された楯無が涙目で居た。

一人がアタッシュケースを開き、確認していた。下手に動けば俺も危ないか、流石にMP7を4挺向けられてたらきつい。

「リーダー、マジで10億入ってるっす」

「そうか、ならもう「用事は無いってか？」な、ぐあっ！」

右腕に巻いていた時計から、軍用対物ライフル「バレットM82」を召還し視界に入る全ての銃器を撃ち砕く。その間、2秒。

「交渉相手が他の奴だったら良かったのにな、その作戦」
「てめえ、こいつがどうなっても良いのか!？」

銃器が使用不能になり恐怖のあまり手下らしき奴らは走って逃げていった、誰が逃がすかよ。

まあ、俺のこれがばれるのはダメだから手下は逃がしてやるか。流石に弾の無駄撃ちはしたくないからな。

「音羽ぁ……」

見たことのないほどに怯えている楯無の頭部にデリンジャーが当て付けられていた、リーダーと呼ばれていた男の顔は勝ち誇ったような顔をしているが……どうするといつかねえ。

得意げに俺にデリンジャーを握っていた右腕を向けてくる女。

「残念だったな小僧、少しばかりヒヤツとさせられたぜ」

「ああ、右腕はもつとヒヤツとしてるんじゃないか？」

なにせ肘から先は既に無くなっているのだから。

「……な、ぎゃああああ!!」

「王室から騎士の称号貰ったのは伊達じゃないんでな」

倉庫の奥、塗装が剥げて見る影もないコンテナにデリンジャーを握ったままの腕が深紅の液体が床のコンクリートを染め上げていた。

なんとか楯無に血はかかってないらしいな、そう狙ったからだけだな。

「動くなよ」

楯無が頷いたのを確認し、枷となっていた合金製の鎖を撃ちぬく。いくつかは短い鎖が残っているがこれで動けるはずだ、もっとも派手に金属片が弾けていったがな。

「音羽……！怖かったよ、うう……」

「まったく、怪我は無いか？俺が来たからには大丈夫だ」

泣きながら楯無が走ってくる、まったく、心配かけやがって。てか、俺より身長上だろうに……。

更識の17代目がこれでいいのか？さて、仕上げ行くか。弾装を入れ替え、銃口を女に向ける。

「お前の負けだ、大人しくお縄になりやがれ」

「ふざけるな、男に負けるだど！？しかもガキに……んなことあってたまるかああ……！」

瞬間、視界が閃光に包まれた。思わず危険を感じ楯無を抱き寄せる銃口は向けたままだ。

光が拡散し、目の前には一機のISがあつた。この世界最強と言われている、元宇宙用マルチフォームスーツ……その日本製第二世代の最高傑作「打鉄」が居た。防御力、汎用性の高さによりラファールと並ぶ量産機だ。

「へっ、どうよこいつは！ああ？」

面倒なもの持ってやがったなこいつ、そりゃあ生身でISには普通なら勝てないからな。

製作者も言ってるやがる「ISに勝てるのはISだけ」ってな。とはいえ、最強なだけであって完全では無いんだよね。それに見てみればところどころ部品が緩んでいる、勝機は……ある。

「音羽ぁ……」

「なんて顔してんだよ、まあ、少し待ってる。すぐにカタつける」

そう言ってる俺は、いつもかけている赤縁の眼鏡を外して投げ捨てた。

24・王室認定騎士（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の現時点の資産は億単位

25・死神の瞳（前書き）

音羽キターーーー！！な話です

25・死神の瞳

「^{リーバースアイ}死神の瞳起動」

イギリスでセシリアと共に誘拐されたときに発現した、空間展開型
擬似ハイパーセンサー。

起動すると顔の前面右半分が黒い影に包まれ瞳が紅く発光する、理論上はドイツで試験的に使われている越界^{ヴォーダン・オージェ}の瞳と同じで動体視力の強化による相対的な反応速度上昇による戦闘能力強化である……。らしい、実際は良く分からんがな。ひとまず「解雇」の理由である……。

「てめえの腕も貰うぞ！」

「残念ながら、渡す気は更々無いんでね！」

女が人一人はあろうかと言うほどの近接ブレード^{コール}を呼び出し、空気を切り裂きながら迫ってくる。その刃には女の歪んだ笑みが夕日に反射して映りこんでいた。

「……………」

ガキイン

振り下ろされた凶刃は横から蹴り上げられ、音羽の身体を数ミリずれて地面へと突き刺さる。その一撃生身の人間に逸らされたことに驚愕の表情を浮かべてしまった。それが今の音羽には貴重なチャンスであるというのに。

「なっ！？つあぐうあ！」

首筋に冷たい感触を感じた途端、痛みを感じた。血は出ていないがシールドエネルギーが大量に減少していた、思わず腕を振るう。しかし、既に離脱していた音羽に拳が当たることも無く空しく空を着る音を響かせえるだけ。ハイパーセンサーで視認したのは大型のチェンソーを両手で構えた自らの腕を奪った憎い少年。もはや、プライドなど消え去り音羽への復讐しかなかった。それに致命的な損傷を負っていることにも、既に打鉄のPICは半数が損壊しているのだから。

「はっ、知ってるか？やろうと思えばこういのでシールドエネルギーなんざ削れるんだぞ？」

「だったら、これはどうなんだよああ！？」

空中にIS用サブマシンガン「メルティ」が光の粒子を形成しながら現れる、瞬間、銃声。

音羽の居た地点一帯が着弾により煙幕に包まれた、女は狂ったように歓喜の声をあげる。

「お、音羽あ！！！」

楯無の悲痛な叫びが響いて反響する、女の銃口が楯無に向いた。

「残念だったなあ、彼氏を追いかけていきな！」

「彼氏になった覚えは、無いんだがね。まあ、それも悪く無いかな？」

ズガンッ

瞬間、女の身体が地面に叩きつけられる。その後ろには工事用の小型パイルバンカーを両手でどうにか抱えた音羽が立っていた、音を立てて杭を打ちおろしたそれには大量の銃創があった。パワーアシスト用のケーブルが切断され、只の金属の重しに成り果てる。

ズガンツズガンツ

「あゝあ、これも使い物にならなくなったか・・・」

絶対防御のエネルギーシールドを突き続け杭先が曲がったパイルバンカーを投げ捨て、女の上から飛び降りる。既にISは強制解除され、気絶した女がISスーツを纏った姿で倒れていた。それを見た音羽はどこからか注射器を取り出し、女の失った腕の切断面へ針を刺す。中身の液体が注入される。

「それは？」

「再生促進医療用ナノマシン、こいつの腕も半年で元通りだ」

流石に人の腕を奪うのは嫌だからな、とはいえ苦しい思いはしてもらうがな。さて、と。早めに失敬しないと警察が五月蠅くなるな。ささつと証拠隠滅してこいつをどうにかしなければいけないな。

いつもはやる気の無い顔で渋々仕事をしているような音羽が、自分の命も省みず助けに来てくれた。
それこそ犯罪者に怖気づくこと無く、華麗に撃退して。

「ほら、帰るぞ楯無」

手を差し出してくる彼は今、この世界の誰よりも格好良く。そして、一人の少女に淡い恋心を抱かせた。

「うん！」

「ははっ、そう来なくっちゃ！」

この日、17代目更識楯無は人生で初めて恋をした。

「・・・・・・・・つく、ああ？生きてるのか」

目を覚ました女が最初に感じたのは左手に握らされた紙切れだった。それを倒れこんだまま開くとそこにある一文と住所が記されていた。

『アレンティア薬品 生活には困らないだろうからココ行け。話しは通したから手下といっしょにな、右腕は半年すりゃ治るからそのつもりで。サツには通報してないから安心しとけ See you
：）』

「あん？ご丁寧に包帯まで巻いてやがる・・・・・・・・けっ、お節介な男だぜ。不思議と嫌な気分じゃねえけどよ」

25・死神の瞳（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の腕時計は擬量子化格納領域装置、ある程度の物は仕舞える。
ライトな四次元ポケット、カップラーメンから対物ライフルやお湯
が入ったやかんまで入っているらしい

26・特別な存在（前書き）

最後の台詞の意味が分かる人は居るかな？

26・特別な存在

「あの、なぜ俺がここに呼び出されているのでしょうか」

誰もが真面目に授業を受けている平日火曜日、ある夏の日。見知らぬリムジンに「更識の者よりお話が」と言われ任意と言う名の強制でとある大豪邸へと連れて来られた。目の前には16代目楯無が鎮座していらっしゃる、放たれる気迫でさつきから手汗が止まらない。できるだけ平静を装っているが・・・多分、いや、確実に見破られている確信があった。

「ふふ、別に緊張しなくても良いわ」

「は、はあ。わかりました」

やっぱり見破られていた、分かりきったことだが実際に言われると結構悔しいな。こういう分野に関しては向こうがアドバンテージ大きいけども、なにせ対暗部用暗部なのだから。17代目あいつは全然だったかな、まあまだまだこれからだろう。

「いえね、娘を助けてくれた騎士にお礼が言いたくて」

イギリス王室で10年に一度極秘裏に選ばれる優秀な人物に与えられる国民栄誉賞のガチ版みたいなもの、特に戦闘能力や頭脳・電子機器技術などイギリス版マルチ分野ノーベル賞みたいなものでもある。団長や衛兵など分野それぞれに様々な称号があるのだが、その中でも単機での戦闘能力が認められた人間に与えられる。たかだか小学生程度が、と内密に騒がれたらしいが俺がそれに選ばれた。与えられた人間は軍で言う中佐階級レベル権限があるそう・・・何かつたときに限るが。

「そこまで知っていますか・・・」

「裏では有名よ？今は所在不明で死亡説まで出てるらしいけどね」

死亡説って・・・そりゃあ痕跡消して日本に来たけどさ、向こうの戸籍も別人になってるし。まあ、当たり前っちゃんあたり前か。セシリアには年賀状とか裏ルートで送ってるから大丈夫だし、死亡扱いのほうが助かる。

「それでね、お願いがあるの」

「な、何でしょうか。無理なものは無理ですが」

息を一度吸い、16代目がはつきりと喋った。その驚愕の内容とは・・・！！

「あの子を住ませて守ってくれないかしら、勿論バックアップはするから」

「あの、俺が訳有りの身体とか狙われてる可能性があるとかそこらへんの事情分かって言ってます？」

うなじにあるバーコードに、発見時の大怪我に右目のこれ。中二過ぎる感じがするが、ミリアさんが正体不明の組織から俺を守ってくれていたことからわかる。確実に俺は厄介な存在だと、それに裏の更識がそんな簡単に言っただけなのか？

「安心しなさい、更識が全力で協力してあげる。というか、死亡したって流れてるから裏でももう安心できるわよ？まあ、日本にいれば大丈夫だし」

「はあ・・・ひとまず考えさせてください」

いくらそうだとしてもすぐに返事できるわけが無い、というかこんなのが暗部に対抗できるのか？とか思いながら帰路についた、時計を確認すれば既におやつ時間を過ぎていた……。うわあ。

「それでは音羽様、お待ちしておりますとのことです」
「は、はい」

燕尾服を着た若い男の人が頭を下げ、リムジンを運転し去っていく。思わず癖で自分も腰を曲げて礼をして見送った。

「どうしようかねえ」

考察しながら空中に召還したヤカンからカップに紅茶を注ぐ光景はシニールだったに違いない、一杯飲みながら考える。うゝむ……。。

「どうしたの？」

「いや、楯無を住ませるのは困らないんだが。俺にメリットも有るし、でもあいつが嫌がるだろうし。年頃の女の子がいくら知り合いとは言え男と一つ屋根の下に居るってのもなあ」

「別に困らないよ？」

「そうか、本人が良いならなら良いかなあ……。っておわあ!？」

突然肩に回される華奢な腕、首筋にかかる吐息。聞きなれた声、これは……。

「お前か、驚かすなよ」

「ふふん、それが見たかったのだあ」

こいつは……まったく、心臓に悪いっての。まあ、嫌な気持ちにはならんけどさ。

「で、どうする？」

「もちろん、お世話になります！」

ビシッと敬礼する楯無、もとい新たな同居人。まあ、頑張りますか。毎日が騒がしくなりそうだけでも。

「あ、そうだ。音羽」

「あん？」

そおつと楯無が耳元で囁く。

「更識美月、それが私の名前。覚えてね？」

この日、俺は彼女の真名を知った。

26・特別な存在（後書き）

どうでも良い作品情報

どこでもできたての紅茶が飲める音羽、お茶菓子も常備していると
か

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（前書き）

なんと、PV70000越えにユニーク6000人越えてました。なにかお祝いしたほうが良いですかね？

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった

「いや、新婚夫婦みたいね」

「お前の将来の夫に同情するよ、大変そうだ」

上機嫌で本家から送られて来た絶好のスニークアイテム、もといダンボールの荷を解く美月（二人のときはそう呼べと言われた）。出てくるのは某蛇さんでは無く、服や下着にティーカップから女の子らしい熊の人形まで。

「荷物多く無いか？」

「音羽が少ないだけよ、あれだけの荷物なのになんで一軒屋借りてるんだか」

えーと、俺のは家電一式に服や銃器・・・あと工具だけ。確かに一軒屋借りなくても良いような量だな、実際は二階の一部屋が銃器で埋まってるんだが。それでも空き部屋が一つある、もう一部屋は俺の寝室だが。

「うん、二階の部屋が一つ空いてるからそこで良いか？」

「良いよ、あ、タオルはそっちにお願い」

「了解です」

脚部のタイヤを回転させ、ワイヤーアームでそれを持ったmk？がウィンウィン言いながら美月が指した方向へとタオルを持っていく。音羽は食器棚にティーカップなど割れ物を仕舞っていた。

それから一時間、荷解きし片付けが終わった。居間のソファに座り音羽は寄りかかったまま燃え尽きていた、心なしか色が無い気がする。まあそこはギャグ補正ということだ。

「夕飯何が良い？」

「なんでも」

それが一番困るんだが・・・と良いながらマカロニを茹で始める音羽、すっかり青いジャージの上にオレンジのエプロンをしていた。菜箸を片手にホワイトソースを作り始める、美月はそれを見て色々諦めた。

「どれだけ手馴れてるのよ・・・」

「ん、ああ。厨房でも少しやってたからな、さあて今日はグラタンでもやろうかな」

慣れた手つきで器に盛っていき、最後にチーズを乗せオーブンに入れる。少しすると香ばしい匂いが部屋の中に広り始める、音羽はそれを横目に食卓の準備をしていた。

「私も負けてられないわね・・・」

「できたぞ」

できたてのグラタンが湯気を昇らせる、チーズが溶けて丁度良く広

がつていた。食欲をそそる香りが鼻をくすぐる。う、本家で食べたのより良い匂い。音羽って何でもできるのね、というかこの悔しさが半端ないわ。

「さあ、召し上がれ！」

「い、いただきます……はぐう！」

いきなり人の作ったグラタン食べて「はぐう！」とか何だ、そんなにまずかったかな？美味しく作ったんだが……。一時期は化学兵器やダークマターできたこともあるんだよなあ。それが今はしつかりした奴を出せるようになった、セシリア……。なんかまだ化学兵器作ってそうだなあ。

『クシュン……。誰か噂でもしてるのでしょうか？』

『またこの化学兵器を作ったことではないですか？いまだにこれでは音羽さまも泣きますよ』

化学兵器

なんか、相変わらず手料理化学兵器を作ってるような気がする……。チエルシーさんも大変そうだなあ、いつそのことメニュー送るかなあ。オルコット家の人間がアレなものしか作れないったら大変だ……。考えたらずげえ心配になってきた。

「どうしたの、いきなりそわそわしだして」

「いや、ちよいと元主人のことが心配になってな」

「なに、そんなにたよりないの？」

「いや、ただダークマターを作って無いかと思ってな」

「・・・・・・そんなにひどいの？」

「ああ、見た目は最高なんだけど。その分味がぶっ飛んでて」

いつだか食わされたオムライスは見た目はもう高級レストランのそれでも半熟だったんだ、でもチキンライスがタバスコや唐辛子で色付けされてて（ry

一通り説明すると、美月が顔を引きつらせながら苦笑していた。まあ、そうなるよな。

「なんか、音羽がそうだったのがわかった気がするわ」

「そうか、そうだったら嬉しいよ・・・」

はあ、とため息をつきながらも談笑しながら楽しい夕食の時間は過ぎていった。翌日の朝、一夏に冷やかされたのはまた別の話だ。

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽のオーバースペックはほぼ必要に駆られた結果

お知らせ 24話と25話少し修正しました。

28 生徒の長は大変なんだよな（前書き）

へーい、お祝いで何しようか迷ってる作者です

28・生徒の長は大変なんだよな

「おはよう！はい、おはよう！」

「おはようございまーす！」

とある朝、校門前で俺と美月にジャックの生徒会三人で朝の挨拶運動中。なんで風紀委員がやらないんだ？

ちなみに遅刻者には生徒会長から嬉しい特別指導！近接格闘編！らしい、なにその壮大な物語っぽい感じ。

というか俺に許可とらずにそういうの決めるなよ、なんで副会長のほうが権限あるの？ああつ、なんでギリギリだからってそんな顔で走るんだ！

「だって、ねえ？」

「え、いまだに初日のあれが響いてるわけ？」

「そうだよ」

転校初日、学校内の嫌われ者教師を組み伏せたのだ。教育的指導で組み手をさせられて、勝てたら終了というルールで・・・勝ったんだよね。しかも不意打ちされたのも癖で反撃したし・・・まあ、逆の立場だったら俺もそうなる。

「まじか」

そのせいで、交番から警官呼んでの講話では俺が生徒代表で本職の人と手合わせさせられて防犯教室じゃなくて生徒会長VS警官の試合に成り果てたし。付き添いの警官二人は上司であるう警官を応援して、生徒や教師は俺を応援すると言うシュールな状態になったし。まさかの教育委員会の人まで巻き込んだ2時間に及ぶ白熱した試合

だった……この学校大丈夫なのか？

「まあ、良いじゃない。発言権が上がったし」

「そりゃあ、それは助かるけどさ」

もしかしたら国内では生徒の要望が一番通りやすい学校なんじゃないか、教師側も生徒が問題起こさないから話し合いもそれなりに開けるし。というか、学校内では男女平等な感じになってるし……・まあ、就任演説でそういうことを言ったのもあるのかもしれないが。

「そついや、音羽の夢ってそれだっけ？」

「まあな、早い話が二人みたいな理解ある女性が増えて欲しいってこと」

「あはは、それには賛成だね」

放課後……生徒会室で要望書を吟味していた。もちろん全員で。

「『消えろ、イレギュラー！b y匿名希望』……却下、てかネタに走るな」

「『アイス！アイス！b y青いマフラー』こっちに要望されてもねえ……却下」

「『ネタが浮かびませんb y G』自分でどうにかしてよ」

緩い分、こういうところでふざけてくれる愛すべき生徒たち。別に怒らないけど、要望じゃなくて相談になってるし。てか、関係ないのも混じってないか？

「『エアーマンが倒せないb y匿名希望』俺だって無理だったわ、頑張れ」

「『3分間だけ待ってやるb y某大佐』どう考えても3分過ぎてます、ありがとうございます」

「『起動してもらえせんb yネギ』待つしかないよ」

『はあ……』

まともな要望が無いぞこれ、てかふざけ過ぎだろ。ネタばかりとかいい加減にしろ、もう少しまともな要望は無かったのか。この学校の生徒にまともな奴はいないのか、どうなんだ。

「『友人が他校の生徒にいじめを受けてるみたいなんです、私では無理でした。どうか助けてあげてください！b y西本愛美』いじめだと？くだらんことをする奴がいるもんだなあ」

まあ、勿論動くけどな。こういう時のために要望書を受け付けてるんだからな、明日にでも本人に聞いてみるか。

「つまり、相手は高校生だと？ふむ」

いじめられているという少女、陣内良子さんに事情を聞いていた。なんでもハーフラしく、金髪碧眼だと言うだけで会うたびに空き缶は投げつけられ、あまつさえ先日は小石を投げつけられて頭を少し切ったとか。ひどい人種差別だこと、しかも相手は日本人の女子高校生。そいつらが言うには珍しいからって可愛がられるのが気に入らないらしい。

「で、そいつらは有名な不良グループの頭だと……厄介だなあ」

「しかも、明日の午後6時に川原に呼び出しされていて5万持って来ればやめるって……」

そういうタイプの輩って後からまた要求するんだよね、てか、親はどうしてんだ？娘がそういうことしてるんだったら気づくだろう、ただでさえそういうこととしてれば目立つのに。

「しかも、そのリーダーの人の親はヤではじまる職業らしいよ？」

「……なんて厄介な、そう簡単に手が出せないじゃんかよ」

後が怖いってやつだよなえ、一般人だったら殺されるぞ。しっかりした証拠なきや警察に突き出せないし……どうするかなあ。あ。

「おし、じゃあ良子さん。その日、約束どおり待ち合わせ場所に行ってください」

「え、ちよつと。音羽！？」

「まあ、安心してください。どうにかして見せますよ！」

28・生徒の長は大変なんだよな（後書き）

もし原作までぶっこんでも気にしないでね

どうでも良い作品情報

音羽は普段容姿は男の娘（黒髪サイドテールに赤縁眼鏡）

29・結果・・・（前書き）

後半gdりました・・・orz

29・結果……

午後6時、とある川原。

「おし、約束の5万だ」

「な、ないです……」

陣内良子は音羽に言われたとおりに来たは良いが、中学三年に5万の金額など用意できるわけもなかった。

もちろん、相手の女。この付近では有名な不良グループのリーダー、版内芽衣子が納得するはずもない。

「ああ？無いって、はいそうですかってなるわけねえだろうがよ！」

「まあまあ、そこはどうか勘弁してくれませんか？」

良子のポニーテールに手が触れる瞬間、その腕が何者かに押さえられる。

「そこまで、つてとこか。ギリギリ間に合ったな」

「てめえ、何者だ。邪魔すんじゃねえぞ！」

腰まで届く黒のサイドテール、見透かすように赤縁の眼鏡の奥に鋭い瞳があった。まだ若い、並木野中の生徒であることしか制服からはわからない。

「いえ、うちの生徒が虐めを受けているということ。ご確認に来た次第です」

「へっ、ご苦労なこつて。してるって言ったらどうなるんだよ？」

瞬間、その少女の顔から笑みが消える。

「しかるべき処置、この場合は恐喝と言うことで法に訴えますかね」
「させると思うか？」

「まあ、これでも言えるでしょうか。ね？権三さん」

少女の背後から出てきたがっしりした体格の男性、いかにも親父イ
みたいなこの人は版内権三。版内組の組長であり、芽衣子の父親で
ある。ちなみに表では版内建築の会長である。過ごしやすく、安価
だと評判だ。

「親父！？なんでここに」

「この坊主が教えてくれたんだよ、お前がちよいと人様に迷惑かけ
てるってな」

「髪の色がなんだ、目の色がなんだ。お前だって昔は友達にも居た
じゃねえか」

「いたさ、でも、裏切られた。所詮外人なんてそんなもんだ」

権三さんに話に言ったときに聞いた。なんでも、親友とまで呼べる
ほどだった友人。そいつに言葉巧みに誘導され強姦まがいのこと
をされそうになった。それがいまだに心に傷として残り、異常なま
でに外人に拒否反応。特に金髪碧眼、聞くに堪えなかったが……
そういうのがあるからって許されることじゃない。

「そ、そうだったんですか……」

「ああ、そうさ。第一、あたしに近寄ってくる奴も気に入らねえ」

「なあ、芽衣子さん。あんたは、そうやってるときにどう思った？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「芽衣子、俺が来た途端に目を逸らしたよな？それが答えか？」

沈黙、ただそれだけがその場を埋め尽くす。

「ああ、自分でもわかるさ。ただの八つ当たりだってことくらい、でも、無理だった」

「へっ、わかってやってたなんてなあ。まあ、仕方ねえ。良子さん、これで許してやってくれんか？」

芽衣子の頭を押さえつけ、親子ともども頭を下げる。世間一般には土下座と言われるものだ。

「あ、いえ。芽衣子さんが自分でわかってるならそれでいいです」
「・・・・・・・・い、今まで済まなかった！これで許してもらおうとは思わん、何でも命令してくれ」

芽衣子がさきほどまでのきつい目ではなく、一人の少女としてまっすぐ良子さんを見据える。

「じゃあ、私とお友達になってください」

「あれだけのことしたあたしが？」

「ええ、もう一回、信じてみませんか？」

良子さん言い女すぎる、と思ったのは俺だけではなかったはず。

「ひとまず、一件落着か」

29・結果・・・（後書き）

え、あともう一回更新できるかと9時ころに

30・夏ならば(前書き)

相変わらず季節感の無いGです、もう現実には秋ですが気にせずどうぞ

30・夏ならば

「音羽さん、こっちはコンロの準備終わりました!」

「おう、じゃあ遊びに行つていいぞ簪ちゃん」

今は夏、季節感無いって言われてもここは夏なんだ。現在、美月・一夏・簪・鈴・千冬さんと俺のメンバーで海に面したキャンプ場にいる。なんでも一夏と鈴が髪のことと弄られていた簪のことを助けたそう、男らしいねえ。鈴音ちゃんは女の子だけ。

「すまないな音羽」

「いえ、いつもお忙しいみたいです。こういつときくらいは相手してあげてください」

久しぶりに休暇で帰ってきた千冬さんを一夏と一緒にしてあげるつても目的なんだよね、もちろん夏だからつてもあるが。

「音兄、終わった」

「あたしも」

二人に頼んだのは水汲みだ、貯蓄しておかないと使うときに二度手間だから。ちなみに俺はテントを千冬さんと美月で組み立ててる。もちろん部品状態を量子展開したがなにか？

「おし、じゃ三人で遊んできていいぞ。怪我はするなよ?」

はーい、という元気な声を受けながらロープをくり付けたピックを地面へと打ち込む。これをしっかりやっておかないと風で飛んでしまう。流石に寢床が無いつてのは困るでしょ。というか、千冬さ

んの方角からガスッ！とか聞こえる……どれだけ力入れてるんだ……。

「終わりました？」

「ああ、深めにしたから大丈夫だろう」

「オッケーだよ」

テントの建設……間違っではないな……も終わり、あとはまあ……遊ぶ？というか急遽これを企画したのも理由がある、俺と一夏しか知らないが鈴音ちゃんの家が空気が変わったからだ。だから気分転換も含む、どうせならジャックも思ったがあいつが「夏はドイツで妹分をね」とか言っていたから無理。

「さて、俺はどうするかなあ」

なんか千冬さんが残像残して走っていったんだが、しかも丁寧にキャストオフして……もちろん水着は着てたぞ？若干、鈴音ちゃんと簪ちゃんがびっくりしてたが。ひとまずブラコン乙。いくら滅多に居れないからってそこまでか。シャツとズボンを丁寧に畳んであるから余計に。

「俺も泳ぐかな」

「じゃあ私もそうしようかな」

えーと、服を格納して同時に水泳用の海パンを展開する。自分でやっついてなんだが、便利だなこれ。

美月はなぜか俺の後ろで着替えてますが、見ないよ……紳士（変態ではない）の行動じゃないだろう。

まあ、紳士のしの字もおれには無いけどな。

「お、似合ってるじゃんか」

「ふふ、この日のために新調したのよ」

中二とは思えないほど発育の良い身体を髪と同じ水色のビキニ・・・で良いのか？を纏っている、まあいいんじゃないか。特に俺はどういうことは無いが、ちなみに雅から受け取ったペンダントは外している。

失くしたらいけないからな。

「さてと、俺はモーターボートでも借りて「私も乗るわよ！」どうなっても知らん」

「いいいやつはあああああああああああ！！」

「いやあああああああああ！！」

時速80kmで海面を滑走する状況に、美月が泣き叫んでいるが気にしない。俺は、ただ、走る！！

日が既に海中に没し、夜空には月が昇っていた。コンロからは香ばしい香りと肉と魚が焼ける音が聞こえる。昼間一杯に遊んだ俺達、千冬さんが三人を相手に笑顔で水かけあいなどしていたし・・・まあ、良かった。隣で串に刺さった肉を齧りながらでくと美月が寄りかかっているが。

「久しぶりにはしゃいだな」

「千冬姉、途中からめちゃくちゃ水かけてきたもんな」

「まさか飲み込まれるとは思わなかったわよ」

「でも、楽しかった」

うんうん、企画した甲斐があるってもんだな。美月は高速で滑走したからのびてるが・・・すまん。

「さてと、そろそろだな。空をご覧くださいあれ！」

パチンと指を鳴らす、その途端、夜空に大輪の花が咲いた。

「すげ〜」

「わああ」

「綺麗・・・」

ふふふ、ここから見える小島にはタイマーを仕掛けた自動花火発射装置が置いてある。当分は大なり小なり綺麗な花火が打ち上げられる。量子化って便利だね。

「ほお・・・」

「うふふ、用意が良いのね」

「どうせなら、楽しみたいでしょ」

その間も様々な花火がこれでもかと光り輝く、どこぞの花火大会にも対抗できるぞこれ。ちなみに費用はライセンス料と売り上げからだから問題無し。綺麗だな〜。

こうして、今年の夏も過ぎていく。あいつらにも良い思い出になったでしょ、もちろん俺らもだけど。

30・夏ならば(後書き)

どうしても良い作品情報

そろそろ飛ぶ

31・キャラクターまとめ（前書き）

それ以上でもそれ以下でもない

31・キャラクターまとめ

メインキャラ紹介

更識楯無（女）

音羽が並木野中学校で最初に出会った生徒、一学年生徒会長を務めていたこともありとても有能。

対暗部用暗部「更識家」17代目当主、になったばかり。16代目が先陣切っているので実力は・・・お察しください。並木野中学校一学年生徒会長。少しの殺気で泣いてしまうなどまだまだ普通の女の子、自身を助けに来てくれた音羽に惚れたらしい。本家の意向で音羽と同居中。本名は美月（音羽にのみ教えた）

ジャクリーヌ・ウェルキン（女）

音羽に決闘を申し込み見事惨敗した残念な人、しかしその身体能力は素晴らしい！

音羽の強さに惚れた女（自称）普段はほわ〜っとしているが、本気になるの色々すごい。

たまにドイツ語を話すことがある、my財布には黒うさぎの紋章がある。

並木野中学校生徒会書記。愛称はジャック。

岸川頼子（女）

音羽たちが在籍する一年三組の担任、熱くなると松。修三なみにな

つてしまう。

女尊男卑の社会には珍しい男女平等をモットーに生きる新任教師。ただし、初対面にはきつく当たってしまう癖がある。（本人は改善したいが現時点ではまだまだ）

雅（女）

冬の公園で倒れたところを音羽に助けられた少女。音羽と同年らしいがその素性は一切不明、引き取りに来た人物は彼女曰く、IS装備開発企業の人物だった。家事スキルが壊滅的で、口調もところどころ男っぽい部分がある。日本人らしいが雑煮を知らなかったりする、しかしレゾナンスで音羽が買った服を笑顔で着るなど女の子らしい一面もある。音羽が身に着けているペンダントは雅がお礼として渡した物である。

31・キャラクターまとめ（後書き）

さて、次回は・・・お楽しみに

どうでも良い作品情報

次回やっとなる

32・不幸な二人（前書き）

さあ、原作開始・・・

32・不幸な二人

三月、真面目に受験勉強をして藍越学園に入学し一年が経過。

美月はロシア代表としてIS学園に入学、中二の終わりにロシアに渡ってからは滅多に会えない。俺の護衛もそこで終わった。少し寂しいが仕方ない。

まあ、学園祭には招待されたからその時に会えたが見違えていた。それから鈴音ちゃんが中三になるまえに中国へ、寂しくはなったがなにか一夏と約束をしていたらしい。

ちなみに今日は入試の日である、なぜか去年行われた不正によって電車で四駅行った場所で試験なんていう変なことになっている。俺のときは校舎でだったのになあ、ちなみに一夏が受験する。

「音兄、俺頑張ってくるよ」

「おう、行って来い。まあ、俺も仕事あるんだけども」

並木野中で連続で生徒会長やった因果か、藍越でもやることに・・・一学年の다가確実に来年やらされる。しかも俺の前に入った先輩が全員指名という状況、普通あんたらだろうと言いたいが面接官にまで「ああ、君が！」とか過剰な反応されたし。

「受付だっけ？」

「ああ、そうなんだが・・・場所がわからん」

おいおい、高１と中三が迷子ってシャレにならん。しかも１学年生徒会長がだぞ・・・嫌な汗が流れ始める、というか流れてる。なんでこんな複雑な構造なんだ！常識に囚われない俺 SUGEE な感性で設計されたとしか考えられない、しかも会場は前日発表（しかも職員だけ）だから把握できてないし。やばい、控え室での待機時間ギリギリだ。うわ~~~~！？

「音兄、多分ここだ」

一夏が指差したのは受験会場の立て札、おお助かった！

「はい、時間押してるから早く着替えてね」

こっちも見ずに女性職員が言葉をかける、せめてこっち見ようぜ。まあ、これで大丈夫か・・・って着替える？なんだ、今年から不正防止で持ち物検査じゃなくて服から変えるのか。厳しくするとは言っていたが・・・ここまでとは思わなかったな。

「おし、一夏ささつと着替えちまえ」

「あ、ああ、つて着替えるのか？」

「そうらしいな、厳しくするって言ってたしじゃあ俺は行くぞ」

そう言つて移動しようとした矢先、後ろから悲壮感たっぷりの一夏の助けが聞こえた。

「お、音兄！」

「あん、なん……は！？なんでIS、てかなぜに乗ってる？」

そこには、かつて俺がボコした打鉄を装着した一夏がいた。え、どゆこと。え」と

IS

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなった。ただし、女性しか起動・装着できず。そのために今の過度な女尊男卑社会ができた。

……重要なのは女性しか使えないと言う事だ、で、目の前で一夏が動かしてる。状況が飲み込めていないらしく、さっきから腕を動かしてる。どう考えても災難の匂いしかない。

「い、ー「え、男子が動かしてる！？」「あちゃー」

気づかれないうちに降ろそうかと思っただが、無理だった。頑張れ一夏、俺は知らん。

「無責任！？」

「俺じゃどうにもできん、大丈夫だ楯無もいるし」

「楯無さんがいるからって問題じゃないって！」

「ひとまず降りろ、そのままじゃいかんだろ」

「あ、ああ」

どうにかコックピットが開放され、一夏が降りてくる。以外に高いので俺が抱きかかえることになるんだが……でかくなっただなあ一夏も。まあ、今はそこは重要じゃないが。

「ふう、これからが大h・・・うお!？」

一夏を降ろし、騒がしいので打鉄によりかかりパニックに陥った教師陣を横目に紅茶を二人で一口飲む。もちろん紙コップだ。

「・・・なんか視界が高いなあ、まあ良いや・・・・・・・・・・つてあれえ!？」

「お、音兄まで・・・」

なにかが頭の中に流れ込んできたと思ったら、俺まで打鉄を身にまとっていた。一夏は驚きのあまり空になった紙コップを落とす。

「え、二人目!？ちょ、ちょっと。ほ、報告!！」

なんとも大変なことになってしまいました。

「なんか、俺も頑張らなきゃいけないことになったっばいな。これ」「うん・・・・・・・・」

その後、二人揃って急遽検査をされ、帰宅できたのは日が落ちてからのことだった。

32・不幸な二人（後書き）

どうでも良い作品情報

同時刻、受験会場でなぜかテンションが高い金髪少女が目撃された

33・入学・・・高校一年からやり直し（前書き）

いつもよりサクサク書けた

33・入学・・・高校一年からやり直し

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

IS学園、1年1組教室。一夏は前席センター、俺は窓側の一番後ろ。周囲からの女子の視線が痛い、もし物理干涉ができたら二人揃って蜂の巣になっているんだろう。というか、まさか高校1年からやり直しとは・・・というか、藍越学園の受験会場だったって言うね。通路一本間違えてなければ今頃2年の教室にいたのに、今更過去のこと掘り返しても仕方ないが。

『（これは・・・想像以上にきつい）』

なんとか表面上は平静を保っているが、さっきから嫌な汗が止まらない。教室に男が俺らだけってのがもうきつい、なんか一夏の背中に哀愁を感じる。

「はい、それではSHR始めますよ」
ショートホームルーム

教壇に歩いて来た緑色のショート髪の女性は山田麻耶先生、どうみても背伸び感が満載です。このクラスの副担任である、そしてある一部が異様に大きい。肩こるんだろうなあ、というか服が大きいらしくだばっとしている。愛玩動物に思えてしまうのは仕方ないことだと思っんだ！

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね！」
「よろしく願います」

え、返事したの俺だけ？挨拶と返事は大事だぞ、それもお世話にな

る人ならば余計だ。というか、俺だけとか寂しい。返事したのが一人だけという状況にうるたえる山田先生、不憫すぎるぞおい。

「じゃあ、自己紹介をお願いします。出席番号順で」

なんとか持ち直した山田先生が無難なものを提案する、まあ、入学式終わって最初のSHRってそんなものだよな。今のうちに何言うか考えておかねば、何も言う事が無いってのは恥ずかしいからな。第一印象は大事だぞ。

「――」

順調に進み、一夏の番なんだが。なんか様子がおかしい、む窓側・女子？知り合いか。そっぽ向かれた、ひとまず返事しようぜ。さつきから山田先生が何回も呼んでるぞ、もう軽く涙目だし。

「織斑君、織斑一夏君？」

「っは、はい！」

いきなり大声で呼ばれて驚いたのか、声が裏返った一夏。クラス中で笑いが巻き起こる、逆の立場だったら俺も恥かしいなこれは。まあ、自業自得だ諦める。

「お、大声出しちゃってごめんね。怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でも、自己紹介『あ』から始まって『お』なんだよね。自己紹介してくれるかなあ、ダメかなあ？」

どこだかの伝統工芸品のごとく頭をぺこぺこ下げる山田先生、何回もしているためにサイズが合っていないらしい眼鏡がずり落ちてきている。どう見ても年上には見えん、『子供が背伸びして大人っぽ

くしている』っていう感じ。一夏も軽く焦ってる。

「いや、その。しっかりやりますから、安心してください」

「ほ、ほんとですね！約束ですよ？」

顔をがばつと上げて心底嬉しそうに一夏の手をとる山田先生……
すげえ注目浴びてるな二人。俺に向いていたであろう視線が一つ残
して全部移動したぞ。あ、一夏が決心したような顔で立ち上がって
こちらを向いた、一瞬固まったが自分に向けられる視線に驚いたん
だろう。なにせ約30人ほどの視線が向いているんだから。

「え……え〜っと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

無難にまずは名前から、うんはつきり聞こえる。で？

「……………」

動きが止まった、で、次は何言うんだ？…………俺に助けを求め
られてもなあ、さあ何を言う？まさかそれだけで終わるとかはあり
えないだろう、そこはわかってるはずだ。多分、メイビー、おそら
く。なぜか自信が無くなってきた。

「……………以上です（キリッ）」

え？

ガターン ドテツ ズルツ

十人十色のリアクションを取りながら一夏と俺以外の女子がずっこ
ける、俺はどうにか机に踏みとどまった。座ってるけど、てかmj

k。言うのそれだけかよ、あ。

スパアアン！！

「ザドルノフツ！」

なんか一夏が変な声上げて頭抱えて蹲ってる、出席簿を振り下ろした人物とは！……千冬さんでした、ここの担任か。あのあとの試験ですげえ嬉しそうに笑顔で近接ブレード持って突進してきた人と同一人物とは思えないくらいビシッと決まってる。もはやあのだらしん

ズガンツ！

「FOX DIE！」

出席簿が俺の額目掛けて飛んできた、命中した途端にブーメランみたいに戻っていく……それ本当に出席簿ですか？

「くだらんこと考えるのもそこまでにしておけ」

「はい」

千冬さんがクラス全体を一瞥し、言葉を紡ぐ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ、私の言う事は良く聞き理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導してやる、私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛えぬくことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

無論、世界最強の言葉に大勢が歓喜した。一部に淑女が含まれていた気がするが……。

もちろん、その熱狂的な言葉の乱射に対して根っからうつつがっているのが千冬さんらしい。

「で、お前はまともに自己紹介も出来んのか」

「いや、千冬姉。俺h」

スパァン！

クラスに姉弟であることがばれ、今までで一夏の脳細胞が1万個死んだのは言うまでもない。

33・入学・・・高校一年からやり直し（後書き）

どうでも良い作品情報

クラスメートに変更アリ

34・再会・・・したは良いけど(前書き)

音羽のおかげでセシリア良い子

34・再会……したは良いけど

「さて、時間も無いのでな。如月、自己紹介しろ」

「はい、織斑先生」

一夏はまだ痛みには耐え切れず蹲っている、のた打ち回らないだけマシか。てか、千冬さんが言った途端に俺に視線が集まる。うお、これはそりゃ動きが止まるわな。ビシビシ視線が突き刺さる、圧倒されるってこういうことなんだな。

「えー、藍越学園から転校して来ました。如月音羽です、趣味はサイクリングです。年上ですが気にせず話しかけてください、ひとまず一年間よろしくお願いします」

これで良いはず……。なんか一人だけ視線を叩きつけてくる奴がいるが誰だ？今はまあいいか。

「これでSHRを終わる、授業の準備をしておけよ？」

や、やっと終わった……。もう既に疲れたんだが。廊下を見てみれば終わってから数分も経っていないのに人だから、そうか、これが動物園の動物たちの状況か！ひとまず動物たちよスマン、君たちの気持ちも知らずにいてごめんなさい。

「ちょっと良いかしら？」

なんか最近ずっとご無沙汰な声が聞こえる……。こ、これはもしや！

「セシリア？」

「5年ぶりですわね、まさかこうなるとは思っていませんでしたけど」

まあ、そうだな。まさか同じ学校の同じ教室で再開とは……嬉しいような悲しいような。

「ここにつてことは、候補生に？」

「ええ、オルコット家も安心ですわ。約束通りに」

「おお、良かった、良かったああ」

「きゃあ……もう／＼」

思わず立派に成長したセシリアを見て安心した、というか嬉しくてつい抱き締める。

「うんうん、元気そうで安心したよ」

「私もですわ、久しぶりですわね。音羽に抱かれるのって」

まあ、最後に抱き締めたのってイギリス出る前日以来だからなあ。これでミリアさんも安心だ、俺は勿論安心だ。俺は！今！猛烈に！感動している！

「つと、ギャラリーが騒がしいな」

「あつ……そうですわね」

さっき一夏が見た少女がこっち見て羨ましそうに見ながら一夏を引っ張っていった、一夏はなんか勘違いしてるみたいだが。というか廊下の人だかりがキヤーキヤー五月蠅いな、家族と抱き合うくらい別にどうってこと無いだろ。

「ありや、もう時間か。じゃあまた後でな」

「ええ、また後で」

予鈴が鳴り、一夏が出席簿アタックを食らったのは言うまでもない。流石ブラコン、弟には容赦が無い。

ちなみに俺はすでに教科書とノートを用意し終わっている、予習はしたから大丈夫なはず。いやまあ、なにせ急だったからなあ。まあ、セシリアが同じクラスってだけでも安心できる。というか、どうせならもつと早く分かってれば良かったのになあ。なにとはともあれ頑張るしかないか。

「で、あいつは何で怪しい動きをしてんだ？」

さつきから山田先生が授業をしているんだが、一夏は関係ない教科書の関連性の無いページを開いている。そこは実習でのISの飛行軌道の応用だぞ……あんなで大丈夫なのか？

「ここまででわからないところがありますか？」

「……」

一夏だけがびくつと肩を震わせる、わからないんですねどうもありがとうございました。そこへ教室の後ろに立っていた千冬さんがつかつかと歩いていく、その手には出席簿が握られていた。一夏……なむ。

「……織斑、入学前に参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違っ捨てました」

ズゴム

「・・・!!」

「必読と書いてあったろうが馬鹿者、あとで再発行してやるから1週間で覚える。いいな」

「いや、あの厚さを1週間でとか無理が・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい、わかりました」

あれを1週間か、どうみてもあなたの街の電話帳、もしくは百科事典くらいの厚さなのに。しかも一ページが透けるようになっていくペラ紙・・・普通に無理だよなあ。それをやらせようとするのが千冬さんらしいけど。

「ISはその機動力・攻撃力・防御力、その全てが既存の兵器を凌駕する存在だ。その『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論、一夏も納得したような顔で千冬さんの顔を見る。まあ反論できないわな、まだ一夏がなんか考えてるみたいだが。おそらくしょうもないことだろう、望んでここににいるわけじゃないとか・・・。

「貴様『望んでいるわけでは無い』とか考えているな」

一夏がまたビクリと震える、凶星かよ。結局どこへ行ってもその場所ですぐにいかなくちゃいけない、それが嫌なら「人であることを辞めることだ」ってわけだ。相変わらず辛辣だねえ、まあ現実と直面して生きるしかないからな。俺の場合は諦めが混じってるきがしなくもないが・・・。

「え、えつと織斑君。わからないところは放課後に先生が教えてあ

げますから、頑張つて！ね、ね？」

山田先生が一夏の手をとって詰め寄っている、あいつ・・・まあ視線が行くのは年頃だから仕方ないか。あ、逸らしたつまらん。

「じゃあ、放課後によろしくお願いします」

「はい、頑張りましたよね！」

心なしか山田先生の顔が赤い、確実に変な妄想してるなあね。本当にIS操縦者つて男に免疫無いのか、あ、転んだ。本当に大丈夫なんだろうか、すごい心配だ。

「お、音兄・・・」

「やつれてんなあ、俺もそんな感じだが・・・」

『はあ・・・』

周囲の女子が観察するような視線が集中するなか、暗くため息を吐く男子二人・・・なんてシニールな光景だろうか。ああ、弾なら「羨ましいですよ！変わってください！」とか言っただろうなあ。できたら変わりたい・・・。まあ、心労が耐えないだろうけども。

「ところで音兄、さっき抱き締めてた子って誰？」

「ん、ああ。おゝい、セシリア」

はゝい、と返事をしてなぜか嬉しそうに（当社比30%増し、基準は知らん）駆け寄ってくる。

「どうかしまして？」

「いや、こいつが聞いてきたんでな」

「この方がもう一人の？」

「ああ、織斑一夏だ。よろしくオルコットさん」

「ええ、期待していますわ。一夏さん、セシリアと呼んでくださって構いませんわ」

うんうん、初対面でも良い感じだな。もし俺が居なかったらここで二人が喧嘩してるような気がする、うん。

「そついや、二人って付き合ってるのか？」

「え、そ、そんな／＼」

「んなわけねえだろ、家族のスキンシップだったの」

少なくとも俺はそう思ってる、あれ、セシリアがなんか残念って感じで肩を下げてる……？一夏もなんか苦笑いしてるし、一体なんだってん爪先に鋭い痛みがあああああ！！

「頑張ってくれ、セシリア」

「ええ、心遣い感謝しますわ」

だから、なんで俺を見て残念そうな顔をするんだ。セシリアならともかく、一夏にまでそういう目で見られるのは納得がいかん。ま、またため息……俺って何かしたか？

『はあ』

な、なんなんだ一体！そ、そつだ話題を変えようとかそつしなければ俺のガンダニウム合金ハートに輝が入ってしまう。

「そーいや、一夏を連れてった女の子って誰？」

「ん、ああ。俺の……ってやべ時間だ。あ、後で話す」
「おう」

時計を見れば本鈴ギリギリ、時間を過ぎてしまった数人が出席簿の餌食になってしまったのは言うまでもない。

34・再会・・・したは良いけど（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ寮の部屋の相手が決まっていない（ライ

35・気疲れって結構きつい

キンコーン カンコーン←

音が外れていたのに数人がずっとこける、なんで外れてんだよ。普通どこも同じはずなんだが・・・ひとまず授業が始まるから置いておこう。多分こういうものなんだ、そうに違いない。そうやってなんとか自分に言い聞かせながらノートを開いた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきとは違い、今の時間の担当は千冬さんらしい。なんで山田先生まで机に座って板書のスタンバイをしているのか不思議だが、とつかどう見ても制服着てたら生徒で通じるでしょ。ひとまず年上には見えんな！と、千冬さんの授業ということはサボれない・・・いやまあ、誰の授業でもサボる気は無いけども。

「ああ、忘れる前に。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないな」

クラス代表・・・確かあいつの話では、「生徒会の開く会議や委員会に出る、つまりはクラス長よ」うんわかった、面倒くさいことなのはわかった。俺はやらないぞ、絶対に、何があっても。天地がひっくり返ろうが世界中を敵に回そうがやらん。あ、セシリアは別な。

「ちなみに、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。現時点では対した差は無いが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで……自薦他薦は問わん」

決められたら大層面倒なんですね、わかります。よし、ここはそれとなく一夏に押し付けよう。うん、そうしよう。というかクラスが騒がしいし、視線が俺と一夏に向き始めてる……。やばいぞこれ。嫌な予感がすげえる、主に男子二人に降りかかるのを。

「はい。織斑一夏君を推薦します！」

「私も織斑君を推薦します！」

いいぞ、もつとやれ。と言ってもそうは上手くいかないのが世の中だよなあ、何人か並木野の生徒見つけたし。まあ、やるって決まったらやるけど不可抗力でない限りやらん。せめてここでくらいゆっくりにしたい、某ゆっくりに程度くらいには。あいつが居る時点で無理な感じがしてきたが。

「私は如月音羽君を推薦します！」

「あたしも如月君を推薦します！」

某宇宙がキター！な人がいるのか！？いや、俺だった。というかISなら宇宙余裕で行けるじゃんか、まあくだらん話は放っておいて

「私^{わたし}、セシリア・オルコット立候補させていただきます！」

ああ、そうだ。ほとんどの場合は候補生がクラス代表になるんだっただか、まあ当たり前前の措置だよな。国背負って来てるんだもの、実力見せて活躍しなければいけない。それにセシリアの場合は家も背負ってるんだ、余計に頑張らなければいけないだろう。

「ふむ、候補者は織斑に如月。オルコットか、さてどう決めるか」
「ちよ、ちよっと待ってください！俺はやらないです！」

「自薦他薦は問わないと言った、他薦された者に拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟しろ」

ですよね、と言う空気がクラスを満たす。まあ、当たり前だな。

「なんで音兄は平然としてるんだよ……」

「こんなの今に始まったことじゃないしな」

中学転校二日目に始まり、中学三年に続き。高校一年……ここまで続けばもう慣れるってものだ、慣れたくなかったがなあ。まあ不可抗力にはどうしようもないし、俺も良い経験になったから結果オーライだ。

てか、俺を推薦したの全員並木野出身だし……良いんだけどさ。

「ああ、どうせなら織斑に専用機が来ることだし模擬戦で決めるか」

え、マジで。普通国家代表候補生でも数人しか与えられない物を……ああ、男子ってことでデータ取りか？それなら納得、じゃあ俺はどうなるんだ。無いなら無いでいいけど。てか、一夏が専用機？なにそれ美味しいの状態で……お前なあ、呆れる通り越して尊敬するぞ。

「ああ、如月の場合は遅れるそうだな」
「わかりました」

多分……
夫だ、狂気に染まった千冬さんとの実技試験に比べれば。いけない、

思い出したら震えてきた。ひとまずあのことは黒歴史に指定しておこう、じゃないと精神的に色々大変だ。

「では、一週間後にクラス代表決定戦を行う。三人とも異論は無いな細かい連絡は後でする」

「真剣勝負で決めるなら良いか、問題ありません」

「はい、大丈夫です」

「わかりました」

ちなみに、一夏、俺、セシリアの順番だ。まあ頑張ってみるか。

放課後、俺はともかく一夏が机にぐでぐと情けないくらいに伸びていた。気持ちわかるがなあ、もう少ししゃきつとできないものか。昼休みにあの女の子、篠ノ之箒ちゃんと話をした。一夏、お前は小学生のときからフラグメーカーだったんだな。なんかここでも増えそうな気がするんだが。夜道は気をつけろよ。

「ふう」

俺は絶賛ティータイム、召還した紙コップに紅茶を注いで休憩してる。さつきから誰かが教室に向かって歩いてきてるし、それに移動する気力も無い。初日をどうにか耐えられたんだ、これくらい許されても良いと思う、ちなみに一夏は番茶だ。昼休みは大変だった、セシリアにはエスコートしろって腕からませられて落ち着かないし後ろに女子が大勢並んで追いかけてきたし。一夏も同じ感じだった、

お互い苦労するな。

「あ、お二人ともまだ居ましたね丁度良かったです」

ファイルを小脇に抱えた山田先生と千冬さんが教室に入ってきた、予想はある程度できるがな。

てか、マジで小柄なんだな。平均らしいが、やっぱり年上には見えない。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋の書かれたキーを渡してくる山田先生。ここISS学園は全寮制なんだよな、しかも寮で生活することが義務付けられている。将来有望な生徒を保護するっていう目的もあるけどな。

「え、1週間は自宅からつて聞いたんですけど」

「やっぱし、俺らの保護ですか？」

はい、すみませんね急で。と山田先生が謝ってくる、いや先生が悪いんじゃないんだけどね。まあ、二人しかいない男性操縦者つてことで外部から狙われやすいだろう。実際、家にマスコミから研究所の人間まで押しかけてきたし。それから開放されるのが早まったんだしどっちかって言つと嬉しいな、俺は。

「で、キーが番号違つてことは別室つてことですね」

「はい、部屋割りを急に変更したので分かれてしまいました。一ヶ月もすれば一緒になりますので我慢してくださいね」

それくらいなら問題ない、なにせあいつと一年以上同居してたんだ。今更女子が同室つてことで狼狽しないさ、天文学的確率で。

「それってほとんどダメじゃね！？ってそれは良いや、荷物持ってきてないんで今日は帰って良いですか？」

「あ、いえ。荷物は―」

山田先生が言いかけた途端、ずっと黙っていた千冬さんが口を開いた。BGMはMGSの戦闘時のをどうぞ、ちなみにずっと警戒体制だ。

「私が手配してやった、ありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器で十分だろう」

日々の潤いは大事だと思っただ、俺は右腕のこれに格納してあるけど。ひとまず一夏にいくつかは貸しておこう、何も無いのはきついぞ。特に年頃の男子は。

「じゃあ、時間を見て行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがあります。大浴場もありますが、今のところはお二人とも使えません」

なん・・・だと、風呂使えないとは・・・仕方ない外出許可を貰って銭湯に！

「そのような理由で外出許可は出ないぞ如月」

「はあ、わかりました」

「え、なんで使えないんですk頭頂部に突き刺さるような痛みがあ

あ！！」

ひとまず頭の回らない馬鹿の頭に拳を振り下ろしておく、普通にわかるだろ。男子は俺らだけなんだから。

「お前は女子と入るつもりか、バカ」

「ああ、そっか。そういうことか」

山田先生がなんかおかしくなりはじめたが、気にしたら負けだと思う。なんか、色々腐女子的ワードが聞こえたが知らん。俺にも一夏にもそういう趣味は無い、廊下の女子が攻めだの受けだの言ってるが俺は何も聞いてないぞ！一夏は苦笑いしていたがな。

「じゃあ、私たちは会議があるので行きますね。道草食っちゃいけませんよ？」

校舎出たら50mくらいしかないのにどうやって道草食えというのか、まあ、言われなくても休みたいからまっすぐ行くけども。一夏は1025、俺は1026だ。俺だけ嫌な予感がするのは気のせいではないはず、昔から嫌な予感だけは当たるんだよな。嬉しくないことに。

「まあ、今日はもう帰ろう。疲れたよ俺は」

「そうだな、なんか嫌な予感がするけども」

ははは、と一夏が笑う。それで済めばいいけどなあ。

35・気疲れって結構きつい（後書き）

どうでも良い作品情報

あいっつて、あいっつのことじゃ

36・疲れは溜めないようにしていきましょう(前書き)

あれ、
さうった？

36・疲れは溜めないようにしよう

ガチャリ バタン！

トイレに寄って遅れた俺を出迎えた寮では、一夏の部屋の前に人だかり。なぜか穴が開いている扉に寄りかかってとてつもなく焦っている一夏がいた。ああ、周りが下着の上に薄手のシャツくらいだから。うお、扉から木刀が突き出てる・・・誰が直すんだこれ。

「箒さん、箒さん。入れてください、じゃないと色々と危ないです」

「ガンバ」

「音兄・・・」

さて、俺は俺で部屋に入るか。なんか半年振りの気配を感じるが、よし、普通に開けよう。いちいち動いてたら余計疲れる、どうにでもなれ。

ガチャ バン！

「お帰りなさい、ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

バタン！

きつと疲れてるんだ、そうに違いない。あいつが学園にいるからっていう理由ですごいリアルな幻覚に見えるんだ、絶対そうだ。そうだと云ってくれ！裸エプロンの格好であいつが飛び出てくるなんて、俺はなんなんだ。溜まってるのか？そうなのか！？しかもあいつで？

ガチャ

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「選択肢が一つしか無いだろうが！」

スパァン！！

俺のmyハリセンが火を噴くぜ、って感じに一閃。言い終わったのを確認したと同時に召還、振り下ろす。紙製と侮ること無かれ、たとえISの絶対防御があっても衝撃は貫通するという無駄な技術の塊だ。

その証拠にうつ伏せで倒れた特徴的な水色の髪をした少女が倒れている、痛そう？こいつに手加減は必要ない。さうて、荷物置こう。もちろんこいつを掴んでベッドに放り投げる。

「いつまで倒れてるつもりだ、風邪引くぞ」

「少しくらい心配しても良いと思うけどなあ？」

「学園最強を心配してどうすんだ、てか早く着替える。美月」

既にドアは閉めてあるため、部屋の中には二人しかいない。俺はベッドに腰掛けているが、こいつはいつまでうつ伏せのつもりだ。いい加減起きろってんだ。そう考えながら着替えや荷物を展開していく、まあダンボールに入れて運ぶのが面倒だったってのがあるが。出てくる出てくる、シャツから鍋から包丁まで……ちなみに小型ジェットパックもスピアのベルトバックルに格納されてる。わからない奴はググれ。

「うゝむ、今日は食堂行くか」

「そうだね」

「まず着替えろ、話はそれからだ」

半年振りになるのか？前に会ったのが学園祭のときだし。ちなみに一夏と並んで二ユースになったときにメールでm9（＾Д＾）って送ってきやがった。そうだよ、馬鹿やつたさ二人して。思い出したら腹たつてきた。

「まあ、久しぶり」

「ふふっ、そうね。ようこそISS学園へ！」

ビシッと決めたのはいいが、スク水着用エプロンだから締まらないなあ。まだ着替えてないし・・・目のやりどころに困るんだがなあ、ただでさえスタイル良いんだし。俺は某流さんみたいに耐性ないし、ひとまず視線を外そう。見てるとそれきっかけに弄られる、主に俺の理性を削るようなことをしてくるから困るんだ。

コンコン

なんだ、一夏か？ちょうど良いや。

「音羽、居ますか？」

お、セシリアだ・・・なぜ後ろから痛いくらいの視線が突き刺さってるんだが何故だろう。おし、制服に着替えてるな。だからなぜ睨む、俺何もしてないだろうがよ。ハリセンで叩いたけど。

「居るぞ、丁度いいやまだ飯食ってないだろ。食堂行かないか？」

「ええ、その方は？」

すると、美月が目をキラんと輝かせて目の前にジャンプ。俺の上に乗っかってきた、ぐ、体重かけんな。そしてやわらかいそれを何気

ないように当てんなバカ、心臓に悪いわ！そしてセシリアが目だけ笑ってない、こ、怖いぞおい。火花が散って見えるのはきつと俺が疲れているからだと思いたい。

「更識楯無、音羽の中学時代の同居人よ」

「ええっ！？音羽、あなた・・・」

「こいつとギブ&テイクだったただけだ、それに一年ちょっとだけだし」

「そういうことですか、まあいいです。食事と行きましょう？」

「ああ、楯無。ちよつと降りろ、動けん」

仕方ないわねえ、と言いながらセシリアとは反対側に腕を絡ませる美月。あ。

『歩きにくい』

「って言いませんわよね？」

「言わないよね？ね？」

「・・・はい」

二人に挟まれて食堂へと歩く、腕にあれがあたって落ち着かない。というか、なぜ周りの皆さんは羨ましそうな目で見てくるんでしょうか。セシリアはもちろん昔も同じようにやってたけど、美月はなんか同居始まってからやり始めたし。ひとまず精神的にきつい、色々削られるぞこれ。しかも二人とも大きいから余計に・・・..
h e i p m e ! いかん、おかしくなつて英語出た。

「あ、一夏君久しぶり〜！」

「楯無さん、お久しぶりです」

「お、簪もいつしょか」

「一夏がいたから・・・」

一夏はカツカレー、簪はかき揚げうどん、箒は焼き魚定食（鮭）。どれも美味しそうだな、ひとまず箒と簪の間で火花が散っていらっしやる。これに弾とあいつが入れば中学メンバーなんだよな、生憎あとの二人がいないけども。どうやら一夏と簪が楽しそうに話してるのを見ると、一年くらいの時間の壁は薄かったみたいだな。箒が空気になってるけども。『誰が空気だと？』ごめんなさい。

「うーん、お」

「あら、やはりここにもありましたのね」

「どうしようかな」

セシリアは迷い無く煮魚定食（味噌汁大）を、俺はカツ丼、美月は味噌ラーメン。他にもウエルシュ・レアビットやナンなど世界中の料理がメニューにある。生徒が世界中から来ているつてのがあるからかな。これなら毎日飽きないな、全制覇も良いかもしれない。

「さてと、いただきます！」

「いただきます」

「いただきます、うーん美味しそうね」

「はあ、結局シャワーかよ」

どうせなら小型の浴槽も持つてくるんだった……入りきらないから無理か。まあいいや、さっさとシャワー浴びて寝よう。今日は疲れたよ、主に精神的に。

「はいはい、私が髪を洗ってあげましょー！」
「……頼む」

いつもなら自分でやるんだが、もう結構瞼が重い。自分でやる元氣も無い、なんか背中にも心地良い感触があるがそれに突っ込む氣力も無い……眠い。

「ほら、起きなさいって。ここで寝たらダメよ」

「う、うん」

「まったくもう」

あゝ、気持ちいい。人に髪洗ってもらうのって気持ちいいよね、ふわ。

「ほら、終わったから寝ましょー」

「ああ、助かった。おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

なんか額に触れた感じがしたが………ZZZZ

36・疲れは溜めないようにしよう（後書き）

どうでも良い作品情報

擬似四次元ポケットはスペアが3個、日用品・銃器・小型ジェット
パック

37・災難・・・壽だ（前書き）

どうか彼に労わりを

37・災難・・・鬱だ

日差しがカーテンの隙間から部屋の中に入り込む、ついでに美月も俺のベッドに入り込んでいる。小鳥のさえずりが聞こえる、俺は鴉のほうが好きだがな。そして焼き鳥は皮が好きだ、さえずりが無くなったが気にしたら負けだと思う。ちよつと待て。

「うにゅ、すう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気持ちよさそうに寝ているから起こすにも起こせない、俺が逆の立場だったら起こされたくないしな。いや、寝ていることに關してだぞ。俺は誰かに抱きつくなんてしないからな、多分。うあゝ、朝から理性がガリガリ音を立てて削られる。まさかこれが毎日続くとか無いよね？ねえ？

「ああ、いいや。もう一回寝よう」

「ふひゅ・・・・・・・・」

その後、1年1組の教室で出席簿が振り下ろされる音が響き渡ったのは言うまでもない。

「なぜ弱くなっている!」

「受験勉強してたから・・・かな？」

IS学園部活棟C、剣道場。目の前には床に倒れこんで竹刀を眼前に向けられている一夏と、それを見下ろす侍ガール箒がいた。俺は

これから射撃練習しにアリーナに行こうとしていたのだが気になったので観戦していたところだ。一夏って剣道やってたのか知らなかったな、道理で筋肉のつきが普通と違うわけだ。と言っても練習してるとこんなて見たことないけどな、千冬さんも忙しいから家事で一夏はそういう暇も無かったし。仕方ないって言ったら仕方ないか。

「ーなおす」

「え？」

「鍛えなおす、IS以前の問題だ！」

まあ、なんということでしょう。一夏の表情が呆けていた状態から一瞬でわけが分からないという表情に……。なんか面白いことになりそうだし。さあて、俺は俺で始めるかなあ。恋する乙女を邪魔するのも無粋だからな。

「つく、オート制御だと照準ブレるなあ」

IS学園第三アリーナ、ISでの模擬戦・実習・装備試験などが行われるだけあって半端なく大きい。反対側の観客席が豆粒に見える。しかもこの大きさのアリーナがあと4つ、高機動実習で使われる第六アリーナはもっと広い。まだ行ったこと無いけども。

それより、オート制御だから生身で使うときよりやりにくい。ああもう、面倒なもんだなこれ。

「っだあああああー！」

「ああ、痛い」

アリーナで2時間ほど動かしたは良いが打鉄がなかなか上手く動かずイライラ、別の練習しようとして飛ばうとしたら姿勢崩して頭から転倒。保持していた近接ブレードが手から離れて立ち上がった瞬間に後頭部に直撃、自分の武器に切られるというギャグマンガみたいな事故発生。悶絶しているところを見られて同じアリーナでISを動かしていた女子にクスクスと笑われ、なにくそと起き上がったらPICが誤作動起こして今度は後方5連続回転をして地面へと叩きつけられる。諦めずに起き上がったら、流れ弾のグレネードが目の前に転がってきて爆発。体勢が整っていないために後ろに転び、アンロックユニット非固定部位が地面に突き刺さって立ち往生。どうにか力ずくで引き抜き素振りを始めたら刀身だけが抜けてアリーナの壁と防護バリア―にぶつかる、ドリフのあれみたいにあちらこちらで跳ね返りながらなぜか最終的に俺の股間に直撃。女子には永遠に理解できない痛みに苦しみながら仕方なくアサルトライフル「ヴェント」を展開して撃とうと引き金を引くとジャムリ、取り出そうとレバーを引くと暴発。怪我は無かったものの顔が煤で汚れる。タオルでふき取り、仕切りなおそうとピットから再度飛行。カタパルトが急停止し、ロツクは普通に外れるものだからピットから墜落。終わろうと装着解除したらステータス画面に「整備中」の文字。そのままため息をつきながら崩れ落ちた。

「俺って誰かに恨まれてんだろうか」

「あ、あら。まあ、無理はしないでくださいね」

セシリアの心遣いが嬉しい、ああ、そういや。

「セシリアって可愛いなあ」

「な、なななあ！？いきなり何をノノ」

「いやあ、昔もそうだったが可愛くなったなあと思って」

「なぜ平気でそういう言葉が言えるのか、不思議でなりませんわ。嬉しいですけども」

なんか今のが声小さくて聞こえなかったな、なんて言っただろう？
ちなみに美月は生徒会の仕事でいない、虚に注意されて無理やりやらされてるらしい。生徒会長が仕事サボってどうするんだ。俺だっ
てしっかりやってたんだから美月なら簡単だろう、やる気だせば。

「あれ、音兄はセシリアといっしょなのか。楯無さんは？」

「虚に注意されて仕事中、ってボロボロだな一夏」

「あはは、箒に少々倒されてさ。明日もだよ」

「一夏さん、剣道やってらしたのですか？」

「ああ、小学生のころに道場に通ってたさ。その時からの友達なんだ箒は」

『（箒（さん）頑張ってる）』

こう思ったのは俺だけでは無いはず、というか俺とセシリアが向かい合って頷く。幸い一夏はなにか理解していないようだったが。この鈍感m爪先に針で傷口を刺すような痛みがあああああ！！俺が何をしたんだセシリア、俺は悪いことした覚えは無いぞ！一夏は哀

れんだような目で見るなよ、なにその残念な物を見る感じ。そりゃあ、鼻に絆創膏だけどさ。

「そういえば音兄はなんでボロボロなんだ？」

「ああ、いやな―

長　い　の　で　上　参　称

「なんという……」

「まあ、これくらいでめげないけどな。負けないぞ俺は」

「ふふっ、それでこそ音羽ですわ」

「そうだな、それでこそ音兄だ」

そのころ

「うえー、まだあるのこれ？」

「サボった分は取り返してもらいますよ、ただでさえ溜まっているんですから」

「うう……音羽あ、助けてえ……ん、メールだ」

『断固断る自業自得だ。おにぎり三個と味噌汁あるから食べておけ

よ？俺は先に寝る　by音羽』

「うふふ、優しいなあ音羽は」

「にやけるのは良いから早く終わらせてください」

「ぶうゝ、けちんぼ」

「……音羽に愛想つかされても良いのならどうぞ」

その後、文句を言いながら書類にサインを書き続ける楯無が目撃されたそう。

クラス代表決定戦まで、あと5日。

37・災難・・・・壽だ（後書き）

どうでも良い作品情報

原作と違い、更識姉妹は仲良し。簪はサード幼馴染、空気さんマジ
篤

38・試合前（前書き）

良い切りどころだったので、短いとする

38・試合前

男の特訓風景なてん誰得だよ

IS学園、第三アリーナ。東ピット二番格納庫前、俺は缶コーヒ―片手に壁に寄りかかっていた。流れるようなサイドテールはところどころザラザラ、一部は焼け焦げたような痕……。せつかく苦労して手入れしてたのにIS訓練で台無しに……。ちくしょう。なんとかまともに動けるようにはなつたがいまだに何か起こりそうで怖い、またPIC誤作動起こさないよなあ？……。ちなみにセシリアが候補生ということで俺ら二人と試合、その後俺と一夏という組み合わせ。

「それなのにお前の専用機は来てないのか」
「うん」

そこなんだよな、早めに来る予定だった一夏の専用機が当日になってもまだ来ていない。あと5分で試合始まるぞ？もし過ぎたら俺が先になるってことですよねえ、技量はともかく訓練機で勝てるだろうか。性能差は埋められないしなあ、一応速度特化にチューンしてもらったけども。つてもうあと2分だぞ、間に合わないんじゃないかこれ。あ、山田先生が走ってきた。なんともよたよたして頼りない感じた、今にも転びそうとはこれのことを言うのかも知れないな。実際目の前で一回躓いたし、ある意味期待を裏切らない人だな。

「大丈夫ですか山田先生、慌てなくて良いですから落ち着いてください」

「は、はい。そ、それでですね来ましたよ織斑君の専用機！」

おお、やつとか。結構待ちくたびれた……あと30秒でおい。フォーマット フィッティング 初期化と最適化は間に合わないな。だからって時間は限られてるし、もしかして試合中に済ませるのか？聞いたことないぞ、戦闘中にだなんて。いくら自動でやってくれるとはいえんな無茶な、それをやらせるのが千冬さんですけども。

「流石にきつくはないですか？」

「ふん、できなければ負けるだけだ」

そう言った千冬さんの視線の先にあった格納庫のエアロックが音を立ててスライドする、暗がりの中から一機のISがせり出して来る。工業的なデザインではあるがどこか力強さを感じさせる。

「白」がそこに居た――

この瞬間を待ち続けたように、今、この時のためのようにそれは鎮

座していた。主を待ち続け、迎えるためにそのコックピットを開け放っている。正直に言おう、カッコいいと。

「織斑、早く乗れ。そうだ、座するような感じで良い。あとは自動で最適化する」

「一夏、正々堂々やってこい」

「ああ、分かっている……なんか気持ち悪いな、前見てるのに全方位見えるなんて」

あゝ、ハイパーセンサーか。前方を見ているのだけでもそれによって360度全方位を視ることができ、そのために死角からの攻撃を感知できるって奴だ。本来は航行中に飛来する隕石を避けるためなんけども、他には望遠機能とかな。早く宇宙に行けないものか、某おにぎりに見えるライダーさんは単独で毎週行ってるのに……。なぜ兵器でしか使わないんだ。今はスポーツだけでもさ。ちなみにこのISの名前は『白式』だってさ、読みが某宇宙世紀の金色のあれじゃねえかってツツコミはしてはいけない。

「じゃあ、行ってくるよ」

「ああ、勝って来い一夏」

第が応援したところで、カタパルトに乗って一夏が発進していく。反対側にはセシリアが居ることだろう、どうなるこの試合、結果が楽しみだ。

38・試合前（後書き）

どうしても良い作品情報

戦闘描写は苦手ということに今更気づく

39・蒼の雫・白の翼（前書き）

ー夏VSセシリア

39・蒼の雫・白の翼

「うおつとと、こりゃ特訓しなきゃな」

発進した反動で前に仰け反りそうになった一夏が、セシリアに向かい立った。相対するセシリアはイギリスの第三世代IS「ブルー・ティアーズ」を起動している。腰部には4枚のフィンアーマー、右手には六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。その出で立ちはまるで中世の騎士のようであった。

「ふふふ、これからが楽しみですわね」

「そりやどうも、つとそろそろだな」

広大なアリーナに試合開始のアラームが鳴り響いた。

「手加減しませんわよ!」

「真剣勝負、当たり前だ!」

スターライトmk?の青いレーザーが銃口から迸り、回避行動に移っていた白式の非固定

アンロックユニット

部位の左側の一部を吹き飛ばす。着弾の影響で加速していた白式ごと一夏が後方に押し出された。

「うおつ!?!」

絶対防御は適用されなかったが代わりに左のウィングスラスターが一部破損した、シールドエネルギーが0にならない限り負けでは無

いが機体の破損は後の戦闘行動に障害をもたらす。最悪飛行できなければ中距離射撃型のブルー・ティアーズには勝てない。

流石、代表候補生。俺が移動した先を狙ってライフルを上手く撃ってくる、武器は無いのか？えっと一覧………一覧！？一個しかないのに一覧とはこれいかに。仕方ない、何も無いよりマシだ。

「ええい、ままよ！」

「………一夏さん、本気ですの？」

「というか、これしかなかった」

「そ、そうでしたか………」

セシリアがなんとも驚いた表情でこちらを見ているのがわかる、俺だつて驚いたさ。なにせ『近接ブレード』一本しか無かつたんだから、「普通は剣と銃くらいは入ってるんだぜ」とは音兄の言葉だ。まさか剣しか無いとは、そりゃ俺には銃なんか使えないけどさ。経験的な意味で、だからって射撃メインにこれで戦えつてのはなあ。文句言つても現実是不変ならないけどもさあ。

「では、ここからが本番ですわ！」

瞬間、4機のフィンアーマーが独立してそれぞれがまるで生きているかのように襲い掛かってくる。細い先端が青い光を称え独特の音を放ちながら青いレーザーを撃つ。四方八方から三次元で攻められるためにガリガリとシールドエネルギーが減っていく。どうにか一つを避けても残りが当たるといふ状況、どう考えてもこのままじゃシリ貧だ。

「右足、頂きましたわ！」

「やらせるかよ、でやあ！！」

一瞬動きが止まった後方のブルーティーズ……機体名と同じとは紛らわしい、試験一号機だからそうなってるらしいけども。面倒なので以下ビットを一機蹴り飛ばし、セシリアへと肉薄する。金属が捻じ曲がるような感触を右足に感じながら、自身に向けられていたライフルを近づいた瞬間に左手で殴り銃口を逸らす。

「なあっ！？やりますわね！」

「俺にも譲れないものがあるからな！」

すぐに上下からのビットによる牽制で引き離されるが、一撃入れられた。素人同然の俺が、候補生に一矢報いたのだ。嬉しくならないわけがない。

「あの、馬鹿。一撃くらいで調子乗ってやがる」

「まったくだ、変わらん」

「え、どういことですか？」

まあ、なあ？

「あいつは調子に乗ると左手を閉じたり開いたりする、大抵その時は単純なミスをする」

「今までそれで失敗したの何回だったかなあ……」

正直数え切れんな、その度に俺が出向いてたし。一夏は気づいてな

いけどさ、後始末は大変だったよ？そんなんだから「最強の生徒会長」って影で言われてたんだから。そうこう言っているうちに、一夏がビットを近接ブレードで叩き落しての暴行を加えて使用不能に陥らせている。対するセシリアは・・・無茶苦茶な一夏の動きに驚いていた。ビットが真ん中で捻じ曲がって可愛そうだ。

「おし、貰ったああー!!」

「生憎様、ブルー・ティアーズは六機あってよ!」

重い音を響かせてフィンアーマーの左右から突起が分裂、高速で俺に近づいてくる。回避は・・・間に合わない。さっきまでのレーザー射撃ではない「弾道型^{ミサイル}」だ。

赤を越えて、白い爆発に飲み込まれた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「なんとというご都合主義・・・」

着弾の煙を見つめながら、俺と千冬さんの言葉が重なった瞬間。その中から、それは現れた。

フォーマット フィッティングプリント
《初期化・最適化完了・確認ボタンを押してください》

「な、さっきまで初期設定で戦っていましたの!？」

「ああ、やっとなの物になったみたいだ」

視界に映る確認ボタンを押すと、金属音を響かせて白式がその姿を変える。工業製品のような直線的な形から生物的な曲線を描き、角ばった非固定部位は受けた傷が無かったのように消えて一対の翼にアンロックユニット。完全な『白』へと変化した。

《近接特化ブレード「雪片式型」》

先ほどまで握っていた無骨なデザインのブレードは、刀身が割れてそこから光の刃を放出。スライドした元刀身はそれを握る右手を守るハンドガードへと変形していた。見覚えがある、かつて姉を世界最強へと導いた刀に型名す刀。

―ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

―だからこそ、守られるだけの関係は終わらせよう。これからは、いや、今この瞬間から。

「俺も、俺の家族を守る」

「……覚悟、ですわね」

「ああ、まずは千冬姉の名前を守るさ!」

一気に上空へと加速、背部ウィングスラスタから尾を引きながら上昇する。その間もレーザーが幾筋も付近を貫いているが、さつき

とは格段に動きやすくなった白式が俺の思い通りに動く。そして、
全てが視える。

「うおりゃあ!!」

「鋭い一閃、見事ですわ!」

残っていた一機のビットを急加速しながらの一振りで切断、高硬度
金属を切断する衝撃が雪片を握る右手に伝わる。刹那、通り過ぎた
瞬間に後方で小爆発。砕け散ったビットの破片が慣性を残したまま
四散していく、気にも留めず最後に残ったスターライトmk?を構
えるセシリアに高速で接近する。

「わたくしにも、譲れないものがありましたよ!」

セシリアがスターライトmk?の後方レバーを引く、するとシヨル
ダーストックが上下にスライドし持ち手に変化した。銃口からは蒼
穹を映すかのような真つ青のレーザーの刃が伸びる、それを腰溜め
に構えなおしたその姿はかつてヨーロッパに名を馳せた名騎士のよ
うであった。

「はああああ!!」

「やああああ!!」

突き出される蒼の槍と白銀の剣がぶつかり合う、加速を啜えた一撃
だったからか雪片の輝きがレーザーの刃を切り裂く。上段に振りか
ぶった一閃が真っ直ぐにセシリアへと振り下ろされる。

『試合終了―勝者―セシリア・オルコット』

「え？」

「はい？」

向き合いながら同じように訳が分からないような顔をしている俺とセシリア、いつのまにか雪片の光刃は消えていた。……

・何が起こったんだ？

「良くもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこのざまか大馬鹿者」

ランクを下げないで上げるのが千冬さんらしい、大馬鹿者だつてさ。おめでとう一夏。一応スポーツドリンクを時速60kmで投げあげ、優しいだろ俺。

「ほぶわあ！」

どうにかキャッチして転んだ一夏^{馬鹿}が居るけども、ちょっとばかり気になることが……。あるんだよねえ。どうみてもあれは一夏の勝ちだったはずなんだがいきなりシールドエネルギーが0になって一夏の負け。まあ、初心者が候補生にあそこまで迫れたのはすごいけどもな。

「雪片の特殊能力だ、『バリア無効化攻撃』という（ry」

早い話、自分のシールドエネルギーを使って相手のシールドエネルギーを切り裂いて攻撃。その際に絶対防御の発動によって相手のシールドエネルギーを喰らい尽くす。それをするまでのダメージと残

り少ないシールドエネルギーでの使用だったためにいきなり0になった。つまりは――

「武装の特性を理解してない一夏の自業自得だと」

「その通りだ、さて如月。お前は30分後だ、準備しろ」

「サー、イエッサー！」

「ふざけているのか？」

「サー、イエッサーああ！？」

突然俺の眉間を狙って音速で振り下ろされる出席簿、どうにか紙一重で回避する。あ、髪が少し切れた……。直撃してたらどうなるんだよこれ。一夏はまだ普通に見てるけども、隣で筭が色々困ってる。まあ、そうだろうよ。それよりも俺の出番だな。

「さてと、じゃあ俺のターンだな」

「訓練機で大丈夫なのか音兄」

「銃器くらいは良いが、またなんかありそうで怖い」

股間にブレードぶつかるとか、股間にry……とにかく怖い。何の心配を俺がしているのかわからんがな、さてと誰もいないはずのピットで学園最強さんが見てるし。良いとこ見せようか、一夏もやってたからなあ。

「それで織斑先生、ラファールは？」

「全機整備中だ、打鉄で我慢してくれ」

「……………(orz)」

39・蒼の雫・白の翼（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズ色々変更

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（前書き）

セシリアVS音羽！

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のパトラー

「あゝ、心配だ。これ整備完全ですよねぇ？」

「当たり前だ、F装備で良かったな？」

「はい」

あれから30分後、俺は打鉄（速度重視のF装備）を装着していた。さきほど一夏が山田先生から「IS起動のルールブック」を受け取ってげんなりしていた。なんせ厚さは某電話帳、一ページはペラ紙・・・一週間でそれを完全制覇。ざまあww

「はあ、なんでここにいらっしゃるうなあ俺」

「それを今更言ってもどうしようもないって音兄」

『はあ』

気分がああああ・・・・・・あ、しまった、この勝負負けられない！いくら解雇されたとはいえ、元執事。主より弱い執事がこの世に居てたまるか、何があっても主人を守りきる、それが執事。^{パトラー}それは生身だろぅが戦闘機だろぅが、ISだろぅが関係無い。というか、ミリアさんが出てくる！負けようものなら絶対亡霊になっても出てきて地獄の30日間を味合わせられる、あわわわわ。

「負けられない戦いが、ここにある」

「な、なんか音兄が達観してる!？」

「何かに怯えているように見えるが・・・む？」

ピットの影に音羽をじゅつと見つめる金髪の女性が見えたとは後の筈の話である、その目は「負けたら、わかってるわよね」と語っているようだったそうだ。

「（ビクッ！！）……………！？」

いかん、なんかミリアさんに見られてるような感じがした。絶対、近くに居るってこれ。……………どうやら緊張で頭がおかしいようだ。落ち着け俺、きっとミリアさんが幽霊になって見てるだけだ。十分怖いぞそれ、ちなみに俺は幽霊とかの怪談話は嫌いだお化け屋敷も。まあ、それは誰にも知られていないけどな！

「さて、時間か。お嬢様の成長した姿でも見に行きますかね」

バトライ
マスタイ
「執事と主人か、面白い」

カタパルトに打鉄の脚を固定する、後方に反射板がせり上がり脚部ごと後ろに下げられる。蒸気カタパルト特有の発射準備だ、今だに現役なのは優秀だからに違いない。F-35（確かC）に乗ったときも世話になったからなあ。なんで乗ったかって？コネですよチミイ。

「じゃあ、行きますか！」

「音兄ガンバ！」

一気に前方に押し出される、対G制御は効いているが。この感覚は、良い！

「うつつしゃああああああああ……………」

音兄が、急停止したカタパルトから落つこちていった。真つ逆さまに、それも頭から……………結局なのか。どれだけ運が無いんだ音

兄、向こうのピットに居るセシリアの顔が引きつっているのがわかる。山田先生は状況が掴めていないのか口をポカーンと開けている。千冬姉は傍目からは分からないかもしれないが軽く苦笑していた。箒は心配なのかピットから下を見ている、あ、起き上がった。

「痛ててて、ちくしょう。なんでこういう時に限って締まらないかなあ・・・」

「大丈夫ですよ？」

「ひとまず、な」

同じ高度に上昇し、向き合う。元・執事バトラーと主人マスターの戦いが、始まった。

「うおっと、のわあ！」

「隙ありですわよ！」

し、四方八方からピットによる牽制射撃。さつきから回避しても着弾ばかりで埒が開かない、そして避けきったと思えば静止した途端にスターライトmk？による的確な狙撃。やはり、見た目は簡単だが実際は・・・というやつだ。しかし、三次元機動ってのはなんと慣れないな。ジェットパックと違って急旋回できるし、PICでホバリングできるし。世界最強の兵器ってのは納得だなホント。

「せええつだあああん！！！」

アンロックユニット
非固定部位の物理シールド裏に搭載されたスラスタを噴かして、勢いに任せてビットを一機両断。今度は刀身抜けなかった俺に勝てないものなどいない、多分！F型の最大の特徴、物理シールド裏に搭載された大出力ブースターのおかげで速度だけならば第三世代にも追いついていける・・・はずのスペックを持つ。しかも傍目には通常型と見分けが付かないという鬼畜仕様。
サブマシンガン「ネフェルテム」を二挺展開して、高速で接近する。

「す、すげえ音兄・・・」
「格段に動きが良くなりましたね、音羽君すごいです！」

管制室の空中ディスプレイにはセシリアに追いつがる音羽の姿が映し出されていた、現在は互いに円軌道を描きながらライフルによる攻勢。一歩も譲らずただひたすらに距離を保ちながら相手を牽制している。

「確か、F型^{タイプ}って速度特化の失敗作ですよ？ほとんど静止ができないために使い手は今ほとんど居ないって言われている・・・教師の中でも使いこなせる人はいませんよ？」

「まあ、そこをどうにかしてしまうのがあいつだ。中学時代に街中上空を飛んでいたからな、それも関係しているんだろう」

「ああ、あれかあ」
「え」

そこには姉弟揃って思い出したように語る二人とそれについていけない一教師と生徒がいた。

「やっとわかったぞ、ブルー・ティアーズの弱点が！こいつを動かすときにお前は他の動作ができない、そうだろうセシリア！」

歯噛みしたセシリアがお返しとばかりに青いレーザーの雨を降らせ、フルオートって・・・銃身焼けるぞ。対策してなければ、熱で溶け落ちるがな。ちなみに俺はエネルギーの効率や使用経験から実弾のほうが使用率が多い。というか、今装着してるF型はエネルギー兵装を載せるほどエネルギーに余裕が無い。それほど速度重視らしい、エネルギーパック式にすれば可能だけでも面倒だ。

「そおい！！」

加速したまま、身体にかかるGを無視してビットをスナイパーライフルで順に撃ちぬく。クロスクリットターンの三次元躍動旋回での高速機動は照準に入らせないばかりか、反撃も織り交ぜて来ているために少しずつセシリアが押される。なにせ相手は、日常的に時速400kmで飛行をしていた人間なのだから。

「なっ、身体が持ちませんわよ！？」

「譲れない戦いがあるんだああああ！！（ミリアさんの意味で）」

至近距離まで肉薄し、高加速ブースターを解除。バージ近接ブレードを振り抜き、スターライトmk？を破壊する。ランスへの変形が間に合わなかったために容易く銃身が切断されて使用不能になる、収束部が壊れても射撃は可能だが収束して威力を上げているために威力はほぼ無いに等しくなってしまう。爆発する直前にセシリアが投げってくる蹴り上げて懐に入り込む。ここからは、俺の領域だ。

「失敗作と名高いF型の真髄^{タイプ}、見せてやる！」

一番の特徴は、その軽さ。そして、ほぼ専用と言われている悪趣味な近接装備。誰が考えたのか今では分らないが威力だけは半端無いというブースター^{バイナリー}が刀身とは逆位置に並列に取り付けられた物理刀、その名も鋼の心^{スチール・ハーツ}。持ち手部分にはリボルバー式の薬室があり、そこに装填された二種混合式の気化燃料を爆発させ刀身を加速。目標を一太刀のもとに切り伏せるというものだ。その威力は第二世代機の武装の中でも三本の指に入る。しかも機体自体の驚異的速度も加算される。

持ち手の引き金^{トリガー}が押し込まれ、鋼の心臓^{ブースター}に燃料^血が送り込まれてブースターが火を噴出して加速する。瞬間、爆発的な速度で振るわれた横一闪は蒼穹の機体のシールドエネルギーを削り取った。

『勝者―如月音羽』

「な、なんとか勝つてぶへはあ！」

蹴り上げたスターライトmk?だったものが俺の頭部に不時着、そのせいで一桁だったシールドエネルギーが0になる。あ、危ないな、今度から蹴り落とそう……。などと考えていると目の前に人の手が？

「流石ですわ、音羽」

「ギリギリだったがな、まあ、こつじやなきや元執事って言えないからなあ」

そのまま空中で握手する、全力で戦った二人を歓声が包み込んだ。

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（後書き）

どうでも良い作品情報

出てきたオリジナル武器は・・・お察しください

10/4 戦闘機の機体名、修正しました。

カタパルトは作者の趣味で蒸気で行きます、好きなんですここは

41・結果がこれだよ（前書き）

短いです

41・結果がこれだよ

あゝ、うん。画面の向こうの皆、おはよう・・・時間がわからん。おはこんばんちわ・・・どこか遠くの世界で誰かが言ってる気がする。まあ、いいや。電波なんて受信しても気味が悪いだけだ。ちなみに俺VS一夏は俺が勝った、5分間ストーカーも真っ青になるくらい追いかけながらスティール・ハーツの連撃を食らわせた。バリア無効化攻撃なんぞ、当たらなければどうってことは無い、スポーツの剣技と実戦の剣技はレベルが違うってことだ。けして、「三日連続戦闘なんてめんどい」と言う馬鹿^{作者}の陰謀ではない。

翌日、火曜日。朝のSHR・・・でそれは起きた。

「では、一組クラス代表は織斑君に決定です。一つながりで良いです
ね」

「ね」

クラス全員（一夏を除く生徒）が声を揃えて顔をそれぞれ見合わせる、教室の前で一夏が散々なくらいに慌てていた。暗い顔をしているのは一夏のみ、ふうははは！・・・・・・はあ。

「先生、質問です」

「はい、織斑君！」

質問は手を上げて元気にしよう・・・基本だな、何を聞くかは無論わかりきっているけども。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってる

んでしょうか？」

「それはですねー」

ガタツと立ち上がる、勿論セシリアも同時だ。腰に手を当てて指を指す、標的は一夏に決まってる。

『俺（私）が辞退したからだ（ですわ）！』

どや顔で一夏を見据える俺達、なんでどや顔って質問はしてはいけない。一夏が心底嫌そうな顔で見ているが無視、細かいことは気にしてたらいけない。「細かいことじゃねえよ！」知るか、俺にとつては細かいことだ。

「ええ、一夏さんが負けてしまったのは当たり前ですし」

「だが、伸びしろがあるってことで経験積ませるためにだ。お前言つてたろ？」

「まあ、そうだけでも」

「なら、頑張れ一夏」

「ああ、俺がやってやる！……で、本音は？」

「めんどいので馬鹿な一夏君に押し付けて^{任せ}楽をしよう^{頑張ってもらおう}と」

「本音と建前が逆だ！？」

まあ、千冬さんに説明したし。実際一夏には頑張ってほしい、覚悟があるならそれ相応に力も付けて欲しい。めんどうなのも45%くらい入っているがな、ここが藍越だったらやってるが生徒会長がいつって時点で却下だ。うん。わざわざ面倒ごとに首は突っ込みたくないからな！

「それでは、織斑君がクラス代表で決定です。良いですね？」

『はーい!』

IS学園一年一組、今日も今日とて平和である。ついでに俺は副代表……解せぬ。

41・結果がこれだよ（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんマジ活躍（予定）

42. はじめての実習

「おくれる〜〜〜!!」

「なあっ!? 音兄、俺も乗せてくれ」

「残念ながら一人用だから、ごめ〜ん」

男子に宛がわれた更衣室から実習が行われるグラウンドまでは結構な距離がある、なにせ軽いマラソンくらいには・・・遅刻した場合は織斑先生からのありがたいお仕置きがある。・・・ので着替えが終わった俺は開け放たれた窓からダイブ、小型ジェットパックを召還して時速200kmでまだ着替え終わっていない一夏を尻目に高速移動中。無断のIS展開は許されていないがこれの許可は取っているため咎められない、まあ、委託企業の資金提供がされてるからそのツテで言うのが正直なところ。ちなみにこれの操縦はライセンスが必要、本当は緊急時のために取得したものなんだがな。どんなのかわからない? JET MAN ってググレ、画像検索で。それに普通のゴーグルとISスーツ着た状態だ、色はブルーな。ついでに言えば俺のISスーツは半袖ハーフパンツの密着型だ、汗でべたつかないって良いよね!

「とおおおおちゃあああく!! つせい!」

一端着地してから、軽くジャンプしてジェットパックを格納。ベルトにはできないので腕輪にして完了と同時に再び着地して列に並ぶ。クラスからはおお〜という声が上がったが・・・なぜかセシリアだけじと〜と睨んできていた。だから俺が何したよ、前に聞いたら俺が悪いらしい・・・理由は教えてくれなかったがな。それだと直しようがないと思うんだがなあ・・・あ、一夏がやつと来た。

「遅いぞ織斑」

「すいません・・・（音兄エ・・・）」

四月下旬、そろそろ遅く咲いた桜も散って緑が増え始める・・・やべ、桜餅食い損ねた。頃・・・少し授業にはとうてい関係ないことを考えながら今日も今日とて鬼教官と言う名の織斑先生のありがたいお言葉を聞いていた。ハイパーセンサーのおかげで良く聞こえる。

「早くしろ、熟練した操縦者ならば展開まで一秒とかからないぞ」

ISは一度、最適化フィッティングをしたらずっと装儒者の体にアクセサリーの形状で待機している。俺の場合は貸し出しのために仮最適化だがな、セシリアは左耳のイヤークラス。俺は眼鏡・・・一夏はガントレットだ、どこがアクセサリーだよ一夏の場合防具じゃないか。

「集中しろ」

次は出席簿で叩かれるな、あのブラコン教師ちふゆのことだから。流石ブラコン、容赦無いぜ！え、なんで俺が叩かれないって？ポーカーフェイスだからに決まってるジャマイカ。それでも軽く睨まれてるがな！

「・・・・・・・・」

一夏が右腕を突き出して左手でガントレットを掴んでいた、あえて言おう、中二くさいと。いやまあ、それでゆっくり展開されていくから面白いんだけど。0.7秒の展開時間、その後には白式を纏った一夏がそこに立っていた。人のやり方には

「よし、飛べ」

言われてからのセシリアの行動は早かった、俺は一気にブースターを噴かして急速上昇。F型の速度はやはり良いなあ、一夏がのろのろと飛んでくる。スペックはブルー・ティアーズより上なのに勿体無い。それに出力全開だと追いつけるF型もどうかと思うけどな。

「打鉄がその速度と言うのも、面白いですね」

「まったくだ、というかこのままこいつが専用機でも良いんだがな」

それにしても俺に専用機ってどんなのが来るんだろうなあ、クライング・ウルフみたいな四脚でも良いぞ。……って一夏、遅い！ 見てることちが心配なくらいにぐらぐら揺れながらやつと並んだ。別に前方に角錐があるイメージなんてものは正解じゃないし。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するのが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。なんで浮いてるんだこれ？」

「どこその毎回マミるあんど違って機械なんだから「そういうふうにできてる」で良いんじゃないか？」

どうせ流動波干渉だ反重力制御だ説明したって理解できないだろうし、あれ、ISの技術流用すればBB部隊の装備再現できそうじゃね？ それよりもREX乗ってみたいけども。まあ、今は関係ないか。

「織斑、オルコット、如月。急降下と完全停止をやって見せる、目標は地表から10センチだ」

おゝ、地上で話している千冬さんの顔のしわまで良く見える。まあ、機能制限外せば何万キロ離れた場所も見れるんだけどな、流石宇宙開発用マルチフォームスーツ！一度開発者と話をしてみたいものだ。でも、なんか人格破綻者という噂も。興味無い人間にはとことん冷たいらしいよ、どうやって生活してんだろうか。

「では、お先に！」

おゝ、流石候補生。見事にやってのけた……うん。さて、次は俺か……。せめてここくらいは良いとこ見せられなければいけない。代表決定戦で年上の威厳を簡単に失ったために俺は負けてられないんだよね、まあ、無理はできないけどもさ。

「っせい!!」

地面へと姿勢変換、そのまま二枚の物理シールド裏の高出力ブースターによる爆発的な加速で移動。地表近くでPIC全開と逆噴射で急停止。っふうっ、スリル有るなあ。まあ、こうできるのも毎日セシリアが練習に付き合ってくれてるからだな、感謝しなければなあ。

「ふむ、9センチか。なかなかだn……。なんだ？」

後方で一夏がクレーターを作って犬神家をやっていた……。なんだこれ、強制解除してるしある意味すごいわこれ。一夏にはギャグのセンス……。無いな、日常的にそう面白くないの考えてどや顔してるだけだし。それを考えたら今回は面白いほうか、ついにリアクション芸人目指すのか？違っただろうけど。

「好きでやったんじゃねえええ!!」

無理やり頭を地面から引っこ抜いて一夏が立ち上がった、一瞬、一角の白い何かが見えたような気がするが気のせいかな。そうか。ってセシリアは普通に心配してるのに、箒さんがIS付けてるから大丈夫発言・・・あなた一夏のこと好きなんですよね？ひとまずなんか言い合ってるのを横目に一夏回収、わっなんか火花が見えるよ。

「馬鹿者、誰がグラウンドに穴を開けると言った」
「・・・すみません」

一夏の醜態にクラスの女子がm9状態、ISはどうやら一夏のハートは守ってくれなかったようだ。

「情けないぞ、一夏」

箒が一夏を目尻上げて睨んでいるが、箒の教え方はスーパー擬音タムだった。理解できる人はおそらくこの世界に二人といたないだろう、某ドモンなら理解できそうだが。「くいって感じ」とか「ズガッって感じ」とか・・・うん、わからん。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるようになっているだろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ、馬鹿者」

「はい！」

「よし、では始めろ」

その途端、一夏が再び右腕を掴み瞼を閉じて集中を始めた。右手のなかで徐々に光の粒子が姿を結び始め、0.7秒。白式唯一にして最強の刀、雪片が現れる。頑張ったんだよな一夏も、こうなるまで1週間かかった。まあ、普段の生活で手元に刀が出てくるイメージ

なんてしないからなあ。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ」

やっぱ厳しいなあ、少しくらい褒めてやっても良いのに。一夏も軽くうなだれてる、頑張れ一夏。って次は俺か？

「次、如月」

「サー、イエツsぬわあ！」

「返事は『はい』だ（ふざけるなよ？次ふざけたらry）」

「はい！（いかん、目が怖い。本気だ）」

出席簿の衝撃で痛む頭をさすりながら軽く右手を振り、加速する刃をイメージして刀を抜き放つ動作をしてステイル・ハーツを展開する。勿論、薬室にカートリッジを装填して安全装置を解除した状態で。青い空にはこれの青も合うなあ。ちなみにステイル・ハーツは？から現在も開発中らしい。噂では？まであるらしい・・・機体は失敗なのに。

「ふむ、次。オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げて、真横にズビシッ！と突き出す、見事なツッコミアクション・・・良いセンスだ。そしてそれが終わったころにはスターライトmk？が握られていた、視線を向けるだけですぐに発射態勢へ。流石代表候補生、セシリアサイコー！！（セシリア分が毎日補給できるため幾分かおかしくなっています）

「ただし、そのポーズは止める。横に銃身に向けて誰を撃つ気だ、正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは―「直せ、いいな」・・・はい」

ああ、千冬さんの前では伝統の構えもダメなのか・・・今度時間あるときに相手しよう。俺が銃の展開を迫られたら必ずこうするが、どうやらセシリアには抵抗はできなかったらしい。あの睨みはきついからなあ。

「まあ、気にするな。今度にも一緒にやろう、懐かしいし」

「はい、是非！」

「なにイチャイチャしている。オルコット、近接武装を展開しろ」

「は、はい！」

イチャイチャって・・・俺がセシリアと？そんなことあるわけ・・・ここに突き刺さるような視線が来てるからやめよう、精神的にきついわこれ。俺って何か悪いことしてるのかなあ・・・謎だ。

「音兄・・・セシリアが可愛そうだ」

「一夏、お前が言える立場か」

セシリアはスターライトmk？（正確にはランサーカスタムって言うらしいよ）で慣れているのか、すぐに手元に近接武装である「インターセプター」を展開した。どちらかと言うとコンバットナイフサイズ、近づかれた場合の緊急装備みたいだ、あまり丈夫そうでもない。まあ、中距離型だからなあ。

「ふむ、では時間だ。今日の授業はここまでだ、織斑、グラウンド

を片付けておけよ?」

さて、一夏は自業自得だし。ささつと着替えて昼食、助けを求める声には答えるが自業自得はお断りだからなあ。今日は何食べようかな、それとチーズケーキも忘れてはならん。あ、セシリアも誘うか。

「セシリア、昼一緒に食わないか?」

「はい、是非とも」

42・はじめての実習（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんスペック上方修正

43・祝賀会だって（前書き）

ちよい今回は出来が悪いです

43・祝賀会だつて

「ふうん、ここがそうなんだ」

日も沈み、夜。IS学園の正面ゲート前に小柄な体には不釣り合いなボストンバックを脇に抱えた少女がいた。

「つまみ食いすんなこの泥棒猫〜!!」

「少しじゃないのよ〜!」

その前を高速で水色の髪の少女と後ろをサイドテールのコック服を着た女子が走っていったが、声をかけようとしたところには既に遠くへと走り去っていた。通り過ぎた際に起きた風に特徴的なほど鮮やかなサイドアップテールがなびく、それを留める金の留め金が月光に反射して輝いていた。

「受付ってd……行っちゃったわね、どれだけ速いのよ」

仕方なく上着のポケットからくしゃくしゃになってしまった一切れの紙を取り出す、その扱い方から少女の性格が窺える。大雑把・活発・ツンデレである、最近の悩みは体のある部分のことであったりする。

「……まったく、本校舎一階総合事務受付ってどこよ」

文句を言っても返事をするわけがない、多少イライラしながら紙を上着のポケットに仕舞う。また中でぐしゃりと聞こえるが気にも留めない、遠くから「邪魔すんなコラ!」とか「いや〜!」とか聞こえるが気にしない。今は目的の場所へと移動するのが先決なの

だから。ちなみに思考より行動なやり方である、悪く言えば「良く考えない」である。

「だから・・・つまり・・・という感じでだな」
「いや、それ分らないって」

聞き覚えのある懐かしい声、歩きながらふと聞こえたそれに少女の胸は高鳴る。予期しなかった再開に思わずガッツポーズをとってしまふ、しかし聞こえたのは意中の相手だけでは無かった。

「くいつて感じてなんだよ」

「・・・くいつて感じた、理解しろ一夏」

「あのなあ・・・」

影から覗いて見えたのは見覚えのある男子と今まさにすたすたと立ち去る少女の姿だった、知らない女子と親しそうに話している・・・さきほどまでの高揚は嘘だったかのように消え、ひどく冷たい感情が胸の中を埋め尽くす。苛立ちが沸き起こるがどうにか押さえつけて歩く。

「時間に間に合わないって言ってるだろうが!!」

「とおっ!」

「あ、また逃げやがった・・・ったく」

総合事務受付の看板が見えたところに丁度、先ほどのコック服を着た人物が一人の女子を逃がしたため息をついていた。黒の左サイドテール、特徴的な優しげのある声に高めの身長。頼りがいのあるその背中、かつて実家の常連であり世話になった人物。

「まだ、30分はあるか・仕方ないメール送信つと」

「もしかして・・・音羽？」

「・・・・・・・・ん？」

なんか懐かしい声を聞いたような・・・どこからだ？見回してもどこにもいないな、俺も幻聴聞こえるようになったのかなあ・・・シヨックだ。さて、気を取り直して食堂行くか腕によりを振るつたら全員満足なはず。盛り付けがまだ終わってないんだよね、某美月さんのおかげで。

「ちょ、ちょっと。無視しないでよ！」

「また幻聴か、疲れてるのかなあ・・・・・・・・お？」

なんか下から聞こえたので視線を向けてみたら・・・・・・・・どこかで見たことあるようなツインテ少女がいた。あれ？

「もしかして鈴ちゃん？」

「そうよ！なんで気づかないのよ、嫌がらせなわけ！？」

「ああいや、悪い。もしかして転入か？おそろく一夏目当てか」

「まあね、本校舎一階総合事務受付つてあそこで良いのよね？」

「ああ、あそこだ。一夏は一組だから・・・つとやべ時間だ、じゃあな」

「うん！ありがと」

後ろで「クラス代表変わってもらおうと思って」とか聞こえたが、

俺には多分関係無いだろう。どうせクラス代表は一夏だし、っと就任祝いパーティーの準備しなければ！！腕時計を確認し、俺は全力で一学年食堂へと走って飛んだ。どうせなら祝い事は派手にやりたいたいじゃないか。

「というわけで、織斑君クラス代表。如月君副代表決定おめでとー
！！」

『おめでとー！！』

パン、パパンと景気良いクラツカーの音が鳴り響く。俺と一夏の頭の上に乱射されたクラツカーのテープが大量に着地して結構重い、ついでに火薬の匂いがすごい。まあ、祝ってもらうのは誰だって嬉しいよね一夏はいまだにどよんとしてるけど。ここは一学年食堂、時間は夕食後の自由時間を貸しきり。一組のメンバー勢ぞろいで飲み物片手に並べられた料理をつまんでいる。

「これ全部如月君が作ったの？」

「おう、特製ダレに付けて食べてな」

この、後ろの横断幕にも書いてあるが「織斑一夏・如月音羽就任パーティー」は一組女子と料理担当の俺で企画されてる。というか、小耳に挟んだから俺も協力することにした、こういう祝い事は楽しくて意味があるからな。って、一夏がまだ暗いなおい。

「これでクラス対抗戦も盛り上がるよね」

「ほんとにね」

「ラッキーだったよね、同じクラスで」

「ほんとほんと」

「俺も楽できるし、一夏は良い力試しになる。ホントに良かった」

今相槌打った娘って2組の人だったと思うんだが、いや、居ても良いんだけどね。てか、一組の人数余裕で超えてるなこの状況は、クラス垣根越えても別に良いじゃないか。確実に40人越えてるよ。うな感じがするけども。

「人気者だな、一夏」

「・・・本当にそう思うか？」

「ふん」

「素直じゃないねえ、箒も」

「ええ、もう少し素直になれば良いですけど」

「まったくだ」

ちなみにセシリアが俺に腕を回して右側に座ってる、動きにくいんだが。当たって落ち着かないし、まあ、前にそれ言ったらなぜか怒られたからもう言わないけどもさ。あれだよあれ、傍目から見ると羨ましいけど実際は大変なんですよって状況。・・・そーいやセシリアも女の子から女になり始めてるんだよね、成長したのはちよつと嬉しいけど寂しくも感じる。これが親の気持ちなのかなあ・・・ハッ、不穏な気配！

「どうも」、新聞部です。今話題のお二人に取材を・・・あれ音

「つちどこ？」

オーと歓声が沸き起こる、俺はオーな気分じゃないんだが。音っち・
・音兄のことか？ホントだ、いない。

「まあいいや、新聞部副部長の黛薫子よ、よろしくね〜」
『イエーイ！！』

名紙を受け取る、書くとき大変そうだなあと思った。画数多すぎる
ってこれ・・・あ、音兄が観葉植物の陰に隠れてる『教えるな！』
わざわざプライベートチャネルで話すなよな。そこまで嫌なのか、
というか音兄をそこまでさせるって何者さ。

「ではズバリ織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ！」
「え・・・えーと」

いきなりボイスレコーダーをずいっと出されても、言う事なんて決
まってるんだがなあ。う〜ん、どういえば良いんだ？期待のこも
った視線がたくさん突き刺さって大変なんだが、む〜ん。

「まあ、なんとか頑張ります」
「え〜、もつと良いコメントちょうだいよ。『俺に触れるとやけ
どするぜ！』みたいにさ〜」

そんなこと言われてもなあ・・・あ。

「俺だって、やれる！」
「おお〜、かつこいいじゃない。じゃあまあ、あとは良い感じに捏
造しておくね」

そんなので良いのか新聞部、ここに現代の報道の腐敗を見たような気がする。いや、大げさか・・・というかこういうことなのか隠れてる理由は。コクコク頷いてるし、いつもの頼りになるあの面影はどこへやら。セシリアはなんとも言えない顔でため息ついてるし。

「あ、音っちに言っておくけど。取材拒否したら”あの”写真ばら撒くから」

「させるかああ!!っていうか、脅すな薫子」

「あらら、まあいいや。はいはい、譲った理由は?」

突然飛び出てきた音兄、一体どんな写真なんだろうか・・・聞かないほうが良いだろうなああの慌てぶりからすると。なぜかセシリアが顔赤くしてるし、うん、俺は何も聞いてなかったことにしよう。それが一番だ。

「利害一致で押し付k・・・任せた」

「うんうん、よしオツケー。じゃあお礼にたっちゃんにあの写真見せておくね」

「大丈夫だって、一枚だけだから」セシリアちゃんも良いよね?」

「はい」

「俺に味方はいないのかよ・・・」

orz状態になっている音兄、なぜ今日は貴重な姿ばかり見れるんだろう。明日は雨でも降るのか?

「じゃあ、ほら音うちも並んで。写真撮るから」

「わあつたよ、俺真ん中で良いのか？」

「（合法的にアピールですわ！）」

「専用機持ちだから良いの！」

「（肩組んでっていうのも久しぶりだな）」

カメラを向けられる、薰子つてのが心配だ。いつだかも転んでセシリアを押し倒しちゃったように見える写真を撮られたし、あれつてこれのことだよちくしょう。まあ、セシリアとの写真なら良いか。俺がいたころの写真は残ってないし。

「じゃあ撮るよ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「あ、2か？」

「ぶぶ、74・375でした！」

パシャッと音がしたところにはフレームにクラスの皆が入ってしましたとさ、なにいまのみんなの移動速度。人のレベルじゃなかったぞ・
・まあ、十代乙女には物理法則や常識は通用しないってことが。

「なんで入っていらつしやるのかしら？」

「まあまあ、大勢のほうが良いだろ。なあみんな」

「そうだよ」

「抜け駆けなんてさせないもんね」

そんな楽しい宴は11時ころまで続いたとき、俺はすぐに帰ったけどな。十代女子のスタミナ侮ってたよ。

43・祝賀会だって(後書き)

どうでも良い作品情報

音羽の総資産(作者のガチ計算結果)

薬品企業の年収からライセンス料3%×5年

約200億円なり

(本人と一部企業関係者しか知らない)

44・記憶の断片（前書き）

少し動くかな、短いです

44・記憶の断片

―夢を見る

―どこか暖かく

―どこか寂しい

最初に目に入るのは透明なチューブのようなもの、液体が満たされた中に幼い男の子が見える。隣には同じようにチューブがありその中に同じ言ように女の子が入っていた。腕を動かしても温度を感じない液体しか触れない。外を見れば白衣を着た研究員らしき人ばかり。

「……………だ……………エ……………ク……………ド……………」

「……………マシン……………調整……………」

「……………DNA……………L3……………設定……………」

とぎれとぎれに言葉が聞こえる、どこかの研究室のようなのだが。それ以上はわからない。

『生体部品生成開始』

『D8筋繊維にエラー自動修正開始』

チューブに繋がれた機器を操作する白衣の男性、女性。若い者から、白髪の年寄りまで。ときどき、身体に痛みを感じる。中身から弄られているかのような不快感、でも嫌にならない。むしろ心地良い。それを感じているということはこの男の子の視点で夢を見ているのだろう。

場面は変わり、同じ場所。でも、研究員たちの顔には焦りが見え隠れしていた。

「強制．．．．．コア．．．．．埋め込み．．．」
「不可．．．．．耐久．．．．．エネルギー．．．」
「失敗作．．．．．100体．．．もう．．．．．」
「．．．．．IS．．．．．無理だ．．．．．」

血眼になって機器を操作する研究員。近くのモニターには数式や複雑な設計図のようなものが大量に羅列され、延々と流れていた。

再び場面は変わる．．．．．視界に映るのは、廃墟。輝が入ったチューブ、血が付いた右手、銃声。

「成功体．．．．．させるか．．．．．」
「撃ち殺せ．．．．．逃がすな．．．．．披検体．．．．．」

なぜか左手には赤い液体の付着したナイフ、右手にはハンドガン。

足元には息絶えた人間だったもの、床はそれから流れ出す液体に染められて小さな水溜りになっていた。後ろには女の子、怯えたような表情で蹲っていた。

「大丈夫、■■■は俺が守るから」

「ホント？」

「うん」

ふと見上げたそこには自分が入っていたであろう大きなチューブ、下には小さな金属プレートが貼り付けられていた。ところどころ赤いなかがかびり付いているが、かすかに刻印された文字が見える。この夢の主役であるう少年の存在を示す名前。

『一戦闘特化遺伝子強化披検体N - 35』
エクステンデッド

「……………んあ？……………」

何か懐かしいものを見ていたような気がする、幼き日の思い出のような。それしか感じないが……まあ、所詮夢か、それにしてもなんだったんだろうな。

「ほら、起きろ。朝食食いそびれても知らないぞ」
「うにゃ」

「うおわぁ！馬鹿、なんで下着だけで寝てるんだよ！」

中々起きないので布団をめくると、最初に見えたのは紫の・・・所謂勝負用とかって言われそうなブラとパンティー。正直言うと、とても艶やかです、こいつも体型は結構良い方というか良いので。俺だって普通の男子高校生であり思春期ですよ！朝からはダメだってこれは、前屈みになっちゃうから。

「ん、誘惑ですけど。なにか？」

「せんでいい、早く着替えろ。俺は向こう向いてるから」

「中学のときは普通に着替えてたじゃない、もしかして・・・」

あゝ、この後ろから聞こえる布擦れの音が落ち着かん。落ち着け俺、後ろにいるのはただの幼馴染・・・で会ってるのかわからんけど。幼馴染に反応してどうする、ただの節操なしじゃないかよ。早く男同士の部屋になりたいです、むしろセシリアと同部屋だったらもう少し落ち着いてくれたかもしれん。

「わひゃあ！？な、な、にやにを・・・／／」

薄手のシャツごしに感じる二つの暖かくて柔らかいなにか、こ、こいつ・・・わざと当てる反応楽しんでやがる。よく知った相手とはいえこういうのができる女子っていないよね、普通は、こいつが特別なだけかもしれないが。

「そういえば、クラス対抗戦頑張ってたね」

「俺は副代表だから関係無いだろ」

「さて音羽分も補給できたし、私は行くわね」

「説明してけ！・・・行っちまったし」

音羽分つてなによ、そんなことを疑問に思った朝だった・・・。

44・記憶の断片（後書き）

というわけでどちらかと言うと楯無さんの出番でした

どうでも良い作品情報

今作品で打鉄は結構バリエーション多い

45・つるべたツンデレ中華娘登場（前書き）

ISガチャでお嬢様が一発で当たりテンションがヒヤッハーしています

予約投稿の日時間違えてしまっていました、すみません

45・つるべたツンデレ中華娘登場

「おっはよ〜！」

朝の挨拶は元気にしよう、勿論笑顔で。最近は挨拶ができる人が減っているらしい、人との付き合いは挨拶から始まるんだ、しっかりすれば良い人間関係が築けるぞ。

「おはよ〜如月君。転校生の噂って知ってる〜？」

「おう、おはよう。ああ、中国からだったっけ」

遅く起床したために今日は朝食を一人で済ませた、もとい栄養ドリンク。時間が時間だったから遅刻するわけにもいかなかったんだよね、すまん俺の体。千冬さんの出席簿のほうがダメーじ大きいから優先させてもらった・・・転校生ねえ、無粋だから言わないけどね。

「しかも代表候補生なんだって〜」

「へえ、ほお。ふ〜ん」

代表候補生と言えば……………。

「あら、わたくしの機体データでしょうか」

「どっちかって言うと俺らのデータだろうな、タダではやらないけど」

いつもにも増して腰に手を当てるポーズが似合ってる、一夏が考えているようにイギリス人全員が綺麗にできるわけでは無い。これも威厳と嗜みの一つである、俺は一応できるが特に使う用事も無いからやってない。ひとまず、今日もセシリアは可愛いとだけ言っておこ

う。

「このクラスには無いのだろう、ならば騒ぐほどのことでもない」
「そうか？」

さっきまで遠くの自分の席にいた篤がいつの間にか一夏の席へと移動してきていた、もしや忍者か？違うか、そうか、空気なだけか「誰が篠ノ之空気だ馬鹿者」だそうだ、まあいいけど。なんか一歩乱起こりそんな予感がするなあ、原因は主に一夏とか一夏とか一夏とかry。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるのか？」

「候補生ということですからお強いのでしょうかね」

つまり・・・優勝景品の「食堂スイーツ一年分フリーパス」が手に入りにくくなるということか、確実に候補生機体データとかでこういうイベントには出る。というかデータ取りのために来ていると言っても過言ではない、ちなみにセシリアもそんな感じである。ついでに言うところのクラス対抗戦とはクラス代表同士による、本格的なIS実習が始まる前の・・・えーっと・・・スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。やる気出すためにフリーパスとかが景品にされるらしい、粋なはからいをするものだ。え、そっちの説明が重要だって？俺にはスイーツのほうが重要なんだよ。

「対抗戦は負けられないぞ一夏」

「まあ、やれるだけやってみる」

「やれるだけでは困るぞ一夏！男たるもの頂点目指していかなば意味が無いだろう」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

「今のところ専用機持ちは1組と4組だけだから余裕だよ」

いや、仮にもクラス代表だから油断できないと思うんだが。専用機持ちじゃない候補生だっているんだから、機体性能が勝利の絶対条件じゃないんだぞ。どこかの池田声の仮面彗星も言ってたじゃないか、え、分からないって？ g g r k s

「―その情報、古いよ」

突然教室の黒板側の入り口から昨日ぶり―ああ、一夏には1年ぶりか―の声が聞こえる、その懐かしい声に一夏が振り返る。俺は最初からそっちを向いていたので問題ない。あ、筭の視線が真剣を抜いた侍のように鋭くなった。いや、元からが余計に鋭くなっただけかって鈴ちゃんそいう風にすると―

「2組も専用機持ちが代表になったから、そう簡単に優勝させないから」

「鈴……？お前、鈴か！」

「そうよ。中国代表候補生、フアゼンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

おお、なんというカッコつけ。まあ、カッコよく決まってるけどボーイッシュってこういうのを言うのか。うん、勉強になった、いつ役立つかわからないけど。今日もサイドアップテールが陽光に反射して輝いている、健康的ってのは良い事だな。ちなみに鈴ちゃんも一夏のことが好きである、この女泣かせ！「音羽……それ、あなたが言えることですか？」どこがだよ、俺のどこが鈍感でビン・カン燃えない奴だっって言っただ。

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「な、なんてこと言うのよ！ 台無しじゃない！」

流石KYキング、せつかくのシーンを根底から破壊してくれた、おのれデイクイドオオ！！ まあ、某10周年はどうでもいいが、というか、何時になったら一夏はまともな男になるんだろうか。まさか、ここからまた増えないよな一夏ハーレム。一瞬、金髪貴公子と冷水って単語が思い浮かんだが関係ないよなあ！？ まあ、昔から嫌な予感はあるから……ま、一夏のことだからもはや驚かないけどな。

「一夏エ……まったく、お前は……」

いかん、新たな犠牲者が出てしまう。ここは伝統のやり方で伝えねば、一夏と一瞬視線を交わし鈴ちゃんの背後を指差して叫ぶ。

『志村うしろ、うしろ！！』

「え？ ぴぎやア！！」

無慈悲に振り下ろされる名刀『出席簿』、その迷い無き一閃は鈴ちゃんの額に吸い込まれるように命中した。振り返ったら視界から外れなくちやいけないだろ千冬さん！ 叩くのはまだ早いよ、ああ、でも千冬さんがなんか堪えてるようにしてる。ドリフSUGEEEEEE！！

「凰、もうSHRの時間だ。さつさと戻れ」

「は、はい！ 一夏、また来るからね！！ あ、音羽も」

そう言っただけチャームポイントのサイドテールを揺らし、身を翻して

去っていく。その身軽さはさながら猫のようだ、そっぴや猫って可愛いよね。まあ、セシリアのほうが何倍も可愛いかな！それは譲れん、あ、SHR始まる。ってか、俺はついでかよ、まあ別に良いけどさ。

「さつさと戻れ」

「はいいー！」

結局今も千冬さん苦手なのか、昔からだよね。懐かしい、っと席に戻らないと大変だな。一夏はどうせ自分に迫る危機に気づかないで「なんで格好つけようとしたんだ？」とか考えてるんだろ、目の前に武神が立っているけどもシラネ

「あいつ、IS操縦者になったのか・・・」

「一夏、あいつは誰だ！」

あ、あ、あ・・・どんどん他のクラスメイトも一夏の元へと質問に行ってしまう、数人は俺の動きと表情と時計を見て自重しただけだな。

ズバンズバンズバンズバン！！

『・・・・・・・・！！』

「席に着け馬鹿者共」

スライドしながら残像を残して振り下ろされる出席簿が火を噴く、並んで頭を抑えて蹲る女子とその中心にいる一人の少年という不思議な構図が出来上がった。なんだこれ。

ちなみに鈴ちゃんのが気になって仕方ないのか、箒がその後の授業で6回叩かれたのは不可抗力でもあると思いたい。

45・つるべたツンデレ中華娘登場（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアと楯無にしてほしいコスを作者がこっそり教えて欲しがっていたりする

46・通常営業の喧騒（前書き）

ネタ会話多目です

46・通常営業の喧騒

「お前のせいだ！」

「なんでだよ……」

昼休み、昼食をとろうと食堂に向かったところ。一夏が箒に理不尽な説教をしていた、いくらなんでもそれは無いだろよ。自業自得だし、よりによって千冬さんの授業で考え事して話聞いてないでいたらそりゃあ叩かれるわな。しかも6回も、見てることからすれば年頃の乙女らしいんだが、タイミングが悪かった。鬼の……いや、鬼神の居る前ではそういう行動はそれこそネイキッド（ナイフ縛り）でBB部隊同時相手にしてるようなものだ。この例えが分かる奴がいるかどうか知らないけど。

「まあまあ、話は飯食いながらでいいだろ。な？」

「ずっとここで立つてるわけにもいかないしな」

「ええ、座ってゆっくりお話するのが良いと思いますわ」

三人による自然な口撃に箒がわかったとでも言うように頷いて歩き始めた、あ、向こうで鈴ちゃんか仁王立ちして待ってる。心なしかイラついてるように見える、右足の爪先を何回も上下させているからなんだが。そういえば俺はカルシウムを過剰と言えるまで摂取してるのにイラつくことがあるんだが、誰だろうね「イライラするのはカルシウムが足りないからだ」とか言ったのは。まあ、そのために俺は味噌カレー牛乳ラーメンなるものを注文したけど。美味しいのかこれ？

「待ってたわよ、一夏！」

それぞれの昼食をおばちゃんから受け取り、席に着こうと視線を食堂に巡らした先に鈴ちゃんがどくと構えていた。さっきからずっとそのままだったのか、心なしかラーメンの麺がスープを吸って延びてるように見えるんだが。ラーメンに限らずできたてが美味しいんだぞ、てか、結局カツコつけするのか。似合ってるけどさ。

「まあ、とりあえず座ろうぜ。あそこ空いてるし、鈴も早く食わないとダメだぞ」

「わ、わかってるわよ!」

ともあれ、一夏が先導して空いていたテーブル席に座る。円形のテーブルを囲むようにしていつものメンバーが座る、順番は一夏・篤・鈴。丁度鈴が一夏の隣に自然な感じで座っていた、俺とセシリアはそれに向かい合うようにして座っている。

「それにしても久しぶりだな、一年ぶりか?元気にしてたか?」

「元氣も元氣よ、誰かさんのおかげで(チラ)」

「……(プイツ)」

「どうしたんだ音兄?」

「なんでもない」

そうだ、なんでもないんだ。別に月1で一夏の写真をメールで送っていたんだ、とか言えない。しかも涙目+上目遣いのコンボで撃墜されたから断れなくてとかも言えない。まあ、好きな人に突然会えなくなることになるなんて悲しいからな。まあ、並木野で生徒会長やってたときの癖というか「いつでも、どんなときでも生徒会長は生徒の味方」っていうのが固定観念であるというかなんとか。まあ、それはいいや。

「俺が良く行つてた料理屋の娘さんなんだ（ボソリ）」

「やはり・・・一夏さんのことを？」

「うん、結果はこのとおりだけでも」

目の前では二人の少女が互いに火花を散らせて睨みあっていた、一夏、幼馴染にファーストとかセカンドって付けるなよ。ついでに言えは一夏曰く、簪ちゃんはサードらしい。だから幼馴染にファ（ry

「付き合ってるのか一夏！？」

「つ、付き合ってるなんてそんな・・・／＼」

「なんでそんな話になるんだよ、ただの幼馴染に決まってるだろ」

『・・・・・・・・・・』

「なんで睨んでんだ？」

「なんでもないわよ！！」

一夏エ・・・・・・・・どうしてそこでわからないんだ、そこで！諦めんなよ！できる絶対できる・・・・・・・・わけないか。まあ、そういうことはお構いなしに俺は味噌k（ryラーメンを、セシリアは煮魚定食を食べる。おお、結構美味しいなこれ。（作者も食べた経験あり、美味しかったよ）

「鈴音さんですね、わたくしイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。よろしくお願いいたします」

「・・・・・・・・誰？」

「なっ！？同学年の候補生も把握しておりませんか？」

「うん、興味ないし」

「なっ！？な、ななあ！？」

セシリアのコメカミに四つ角が見える、突如言われた驚愕の事実によろめきそうになるもどうにか抑えたその顔は真っ赤になっていた。まるでマンガのゆでだこのようだ・・・喋ったら超速で撃ち抜かれるから言わないけど。ひとまず落ち着かせよう。

「言っておきますけど、あなたには負けませんわ!」

「あっそう、まああたしが勝つけどね。悪いけど強いもん」

ふふんと強気な鈴ちゃん。相変わらずだなあ、妙に確信的だし嫌味には感じないんだよね。素で言ってるからなんとも言えない、素で思っただけのまま口に出すからなあ。嫌味じゃないからもちろん怒る人もいるよ?

「言ってくれますわね・・・」

「変わってないなあ、鈴ちゃんは」

俺がしみじみと昔を思い出して懐かしんでいると鈴ちゃんが一夏にクラス代表か否かを聞いていた、ああ、2組の代表になったって言うってたな。確かもう決まっていたと思うけど、おそらく候補生ってことでの措置か?専用機持ちって言うってたし、中国も第三世代機できたって聞いたけどどんなのだろう。某ナタクみたいにクローが付いてて伸びるんだろうか、それはそれで強そうだな。

「音羽、そんなのなわけ無いでしょ」

「じゃあ、隠し腕」

「気味が悪いでしょ」

「NT-D」

「ここから出て行け!」

「エネ。ーコントローラー!」

「右上上下A B！つてできるかあ！！」

『いい加減にしろお（なさい）！！』

痛い、人の頭を雪片とスターライトで叩くなんて。なんかズガベシッ！！つて聞こえたぞ、およそ人体から聞こえてはいけない音だと思っんだが。え、ギャグ補正？ふざけるな。てかメタネタやめろ。それ以前にIS用の特殊合金で作られた装備をハリセン代わりにするな、俺の体内に物理的な突っ込み（誤字にあらず）になるから。

「まあ、いいや。じゃあごゆっくり」

「では、わたくしも」

昼食を終えた俺とセシリアは背後から聞こえるいつものどおりの喧騒を聞きながら、教室へと歩いていった。ふと掲示板が目に入ったので何か連絡事項などがないか確認する。ちよつとした連絡事項などはここで開示されるために、食事を終えた生徒がまばらではあるが集まっていた、大きな行事の連絡や情報確認もできるんだよね。

「え？」

「あら」

そこには、クラス対抗戦の出場がクラス代表と副代表の二名に変更されたという事項が表示されていた。

美月が言ってたことって……こういうことだったのかよ、mjk

46・通常営業の喧騒（後書き）

どうでも良い作品情報

原作2巻終わるまで音ucciの本当の専用機は出てこない予定

47・当然の報い

IS学園第4アリーナ、その中央には4機のISが展開されていた。無論、白式とブルー・ティアーズに打鉄のF型と貸し出しの一般機だ。

「まさかタッグになるとは思わなかったよ」

「これも良い経験だろう」

「後で楯無シメる」

「ともかく始めましょう、私と箒さんで攻めますから。お二人で連携してくださいね」

白と蒼、二つの黒が舞い上がった。そういえば何故か一夏が箒とセシリアに追いかけられてボコボコにされるようなイメージが思い浮かんだんだが気のせいだろうか。それはそれで見てみたいような感じもするけど、言うておくが俺はSでは無いぞ。断じて。まあ、美月の困った顔を見てどこかゾクゾクするようなことはあるけども。

「では、行くぞ！」

「上等！」

「全速全身DA！」

「音羽は危ないネタを使わないでください！」

ちなみに俺はいつもの赤縁眼鏡をかけたままである、右目の抑制も兼ねているからな。じゃないと関係ないときに起動して面倒なことになる、この右目のこと知ってるのは俺とセシリアと美月に千冬さんだけ。何かあったときのために敵を騙すなら味方から実践しているのだ。事実、俺がIS学園に入ってから裏で動きが活発になっ

た組織があるとか。正体不明だけど。亡国とかつて名前だったな、
イージス？違うか。

「せやあああああ！！」

「やらせるか！」

篤が一夏にブレードで切りかかるところをハンドガンで牽制する。
もちろんセシリアがスターライトでの正確な射撃をしてくるのでシ
ールドで防ぐ。

「一夏、今だ！」

「おう！」

それから2時間、みっちりとISでの訓練をした俺達。一夏は汗だ
くで疲れきっていた、まあ、何も運動してないでいればそうなるよ
な。今は一夏と篤が反対側のピットにいるのだろう、なんか鈴ちゃ
んが上の通路歩いてそっちに歩いていったけど。

「ふは、ISってのは結構使いにくいな」

「まあ、慣れなければ大変ですからね。安心してください、私がし
っかり教えてさしあげますわ」

「ありがたき幸せでございます、お嬢様・・・ってな」

「やっと様になりましたのね、今更だと違和感ありますけど」

まあそりゃあ、本邸では普通にタメ語っていう暴拳を犯していたけども。良くあんなんで俺やっていれたな、そりゃまあ警護は体に覚えさせられて反射でしちゃうレベルにはなってるけど。執事的スキルは皆無だからな、どっちかっていうと年の離れた妹に今日は。。をするよって教えて連れて歩いたようなものだからなあ。護衛のほうメインだったし。

「俺の体のことがはつきりして片付いたら良いんだけどなあ」

「何か新しいことは分かりましたの？」

「裏でどこかの組織が動き出したってくらい、俺が一夏のどっちが狙いかも分からない」

死亡扱いになってたらしいけど、世界的ニュースになったからまた振り出しだ。中々俺自身の情報も出てこないし、結局俺はキャベツ特化56円なのか？近所のスーパーで1玉40円だったぞおい。

「右目のあれを使わなければ大丈夫だと思いますが」

「まあ、そうなんだけども」

コネ使ってフランス経由でドイツ軍に聞いてみるかな、こんな造った記録あるか？みたいに、確か遺伝子強化体が部隊配備されてるところがあるって噂程度に聞いたことあるし。そこらへんでなにかしら無いだろうか、せめて56円の本当の意味を知りたいです先生。

「は、厄介な体なこと」

「例えあなたがどんな存在だろうと、私は傍に居ますわよ」

「……（涙目）」

「あ、あら？どうしたの音羽」

「いや、嬉しくて……ああ、俺は今猛烈に感動している！」

いかん、嬉しすぎて涙が止まらない。何時振りだろうかこんなに泣いたのは、おそらくミリアさんに直々に鍛えられてそれがきつくて泣いた以来か。セシリアは何時の間にこんなに人間が出来上がっていったんだ、俺は嬉しいよ！あゝ、涙がやばい。汗みたいになんと流れる。

「もう、そんな大げさな」

「ありがとうな、セシリア」

「まあ、それは良いですから。夕食にでも行きましょう、ね？」
「そうだな」

二人して笑顔で食堂に向かって歩いてみると、何故か一夏と箒の部屋が騒がしい。またなんかやってるのか、どうせ性もないことなんだろうなあ。竹刀と金属がぶつかる音がするし、どうしてそうなった。

「またか」

「またですわね」

はあ、とため息をつくと突然鈴ちゃんがドアを蹴破り走っていつてしまった。……。仕方ないので箒に経緯を聞き、なんでも鈴ちゃんが昔に約束した「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてくれる？」という「毎朝味噌汁を」擬似四次元ボケットというものを「毎日タダ飯」と勘違いしていたらしい。腕時計からハーフサイズ月光を一機召還して痛みだけを与えるように命令して一夏をボコらせておいた。ついでに捨て台詞も。

「牛に蹴られて死ね！あ、箒も飯行かないか？」
月光

「ああ、一夏。死ねとはいわん、だが死ぬ気で反省しろ」

アッー！！とか遠くから聞こえたが気にしない、乙女の純情を弄んだ人間に当然の報いだ。え、月光だからシヤレにならないって？まあ、そりゃあ生体部品じゃなくて電磁人工筋繊維で脚部を作ったからやるうと思えばコンクリートくらいは砕けるが。非殺傷、痛覚のみっていう稼働命令だから死にはしない。痛みは半端ないだろうけども。精々ワイヤーアームで痺らせるくらいだし。

「は、まったく一夏が将来暗い夜道で刺される未来しか思い浮かばない」

「同感だ、鈴音とやらが不憫でならん。いくら恋敵とはいえあまりにあまりだ」

「いつから一夏さんはああでしたの？」

箒と俺が向かい合ってため息を吐く、そこからかよ。

「小学生のころからか、道理でなあ」

「やはり中学も変わりなくか、まったく」

「・・・一夏さんは一夏さんですね・・・」

食堂に三人のため息が響くように吐き出されたのは言うまでもない。

47・当然の報い（後書き）

どうでも良い作品情報

作中に出てきた月光は音羽宅にも一機オリジナルサイズで配備中
（ステルス状態で）

48・番外編 IF その1「幻想入り」(前書き)

息抜きに番外編、時間軸は音羽が高1のとき

本編のIFですので平行世界のことだと思ってください

(作者は詳しくなく、ノリですので細かいツッコミは無しが嬉しいです)

48・番外編 IF その1「幻想入り」

「あ？」

とある休日の土曜日、銃器などを裏ルートで仕入れてほくほく顔・
・・・それはそれでおかしいか。まあ、例えて言うならISの8巻
がやっと出て買えたぜ！って感じるくらいに嬉しいみたいな感じた。
例えばメタなんて言っちゃいけない、分かりやすければ良いんだ。
で、なにこの足元の穴は。

「おわあ！？なんだこれ？ってか、落ちるゝ！」

どうにか飲み込まれまいと道路を掴むも、穴がそれ以上に広がり飛
ぼうにもジェットパックが整備中であり手元に無いことを思い出し
た。あれ、詰んだ？なにこの状況、え、え？

「No~~~~~!!」

最期の踏ん張りも効かず、その真っ暗な穴に俺は飲み込まれてしま
った。藍越学園に入学して初めての夏休み、初日の出来事である。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「どこだこい」

気づけば見知らぬ森の中、周囲には青々とした森林が遠くまで広がっていて―イオンが過剰摂取できそうなくらいだ。過剰摂取とかイオンにあるかどうか知らないけども、人っ子一人見当たらない、動物の気配も感じない。あるのは視界いっぱい広がる森林、もとい樹海だけである。

「携帯は圏外、GPSも不可。どうということなの」

衛星の回線に乗っ取る魔改造を施してあるにも関わらず、携帯の左上にはどや顔で圏外が鎮座している。まだ買って改造してから三日しか経ってないぞおい、すぐに使えなくなるとは何事だよ。せつかく米軍の軍事衛星乗っ取れるレベルにしたっていうのに、あ、身の安全って意味でね。軍用レーザー砲搭載されてるから。

「まあ、悩んでも仕方ないか」

まずはどこか人のいるところに出て、ここがどこかなど情報を手に入れなければいけない。悩んでいる暇なんてないんだ、早く家に帰らなければ・・・あのままイギリスに墓参りに行く予定だったけども。ひとまず、現状を打破するために俺は森を歩いていった。風の向きからしておそらくこっちに行けばいいはずだ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

そうは言ったものの、かれこれ二時間。さきからぐるぐると同じ場所を歩いているような気がしてならない、目印を付けてきたからそれは無いとわかるが・・・景色が変わらない。このままでは結局遭難してしまう、すでに遭難してるような気がするけども。

「まいったな」

諦めて死神の瞳を起動させようと眼鏡に手をかけようとした途端、リーバース・アイ近くの草むらから何かが動く音が聞こえた。

「リスか？流石に熊は無いだろうが」

とりあえず気になったので自身が遭難状態にあることも忘れて音の発生源へと近づいていった、できればリス所望、可愛いは正義である。誰か・・・確かジャックがそんなこと言ってた、絶対違うと思うが。

「うおっ!？」

突然足元に飛び出てきたものだから、思わず驚きのあまり後ずさり。そのまま後ろへと倒れこむように転んでしまった、丁度尻が当たったところに小石が突き出ていたみたいで痛い。まだ痛みが残るそこをさすりながら飛び出てきたそれをようやく見る。白い・・・毛玉？目と口はついていてみたいだが、何も言わない。じつと俺の顔をガン見している、なにか言ったら言っただけ怖い感じもするけど。油で揚げたらおいしそうだなこれ、抹茶塩を少し振りかけてサクツと。ひとまず初見の生物であるのは確かだ、なんだこれ。

「・・・・・・・・・・じゅるり」

「・・・・・・・・・・（ガン見）」

小腹が空いてるし、捕獲してみるか。新種だったらおそらく研究所とかから報酬とかも貰えるかもしれない、既に総資産が企業のそれを超えてるけど。一昨日に銀行口座の金額見たら大企業の年収数年分になっていたけども、どう使えと？オルコット家には裏ルートで送金したけどもさ、それより今はこいつを捕まえるのが先だ。

『・・・・・・・・・・』

今まさに手を伸ばそうとした手前で、その美味しそうな毛玉は素早い身のこなし（？）で遠くへと飛び跳ねて逃げていつてしまった。ああ、貴重な不思議生物兼食料になりそうだったなにか……。名残惜しくそれが居なくなつた方向を見ると、いくらか明るく見えた。どうやらその先は開けているようだった。

「お、おお！出れたー！！」

5分ほど歩いていくと、見渡す限りが広大な草原になっていた。まあ、濃い目の霧がかかっていて地平線が見えないんだがな。それでも森の中で過ごすようなことにならなくて良かった、持つてる食料なんてカロリーメイト食いかけの一本しか残ってなかったからな。流石に寝袋無しで野宿はきつい、いくら大丈夫なように鍛え上げられてしまったとはいえ。

「どうするか、このままここに突っ立つてるわけにもいかないし」

ここから人が住んでいそうな集落は見えないが、森と反対側になら人里くらいはあるはずだ。というか、無かつたらマリアナ海溝なみに深いため息を限界まで吐くことになりかねない。ジェットパックが手元に無い以上、上空から飛行して調べることもできないし。・

・・・歩くしかないか。

□ ■ □ ■ □ ■ □

歩き始めて既に10分が経過した、どこにも集落なんて見えないし水田のようなものも見えない。心地良いそよ風が俺の顔を優しく撫で付けるだけ、あゝ静かだなあ。まあ、まさかこんな場所で迷子とは夢にも思わなかったわけですが。平原で迷子とかどうやったらできるんだろうね、俺がなうな感じでそれだけど。

俺のチタン合金ハートが傷ついてため息をはあと吐いていると、どこからか声が聞こえた。

「どうして迷子になっているか知りたい？」

「ん？」

項垂れていた顔を声の聞こえた方向に向けると、そこに青い服を着た小さな女の子がどしつと構えて立っていた。軽そうなのにどっしりとはこれいかに、帰れたら一夏にでも教えておこう。で、迷子の理由だつて？

「道に迷うのは妖精のせいなの」

「・・・厨二？邪気眼でも発動した？」

というか、このISっていう科学技術の塊が世界の中心となっていて世の中にそんな非科学的なものを出されても。普通ならはいそう

ですかつて納得できるわけがない、というか中二病患者を相手に話している暇など無いんだが。見たところ小学生っぽいし、ひとまず人里まで案内してもらおう。

「違うわよ！いきなり失礼ね」

「ああ、すまん。ところでどこか近くの人里まで案内してくれないか？君はどこに人が住んでるか知ってるかな？」

「もちろんよ！」

おお、助かった。元気に返事をしてくれただってことはもう安心だ、無事に人里に行ける。

「じゃあ、案内お願いしても良いかな？」

「道を教えてほしいの？それじゃあ・・・」

「勿論お礼はするよ、できる限りだけど」

俺が言い終わった瞬間、両手をこちらに向けてくる女の子。――なにするんだろっ、おんぶでもすれば良いのか？気の強い子みたいだから、それは流石にありえないか。以上、セシリアを相手に頑張った俺の経験による考察終了。

シユパン

「え？」

視界を埋め尽くすつまではいかなないものの、多数の小さな氷塊矢のように放たれて。そのうちの数個が俺のすぐ真横を通り過ぎていった。当たりはしなかったものの、サイドテールに少し掠った。体に命中しなかったものの、掠った髪が少々散らばったことから相当の威力を持つことがわかった。体に当たれば怪我だけでは済まないと

直感で理解した。

「いきなり何しやる！」

「案内してほしかったら最強のアタイを倒してみなさい！！」

「は！？」

一体何がどうしてこうなった、道案内を頼んだら何故か戦うことになったし・・・それ以前にあの女の子から氷の弾撃ち出したぞ。教えてくれないか、ジャック。ここに居ないから意味無いけどもさ。そうだ、良く考える俺。きっとこれは夢だ、幼女が手から氷塊撃ちだして俺を狙ってくるなんてことあるわけないジャマイカ。どこのゼビウスでも相手は女の子じゃないぞ。

「あいたたた・・・流石にこんなリアルじゃ夢なわけないか」

頬をこれでもかとおつねって見るが、考えるまでもなく非情なまでの痛みが伝わってきた。認めたくないが認めるしか道は無いらしい、これは紛れも無く現実だった。大人しくやられるわけにもいかないが。

「あんたを冷凍保存してやるわ！」

「話を聞きやがれ！！！」

「当つたれ！！！！！」

「言葉のキャッチボールしてくれ！」

いくら氷塊をばら撒いてくるとは言え、相手は女の子。むやみやたらと銃器を出すわけにもいかず、彼女の撃ちはなってくる氷弾の雨を避けるはめになってしまった。弾薬に非殺傷のゴム弾なぞ入れているわけもなく、対抗もできるわけがない。

「誰か助けてくれ〜！help me!!!」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「あらあら……幻想郷に来て早々、大変な目に会ってるみたいね」

さらにそれは言葉を続ける。

「まあ、私が助けてあげるのも良いのだけれど」

悩むような声を出す、気にせず続ける。

「こんなに面白いことに手を出すのもあれだし……もうちょっと様子を見ても良いかしらね」

ふふふと笑いながらその光景を見ていた。

「ここは一つ、彼のお手並み拝見ね」

48・番外編 IF その1「幻想入り」(後書き)

どうでも良い作品情報

本編に関する情報も一部出る予定

49・夏が原作読者に恨まれる理由（前書き）

今回はgottaってしまった感がヤバイです

49・一夏が原作読者に恨まれる理由

一夏に私的制裁を加えてから、一晚。

クラス対抗戦の初戦の相手は・・・鈴ちゃんと元二組代表さんであつた。

ついでに言えば、5月に入ったというのに鈴ちゃんは一夏と話すことなく嫌悪感をオーラとして見えるんじゃないかというほどに露骨に出していた。小さい虫くらいだったならその気迫でやられそうだなと思うくらいだった、一夏、早く謝ってくれ。いくら自分に向けてくれたもので無いとはいえあの空気は気持ちが良いものではない。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「IS使った訓練も今日で最後か、心配だなあ」

いつもどおりの一日を終え、日が西に傾き始めた放課後。明日からクラス対抗戦用にアリーナが試合用に調整する期間に入るため実質最後のISを使った実習時間となる。まあ、これだけ大きいアリーナを使うんだから剣道などのスポーツとはする作業が比べ物にならないほどに多くなるので仕方ないことではある。

まあ、ISが飛び回っても端から反対側まで行くのに結構かかるかなあ。

「IS操縦もそれなりに様になってきたからな」
「まだまだ俺は足りないよ」

ちなみにメンバーは俺とセシリア、一夏に空気「空気ではない！」・
・ 箒である。最近ではクラスの女子が慣れたためか落ち着いてきたために質問攻め（主に一夏が、俺は避けた）や追っかけ（俺は空の旅、一夏は放置）も収まっていた。まあ、俺は見つかる前に逃げたり捲き菱をばら撒いていたから主に逃走手段を持たない一夏が楽になっただけなんだがな。

「せめて助けてくれよ、男は二人だけなんだからさ」

「いや、そういうのは中学で十分だ。月単位のほうがマシだろう」

思い出すは、生徒会就任後から始まった俺の追跡劇。校内にいる間はどこからか視線を感じ、カメラのシャッター音が聞こえ、知らない間に生徒の間に俺の写真が広まっているという状況。IS学園祭に美月が招待してくれたときは同期の並木野出身生徒による伝言であれこれ追われて女装する羽目になったりした。黛にはそのときの写真を撮られた……一生の不覚！！

「それにしても、音兄の専用機って何時来るんだ？」

「早くても臨海学校ころ、遅ければ夏休み終わってからだってさ」

なんでも英国王室で、認定騎士だからと現在急ピッチで建造が進んでいるらしい。しかも女王陛下直々の命令で……。まさかの稼働データは機体の性能評価のだけで良いという計らい。逆にそれで良いのか？とこちらが心配になるほど、「騎士としての生き方が対価です」と言われてしまったので……。どうしようも無いけど。

「まあ、セシリアのおかげで良く動けるようになったし。フリーパスのためなら……。ふふふふふ」

「少しどころか結構怖いんだが」

「例えばそれなのはまあいいとして、そういうことよ」

これで理解する一夏も一夏なんだけどな、いつも面白いかどうかは知らないが洒落を思いついてるみたいだし。これくらいが丁度良いだろう、うん。セシリアは良く分かってないみたいだけど。

「謝りなさいよ！」

まあ、一夏が理由を説明しろとか言い始めて口喧嘩が勃発。理由を言えるわけがない鈴ちゃんが謝罪をとにかく要求し無限ループ・・・お前らなあ、もう少しお互いを理解したらどうなんだよ。ほら、鈴ちゃんなんて恥かしくて顔真っ赤にしちゃって、そろそろ仲裁しないとヤバイかな？

「じゃあ、負けたほうが買ったほうの言うこと一つ聞くつてのでどうよー！」

うげ、いきなり巻き込まれた。

「じゃあ、勝ったら理由説明してもらうからな！」

もうやめて、鈴ちゃんのライフはもう0よ！というか、それって死ねってことかよ。朴念仁って怖いな。

「い、いや説明は・・・／＼」

「なんだ、怖いのか？恐怖なんか捨ててかかってこいー！」

負けず嫌いに挑発とか、そんなこと言ったら鈴ちゃんが対抗しないわけじゃないか。これって俺も巻き込まれたってことだよな、確実に。ねえ？セシリアは「頑張って！」って顔で笑顔を向けたあ

と視線逸らしたし、筈は頭抱えてため息ついてるし。

「い、言ったわね！そっちこそ覚悟しておきなさいよ、この馬鹿！
鈍感！朴念仁！」

むかつ。

何か嫌な予感、こういうときは大抵良い事が起こらない。というか
起こせない。

「うるさい、貧乳」

『！！！！？』

瞬間、爆発音とともにピットが揺れた。音の先には、凹んだ壁と右
腕が部分展開されたISを纏った鈴ちゃん。どうやら壁を直接殴っ
たわけではないことから、とてつもない強い力だということがわか
る。え、え、どうしてこうなった。つか、酷いな一夏。

「い、言ったわね・・・禁句を言いやがったわね！！」

あ、ISアーマーがどれだけ強く握られているのかみしみし言いな
がら紫電を放ってる。これはマジで怒ってるな、昔から気にしてた
からなあ、それは一夏も重々承知していたと思ったんだが。おそら
く売り言葉に買い言葉ってところか、ガチで焦ってるし。まあ、自
業自得だよな！

「い、今のは悪かった！す、すまん！」

「今の「は」？今「も」よ！！対抗戦、覚悟しておきなさいよ！？」

□ ■ □ ■ □ ■ □

鈴ちゃんがガチギレして去ってから・・・

「ひとまず、しっかり謝れよ？」

「・・・わかつてる、はあ」

「・・・まあ、頑張るしかないよね。プライベート・チャネルで鈴ちゃんが「一対一^{サシ}でやらせて」って言ってたし、本気で痛めつけるんですね、わかります。」

49・一夏が原作読者に恨まれる理由（後書き）

どうしても良い作品情報

音羽の呼称

美月・箒・セシリア・鈴音・虚・雅〓音羽

一夏〓音兄

黛・本音・ジャック〓音うち

千冬・山田〓如月

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（前書き）

だいたい自業自得

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い

試合当日、第二アリーナ第一試合。対戦カードは織斑一夏 & a m p ; 如月音羽 V S 鳳鈴音 & a m p ; 河西愛理、二つの黒い影と赤と白が向かい合う。噂の新入生の試合と聞いてアリーナの観客席は満員御礼、通路で立ち見する人も現れるほど。それでも入りきらなかった生徒は中継モニターで観戦するんだって、風に聞いたところによると賭けをしている輩もいるとか。

□ ■ □ ■ □ ■ □

それにしても、鈴ちゃんの専用機「甲龍」^{シェンロン}だっけか。スパイクアーマーが付いた非固定部位^{アンロックユニット}が特徴的である。殴られたら痛そうだが、それ以前に第三世代兵器が搭載されているからそれにも注意が必要だ。白式ならまだしも、こちらは所詮量産機。しかも高機動型だから射撃は避けなければすぐに撃墜される。しかも、今の一夏の技量ではおそらく二対一は無理がある。

『それでは規定位置に移動してください』

無常にも考え事をする暇も無くなる、お互いに向き合う。その距離5メートル、既に試合は始まった。

「一夏、謝るなら手加減してやっても良いわよ」

「そんなの、雀の涙くらいだろ。真剣勝負だ、そんなの要らない。全力で来い」

空気が張り詰める、河西さんもにこにこ笑顔で会話を聞いている。どうやら言わずとも良かったらしい、話が分かる人でとても嬉しい。鈴ちゃんがいなければクラス代表になっていたことから相当の実力者であることは………確実だ。そこらへんを一夏が理解している心配でもあるが。

「ISの絶対防御も完全じゃないのよ、シールドエネルギーを突破できる攻撃力があれば本体に直接ダメージを与えることも可能なのよ」

事実なんだよね、これがまた。秘密裏に操縦者にダメージを与えるためだけの武装も開発されているからな、いつだか実物を見る羽目になったときはその趣味の悪さに気分を害したこともある。条約違反だから競技では使用が禁止されているがもし戦争になったらあちこちからそういうのが出てくることだろう。まあ、普通の武装でもやろうと思えばできるんだがな。つまりは。

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

この事実は揺るがない、代表候補生レベルともなるとそれも容易くできるほどらしい（セシリア談）それほどまでに操縦技能レベルが高いということの証拠なんだよな。だから、一夏がセシリアにあそこまで迫れたのも、俺がセシリアに勝てたのも運が良かったからに過ぎない。俺の場合はほとんど不意打ちだったからな、まあ、だからこそ負けないためにこれまで特訓してきたんだ。奇跡は、自分から起こすためにある。

『それでは、試合開始！！』

同時に開始を知らせるブザーがけたたましく鳴り響く、その音が鳴

り終わる前に4機の影が素早く動き出した。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「悪いが、あいつらはあいつらでやらせてやってくれないか？」

「勿論、邪魔はしないわ。生徒会長さ・ま？」

ビクツと背筋に悪寒が走る、俺をそう呼ぶってことは・・・並木野出身か！しかも俺が逃走のためにばら撒いた撒き菱用写真の弊害、なぜか息を荒くして迫ってくる女生徒という理解できない事態。楽だからとやった結果がこれだよ！

「うふふふふ、会長の体をふふふふふ」

「させるかぁあー！！」

瞬時に大型対物ライフル「レインスパア」を展開し、三点バーストでタングステン合金弾―驚異的な貫通力を持ち対物射撃に良く用いられる、某13なスナイパーもそれで階下から上階の戦闘員を床を介して撃ち抜いていた―を全て当てるつもりで撃つ。

「はぁはぁ、銃を撃つ会長も素敵！！」

しかし、普通ならば避けられない軌道のそれをこんな言葉とともに余裕で回避しているのだからすごい。そのセリフが無ければもつと素敵だったと思うんだ、あとそんなに怖い目で息荒く迫ってこないでくれ。まさかISの試合で貞操の危機を感じるようになってしまうとは思ってもいなかったよ、マジで。はぁはぁ言いながら銃弾を

横にずれて避けるし、スラスタ―使った三次元跳躍してショットガン「アンブレラ」を二挺持つて襲い掛かってくる。

「ヒッツハー！！」

「でえい！！」

銃撃の応酬が延々と続く、これは良い勝負になりそうだ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「つぐ、重い！」

「初撃を防ぐなんてやるわね一夏！」

試合開始とともに先制攻撃で雪片を振るうも、巨大な青龍刀・・・もはや大剣と呼べるそれによって見事に防がれてしまった。しかもそれが二本、バトンを扱うかのように華麗な剣捌きでの連撃はどうにか防ぐので精一杯だった。あまつさえこちらは細身の刀一本、どうにか防ぎきっただけでもマシなほうだった。

「（このままだと消耗戦だ、どうにかして一回離れないと・・・）」

「フツ、甘い！！！」

後退しようと姿勢を変えた瞬間、あの痛そうな棘付きアーマーが上下にばかりとスライドして開く。その中に見える球体が光り輝いた瞬間、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。あまりにも大きい衝撃に気を失いそうになってしまいが、ISのブラックアウト防護によってどうにか意識を保つ。

「今のはジャブよ、貰ったア!!」

にやりと笑った鈴、先ほどのそれを警戒してどうにか回避行動を取った瞬間。間髪要れずに権勢ジャブの後の本命が二発撃ち込まれた。その結果、着弾の反動と重力の相互効果でアリーナの地面に強く叩きつけられる。ずきりという鈍い痛みで立ち上がるのもままならない、見えない拳は言葉通りシールドエネルギーを貫通していた。既にシールドエネルギーが76も削られていることからその威力の高さに納得した。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「なんなのだ、あれは・・・?」

試合管制とモニターのためのピットで試合を見ていた篤が呟く、それが聞こえたのかセシリアが答えた。

「『ショックキャノン 衝撃砲』ですわ、空間自体に圧力を加えて砲身を形成して余剰で生じた衝撃を強固で不可視の弾丸として撃ち出す第三世代兵器ですわ」

しかし、その説明を篤は聞いておらず。モニターに映し出される一夏を心配そうに見つめていた。

山田先生が「流石、代表候補生ですね」と嬉しそうにしていたのはここだけの話である。

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（後書き）

どうでも良い作品情報

作者がPV20万・ユニーク3万突破記念話のやってほしい内容を聞きたそうにしている

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(前書き)

本編のストックが切れていて無理だったので番外編です

51・番外編 IF その2「冷静になるう」

「喰らえっ!!」

「のわあっ!？」

少女からの弾幕をどうにか避ける、どうして氷が銃弾レベルで襲い掛かってくるのさ。どうにか話し合いで解決したいのだが、相手は聞く耳を持たない。耳はあるけども、コミュニケーションが取れない。怒り狂ったブラコン全開の千冬さんでもしっかり話せば和解できると言うのに・・・結局拳骨一発は食らわされるけども。このままだと全身が氷だらけになるのも時間の問題だ、多少力づくで取り押さえるしかないか。

「当たりなさいよ!!」

「誰が好きこのんで弾に当たるか!」

それにしてもどうやって捕まえようか、あの高速の弾幕をどうにか掻い潜って彼女に近づかなければいけないのだが・・・あ、使うのは少々気が引けるが・・・仕方ない。怪我したくないし、怪我させるわけにもいけない。いくら氷塊を大量に撃ち放って来ても、相手は小さな女の子なのだから。子供を傷つけるのは流石になあ。

「ああもう!!」

「なんなんだよ!!」

付近には立体機動装置のアンカーを打ち込んで使えそうな木も見当たらないし、機動隊が使うようなシールドも格納していないから使えない。まあ、ゴム弾でもあれば良かったんだが・・・生憎日常

で相手するのは実銃を使うお兄さんとお姉さんばかり。いつだかは重機の事故に見せかけて殺そうとしてきたこともある、俺って何者よ。なんかドイツ語が良く聞けたけどもさ。

「・・・お？」

しかし、避け始めてから結構経ってから気づいたのだが。この氷の弾幕には規則性があるみたいだ、右目を使わずともある程度の軌道は読めてきた。接近するのは無理だが、弾速がそれなりにあるので避けるので精一杯ってところ。

「（このまま弾切れとか無いものか、当たらないから奴さんも焦ってきてるみたいだし）」

できればお互い怪我もなく穏便に解決したい、既にそれは無理っぽいけども。弾幕が広がっている時点で・・・なんであるときはISに勝てたんだか。まあ、学園で破損したメーカー修理中のを強奪したのみたいだったらしいが。それでも、IS倒しておいて目の前の少女に苦戦してるってなによ。

「こうなったら当てて見せるわ、凍符『パーフェクトフリーズ』！」

「なあっ！？仕方ない！」

彼女が叫んだ途端、色とりどりの氷弾が俺に向かって先ほどまでとは比べ物にならないくらいに飛んでくる。さっきのよりも弾速が上だな、色々諦めてデフォルト装備だった眼鏡を耑るように外して死リ神の瞳を起動させる。同時に鞭型のワイヤーソーを召還して迫り来る氷塊を音速の一閃で弾き始めた。

「せいやあ!!」

「ええっ!？」

なんか・・・うん、結構これ脆いんだな、硬いけどワイヤーソーを振り回して叩きつけるだけで簡単に砕ける。割れた破片がナイフみたいに鋭くて油断できないけども、刺さったらおそらくその部分は凍りつくだろう。割れたところから異常なまでの冷気が噴出している。

「つて、やあ!!」

しかし、叩き落せるからと言って安心はできない。その氷塊が白くなつて縦横無尽に動き回ってくるのだからよそ見をしようものならすぐに直撃してしまう。ワイヤーソーもある程度休ませないと冷え切つて千切れてしまう可能性もある。持久戦もこのままでは逆転されてしまいかねない。

□ ■ □ ■ □ ■ □

どうにか持ちこたえるも、そろそろワイヤーが撓りにくくなつてきた。限界が近くなつてきた証拠でもある、飛来する氷弾が最初のものに戻ったが。結局近づけずにいる、滅茶苦茶に撃つてくるおかげで弾幕が自然に激しくなっているのだ。例えるならば、子供が両腕をぐるぐると振り回してきたような状況。迫るのが可愛らしい手ではなく氷の弾なのだから甘んじて受けることなどできるわけもない。というかしたくない。

「そろそろ止めに「するわけないでしょうが!」ですよね」

そういえば、非殺傷のつて言えば候補があつた。確か、結構前にテスト格納つてことでゴムボール（近所の百均にて）を入れていたような記憶がある。確かそのままになってたはずだから今も格納されたまま眠つてるような気がする・・・多分。

「おっしや、そおい!!」

「へ、ぶへっ!・・・」

まさに神速とも言えるほどの速さでそれをイメージし、投げつける。俺の手から離れたそれは放物線を描いて少女の顔に金属光沢を見せ付けながら・・・顔に直撃した。ガッン!!とか聞こえたけど、なんか手が軽く冷えてるし、投げたのがゴムボールではないことは確かではある。

「やべ」

「ふにや~~~~・・・」

そのままふらふらとよろめきながら少女は地面へと倒れこんだ、まづつた、投げたのは球体ではあるが全然の別物であつた。何を投げつけてしまったのかと良く見てみると、見慣れた銃器的特徴的な金属光沢。・・・ガバメントアーミーカスタム用の50連ドラムマガジンだった、通称「かたつむり」。一番投げてはいけないもののような気がする、主に重量的な問題で。ぶつかって気絶しただけであざなどは見受けられないのがせめてもの救いである。

「キュー・・・」

「はあ・・・」

ゴムボールだからと全力で投げたのが原因だろうか、ものの見事に

気絶してのびていらっしやった。それはそれとしてどうするか、目を覚ますのを待っていると日が沈んでしまいそうだし。かといってここに置いていくわけにもいかない。

「どうしたものか……」

あてもなく彷徨うわけにもいかなかったが、だからと言って立ち止まるわけにもいかないという今現在。唯一の頼みの綱は気を失っていてどうしようもなく、八方塞だった。誰か助けてくれないかな、主にこの状況から。どうしようもなく、近くの岩に腰掛ける。はあ。

「なら、助けてあげましょうか？」

「はい？」

いま、どこからか声が聞こえたような。辺りを見回すも、いるのは俺と気絶して倒れたままの女の子だけ。俺は幽霊とかお化けとか苦手なんだが、それこそ縁日で開かれるお化け屋敷に入れないほどに空耳にしてははつきり聞こえたし……イヤアアアアア！！

「てえい！！」

嫌な予感がした俺は即刻、その場からイグニッションブースト瞬時加速もかくやというほどの速度で飛び跳ねて離れた場所に着地した。ここに来る前に飲み込まれた落とし穴に似た空気を感じたからである。

「まあ、上手くいくとは思ってないけどさあ！！」

着地した場所に、待ってましたとばかりに例の落とし穴がぽっかりと口を開けて待っていたのだから。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……ここは……？」

気がついたころには、先ほどまでいた広大な草原ではなく、見知らぬ家の中にいた。どちらかと言うと伝統的な和風の住宅、掛け軸や生け花が飾りつけられていることから客間であることはすぐに理解できた。柱が綺麗に磨かれていて、ほこり一つ無いことから長年大切にされている歴史有る住居であることは理解に容易い。まさにT H E 和室のようである、招かれた記憶が無いことは確実であるのだが。

「あら、気づいたみたいね」

背後からさつき聞こえた声がする、まあ、部屋の中をきよるきよるで見回していても結局は俺も人間である。首は180度回らないし、後ろを見ることもできない。ひとまず、振り返ることにした。

「ようこそ、幻想郷へ……とでも言っておきましょうか」

そこには、セシリア並みの長さの金髪ストレートな女性が立っていた。どこことなく不思議な印象を受ける気がする、ひとまず初対面であることは確かである。というか、金髪の知り合いなんて数えるくらいしか居ないよ。米軍のI S パイロットとオルコット家くらいだよ！

「如月音羽と言います、あの、どちらさまでしょうか？」

「あら、どうも。私は八雲紫、境界を操る妖怪よ」

「……妖怪？溶解……熔解……用かい？ＹＯかい？まさか、そんな空想上のものが居る分けないジャマイカ、しかもこんな美人な人が？妖怪ってあの某ゲゲの人に出てくるみたいなのじゃないのか？」「このロリコンどもめ！」のあれとかさ。なにも俺の髪はアンテナ立たないよ？

「妖怪……ですか？」

「ええ、そうよ」

につこりと笑うその顔はとてもふつくしい、うん。でも……どう見ても妖怪なんてのは見えない、というか今の科学万歳な世の中で生きてきた身としてははにかにも信じがたい。まあ、さっきまでの出来事を思い返してみればそれを認めるしか無いのだが。

第一、実際にそうだとしても俺の目の前にわざわざ現れたのだろうか。それに……幻想郷ってなんだ？東京と京都の仲間か？日本国内にそんな地名なんて無かったと思うが。わけがわからないよ。

「まだ、今の状況に混乱してるみたいね。……無理も無いけど」

そりゃあ、そうだ。さっきまでの出来事を振り返れば冷静にいられるわけがない、冷静にしたら見る奴がいたら見てみたいわ。

「あなたの身に一体何が起こったか、説明したほうが良いかしら？」

「是非とも、k w s k」

「分かったわ、ひとまず座りなさい」

「はい」

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(後書き)

どうでも良い作品情報

番外編では原作とは矛盾、キャラ崩壊アリ

52・失敗作という名・・・（前書き）

音羽のターン・・・ですね

52・失敗作という名・・・

「はあはあ・・・やるじゃないか」

「うふふ、二次の世界とはいえ最高です！」

だめだこいつ、早くなんとかしないと。え、今どうしてるって？お互いに近接ブレード出して鏢迫り合ってますが何か、河西さんマジ強い。突けば刃の横面を叩いて切っ先逸らすし、ショットガンで牽制しようとするばナイフで破壊するし。本当に一般生徒か？って思うほど、さつきから「神様ありがたいです」とか「転生とか俺得ww」とか言ってるのが玉に傷だが。中二病でもこじらせてるんだろうか。

「私のチートボディが火を噴くZE！」

「ホントにチートだよ、その技量は！」

大口径マシンガン「ガードブレイカー」を鼻歌交じりに反動無視してぶっ放すくらいには、あれって反動が凄すぎて反動相殺用のスタビライザーが必要って聞いたことがあるんだが。デフォルトの打鉄で扱えるって何者だよ、普通の生徒が分からないまま使って転んだって聞くぞ？

「うおらあああー!!」

「きゃあああー!!」

しかし、雑な照準だったために高速機動状態のF型に追いつけるわけもなく。その多量の弾丸は軌跡を描いてアリーナの壁に穴を穿つ、弾跡が俺の一步後ろってだけで十分凄い。おそらく、油断した隙に本命をドカンとかます魂胆なんだろう。狙っているような笑みを浮

かべながら今も引き金を引いていた。

「まだまだ楽しみたいが、決着付けようぜ！」

「ええ、行きますよー！」

お互いに一気に上昇し、俺は「スティール・ハーツ」を河西さんはIS用刺突エネルギーランス「はくが白牙」を展開し、同時に音速を超えた加速で接近した。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「よくかわすわね、衝撃砲「龍砲」は砲身も砲弾も見えないのに」

まさに、その通りだった。砲弾が見えないのは勿論、砲弾も見ることもできない。しかも今までの攻撃からあの衝撃砲、砲身斜角に制限がないみたいだ。後ろに回っても不可視の衝撃の拳を食らわされたからわかる、射線が直線状なのがせめてもの救いだ。鈴の技量と相まってそれすら弱点と思えないほどだった。俺はなんとかできている無制限機動から三次元躍動クロスクリッドターン、全方位の軸反転など基礎のすべてを高いレベルで習得して自分のものにしていった。

「（ハイパーセンサーで空間の歪みと大気の流れを探らせてるけど、撃たれてからじゃ遅い。どうすれば……）」

不可視の衝撃をすれすれで回避しながら、先手を打つためのタイミングを見計らっていた。決め手は……この手の中にある。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「っらあああああ!!」

「はあああああ!!」

音速の一閃と刺突がぶつかり合う、反対側では零落白夜の刃を光り輝かせた白式が瞬時加速で懐に入り込んでいた。なんでも、千冬さんが現役時代に雪片とともに勝ち抜いた相棒とも言える技らしい身に付けるにはとてつもない特訓が必要だとか。どんなのかって言う、あれだ。バツアレグでジャンプして目の前に!!って感じた。

「鈴、貰ったあああ!!」

「な、きゃあああ!!」

零落白夜の一閃、それが甲龍のシールドエネルギーに食らいつく。その瞬間。アリーナの中央に極大のビームが撃ち放たれた。アリーナのシールドエネルギーを易々と破ったそれは、競技中だったIS全てに警告を発した。

『警告! 未確認ISの存在を確認! 白式がロックされています!』

「未確認機だと? つくそ、教師部隊が来るまで抑えなきゃいけないか・・・!」

「せっかくの試合の邪魔をするなんて、無粋な真似をしてくれるね」
「ホントに」

「まったく、一夏・・・どうせ逃げないわよね」

「当たり前だ、って危ねえ!」

ズガガンッ！

音兄と河西さんの支援の銃撃で奴が注意をそちらに向けた隙に鈴を抱いて回避する、煙が立ち込めたままでもんな奴かは分からないが半端無い火力を持つことだけは確実にわかった。

『皆さん、試合中止です！退避してください！』

オープンチャネルで山田先生が通信で伝えてくるが、セシリアから送られてきたメッセージによるとアリーナは緊急時のレベル4で封鎖。アリーナ内のISでは突破は不可能、突入用の入り口はハッキングされて開閉不能。事実上、アリーナ内に馬鹿みたいな火力を持った不明機と閉じ込められた。

『織斑先生、教師部隊突入までこちらで抑えます。というか抑えるしかないです』

『わかった、ただし怪我はするなよ？』

なんとか千冬さんに許可を貰い・・・いや、もらえなくてもやるしかないんだけどさ。こんな状況じゃ、

たたかう

たたかう

たたかえ

たたかうしかない↑

こんなんだし、逃げれないし。というか、さつきから右目が疼いて仕方が無い。眼鏡で抑制してるけどちょいやバイ、俺自身説明できないし起動すると結構怖い。（鏡で見たら実際そうだった）まあ、

眼鏡かけてて良かったかな、というかこれってフラグっぽいが大丈夫だよな。ひとまず目の前の不明機の相手をしなければ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「聞いたな？」

「ああ、わかった」

「当たり前よ」

「ふふふ、りょーかい！」

ひとまず、例の不明機がまさに異形だった。深い灰色の体に特徴的に長い両腕、脚部の爪先より長いそれは手に砲口を覗かせていた。なにより首と捉えることができる部分が見受けられない、肩部と頭が一体化しているように見える。背が高い某ピンク色の悪魔と言えはわかりやすいだろうか、そしてISにしては珍しい『全身装甲』フルスキンだった。頭部らしき部分はセンサー機器が剥き出しであり、その異様さをこれでもかと思せ付けていた。

「一夏は上空で旋回しながらタイミング図れ、俺と愛理で射撃。鈴ちゃんもは衝撃砲で牽制。いいな！？」

『了解！』

即席の作戦の指示を出す、おそらくそうでもしなければ4機ではまともに動けないだろう。俺以外はISだからとはいえ実戦は未経験、そんなこと言う俺もISでは未経験だがな。生身と戦闘機くらいだ、そのときのことは追々話すとして。さっさとあれを片付けなければな。

「一夏、今日はお前がヒーローだ。わかったな？」
「ああ、やってやる！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……………ねえ」

「なんだ、鈴ちゃん。言いたいことはわかるけど」

「どうしてあれは上半身ぐんにやり曲げて避けてるのよ！おかしいじゃない！」

「そうだね、人が乗ってないみたいだよ」

そう、コックピットにいるはずの人間の体がくの字みたいに曲がって銃弾を避けたり、保護機能があっても無理なはずの急加速・急停止をさつきからやってのけやがっているのだ。体がいくら柔らかくても肋骨がありながら胸部を90度曲げられるわけないし、どこの蛸さんですか。仕方ないので気づかれない程度に右目を起動させて生体反応を探る……………。

「無人……………だと！？んなアホな！納得できるけど！」

「え、そんなことがあるわけ無いじゃない！」

「事実だ、『ありえないことこそありえない』ってことだ・俺だつて信じられないけど。聞いたなお前ら」

「ああ、全力でやれるってことだよな？」

「ぬふふ、本領発揮なのだ！」

まあ、無人なら全力全壊でできるよな。機械ならばどれだけぶち壊しても文句は言われないだろう、多分後で調べることになるだろう

けども。ひとまずは安全のために無力化、もとい停止させなければいけない。

「アンロックユニットフル
非固定部位完全ブースターモード」

外見はただの物理シールドだった対照的なそれが中央の基部から横にスライドし内部を支えるフレームが露出する、そこに光の粒子が集結し^{最速}失敗作と呼ばれる所以の大型プラズマ複合ブースターが二機一対で顕現する。ただ、最高の速さのみを求めたIS史上の幻想とも言えるべき存在。

「打鉄F型。いや、『打鉄・疾風^{ハヤテ}』か」

外見だけは打鉄の特徴でもある防衛重視のシールドに見えるが、それは相手を欺くための仮の姿。実際はプラズマ複合ブースターの膨大な重量を支えるため、ここぞの勝負時に真の姿での最速の煌きで相手を切り裂く。疾風と名づけられたのはそのためである、その異常、いや、規格外レベルの速度を扱いこなせる者は全世界でも二人しかない。その一人が、今この場にその存在を誇示している如月音羽であった。

「さて、サポートは俺に任せな。今なら行ける」

音の壁を越えた翼が、今ここに、舞い降りた。

52・失敗作という名・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

打鉄・疾風の最高速度は第三世代機に追いつくほど、これでも第二世代です（ライ

53・決着・・・・・・・・！！（前書き）

残心って大事だよね、そんな話も含まれる

53・決着・・・・・・・・！！

「はぁぁぁぁぁ！！」

疾風の名に恥じない音速の速さでそれを超えるスピードの一閃が無
人機の左腕を切り裂き、本体から分離させられた腕が音速の機動で
生じた衝撃波で碎かれる。通り過ぎた場所には粉々に碎け散った機
体部品だったものが散り散りになって撒き散らされていた、「打鉄・
疾風」と「ステイル・ハーツ」の二つが揃って初めて繰り出すこ
との出来る必殺の一撃である。

「愛理、鈴！今だ！」

「待つてましたー！！」

「ナイス！」

左腕部を切り落とされた無人機が左腕部切断による姿勢制御の狂
いと衝撃波の二つの阻害により体勢を大きく崩していた、更にそこ
へ愛理による炸裂チャフ複合グレネード弾の雨あられフルチャージ
された衝撃砲による四肢の内部機器へのダメージ。硬い装甲を持つ
機体に対抗するための実戦向けの有効的な攻撃方法だ。

「H A H A H A H A H A、こうもなつては無人機と言えど見る影も
ありませんNE！」

「結局、4対1じゃ勝ち目は無いのよ！」



「やり過ぎでは無いか？というか、一夏は何処・・・」

「・・・・・・・・空気ですわね」

さきほどまでの真剣な空気はどこへやら、千冬も少々顔を引きつらせながらモニターを見ていた。

「凄いですね如月君、疾風を使いこなせるなんて」

「まさか失敗作をここまでとはな、一夏が兄と呼ぶだけはある」

「・・・・（ニヤリ）あれ、一夏って言いましたね？うふふはい、た〜い〜です〜！」

「・・・・・・・・・・」

みしみしと音を立てながら、山田先生が鬼のアイアンクローを見事に決められていた。人体から聞こえてはいけなはずの音が聞こえているが、それを見てみぬふりをする二人の少女は全力でスルーしていた。

「このままですと怪我無く倒せそうですわね」

「ああ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「量産機だからって、弱いわけじゃないもんね〜!!」

「白牙」を展開して超高速で乱舞のように激しく刺突を繰り返す、

愛理さん。エネルギーカートリッジが採用され、「量産機の汎用性強化」という一時期の計画で開発された武装だである。機能特化のF型などと同じ思想であるが、「機体の一部変更による対応」と「主武装変更による多彩な対応」という二種類の開発思想である。実際に現行されているのは残念ながら後者である。

「織斑君、今です!!」

「おっしやあああああ!! 待つてましたあああああ!!!!」

上空で待機していた一夏が瞬時加速と重力による多重の加速で急降下する、無人機などの弱点。「不意打ちに対応できない」、思考を巡らせることができない無人機などはこれにめっぽう弱い。人間ならば、「多角的な思考」が可能であるが、無人機などの機械は「理解している状況から最善の方法を選択」するだけ、結局は感知しているものだけでしか世界を見ることができないのだ。そこへ長時間認知されていなかった存在がボロボロのそれに向かつて必殺の一撃を放つとどうなるか?

「でやあああ!!」

眩いほどに光り輝く零落白夜の光刃が無人機のシールドエネルギーを貪欲に、貪るように喰らい尽くした。シールドエネルギーが消滅した無人機は、その巨躯の動きを止め、そのまま重力に引かれて落下していった。

「お、終わったあ・・・」

「ふう、終わったわね。戻るわよ一夏」

「おう」

二人がそう言いながらピットへと戻っていかうとしている時、なぜ

か違和感を感じた俺は機能停止した無人機を見つめていた。愛理さんもさきほどまでの緩い感じではなく鋭い視線でそれを見つめていた、こちらが驚くほどの威圧感がある。なにか思うところがあるのだろうか？声をかけようとした途端、突然警告メッセージがポップアップする。

『警告！再起動を確認！！！』

見れば、もう動けるはずのない無人機が残された右腕の砲口をピットに着地した一夏に向けていた。表示される熱量が全開出力であることを否が応でも伝えてくる、ここからなら・・・間に合う！！残されたエネルギーを使って、限界ギリギリの土壇場の瞬間加速で無人機へと飛んだ。こちらを振り返った一夏たちの顔が見えた気がしたが、すぐに視界が真っ白に染まって見えなくなった。ただ、切り裂いた感覚は腕に伝わってきたのがせめてもの僥倖か。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……………？っ痛ううっ……………ああ、生きてるのか」

身体に鈍い痛みを感じ、それを切欠に意識が覚醒する。節々からの痛覚を堪えて上半身を引き上げらせる、それに応じて特徴的な長い黒髪が放射状に広がった。どうやら髪留めが外れてしまったのか外されたのかは不明だが、身に付けられていないことは確かだった。

「起きたか」

「まあ、おかげさまで。ご心配おかけしました」

近くの柱に寄りかかっていた千冬さんが声をかけてきた、尤もいつもよりも厳しい表情を浮かべていらっしやるけども。まあ、仮定ではあるがあれだけの出力のビームの渦の中に装甲の薄い疾風で突っ込んで行っただから当たり前か。良く怪我してない俺。

「結論から言おう、お前が身体への負荷を考えずに突撃して放った攻撃により完全停止。怪我人はお前だけだった、まあ、怪我と言っても肋骨の二三本に少しヒビが入った程度だ。1週間も安静にしていれば治るだろう、お前ならばな」

「まあ、そうですね。やはりあれは無人機で？」

「お前が見抜いたのだから、分かっているのではないか？」

「そりゃあ、そうですね。一応、ね」

誰だってそうじゃないか、確信的な情報を自分で持っていたとしても人に確認したくなるってことは。まあ、俺以外に怪我人いなかったってだけでも朗報か。

「だが、無理はするな。誰かを救ってもお前がどうにかなってはいかん、泣く者もいるだろう」

「気をつけてはいるんですけどね、それが中々に難しいんですよ。まあ、善処します」

「なら、良い。……こそこそしないで入ってきたらどうだ?」

千冬さんが保健室の入り口のドアを開け、顔を出して廊下にいたであろう人物に声をかける。

「では、私は戻る。調子が整ったら自室へ戻れ」

「わかりました、まあ当分戻れなさそうだけでも」

千冬さんと入れ替わりに入ってきたのはセシリア・一夏・鈴ちゃん・馬鹿第・河西さん、あと天災。保健室がまるでゲームセンターに入った瞬間のように騒がしくなる、それを見ながら俺は後ろ手に治療用ナノマシンの注射を腰にする。機能が停止すると体内で分解されて排出されるという身体に優しいタイプだ、ちなみにライセンス企業製。今使ったのは骨折治療用の物である、便利だねこれ。ちなみに使用済みの注射器はすぐに格納した。

「音羽、無事でしたの!？」

「音兄、大丈夫か?大丈夫っぽいけど」

「ダーリン、怪我は無い!？」

「少しは怪我人の前なのだから静かにしたらどうだ」

「音羽っちモテモテだね」

一夏は俺を何だと思ってるんだ、美月の夫になった覚えは無いし、愛理さんは関係ないこと言ってるし。まともなのはセシリアと第だけか、ひとまず全快したら一夏と肉体言語でちよっとお話ししよう。一度シバく必要がある。

「千冬さんの話だと肋骨にちょっとしたヒビが入ってて、1週間は安静だつてさ。以上」

「それって、あの打鉄の副作用か?」

「おう、無理な加速の結果らしい。結果オーライだけでも」

「まったく、一夏君は変わってないわね。曲がりなりにも剣道やってたんでしょ？」

「面目ない・・・」

「私がまた鍛えてやる、覚悟しろ一夏」

「つえええ！？またあれかよ・・・」

「ISだったらアタシも手伝うわよ？」

「む、二組のおまえは黙っている！！」

「なんですって！！」

「まあまあ、お二人とも落ち着いてよ」

騒がしくなった4人を一瞥し、二人へと視線を移す。

「あゝ、その。スマン・・・」

「音羽も変わってないわね、ホントに。少しは自分のことも考えなさい？」

「まったくですわ、人を守るなどと言いますが、自分のことも考えてくださいな」

「・・・はい」

女子二人に叱られるというなんとも情けない状況になっていた、あゝ・・・。ホントに情けない、この癖も考え物だな、自覚してはいるが自重したことは一度も無い。この二人に心配かけてしまうというのも申し訳ない気分になってしまふ、はあ。

「まあ、後先考えずに人のことを思って動けるのは良い事ですし。

その・・・かつこよかったですわ」

「セシリアちゃん、そういうのははっきり言わないとダメよ。ライバルにアドバイスするのもあれだけでも」

なんか、後が良く聞こえなかったが。ひとまず俺は保健室にいる全員を見回して、笑みを浮かべたのであった。

追記・どうやら鈴ちゃんと一夏は仲直りしたみたいだった、まあ、めでたしめでたし・・・？なんかまた何かひと悶着ありそんな予感がするけども。

53・決着・・・・・・・・!!（後書き）

どうでも良い作品情報

河西さんは・・・・モブな転生者っぽい存在・・・・のはず。まあ、気が向けばちよくちよく出てくる、フラグは立たないけども友人くらい？

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ(前書き)

さあ、舞台は地球上のどこかです。なんともgoddってしまった

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ

「どうもお久しぶりですな、如月音羽博士」

「いや、かしこまらなくても良いですよ。どうせただの学生ですから」

え、せつかくの休日なのに家に帰らないでどこに居るって？米軍の秘匿基地の一つ、「一地図に無い基地<イレイズド>」だよ。場所は言えない、いくら国防省に顔が効くからってそんなことしたら消されそうになるからな。ちなみにここの開発部門がナノマシン技術のライセンスを持つてる、その関係で「世界で二人の男性IS操縦者の一人」ではなく「一人のナノマシン技術開発者」の扱いを受けている。アメリカにすればIS操縦者ということよりそちらのほうが重要なのだ、たかが数機の世界最強の兵器より。今声をかけてきたのはイレイズドの司令官、はつきり言って嫌いな人間の部類である。さつさと別れて企業の看板が立て掛けられた真っ白な建物に歩き始める。

□ ■ □ ■ □ ■ □

少し歩いていくとパイプ椅子に座った若い女性が声を上げる、久しぶりの対面である。

「あら、博士が来たのね。みんな、集合ー！！」
「博士って……」

ちなみに今、目の前で後ろにある大きな工場へと声を張り上げて叫んだのはこの主任を務めている「エルハイム・ネーブ」さん。彼女はなんとここに来てから2年で主任の地位へと実力で上り詰めた努力の天才である。ちなみに自称機械が恋人の23歳、眼鏡のレンズにナノマシンを使用して双眼鏡にしてしまうなどユニークなものを作ってしまう人だ、特徴的なブロンドの髪をポニーテールに纏めてい、体つきは一部を除いて所謂モデル体型である、悩みは鈴ちゃんと同じらしい。

「お、坊主博士が来たのか。久しぶりだな！」

「あら、カツコよくなったわね〜！」

「ははは、元気そうじゃねえか」

「どうもです、面白いものができたとかって聞いてですね！」

そろそろと賑やかな開発研究部の面々が作業をしていた手を止めてガラス張りの部屋から出てくる、ここ「ミクロドクター」の開発部門には年配の方から若者まで幅広い年齢層に加え様々な人種の人が勤務している。ナノマシンを含めその応用技術を使った医薬品から医療器具まで俺が提供しているナノマシン技術のライセンスをアメリカ国内で唯一持った世界シェアナンバーワンの企業である。その開発室には、「勉強ができる人」ではなく「科学と化学を使って医療を支えたい」人のみが在籍できる。なぜここにその開発研究室があるのかというと、ほぼ国家機密レベルである情報を扱う場所であるために適切な場所が選ばれただけ・・・である。

□ ■ □ ■ □ ■ □

研究室の応接用のソファアに座りながら、提出された計画案を吟味していた。それを喉をごくりと鳴らしながら見つめる総勢8人の大

人、その視線の先には至って普通・・・には見えない黒のビジネススーツを着込んだ高校生。非情にシニールであるのは誰の目にも明らかであるが、それに慣れてしまった俺も大概か。

「おお、先天性部位欠損の患者の欠損部位の生成か。ふむ、神経組織の代替も必要だね」

「生体タイプを使った癌患者の切除部位の代替か・・・なるほど、患者の細胞への自動最適化があればもつと良いよ」

「視覚障害者用の人工視神経と眼球・・・良いアイデアだけど、どうせならW85で表面を覆ったほうが見た目も良いよ」

「ウイルス用の撃退システム・・・これはもう少し確実性が必要だよ」

「骨髄の正常化か、ファイリングしてからの生成にしたほうが負担も少ないよ？」

出るわ、出るわの大盛況(?) 数年前までの医療関係者が見たら驚愕のアイデアの数々だった、現時点では世界各国の大病院や医学関連施設での試験が必要だが。実用化すればこれまでに「治療にかかる日数の短縮」や「再生医療の停滞」、「新薬開発」の三つが爆発的に進歩する。

「よし、じゃあメアリーとジェシーはこれの改良、マックスとジムは手伝ってあげて。ヴェルと主任はこの二つを学会と政府に提出、これはそのまま通しても大丈夫だから」

「わかったぜ、ほらちゃちゃっと始めるぜ!」

「おっけ」

「ほいほい」

「俺の腕の見せ所だな!」

「書類はまとめておいてくださいよ?」

「おお、博士直々のオーケーが出たな。おっしや！」

「ふふふ、流石ね如月博士」

指示を出すとそれぞれが慌しくパソコンを起動させたり書類を出したり、電話をかける者やペンを走らせる者も。かくいう俺もノートパソコンを展開して採用時の工場用の機械部品の設計図をペンタブとCADを併用して描き始める、ほぼここが軌道に乗り始めたところからのいつもの風景である。確か中二の始めか、それまでは自宅からテレビ電話で指示してた。たまにこっちに来ることもあったけど。

「俺は滅多に来れないんだから、そこらへん考えるよー！」

『はい』

その後は、キーボードの叩かれる音とペンが走る音だけが研究室に響くのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「おっし、お疲れ。休憩入って良いよー！博士もそろそろじゃないかい？」

「おお、そうだな。って、だから博士って呼ぶな。名前で呼べって言うてるのに・・・」

「じゃあ、音羽っちで！」

「おお、良いんじゃない？」

「あらあら、可愛らしくて良いわね」

「ははは、音羽っち（笑）」

「嬉しくねえ〜！」

散々呼び名で弄られてしまった、時計を見ると既に帰国しなければいけない時間になっていた。当初の予定の時点では顔見せが目的だったので当たり前だが、久しぶりに会った皆が元氣そうで良かった。ISがどうこうならなければ卒業後にここに正式に就職だったのに・・・おのれISめ。

「そこなの！？」

「まあ、ね。じゃあネーブ主任、後は頼みますね」

「ふふん、任せなさい！」

「次来る時には美味しいケーキでも持ってきます、それでは失礼します」

ガラスのドアを開けて開発研究室を出る、確か帰りはVIP専用機だってさ。まあ、今はスーツだし別に大丈夫か。VIP用のゲート通るから騒がれないし、そういう場所ではそれなりの扱いされるし。総資産が中小企業を余裕で買収できるレベルになってたとかは言えない、そーいや俺の追いかけてる組織ってドイツのらしいよ？

□ ■ □ 少年帰国中 □ ■ □

「うああ~~~~！！帰ってきた・・・」

結局日本に着いたのは日曜日午前10時、丸一日結局経った。あるええ？まあ、夜中じゃなかったからまだ良いか。腹も減ったし、どこか近くのレストランでも寄るかな？

空腹に勝てず、俺は空港内にある高級（自称）レストランに入ったのだった。懐かしい顔に出会ったのだが、それはまた別のときにも。

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽のイメージ落書きがみてみんな・・・後悔するなよ!!（某王子風）

55・前触れ（前書き）

なぜオリジナル展開にするとgoodってしまっのか

55・前触れ

「あ〜つと、今月分つと」

現在、午後3時。レストランで懐かしい人物と談笑しながら食事を終えた俺は自宅に荷物を置いて近所の銀行に来ていた、今月分の生活費を口座預金から引き落とすためである。例えるならば給料日に銀行で月分の給料を下ろしに来たつとところ、いくらライセンス料が振り込まれるとは言え引き落とさなくては使えない。電子マネーなんてあるがデータが吹き飛んだことがあるから却下、量子化して格納すれば良い話だし。

「〜」

鼻歌を響かせながらタッチパネルになっているATMの画面を操作する、え〜つと当分はこのくらいで良いか。ただでさえ半端無い金額が納められているのだが、使い切れない量なのに光熱費がかからないIS学園のために余計使うことがない。某東なMAXみたいにリアルでハンカチに使えるぞこれ、やらないけど。

「つと、こんなところか」

必要な金額（高校生には似つかわしくない金額だが・・・）をmy財布に仕舞いこみ、銀行を出す。自動ドアが開いた瞬間にこちらへ流れ込む外気の風が心地良い。さて、用事も特に無いしIS学園に帰るかな・・・家の中はmk?がやってくれてるだろうし。警備はガチ月光がステルスで待機してるから完璧だし。民間人の家とは思えないくらい万全だからなあ、ISでも使わない限り無理だなHAAHAA。

そんなことを考えながら俺はIS学園行きのモノレールに乗り込んだのだった。

□ ■ □ □モノレール移動中 □ ■ □

ガタンゴトンと規則的な音が車体を通じて耳に響く、ウォークマンで「STRAIGHT JET」という最近人気上昇中らしいアーティスト（声優さんもやってるらしい）の新曲らしい。なんでかどや顔で洋上を飛行する一夏が思い浮かんだんだが、なんでだ？まあ、いいや疾風が修理終わったら一夏を特訓という名目でボコろう。なんでかそうしなきゃいけない気がする。

「そついや、機体マニュアルが届いたんだっけか……めんどいなオイ」

「変わってないね、音つちは」

「どうせ俺の性格は変わらないですよ……あ？」

思いもかけず懐かしい声が聞こえたものだから、当時のままの態度で受け答えをしてしまった。声の聞こえた座席の反対側を見ると、沈みかけでの夕日のように燃えるような朱色をしたショートボブの少女がこちらを見てにこにこ笑っていた。着ている服が見たことのない黒の制服ではあるが見間違うことはない、中学転校時に俺に対決を申し込み物の見事に惨敗したジャクリーヌ・ウェルキンその人であった。

「……久しぶりだな、ジャック。ドイツに帰ったんじゃないかたかお前？」

「いや、本国で仕事を押し付けられてね」

そういえば、そんなメールが来てた記憶がある。なんでもドイツのIS用特殊部隊に配属されたとか、ありがとウサギ隊だっけか？いまいちすっかり覚えてないが、まあウサギであることは確かだ。ということはこの制服もその制服か、黒がメインつてのはまた汚れが目立たなくて良いな。

「仕事？ドイツ軍がなんでそれで日本に来るんだよ」

「機密だからまだ口外できないんだよね、まあISに関したことはあるよ」

「お前も大変だな・・・まあ、頑張れ」

「うん、そういえばたっちゃん元気かい？」

「ああ、毎日俺に嫌がらせで抱き着いてくるくらいにはな。俺だって年頃の男なんだからよしてほしいよ」

「あはは、やっぱ鈍感だねえ音っちは」

「あのなあ・・・、もし、もしだぞ？あいつが俺のことそういう方向で思ってたとしても、やり方があるだろう・・・？」

そうだ、仮にあいつがそういう方向でそういう行動を起こしていたとしても。俺が襲うわけが無いことは理解しているはずだからな、いくらナニが溜まっていようともそういう下種なことは絶対にしない。そういうのは男として最低だからな、そこらのどうしようもない輩と同じになるわけにはいかない。

「わかってないね、女心は」

「俺は男なんだから理解できるわけないだろう、てか理解できたら苦労しないっての」

いちいち「女心わかってないわね」by鈴ちゃんとか、「はあ、

戦術と経営の前に男としてry byセシリアとかつてなるんだよ。流石にどこぞのマンティスさんみたいにリーディングできないからどうしようも無いし。一夏に言われたときは凄いショックだったけど、上手いと思うよ？「女心は秋の空」とか、あゝあ。

「まあね、でも少しは努力しなきゃ」

「してるつもりなんだがなあ、それが中々上手くないんだよ・・・」

わからないからって聞くとはたかれるし、呆れられるし。じゃあどうしろと言っのさ、理不尽じゃね？そこは一夏も共感していた、まことに残念である。

「はあ、まあなんとかやってるよ俺は」

「そうみたいだね、あ、私の上官がお世話になるから」

「ほお、それは気になるな。強いんだろ？」

「うん、まあ、それだけ・・・じゃあ、また明日ね」

停車したモノレールから、ジャックがひょいっと飛び降りるように降車する。身のこなしは昔よりいくらか引き締まっていた、もしかしたら油断すると負けるかも、と思わせる動きだった。・・・え、また明日？どういうことだ、おい！？どうしようもなく、ジャックを見るが時既に遅し。モノレールは走り出してしまっていた、ちくせう。

「・・・まさか、転校なわけないよな・・・？」

まあ、ISに関係することって言ったらそれくらいしか思いつかないわけですが・・・mjk

55・前触れ（後書き）

どうでも良い作品情報

ラウラには一種のフラグ建築予定

56・三人目だつてさ（前書き）

短いです、すみません

56・三人目だつてさ

とある月曜日の朝、と言つても一晩明けたただだが・・・ジャツクのことを話したら美月が笑つていた、おそらくいつものように「サプライズって良いわよね」で言わなかったただけだろう。まあ、困りはしないがな。

「ふわあゝ、あー眠い」

あれこれジャツクのおかげでナニ（と書いて性欲）が鎌首をもたげてしまったのだ、それを知つてか知らずか美月はいつもどおりに抱きついてくるし。そのおかげでまともに眠れなかった、俺の貴重な睡眠時間を返せ！と言えるほどの元気は無かったよ。ただでさえ飛行機での移動中は揺れた状況だから寝れるわけないし、現時点では2時間しか寝てないぞ俺。漫画家目指せるんじゃないかこれは、なる気はさらさら無いけども。

「うぬ・・・zzzz」

教室に入り、ぼやゝとした状態で自分の席。窓側最後尾に座る、のどかな陽気に誘われてついうつかり眠ってしまった・・・のだろう。仮定的なのは途中から記憶が無いからである、く、寝落ちかよ。
・・zzzz



「ルル・デュノアです、こちらに僕と同じ境遇の人が―」

何時の間にやら寝てしまっていたようだ、奇跡的に千冬さんにはバレていなかったようだが・・・まあ良しとしよう。で、転校生だつて？ほう、可愛い女の子だなセシリアと同じ金髪だが短めにしてるのか似合っているが・・・どうしてズボンなんだ、スカートじゃないのか？そりゃあ制服は改造オーケーだし個人によつてほぼ別物みたいになってるけども、女子がズボンか。ミリアさんを思い出すな、あの人いつも「スカートなんてあんなの寒いじゃないの！」つて言つてズボンだったからなあ。

「居ると聞いて本国より転入を―」

あれで男・・・だと！？言われてみれば確かにどこか大人しそうな少年に見えなくもないか、俗に言う美少年というやつなんだろう。いや、ジャックが言っていた男の娘というものだったか？まあ、今はいいか、男二人だけつてのは一夏も俺もきつかったし嬉しい限りだ。それに男の操縦者つてのも二人居たんだからもう一人出てきてもなにもおかしいところは無い、「ありえないということはあるえない」正にその通りだな。っと、耳を塞がなければいけないな、あ、セシリアもニコニコしながら耳に手を当ててるな。一夏は―

『キャアアーーーーー！！！！』

遅かった、後方からのバインドボイス（超）をまともに受けて目を回してる。お前のことは多分2分くらいは忘れないぞ！（短けえよ！）「そりゃすまなかった、ナイスツッコミだ。と、あと二人いるのk・・・・・・」

「男子、三人目の男子よ！」

「しかも守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~!!」

おおげさだな、いや、箱入り娘みたいな状況で長い間過ごしていればこういうものなのか？経験が無いから良くわからないが、まあ、ひとまず最後の奴はネタが古いと思うんだ。うん。ネタは鮮度が命って黛がいつだかどや顔で豪語していた、ネタ違いだと思うが間違っではないと思う。

「で、あと二人は・・・ドイツだろうな。こっち見てニヤニヤしやがって」

見知らぬ銀髪の眼帯少女と知らないわけがない昨日ぶりの朱髪の少女、同じクラスってのは各国の思惑が非情に感じられるな。・・・ジャックが付けてる眼帯がソリッドアイに見えるのは気のせいだろう、うん。世の中気にしたらいけないこともあるんだよ。

「あー、騒ぐな。まだ終わってない」

その瞬間、さきほどまでの喧騒が嘘だったかのようにクラス内が静まり返る。ここ最近見慣れた「リアル鶴の一声」である、自己紹介をした少年が少し狼狽してしまっているのをジャックが落ち着かせていた。気が利くというところはやはり変わっていないな、できれば前もって知らせるとかに気を利かせてほしかったが。

「ジャクリーヌ・ウェルキンです、ドイツから来ました。国の都合で年上なのに一年生からですが、気にせずに話しかけてくださいね！」

そこで俺にウインクをしてきたことによりクラスが再び沸いたのは
言っまでもなかった。

56・三人目だつてさ（後書き）

どうでも良い作品情報

ジャックの眼帯はソリッドアイのデザイン

57・一般人と俺とルーキー（前書き）

2巻が終わるころには驚きの展開を予定しています

57・一般人と俺とルーキー

「あと、並木野のみんなはお久しぶり〜！音っちの写真は私がバッチリ撮るからね〜」

おい、待て。

「流石ジャックさん、わかつてる〜！」

「向こうで随分と鍛錬されたんですね！」

「ジャックお姉さま〜！素敵〜！！」

倍率が一万越えてるのにー中学から三人つてのは凄いなよな、今はそこに感心してる暇や余裕が俺には無いが・・・中学時には撒き菱用の写真をジャックがちゃっかり撮影していたからなあ。その一部が高値で取引されているとか聞いたときはそりゃあビビったがな。俺ってそこらの雑誌モデルみたいな身体はしてないぞ？鍛えてはいるが見た目には細身でもやしっぱいし、どこに馬鹿みたいな身体能力があるのか不思議でならない。ムキムキのゴリラみたいなのはイヤだな。

「まだ、終わってませんから。皆さんお静かに！」

しかし、千冬さんのときのようににはならない。山田先生、頑張ってください、俺は応援しかできませんが。今ここで何か言おうものならば、息を荒くしてこちらを見つめる視線が3から増えるだけだ。って、ああっ！いつだかの例の写真を回してやがる・・・やはりあの逃げ方は失敗だったのか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ、山田先生がうつむいてぶるぶる震えてる。流石にこれは助け舟が必要だよな、見てるこっちも悲しくなってきた。しかしそれを気にせず騒がしく会話する生徒のみなさん、やめたげてくれ。もう山田先生が不憫すぎるし、教師スルーは良くないぞ、しかも高校生が。話に花を咲かせるのは良い事だが生憎今はホームルームの時間である。

「お前ら、静かにしろって聞こえなかったんか？ああ！？」

え？

「返事は！ナメてんじゃねえぞ小娘共！教師の言葉は聞け、良いな！」

え、え〜っと。眼鏡を外し、ギロリという擬音が似合うほどに睨みつけるような目でクラス全体を一瞥する、山田先生。いつものだぼつとしたサイズの合わない服が今は風になびく特攻服に見えるほどだった、普段の優しく真面目で頑張り屋さんな面影は無く、そこにはレディースの総長の姿があった。

『はい！』

「（。d）……………」

クラスの騒いでいた女子は勿論のこと、あの千冬さんでさえ傍目には分らないがぼかんとしていた。これが山田先生の素だというのか、あのほわ〜とした感じからは想像できない変わりぶりだった。一夏に至っては固まっていることからその衝撃の大きさが良くわかる、最後の転校生は軽く冷や汗を流しているように見える。

「スマンな、この空気が悪いが自己紹介してくれ」

山田先生がそのままの状態で「The 軍人」という印象を受ける長い輝くような銀髪の少女に話しかける、その左目は機械的な眼帯に隠されて見えないが、深紅の右目からは冷たいような空気が放出されているように思える。同じような眼帯を身に着けているジャックとは印象が魔逆である。どう考えても仲良くなるには大変そうだな、流石にこういう子に一夏はフラグ立てないだろ。多分。

そんなことを考えていると、その少女がおもむろに口を開いた。

「ラウラ・ボーデウィツヒだ」

「……………終わりか？」

「はい」

いつもの山田先生ならば「え、それだけですか？」とか言っていそうなのだが、どうやらあの状態では違うらしい。どうしてこうなった、あれ、ボーデウィツヒが一夏に向かって歩いていく。どうしたんだろうか？まさか、既に一夏に落とされていたとでも言うのか！？くう、やはり一夏は一級フラグ建築士なのか、これだから弾君は・弾君も結構イケメンだと思うけどなあ。どうしてこいつも違うのか、やはり世の中は平等では無いのか。そうか。

「貴様が織斑一夏か？」

「おう、よろしくなボーデウィツヒさん」

「ふん」

うんうん、挨拶はry……うむ？思い切り右手をボーデウィツヒさんが振るかぶって、振り下ろしたあ！？仕方ない、ここで銃を撃つこともできないし……手っ取り早くこれしかないか……！！

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

織斑教官のモンド・グロツソ二連覇を台無しにした張本人である織斑一夏を精一杯に叩こうとした途端、教室の後方から今までに感じたことのないほどの殺気を感じた。訓練でほとんど動じないはずの私が、そのあまりにも深く濃い殺気に思わず後ろに飛びのいてしまった。この場には軍に身を置く人物など、私とジャクリーヌしかないはず。ましてジャクリーヌがこれほどの殺気を出したことも出せるとも思わない、確かにその明確な殺気は私に向けられていた。その凍りつくような感情が叩きつけられるように放たれる場所へと視線を移すと、そこには笑顔を絶やさない一人の男が肩肘を突きながら私を見つめて、いや、睨みつけていた。

傍目には優しげで素敵と称される笑顔なのだろう、その結果誰も違和感を感じず突然飛びのいた私を不思議がるような視線で見つめてきていた。しかし、今の私の心の中は「恐怖」で埋め尽くされていた、明確な「確実に殺してやる」という強烈なその視線によって。当初ならば妨害があろうとも一度この織斑一夏を叩いてやろうと思っていたのだが、怯えきった兎のごとく私は「失礼」と切り上げ、宛がわれた私の席に着席したのだった。

「私は認めない、貴様が教官の弟であるなどと・・・！」

だが、これだけは譲れなかった。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

どうやら、成功したみたいだな名づけて「殺意のスナイプ」。腕力が足りない俺がいつの間にか身につけていた「実戦」用の脅しスキル。ただ一点、標的とした相手に本気の殺意を込めた視線を笑顔で突き刺すように叩きつける。あまりにも強すぎる殺意のために関係ない人物は露ほども気づかないというほどである、向けられたのが一般人ならば2秒と持たずに気を失ってしまうだろう。軍人だからと思って強めにやったらすぐに怯えてしまった。まあ、ナイフを首筋に突きつけられているような感覚に陥るらしいが、軍人がこの程度で引き下がるなんてなあ。もしかしたら大した奴じゃないのかもな。

「・・・・・・・・・・？」

どうやら一夏はあのようにされる原因に心当たりがあるのか、少し思案顔だ。まあ、そっとしておいてやるか。一夏の問題ならば自分で解決するものだ、関係ないならば徹底的に協力するがな。まあ、後で千冬さんに叱られる覚悟でもしておこう。主にこの一般人には到底不可能なレベルの殺気について。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「あゝ、ゴホンゴホン。ではSHRを終わる。各人はすぎに着替えて第二グラウンドに集合、今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う」「織斑君と如月君は、デユノア君の面倒を見てあげてください。お願いしますね」

いつの間にか眼鏡をかけていつもの山田先生が帰ってきていた、さ

っきの訳を知りたいがおそらく教えてくれないだろう。まあ、某本田さん現象だと言うことにしておこう。

「わかりました、一夏。準備は良いか？」

「ああ、万全だ。いつでも行ける」

「？」

何のことか分からないデュノア……デュノア？デュノアってあのデュノアか、ふん。まあいいや、今は移動だ。説明をしていたら時間と出席簿がハハツ！してしまう。それだけはどうしても避けたい、自己紹介は後でもできるから今は着替えるために遥^更か彼方の安息地へと急がなければいけない。

「I can Fry!」

一夏とデュノアを小脇に抱えたまま、集結しつつある武家の家来らしき動きを見せる女子生徒を尻目に窓を開け放ち飛び降りる。

「キャアーーーー!!」

瞬間、ガクンと揺れて俺の背中に大きな機械の翼が現れる。言わずと知れたジェットパックである、ジェットエンジンを火を噴き、俺たちを前方へと押し出す。あまりにも豪快な「教室移動」であった。

57・一般人と俺とルーキー（後書き）

どうでも良い作品情報

「殺気スナイプ」は人を気絶に追い込むことはできるが虫は落とせない

58・携帯刃物は便利ですね

時速100kmでの空の旅with一夏&デユノアを終えた俺達は、アリーナの空いていた更衣室に到着した。

「よし、着いたぞ……大丈夫かデユノア？」

「だ、大丈夫……シャ、シャルルで良いよ」

「わかった、じゃあ俺は音羽で良い。如月音羽だ、よろしく」

「俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。よろしくな！」

いや、うん。どっからどう見ても女の子に見える、そりゃあ、女子っぽい男がいてもおかしくは無いけどな。しつこいと思うが、如月せん変装をして侵入したりしてきた輩が多かったオルコット家での経験から今でも警戒してしまう。いかんいかん、保身のために警戒することは良い事だが、こういうところまでピリピリしたらどうしようもない。

□ ■ □ ■ □ ■ □

なんとなくだが、やはり気になっていつの間にかシャルルを見つめてしまっていた。

「?どうしたの音羽」

「いや、シャルルって女の子みたいだなあと思ってさ」

「!?そ、そんなわけないじゃない!」

「ははは、だよなあ。わりいな、変なこと言って」

なんか、ビクツてしてたけど。そりゃあいきなりそんなこと言われたら驚くしかないよな、いかん自重しなければ。早く着替えなくては鬼神・チフーユの邪剣「シュツセキボウ」が振り下ろされてしまっ、あれって絶対防御を余裕で発動させて来るから怖い。絶対おかしいだろ、いつぞやのチェーンソーならまだしも市販品があれだけの威力とか。

「まあいいか、よくいっと」

制服上下をすぐさま脱ぎ捨て空中に放り投げる、瞬間、制服と下着の格納と同時にISスーツ（小口径ならず対物も防ぐ）を展開する。専用機持ちの特権である「パーソナライズ」を行うとISの格納領域にエネルギーの多大な消費と引き換えで今俺がやったことと同じことができるらしい。一夏ならまだしも俺は「貸し出し」の域であるために仮フィッティングだけであるために不可能だがな。まあ、どっちにせよ某仮面を付けた風都のライダーさんみたいに光って変身してところだ。いや、この場合古代の戦士のほうか？まあ、そこは良いや。

「うお！？シャルルも着替えるの早いな・・・つくそ、引つかかる」
「ひ、引つかかる？」

「おっ、まったく。なんでこんなぴっちり密着したやつなんだよ・・・」

確かに、引つ掛かるとは言ってもナニがではない。ISを動かすために通電しやすいきつめに作られているため、無理やりにも身体を通すしかないのだ。俺はすぐに量子化しての変身で着替えているから今ではむしろ気づかれないレベルで一瞬涼しくなる感覚が気になるがな。制服と下着が一瞬消えて一瞬でISスーツが展開される、

ほんのコンマ0.0・・・レベルの時間全裸になってしまつのである。いや、システムの理論上仕方の無いことなのだがな・・・どうにかならないから余計にきつい。

「お前用に作ってやろうか？」

「いや、良い。これ以上イメージが必要な道具とかは要らない、I Sで十分だ」

「なにそれ？」

「ん、ああ、俺が作った量子化応用の擬似四次元ポケットだ。ちなみに非売品」

制作費は・・・失敗作も含めてそれなり。市販したいが、俺自身が使っているように武装を格納しての兵器転用の可能性が多いにあるために予定は無い。空港の手荷物検査でも引つ掛からないから、やろうとすれば暗殺にも有効的な機能だ。冷蔵・保温・加熱もできて便利だから俺は重宝しているが、便利な道具は必ず兵器にされてしまう、人間の歴史はずっとそんなものだからな。俺が火種になるわけにはいかない、というかなりたくない。

「じゃあ、早く行こうぜ」

「そうだな、一夏、これに調理道具一式詰めてやろうか？イメージもそれならしやすいだろ」

「おお、それは助かる！」

「よし、じゃあ一週間ほど待ってる」

一夏がひやつほゝいとも言いそうなほどにテンションが引くほど上がって走っていった、そこまで嬉しいのか主夫よ。まあ、なんでもすぐに使いたい調理器具が手の中に出てきたら便利だよな。料理の効率化は良いぞ、うん。

「さて、俺らも行こうか」
「そうだね」

残像を残しながら疾走していく一夏を追いかけながら、二人してグラウンドへと続く長い廊下を走ったのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

ズドム！

ひとまず、遅刻はしなかったものの。変などや顔をしていた一夏が魔剣シュッセキボウの餌食になっていた、どうせ大して面白くもないシヤレでも考えてたんだろう。それにしても良く思いつくものだ、俺にはとうていできない。できたいと思われないがな。ひとまず、今の音は出席簿から発せられる音ではないと思うんだ。日に日に強くなっている気がするよ。

「さて、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
『はい！』

一組と二組の二クラス合同での実習のために普段の人数の二倍であるために聞こえてくる返事も千冬さんということもあるかもしれないが、やる気に満ち溢れていた。まあ、一般生徒にとってはこれが結構重要であるために外せない授業でもあるんだよな、放課後の自主訓練以外だと実習時間くらいしか使えないし。そこが専用機持ちと一般生徒の大きな差か、そういや俺の専用機は夏の臨海学校のとくに来るっていう確定情報。書類が束でマニュアルに挟み込まれていたからな。

「・・・今日は戦闘を実演してもらうか。―凰、オルコット!」

「・・・こういうときって教師がやるんじゃないのか?というか、いきなり戦闘かよ、そりゃあ国家代表候補生同士の試合から学ぶことは多いと思うが。それでも急じゃないか?まあ、いきなり見せて格を見せつけようってところか。千冬さんならそうやるだろうよ、それにしても相手は誰だ?なにか嫌な予感と同時に背筋がぞくりとしたんだが・・・」

「いささか、早いような気が致しますが・・・」

「まあ、千冬さんらしいけどさ。・・・相手は、セシリア?」

「わたくしは構いませんが」

「まあ、待て・・・来たようだな」

千冬さんがそう言って空を仰ぐように見上げる、それに釣られて生徒もそれぞれ見上げた。うん、なにか緑の物体が風切り声を響かせながら降下・・・いや、ふらふらしてるから落下か?ブレーキかけましようよ、山d

ズドガッシャーン!!

俺はひらりとかわしたが、どうやら前にいた一夏が山田先生の墜落地点から逃げ切れなかったようだ。辺りに落下の影響か、軽いクレーターが出来上がり砂埃が巻き上げられて視界を掠める。咳き込みながら爆心地を覗き込むと何故か下敷きであるはずの一夏が上になり、山田先生の素晴らしきメロンの一つを驚掴みという状況になっていた。さっきから一夏は状況が上手く飲み込めていないのか動かずにいるが、汗を滝のように流している辺り焦っているのだろう。

焦って動こうとした結果、山田先生がアレな声を上げてしまっているが。どこのギャルゲーの主人公だよ、と突っ込みたくなるくらいにラッキースケベをやらかしていた。正直見ていられなくて視線を逸らすついでに横に軽く飛ぶ、瞬間、一夏の前髪を軽く焼き青いレーザーが掠めていった。

「うおお！！？なあっ！？」

それに追撃をかけるように連結された青龍刀がフリスビーのように高速で回転しながら、一夏の首を狩ろうかというほどの的確な軌道で迫っていく。「一夏あああああ！！」とか憤怒の感情が込められた声が聞こえた、おお怖い。どうにか一夏が背筋を反らせて回避するが、悪手だ。

「——！！」

一夏の声にならない叫びが聞こえる、なにせ双天牙月はブーメラン状の形態をとっている。投げられた地点へとUターンして再び一夏に迫る。反らせた状態ではまともな動きができるわけもなく、自身に迫り来る凶器を見つめて絶望の表情を浮かべる一夏。自業自得（？）だ、ガムバレ。

「ハアッ！！」

そこへ力強い声と同時に金属同士の衝突音が聞こえた、小型のコンバットナイフの装備だから大きいが一夏が巨大な、それこそ一人分くらい大きさ。連結してるから二人分のサイズのそれに投げつけられて地面へと弾かれて突き刺さる。跳ね返ったナイフも近くの地面へとザックリ刺さっていた。

「大丈夫ですか、織斑君？」

「は、はい。ありがとうございます」

ナイフを投げたのは、さきほどまで押し倒された体勢だった山田先生その人だった。小型のナイフ投げて弾き飛ばすとか、どういう腕してるんだよ。普通なら、ナイフだけが弾かれて不可能なのに……一瞬ナイフを投げたときの山田先生の表情が怖かったことでも関係してるんだろうか。やはり、昔はヤンキーだったのだろうか、投げ方がその筋の人のものだったんだが……マジで何者なんだ？

『……………（ポカーン）』

離れ業をいきなり見せ付けられた驚きか、それともホームルームのときの例のあれの再来か理由は分からないが、ほぼ全員が啞然としていた。ボーデウィツヒとやらも、この時ばかりは同じように口を開けたまま驚愕の表情を見せていた。そりゃあ、そうなるよな。そんな、固まった俺らに千冬さんが補足を入れる。

「山田先生は元代表候補生だ、これくらい造作もない」

「いえ、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

それでも僅差で候補生の中では2位の實力だったんだとか、山田先生凄いな。まあ、過去が余計気になったが。その間に投擲したナイフを回収して腰部のストックに収納していた、ああ、だからすぐに取り出せたわけか。

「さて、いつまで呆けている。さっさと始めるぞ」

58・携帯刃物は便利ですね（後書き）

どうでも良い作品情報

山田先生は原作改変

59・疾風のごとく・・・（前書き）

サブタイは某借金執事とは関係ありません

59・疾風のごとく・・・

流石に数で攻めるということに二人とも抵抗があるようだ、いくら「お前ならすぐ負ける」と言われても簡単な挑発にのるセシリアではない。鈴ちゃんは・・・うん、セシリアが抑えてる。渋る二人に痺れを切らしたのか千冬さんが二人に何か耳打ちした。

「あいつらに良い所を見せられるぞ？」

何を言ったのか分からなかったが鈴ちゃんは一夏を、セシリアは俺をちらつと見てなぜか微笑んだ。俺も一応微笑み返したらなぜか顔を真っ赤にしてなにか蒸気っぽいものを噴きながらそっぽを向いてしまった。どうしてだ？

「ここは私、イギリス代表候補生セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「あたしだって居るわよ、中国代表候補生。鳳鈴音がね！行くわよセシリア！！」

「もちろん！」

いきなり名乗り口上を始めてやる気が一気に上がった二人、一体なにをしたんだ千冬さん。というか、突然やる気上がりすぎるぞ。いや、意欲無きやダメだけどさあ。極端すぎるぞ、いや、かの有名な千冬マジックか？って、そんなこと考えてたらシュツセキボウによる一撃を食らってしまふな。自重しよう。あれ、でもsyusse ki bowって書くとカッコいいなんか。

「では、はじめー！！」

千冬さんが笛代わりに手を叩く、それを合図に空中へ三機のISが飛翔した。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「さて、デュノア。山田先生が使っているISの説明をしてみろ」
「は、はい！」

ふむ、まあ俺はIS情報はある程度合法非法合わせてそれなりに知ってるから聞く必要があるのは一夏か。俺はセシリアの華麗な戦いをこの目に焼き付ける！

□ ■ □ ■ □ ■ □

「え？」
「なあっ！？」

序盤はそれなりに動いていた二人だったが、徐々に山田先生の鬼畜とも言える弾幕によって誘導されて空中で衝突。衝撃から回復しきっていないままの二人に無常にもグレネード（炸裂弾）が6発全弾

撃ち込まれて綺麗な花火にされて現在進行形で落下している。しかもISが解除されて生身で落下してる、山田先生はそれに気づかず高笑いして見てないし……。まったくもう！

「一夏！」

「わかつてる！」

修理が終わった疾風を展開し、落下を続ける二人の下へ白式を同じく展開した一夏と共に飛ぶ。リミッターの部品が事実上の製造不可のため常時「疾風」状態。失敗作所以の製造用金型廃棄でたとさ、でも俺がこれでそれなりにデータ集まるおかげでもう一度やってみようぜの話が持ち上がっているらしい。そういえば簪ちゃんが作ってる打鉄式も機動力重視だったよな、データ使えるんじゃないか？今は先にセシリアをキャッチするのが先決だ〜！！

「イグニッション、ブーストオオオオ！！」

叫んだのはおそらく気分だと思う、余裕で白式を追い越して残像を残しながらセシリアの下へと接近する。詳細スペックによると「疾風」形態では最高速度時速3000kmオーバー、追加エネルギーパックの装着が必要らしいが。単体でも第三世代に速度は追い越してしまう、製作者はスピードジャンキーだったんだろうか？

「つと、ふう……。間に合った」

3m地点で逆噴射による急ブレーキをかけて真下に位置する場所で停止、抱きとめるようにして優しくセシリアを受け止める。反対側を見ると一夏も鈴ちゃんをしっかりとキャッチしたようだった、上空ではいまだに高笑いを山田先生だったものがしているが……。大丈夫だろうか（頭の意味と教師の意味で）

ひとまず、二人を抱きかかえたまま（所謂お姫様抱っこというやつか、一番安定するからな）地上へとゆっくり降下する。地上から見上げる他の生徒がキヤーキヤー騒いでいるがどうかしたのだろうか「羨ましい」とか無言で鼻から赤い何かを噴出す者までいるぞ。どうしてそうなった。

「おーい、起きろ」

「……う……うん？音羽？」

「生身で落っこちたから助けさせてもらった、怪我は無いか？」

「え、ええ……大丈夫です／＼」

ふむ、怪我が無いなら良かった。どうやら鈴ちゃんもなんともないらしい、良かった良かった。ひとまずそのうちに山田先生とお話しなくちゃいけないな、待ってるよ！ひとまず実習の続きだな、セシリアをエスコートしながらクラスの場所へと戻った。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

ひとまず、千冬さんの指示で専用機持ちがリーダーになつての訓練機を使用した実習をした。ほぼ三等分で男子に最初集結してしまつたのには少し引いてしまつた、ともに教えられるわけ無いだろ。効率悪すぎるし、いくら男子が三人だったとしてもそこはしっかり分かれてやろうよ。まあ、名簿で振り分けられてボーデウィツヒの班になった人はご愁傷様しか俺は言えない。なぜかジャックと俺の班がとても賑やかだった（並木野中的意味で）

「ふう、いやゝ疲れたな」

「そうか？もう少し鍛えたほうが良いぞ一夏」

まあ、訓練機を載せたカートを一夏と違って俺はmk？に押してもらっているんだがな。こんな小さいのに動かせるなんて凄いな、作ったのは俺だけでもさ。ちなみに一夏は自分で押している、俺が横に並んで押すのを手伝っているがな。なんでかシャルルだけ「デユノア君にはやらせられない！」とかって体育会系女子数人が運んでいたが……どこか解せぬ。

「確か午後は整備実習だったか、さつさと上がるか」

「そうだな、シャルル、早く着替えに行こうぜ！」

「あ、いや。僕は少し微調整してから行くよ」

「別に少しくらい待っても大丈夫だぞ？」

「いや、結構時間かかるから先に行つてて良いよ」

「別に待つのは慣れてるから大丈夫なへっ！」

「じゃあ、ごゆっくり」

……しつこく連れて行こうとする一夏の頭を掴んで整備室を後にした、しつこい男は嫌われるぞ。友人だとしても、ストーカーだとしても、命を狙うにしても。最後のは違うか、まあいいや。昼だし今日はあれがあるゝ！

59・疾風のごとく・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

今作品では山田先生が元レディース総長です

60 ダブル引越しです（前書き）

そついでとです、はい

60・ダブル引越しです

「………申し訳ない」

「すみません、篤さん」

「いや、大丈夫だ。二人は悪くない」

昼休み、ボーデウィツヒ以外の専用機持ちが屋上にいた。とはいえジャックの姿が見えないが……？

普通の高校ならば屋上への立ち入りが禁止されているものだが、藍越学園のように自由に開放されている。

どうやら、一夏と二人でいたかったみたいだが、一夏が変に氣を利かせてしまったようだ。それを知らずに呼ばれてしまった……なぜ気づけなかったし。

「はぁ……一夏エ……」

「まあ、今に始まったことでは無いですわね……残念ながら」

あくだこゝだ言っても意味が無いというか、のれんに腕押しとかどうしようもないので仕方なく弁当を広げる。なんと、セシリアの手作りなんだよ。羨ましいだろ？え、全然……あ、そう、後でやっぱ欲しいとか言ってもやらん。それにしても腕はどうなったかなあ、チエルシーさんはメールしてもはぐらかすし。なにかニヤヤしてそうな氣がするが。

「いただきます」

「ええ、召し上がれ」

ボックスを開けると、カツサンドにベーコンレタス、卵とダブルベリなど色とりどりのサンドイッチが華やかに鎮座していらしゃっ

た。美味しそう・・・だと！？イギリスにいたころはどう見ても化学兵器だったのに・・・頑張ったんだなセシリア、これどこにお嫁に行っても問題ないぞ！・・・流石に早い、まずは一ついただこう。

「はむ・・・」

「（ゴクリ）」

最初は卵のを一口、いつかはバニラエッセンスとか投入してめっさ甘くなっていたりしたが・・・。おお、すっかり卵の甘みも残しつつマヨネーズと塩コショウがさっぱりとした塩味を舌に感じさせる。

「美味い！セシリア、美味しいよ」

「うふふ、頑張った甲斐がありましたわ」

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「すごい見てるほうが恥かしいんだけど、音羽ってあんなんだっけ？」

「いや、全然。見たことないぞあんな顔した音兄なんて」

「どうみても付き合っているようにしか見えないのだが・・・」

「え、あれで付き合っていないの！？」

筭の言うとおり、経験が無い俺でもそう見える。あれ、やっぱり音兄って自覚無し・・・？セシリアは太陽以上の眩しさの笑顔で「は

い、あゝん」をしてるし、音兄もまんざらでもない様子。楯無さんには言わないでおこう、IS学園で血の雨を見たくはない。シャルルの言うとおり、恋人同士みたいに音兄とセシリアが見えてしまうが、断じてそういう関係ではない。

「まあ、いいか。邪魔するのも無粋だし」

「そうね、はい、酢豚」

「おお、久しぶりだな！」

「ほら、一夏。お前の分の弁当だ」

「ありがとな箒、助かるぜ」

「じゃあ、僕らも食べようか」

二人から離れて、俺たちもそれぞれ昼食を食べ始めたのだった。なぜか音兄が鼻から忠誠心を噴出していたが、何かあったんだろうか？ひとまず、鈴の酢豚も、箒のからあげもとても美味しかった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「お引越しです！」

「あ？」

「ふえ？」

いつもどおりの一日の授業を終え、夕食を済ませた俺は同じく仕事を終わらせた美月とそれぞれのベッドの上でくつろいでいた。といってもだらっと伸びながら俺は支給される専用機のマニュアルを読んでいたところだ。説明書は熟読する派だから。

「あの、山田先生。シャルルは一夏と同じ部屋ですよね？俺は必要無いんじゃないですか？」

「そうなんですけど、部屋の調整がついたので一人部屋です！」

「そんな「マジですか先生！待ってましたあ！」……」

これでやっと理性を毎日ガリガリ削られる心配もない、美月には悪いが俺も今となっては普通の男子なんでな。あれこれ思うところがあるんだよ、毎日理性が削られてもどうにか耐えたんだし、一ヶ月つてことだから丁度だしな。頑張つて耐えた甲斐があったというものだ。

「……私が移動なんですか？」

「はい、やはり年頃の男女が何時までも同じ部屋なのはいけませんし」

「生徒会長権限で「ダメです、約束は守ってくださいね！」……はい」

一瞬、山田先生の背後に禍々しいオーラが見えたような気がしたが、気のせいだと思いたい。てか、そういうところで会長権限使うなよ、もつと他にやるべきことがあるんじゃないか？ひとまず、山田先生には感謝だな、心が晴れ渡っているんだぜ！え、喜びすぎ？知らないなあ。

「わかりました。音羽、絶対トーナメント優勝しなさいよ！」

「あ、ああ。善処する」

他にもつとあれこれ言うんじゃないかという予想をしていたのだけでも、それだけ言うつと荷物をささつと纏めて部屋から出て行ってしまった。なんか妙にあっさりしてるなとか思ったが、まあ気に留め

てもどうせ重要なことならばすぐに俺に伝えてくれるだろう。することもないので再びマニュアルを俺は読み始めた、なに、ビット兵器って・・・俺に使えるかどうか知らないだろ。システム適正試験も受けたことないのにさあ、あ、でも高機動型か。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「いや、シャルルが来てくれて助かったぜ。男二人だけだったし」「そう？あはは」

箒とシャルルが部屋移動になり、やっと本当の意味で落ち着ける。いや、箒と同じ部屋だったことがイヤだったわけではないけども、やっぱり少し意識してしまうものだったからな。やっぱり男同士ってのは気兼ねなくて良いな。

「そういえば、一夏って放課後ISの練習してるんだよね？」

「ああ、そうだぞ。いつも箒とセシリアにやられっぱなしだけど」

ちなみに音兄には零落白夜があるからたまに勝っているだけ、ほとんどの場合はあの「ステイルハーツ」とかいう剣でガリガリシールドエネルギー削られて終わる。もしくは銃器で蜂の巣、あまりにも銃の使い方が上手すぎるから前にどうしてか聞いたら「H A H A H A、偶然だつて」とあからさまにはぐらかされた、こういうときは「詮索するな」っていうことを暗に示しているときなのでそれ以上は聞かなかったが・・・とにかく基本三人にボコられる。

「た、大変だね。僕も専用機持ちだから協力できると思うんだけど仲間に入れてもらって良いかな？」

「ああ、歓迎するぞシャルル！」

「うん、ありがとう！」

思わず、シャルルのちよつとした仕草にどきつとしてしまう。男子だつてことはわかつているが、なんというか、人懐っこい印象だから驚いてしまうことがある。いや、けて俺はアレな趣味は無いぞ。俺だつて普通の異性に興味がある男だ、恋愛とかそういうのは今はそこまででは無いけども。ひとまず、昼は砂糖を吐きそうになったただけ言つておこつ。うん。

「さて、と。今日はもう遅いし寝ようぜ」

「そうだね、おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

そうして、それぞれの寢床に入り眠りに付いたのだった。

60・ダブル引越しです（後書き）

どうしても良くない情報

この「訳有り」がなんとお気に入り登録200件を突破してしまいました、まことに嬉しく思います。みなさんありがとうございます
く！！

とまあ、そんなわけで近日にでもお祝い記念をしたいと思います
すので楽しみに！

61・オリ設定（機体・キャラ編）（前書き）

今更感満載ですが

61・オリ設定（機体・キャラ編）

打鉄機動力特化タイプ「F型」機体名「疾風」

機動力を重視というコンセプトで、マジキチの無名開発者が設計・製作した「量産機の汎用性強化」の打鉄再開発計画案の一つ。機体カラーは原作の打鉄通り黒
計画の「機体の一部変更による対応」《機体の機能特化》「武装の特化」《主武装変更による多彩な対応》二つのうちの前者の一つである。評判は悪く失敗作と言われているところを音羽の要望により眠らされていたところを助け出された。一部部品は生産が終了しているため、後述のF型形態には戻せなくなってしまっている。

秘匿形態（打鉄F型）

一対の物理シールド内に、巧妙に高出力ブースターが内臓されている。秘匿形態でも全開での出力は第三世代に追いつくほど、専用武装の「ステイルハーツ」と相まって攻撃力も十分。勿論、その機動力を求めるために物理シールドは防御性能がほぼ犠牲に。

疾風形態

物理シールドが基部を元にスライドして二基一対のプラズマ複合ブースターが展開・装着される。通称「アンロックユニットフル非固定部位完全ブースターモード」。

この形態では速度のみ第三世代を追い越す、現時点で世界最速のIS。その異常とも言える規格外の速度により、乗りこなせる人物は世界に音羽を合わせても二人しかいない。

偽装物理シールドは巨大すぎる四基のブースターを支えるためだけ

に存在しているため、F型形態よりも防御が格段に薄い。本来は「ここぞの時の一撃用」だが、前述通り一部部品が生産不可能のために形態が戻せなくなっている。スペックデータによると最高速度時速3000kmオーバーであり、高感度ハイパーセンサー搭載により高速戦闘に装備換装無しで対応できる。はっきり言えば速度では怪物レベル。

□ ■ □ ■ □ ■ □

専用武装「スティールハーツ」

刃の背部分に小型ブースターが装着された「加速する剣」、回転式弾装に気化燃料が込められたエネルギーカートリッジを消費して刃を加速させる。その威力は、第二世代兵器の中でも三本の指に入るほどであり機体の加速も追加された場合はそれも加算されるため規格外である。F型・疾風用に開発されたほぼ専用武装であるため、他の機体では耐久力などの要因により使用ができない。元ネタは某グラール太陽系が舞台の4人で進むアクションRPGから。

□ ■ □ ■ □ ■ □

IS用刺突エネルギーランス「はくが白牙」

前述プランの后者であり、現行計画の中で開発された近接武装。機体からのエネルギー供給ではなく、専用のエネルギーパックからのため機体エネルギーを心配する必要がない。（後者のプランで開発

された武装はほぼ全てが機体からのエネルギー稼動ではない）
刺突時のみ、高出力のエネルギー刃が展開されてピンポイントで相手のシールドエネルギーを削り取るというコンセプト。どちらかと言うと競技向きの武装である。

□ ■ □ ■ □ ■ □

オリジナルキャラ

河西愛理^{かさい えり}

二組元クラス代表であり、並木野中の後輩である。音羽を真似てかどうか不明だが、右サイドテールの腰までほどの長さで茶髪。身長は165cm、体重は不明。原作でいう「鈴ちゃんに代表の座を奪われた娘」である。IS原作知識を持った転生者だが、大きく干渉することもなく音羽（の写真を求めて）を追いかける淑女。神さまにチートボディを貰うが自衛程度にしか使わないためほぼ目立たない。二次創作の世界と気づいているが自由気ままに二度目の人生を面白おかしく過ごしている。音羽の認識は「中二病をこじらせた残念な少女」であり、貞操の危機を感じている。

61・オリ設定（機体・キャラ編）（後書き）

どうしても良くない作品情報

Jonathanさん話し合いで相手になっていただきありがとうございます。
うございました、ここでお礼させていただきます。

62・特訓と乱入

「一夏が凰さんやオルコットさんに勝てないのは、単純に射撃武装の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかってるつもりなんだがなあ・・・」

シャルルが転校してきて5日、今日は土曜日。今週はイレイズドに飛ぶ用事もなく、午前の授業時間が終わった午後。自由時間となり、アリーナも全開放と言うことでほとんどの生徒がISでの鍛錬に励んでいる。知識や技術面でまだまだなため、俺もその一人である。一夏とシャルルの練習に付き合う形であるがな、やはり一般生徒とは知識・技術面でも遅れているため貴重な時間を無駄にはできないのだ。

「うゝん、知識としては知ってるってところかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「う、確かにそうだな。瞬間加速も読まれてたし」
イグニッションブースト

「お前のISは格闘オンリーなんだし、他の人以上に射撃武装の特性を理解しておかないといけないな」

「それに、一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で対応できちゃうし。それに音羽の『疾風』ほどの速度じゃないから余計にね」

まあ、疾風の場合は予測射撃したところには既にそこを通過ぎてるってレベルだからな。それこそ大振りに動かさないといけないからその前に接近されるか撃たれる。シャルル曰く「ある程度近づかれなきゃ射撃は当てられないよ」とのこと、どれだけ速度が規格外かが良くわかる。代表候補生にそこまで言わせるってどれだけだよ。

「あ、一夏。瞬時加速中に急制動かけて曲がろうとすると機体も身体も変に負荷かかって骨折とか怪我するからな」

「むう……」

「あんまり無茶な動きはしちゃだめってことだよ、わかった？」

「おう、なんとか」

まあ、実際。操縦者保護機能があるとはいえ、完全ではないし、死にはしなくても限度を越えれば怪我はする。そうならないように上手く立ち回るようにするのが大事なんだよなあ。お、一夏がうんうんと頷いている。まあ、確かにシャルルの噛み砕いた説明はなんともわかりやすいものだ。個人的に教科書をそれでやってしまえば良いのではないかと思う。

ちなみに

『こう、すばーんとやってからじゃきんって感じた』

『なんとなく分かるでしょ？感覚よ感覚、はあ？なんで理解できないのよ！』

『防御時は上半身を上へ5度、回避の場合は後方へ20度反転ですわ』

……順番は第・鈴ちゃん・セシリアの順番である、個人的にはセシリアの説明が一番分かりやすい。数字で動き方が示されるんだ、擬音語や感覚だけの説明より理路整然として良いだろう。なんで一夏がそれを理解できないのか不思議でならない、それを言ったら第と鈴ちゃんに「ええ」って言われたし。うゝむ。

バンッ！！

「うおっ！？」

いつの間にか深く思考の海に浸かっていたらしく、突然実弾銃特有

の発砲音が聞こえた。どうやら、シャルルが自身の機体の一つに使用許諾を発行して一夏に使わせているらしい。ちなみに許諾を操縦者とISに出されない限り他の機体の武装は使用できない。例外もあるらしいけども基本はそうなっている、射撃系のものは実際にそうだし。事実上のID武装ってところか、まあ、後付武装が満杯^{バースロット}だとしても実際に使った経験は後の糧となる。

「やっぱ、速いな」

「うん、だから軌道予測さえ合ってれば簡単に当てられるし外れても牽制になる」

「だから、簡単に間合いが空くし、続けて攻撃されるのか」

「そうだよ、あ、1マガジン続けて撃ってみて」

「わかった」

規則的な銃声が響く、どうやら白式には射撃補助用のセンサー・リンクが搭載されていないらしい。武器が雪片だけだからだろうか、普通はどんなタイプのISにでも入ってるはずなんだがな。そのため一夏は補助無しにマニュアルで撃っている、オートで調整されると相手にロック警告が出されたり細かい調整ができないから俺は基本使っていないが。

□ ■ □ ■ □ ■ □

シャルルの専用機「ラファール・リヴァイブ・カスタム？」の搭載武装が20とかいう驚愕の事実に驚いたり、一夏とシャルルが再び軽い模擬戦したりとゆっくりしていた。勿論、俺はセシリアにご教授願いながら高速でお空の旅をしていた。一段落付けようかと、一度俺が降下したとき。にわかにアリーナが騒がしくなった。なんだ？

「ね、ちよつとアレ・・・」

「ドイツの第三世代型よね、まだトライアル段階っていう」

ちようど、一夏も１マガジン撃ち終わったところらしい。騒ぎの原因へと視線を向けていた・・・ジャックはなんか授業終わってから即効でシエスタと洒落込んでいったが。あんなんでもドイツの候補生だつてさ、データとか取らなくていいのかあいつは、まあ、本人が「眠いから寝る、以上！」って言うてたから別に気にしないけども。

「・・・・・・・・・・」

そこに居たのは転校初日に一夏を叩こうとして俺の殺気スナイプで見事失敗したドイツ国家代表候補生、ラウラ・ボーデウィツヒだった。ちなみにクラスでは一切会話無し、部隊の仲間であるジャックとは事務的な話のみという孤高の少女である。そして、昨日だが食堂で一人「ぷりん」を頬を染めながら食べていたのを見かけた、ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長であり階級は少佐だつてさ。ついでに言えば、ジャックは大尉、副隊長。H A H A H A、俺は英国王室認定騎士だから軍では中佐レベル・・・らしいすっかり忘れていたがな！

「おい」

ISの開放回線オープン・チャネルで一夏が話しかけられていた、まあ、初対面があんなのだから誰だつて忘れないだろう。

62・特訓と乱入（後書き）

どうしても良い作品情報

ここらへんからちよいと改変

63・偽りの仮面は今宵割れる

「・・・・・・・・なんだよ」

張り詰めた空気の中、刺すような視線に射抜かれた一夏が渋々といった感じで返事を返す。まあ、初日に叩かれそうになってしまえば応対がそうなってしまうのも仕方ない。誰が自身をいきなり叩こうとした人間と誰が仲良くできるだろうか。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

一夏が言い終わるかどうかのタイミングで言葉を紡ぎながら飛翔してくる、こいつ、何を考えてやがるんだ？普通に模擬戦ならば、普通に頼めば良いのだろうがやはり一夏になにかあるようでさっきから世界に一夏しかないかのように見つめている。

「嫌だね、第一理由が無い」

「貴様には無くとも、私にはある」

どこか思い当たる節があるのか、一夏がなにか思い出したような表情を浮かべて拳をギリギリと握っていた。どこか、自分への悔しさや情けなさに腹を立てているかのようなだった。まあ、後で説明してくれるだろう、無理やり聞くほいど野暮な真似はしたくない。

「貴様が居なければ教官が大会二連覇を成し遂げていただろうことは容易に想像できる。だから私は――貴様の存在を認めない」

どうやら、「教官」と呼んでいることから千冬さん絡みの内容であることは良くわかった。ドイツに行っていたからそれ関係・・・お

そらくボーデウィツヒはその時の教え子だろう。二連覇というときS世界大会のモンド・グロッソのことだろう、おそらくそのときの千冬さんが辞退ということに関連する内容か。しかし、何があったかは知らないが存在を認めないなどはひどい言い草だな。

「また今度な、今はよしてくれ」

「ふん、ならば――戦わざるを得ないようにしてやる!!」

言うが早いか、ボーデウィツヒは即座に戦闘態勢に機体をシフトさせる。火器が使用可能になった瞬間、右肩に装着されている大型実弾砲が火を噴いた。

ガキンツ!! ドカーンン!!

「軍人が拒否をした一般人に攻撃するとは、お前の頭は正常か?」

「こんな密集空間で戦おうとするなんて、ドイツの人はビールだけじゃなく頭もホットなのかな?」

即座に一夏の目の前に黒と朱の二つの影が立ち塞がる、言わずもがなISを纏った音羽とシャルルであった。ラファールの物理シールドが高速の弾丸を弾き、音羽が展開した対物ライフルがほぼ同時に実弾砲を真っ直ぐに撃ち貫く。即席のコンビネーションが見事に決まっていた、それを傍観していたほかの生徒からは歓声が上がっていた。

「・・・貴様とは問題を起こすなと言われている、今日は下がらせてもらおう」

音羽を一瞥すると、さきほどまでの氣勢はどこへ行ったのか踵を返して立ち去っていった。管制室から教師の声が響いて聞こえるが、

おそらくあのボーデウィツヒのことである、結局は馬の耳に念仏である。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・た、助かった。ありがとう音兄、シャルル」

「いんや、気にするな」

「怪我がなくてなによりだよ」

まったく、いきなりぶっ放すなんてふざけやがって。というか、俺と問題起こすなってどういうことだよ、え、もしかしなくてもドイツの一企業にもライセンス生産とかあるからそれか？そりゃあ、大企業だから国としても大事な税収入源だろうがさ、ここまでかよ。まあ、こういうふうにされたからってライセンス取り消しとかはないけど・・・なんだかなあ。

「まあ、もう四時になっちゃうし。今日はもう上がるうか」

「そうだな、あ、銃サンキュ。助かった」

「じゃあ俺も上がるかな、まあささつと着替えちゃうか」

また一夏がしつこくシャルルと一緒に着替えようとしたり、セシリアが俺と一緒に着替えても良いとか言い出したりしたが鈴ちゃんと算の説得（物理）によってなんとか解決した。・・・まさか、一部の腐った女子のBでLな薄い本みたいな趣味なのか一夏って？

「違うわ！」

「大丈夫だ、俺は否定しないから。あ、俺は対象にするなよ？」

「だから違つて……」
「え、一夏……」

いやあ、一夏を弄るのは楽しいね。む、山田先生がなにか急いでいるように走っていた、転ばなければ良いが……。やっぱり転んだ、すぐに起き上がったがもう少し落ち着いて歩いたほうが良いと思うんだ。

「あ、丁度良いところにお二人いましたね！」

「先生、おかえりはあちらです」

「ええ、それではまた来ます……。って用事があるんです！」

ふむ、ノリツツコミが大分板についてきたな。最近の密かな楽しみであるのだがな、千冬さんにあとで叩かれてもいいや、面白いし。で、用事ってなんだ？

「いえ、織斑君は「白式」の如月君は「疾風」の書類をちよつと書いてほしいんです。すぐに終わるので職員室に来てくれませんか？」

「ああ、そういうことですか。わかりました」

「じゃあ、すぐに来てくださいね！」

「シャルル、じゃあ先にシャワー使つててくれ」

「うん、わかった」

再び慌しく走り出した山田先生、あ、また転んだ。ひとまず職員室行こうか。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「すぐって言ったのに・・・」

「まさか、書類10枚もとは思わなかったな」

ただ単に機体の書類上の装儒者の登録で名前を書くだけのものだった、まあ、管理用の名簿と言ったところなんだが、それが10枚もなんだからそりゃあ20分もかかる。臨海学校ころにはイギリスから専用機が正式に来ることが確定していてもやはり貸し出しとは言え必要らしい。あゝしんどかった。

「一夏、ちょい紅茶飲ませてもらって良いか？喉渴いてさ」

「ん？音兄、いつものあれじゃないのか？」

「いや、丁度お湯が切れててさ。少しは男子同士三人で話もしたいし」

「わかった」

いやゝ、一夏が淹れる紅茶ってなんか知らないが美味しいんだよね。こつ、チエルシーさんが淹れてくれたのとはまたちよつと違うんだが、説明しにくいが実際そうなんだよな。お、着いた着いた。

「あ、シャルルはシャワー浴びてるのか。音兄「椅子は自分で出した」だったら良いか、ちよつと待っててくれ」

「おう」

ふかふかのクッションみたいな椅子を展開して、そこへもふゝっと座る。身体に合わせて形を変えてくれるから結構良いんだよねこれ、しかも緊急時に自爆機能付きという男のロマンも詰まってる。まあ、浸かったことは一度も無いし使う予定も無いけどさ。ふわゝ

「ああ、シャルル丁度良かったボディーソープ・・・・・・・・・・」
「い、一夏。ああ、ありがと・・・・・・・・・・」

ボディーソープが切れてたらしく、一夏がシャルルに渡しに行った。どうやら丁度出くわしたらしい、まあ、男同士なんだし手渡しでも問題無いしな。なんで途中で静かになったのかわからんが。

「う、ここに置いておくぞ?」

「う、うん」

なぜそんなに噛む、遂にニワトリの物真似でも始めたのか? どうして戻ってきた一夏の顔が赤くなっているのか知らんが……?

「ははは、どうしたよ。シャルルが実は女子でしたとか?」

「うん」

「そりゃあそうだよな、そんなわけ無いよな……」

は? 今ナンテイツタコイツ? 「うん」これは肯定の意味だよな日本語で、運勢の「運」でもくもの「雲」でもある。で、俺はなんて質問した?

Q・シャルルが実は女子でしたとか?

A・うん(yes)

「マジ?」

「え、音羽も?」

「ふへ?」

声のした方向に振り返ると、そこには金髪の貴公子ではなく一人の少女が居た……。おいおい、どういつことだよ!?

63・偽りの仮面は今宵割れる（後書き）

どうでも良い作品情報

一夏はシャワールームのドアを開けて渡した・・・どういづつと
かわかるよね？

64・知る者、知られる者（前書き）

キヤー、またgodった

64・知る者、知られる者

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「（気まずい）」

シャルル（女）がジャージ姿に着替えてシャワールームから出てきてから既に一時間、誰とも無く口を開かず沈黙だけがその場を窮屈なほどに埋め尽くしていた。正直、こういう状況はあまり経験が無いために俺もどうしようもなく無言でいるしかなかった。心地いい静寂は嫌いではないが、こういうのはあまり好きではない。

「あゝ、ひとまずお茶でも飲むか？」

「（コクリ）」

どうやら埒が開かないため空気を変えようと一夏が立ち上がった、俺は頷きで返したがシャルルはびくりと身体を震わせる。まあ、いままでのを考えればそうはなってしまうか。

「う、うん」

「わかった」

まあ、やっと会話なのだが。すぐにまた沈黙へと戻る、淹れ終わるまでがまた想像以上にきつかった。俺はどうすることもなく、なにが茶菓子を持っていなかったか少し調べた・・・・あ、ドーナツがあるな。よし、甘い物があるならば少しは良いか。ひとまずドーナツを皿と一緒に展開してテーブルに置く。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「もう大丈夫だろ、ほい」

「あ、ありがとーきゃっ」

一夏が湯飲みを渡すときに手が触れたからか、シャルルが慌てて手を引っ込める。思わず落としそうになった湯飲みを無理な体勢で取ったために反動で中の熱い茶が一夏の手にかかってしまった。うわ、火傷するじゃないかよ。

「わあ、ごめん！」

「あち、あちちち！」

「ったく、初々しい奴らだよまったく」

蛇口を捻り、水を勢い良く流す。手招きして高温のお茶がかかって騒いでいる二人を近づかせる、すぐに冷やさないとダメージが深くまで行っちゃうからな。一気に空気が和やかになる、なんというシリアスブレイカーだよこいつは・・・そのほうが良いけどさ。

「シャルル、しっかり冷やしてやれ。俺は冷却シート出すから」

「わかった、ほら一夏。しっかり手を出して」

「うう、すまん」

えーっと、冷却シートは・・・確か部屋の入り口の棚の中に何枚か常備されてるんだよな。保健室や医務室などは寮よりはアリーナが近いという場所にあるために軽症程度ならば室内に薬品などが常備されているのだ。ちなみに薬品棚の奥にはナノドクター製の火傷用塗布薬と冷却シートを見つけた。ナノマシンによる効果の底上げがされているんだよね。ちなみに生体分解型の使用により人体に

影響無し。やったね一夏、2日で治るよ！

「まったく、ほれって一人で塗れないか。シャルル、すまんがやってくれ」

「オッケー」

「すげえ情けないんだが俺」

シャルルに塗布薬の小さい容器を投げ渡し、冷却シートのパックを開いて冷却開始まで振る。丁度カイロをぐしゃぐしゃやって発熱させるのと同じだ。うんうん、シャルルもしっかりやってくれてるし良いかな。塗り終わった患部へシート（小）を貼り付ける。

「はあ、俺って奴は・・・」

「はいはい馬鹿は安静にしてろ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

一夏の治療も終わり、今は三人して紅茶を飲んでいる。さて、と、そろそろ良いかな。

「なんで男のフリをしていたんだ？無理には聞き出さないけど」

「それは・・・その、実家の方からそうしろって言われて・・・」

「実家っていうとデュノア社か、だが、どうしてだ？デュノア程の企業なら俺が誰かわかっているはずだろ」

「うん、そうなんだけど。経営不振で焦ってたんだ社長・・・僕の・・・父さんが。それで直々の命令で」

一夏が？マークをひよこひよこ浮かべているが、まあ、後で良いや。だが、自身の父のことだと言うのにそこから表情が曇りだした、どういふことだ？罪悪感とは別の・・・嫌悪？

「命令って・・・親だろう？どうしてそんな・・・」

俺の疑問に一夏が代わりのように口を開いた、どうも表情が優れない。どういふことだ？

「僕はねー愛人の子なんだよ」

一夏は絶句していた、そりゃあ15にもなればそういう言葉の意味も分かってくる。俺も企業人としてそういう話は嫌でも聞こえてくる、あくまでも自身の子を「愛人の」というだけで使いやすい「駒」として道具のように扱う。正直反吐が出ることだが、これは古来から行われてきたことでもある。今に始まったことではないが、自分がライセンス許可をしている企業では厳しく禁止をしている。それほど俺個人としては嫌なことであるからだ。

「それでね、引き取られたのが2年前。丁度お母さんが亡くなったときだったんだけど、父の部下がやってきたの。連れて行かれて検査されたらIS適性が高いことが分かって、非公式だけどテストパイロットをやることになったんだ」

おそらく、話すことも苦しいのだろう。俯いたまま、今にも掠れそうな弱々しい声で健気に話してくれていた。心が痛むが、聞き逃すまいと耳をしっかりと傾ける。

「父に会ったのは2回くらい、会話は数回だけ。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度本邸に呼ばれてね……。本妻の人に「

この泥棒猫が！」って殴られたよ。あの時はひどかったなあ」

あはは、と無理やりということがわかる愛想笑いに俺らは返すこともできなかった。一夏が怒りを抑えて拳を強く握り締めていた、血が出るのではないかと思うほどの強さのため爪が食い込んでいた。

「それから少し経ってデュノア社は経営危機に陥ったの」

「なんでだ？ISのシェアは世界3位じゃなかったか？」

「言っちゃなんだが、結局ラファールは第二世代。今は世界中が第三世代開発に動いてるから開発がままならないデュノア社は状況が厳しいのさ。欧州連合の統合防衛計画「イグニッション・プラン」からも除名されてる、切羽詰ってるんだよ」

「うん、音羽の言うとおりなんだ。実際に、政府からの援助もこの先危ないし」

現在、それを理解した投資家たちがデュノア株を売り出したおかげで株価は現在暴落。どうにかラファールの利益と関連産業で生き残っている状態。企業としてはとても危険な状態である。

「それでね、次のトライアルで選ばなかった場合は援助カットとIS開発権の剥奪が言い渡されているんだ」

「でも、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔、それに――」

シャルルが堪えるように息を吸い込む、どこか苛立ちと申し訳なさを感じられるそれが言葉になって吐き出された。

「同じ男子なら、日本で確認された特異ケースと接触しやすい。可能であれば機体と操縦者両方のデータも取れるだろうってね」

「俺らのデータを気づかれないうちに盗めってことか、気に入らん

な」

どうやら話を聞いた限り、罪悪感など微塵もなくもはや娘ではなく唯の「使える道具」としてしか考えていないらしい。まったくもって胸糞悪い、やはり実際にその目で耳で感じると余計にイラつく。

「聞いてくれてありがとう、少し楽になったよ。でも、バレちゃったから僕は強制送還かな。今までウソをついててごめん」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

深々と頭を下げるシャルル、そこには心からの謝罪が表されていた。遂に我慢ができなくなったのか一夏ががしつとシャルルの肩を掴んでいた。

「いいのか、それで」

「え・・・・・・・・」

「それで良いのか？良いはず無いだろう、そりゃあ親が居なけりゃ子供は生まれない。だけど、だからと言って親が自分の子に何をやってても良いはずが無い！自分の人生は、他人に決められるものじゃない！自分で決めるものだろ。それを親がどうこう言う権利は無いはずだ！」

「一夏、落ち着け。シャルルが驚いてる」

「あ、ああ。スマン、シャルル」

「い、いや。大丈夫、どうしたの？」

「俺は・・・俺と千冬姉は両親に捨てられたからさ・・・」

「あ、ご、ゴメン」

「いや、良い。別に今更会いたいとは思わないし、俺の家族は千冬姉だけだから良い」

おそらく、書類に書いてあったであろう「両親不在」の表記の意味を理解したであろうシャルルが謝る。俺も書類上は「両親不在」になっているが、実際は「不明」、うなじのバーコードから親がいるかどうか怪しいが。まあ、実際はどうでも良い、ミリアさんが俺にとっては親代わりだったからな。感謝はしてもきれないが。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「で、だ。一夏の言うことはごもつともだが、どうしたい？」

「う、うん。できればここに居たい」

「そんな一夏に問題だ、特記事項21の内容を答えよ」

「え？・・・ああ、そういうことか。学園に在籍する生徒は全ての組織・個人からの干渉はされない！つまり3年間は大丈夫なんだな？」

「後は・・・それまでに俺がフランスに支社を建てて買収してやれば良い」

「え？音兄が？」

「あ、あゝそこからか」

□ ■ □ 音羽説明中 □ ■ □

「ナノドクターって大企業じゃんか、そのライセンス提供者って・・・」

「おう、だからこれでシャルルも大丈夫だ。安心して良いぞ？」

「え、でも音羽にはメリットが無いよ？」

「ん？おかしいことを言うな、こっちはIS関連に産業を伸ばせる、収益は上がる。そゆこと、オーケー？」

「あ、ありがとう」

「感謝は一夏に言うんだな、俺は企業人として動くだけだ」

さてと、これで良いか。腹も減ってるだろうし、飯食いに行くか。シャルルも気が抜けたような感じだし・・・「ドンドン」誰だよ？

『一夏さん、音羽がどこに居るか知りませんか？』

げ、一夏にジェスチャーで「知らない」と伝える。今ここで返事をすればセシリアがドアを蹴破る勢いで入ってくるのは確実だ、シャルルの正体がバレるのは何がなんでも避けたい。

「セシリアか？俺は知らないけど、食堂にでも行っただんじやないか？」

「そうですか、すみません。それでは」

「お、おう」

ふう、さてと。俺は窓から脱出でもしよう、その後に適当なところから行けば良いだろ。

「・・・・・・行っただか、じゃあ、シャルル頑張れよ。アデュー」

窓からダイブしジェットバックで俺は夜空をバックに飛び去ったのだった・・・・・・。後でセシリアに見つかり自室で「はい、あーん」をする羽目になったのは言うまでもない。

64・知る者、知られる者（後書き）

どうでも良い作品情報

ライセンスの金額は喋っていない

65・淑女と冷水

「そ、それは本当ですか？」

「学年別トーナメントで優勝したら音羽が一夏と付き合えるってやつでしょ？」

「へー、それは面白そうだね」

「ふふふ、これは俄然やる気が出てきましたね」

月曜の良く晴れた気持ちの良い朝、男子3人（一人女装だが）で教室へと入ろうとしたらなにか女子勢が騒がしく会話に花を咲かせていた。そういえば女子ってなにかと噂話好きだよね。

「おっはよう」

「おはよう」

「よっす」

それぞれの挨拶を終わらせ教室に入ったのだが、なぜか『きゃあああ！？』とか叫んであちこちに焦って散っていった。いきなりそんなリアクション取られると俺の超合金ハートが傷つくんだが、ひとまず訳分からん。

「なんか名前が出てた気がしたがどうかしたのか？」

「い、いえ。なんでもありませんわ！」

まあ、別にどうってことは無いけどさ。セシリアが妙によそしめいが・・・多分聞き出そうとしてもこれは無理だな。俺の場合はそれ以前にセシリアに嫌われたくないが優先されるが、多分そうなら俺は生きていけないと思う。

「まあ、座ろうか」

「そうだね」

「だな」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「（どうしてこうなった）」

一夏に思いを寄せる侍ガール、篠ノ之箒は校内に広まった噂に頭を悩ませていた。先日、部屋を移動する際に「トーナメントで優勝したら付き合ってくれ」と約束を交わしたのだが、なぜか「優勝したら織斑一夏・如月音羽・シャルル」デュノアの誰かと付き合える「というもの」に変わって広まっていたのだ。

「（これは私と一夏だけの約束のはず、なぜ音羽とデュノアが巻き込まれているのだ!）」

原因としては一夏に伝えた際の余計なまでの大きな声だったのだが、恋する乙女にはそれに気づくほどの余裕があるはずもなかった。それで聞かれた結果、尾ひれが付いての結果である。本人は「二人だけの秘密」にするべきだったのだが、こうなってしまった以上優勝するしか道はなかった。

「（だが、今度こそ私は道を誤らずに戦えるだろうか・・・）」

過去、ISによって一夏と引き離され、日本各地を保護という名目で駆け回らされ、連絡を取ることもできず、気づけば親とも引き離

され一人になってしまった。その時の負の感情を叩きつけるようにして剣道をしていた自分の姿が思い返される。それはもう、醜いものであった、今では克服したと思っていたがやはり心配であった。なにせ、心に付着したそれは簡単に洗い流せるほど単純ではないのだから。

「（いや、あの頃の私ではないのだ。やれる）」

そこには、自身の信念に従って進もうとする剣士が居るだけだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「あ」

「あら？」

二人揃って相手は違うが恋する少女が放課後、目的のための鍛錬に来ていた。

「あら、鈴さん。私はこれからトーナメントに向けて訓練しますの」
「そう、奇遇ね。私もよ」

二人の間に火花がバリバリと散る、お互い目的は同じためにライバル視していた。

「ねえ、音羽は譲るから優勝させてくれない？」
「いえいえ、一夏さんはどうぞ。私は優勝して音羽を賞いますので」

どちらも負けず嫌いということが災いしてか、どちらとも無くメイ
ンウエポンを展開する。一触即発の空気の中、お互いにISを全身
に展開してアリーナに降下する。

「じゃあ、勝った方が優勝ってことで良いわよね？」

「ええ、異論はありませんわ」

「では――」

セシリアの言葉を遮るかのように突然、超高速の砲弾が目前に飛来
した。セシリアが鈴を抱きかかえて後方に回避するが、それを追っ
かけるかのように2発目、3発目と続く。そこまで来ると、左右に
分かれてセシリアはライフルを、鈴は衝撃砲をそれへと向ける。視
線の先には、先日の漆黒の機体。『シュヴァルツェア・レーゲン』
専属操縦者――

「ラウラ・ボーデウィツヒ……」

「いきなりぶっ放すなんて、何考えてるのよ！」

ガシンと大型の青龍刀「双天牙月」を連結させ、二門ある両肩の衝
撃砲を準戦闘態勢にシフトさせた鈴が威嚇するように睨み付ける。

「鈴さん、その程度の挑発に乗っては思う壺ですわよ」

「そ、そうね……ありがとセシリア」

キツとラウラを見据えてセシリアが言葉を続ける、右手は後ろに立
つ鈴を抑えるかのように上げられていた。

「それで、一体何の用ですか？ 私たちはこれから大事な予定がある

のですが」

「ふん、中国の「甲龍」にイギリスの「ブルー・ティアーズ」か。データで見たときのほうがまだ強そうであったな」

あまりにも挑発的な発言に二人の頬がつり上がる、武器を持つ手に力がこもるがどうにか息を吐き出すことで落ち着く。

「何よ、やるの？わざわざドイツくん dari から来て結構な物言いね、常識を疑うわよ？」

セシリアが「鈴さん」と声をかけるが、既に本人の心は沸点を通り越し今すぐにも飛びかかろうと双天牙月の切っ先をラウラに力を込めて向ける。既にセシリアの腕を押しつけて睨みつけてしまい、セシリアの制止を振り切ろうとしていた。

「ほう、一人で十分か？まあ、訓練機に負ける程度の輩に私が倒せるとは思っていないがな」

「そんな見戯のような挑発に乗ると思ったら大間違いですわよ？」

「ふん、そちらはやる気のようなうだが貴様は傍観するだけか？とんだ腰抜けだな」

「言いたければどうぞご勝手に、模擬戦のお相手はしますけどもね」

それを言い終わるかどうかのところで、堪忍袋の尾が切れたのか、鈴が地面を蹴り飛ばしてラウラへと加速して突っ込んでいった。

「はっ！来い、数だけの国でも足掻いて見せる！」

65・淑女と冷水（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアは原作より良い子&冷静

66・傷つく翼、舞い降りる雫（前書き）

作者はラウラが嫌いなわけではありません、あしからず

66・傷つく翼、舞い降りる雫

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、勿論だ。確か今日使えるのは――

『第三アリーナだ』

『わあっ！？』

なんだ、いきなり口を開いたらそんなに驚くなんてひどいぞ。まあ、いきなり横から見知っている声とは言え聞こえてきたらそりゃあ驚くかもしれないが・・・そこまでか？まあ、箒はともかく俺は癖で足音と気配を消していたが。なぜか箒が「お前は忍の家の出身か？」っていうずれた質問されたときは面食らったがな。

今時忍者って残ってるのか？

「まったく、驚きすぎだぞ？」

「本当にな、少しは回りに気を配れ一夏」

「お、おお。スマン」

「ごめんね、突然だったからびっくりしちゃって」

「ああいや、責めてるわけではないぞ」

シャルルがこつちが驚くほどにぺこりと頭を下げる、流石にこつちが悪かったと非常に思ってしまったい少し言葉をつぐんでしまふ。箒も同じらしく、ごほんと咳をして気分を切り替える。

「ま、まあ。第三アリーナに行くでしょう。今日は空いているらしいから時間があれば模擬戦もできるだろう」

「そつえばセシリアと鈴ちゃんが走ってたし、丁度良いだろう」

丁度良ければ相手を頼めるだろうしな、最近は接近しても切り裂かれることが多いがな。やはり候補生は格が違うつてことだよ、決定戦は運が良かったんだよきつと。ああ、でもどうせなら専用機でやりたかったなあ。学年別トーナメント。

「じゃあ、早く行こうぜ！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

セシリアは鈴を抑えることを早々に諦め、アリーナ後方からじつくりと二人の戦いを解析していた。相手が軍籍の人間であるから情報を集めるためである、別に模擬戦程度であるから怪我をすることは無いだろうという常識に当てはめた考えからの行動であった。それに、軽い挑発に易々と乗っついては偉大な前当主の母に申し訳がない。それに本人は隠しているつもりのようなが、去ってから裏で支え続けてくれた音羽にも申し訳ない。

「それにしても・・・A I Cの完成度は素晴らしいですね」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、「慣性停止結界」とも呼ばれるそれはドイツが開発途上のIS用第三世代兵器である。目標とする物体を放ったエネルギー波による拘束で動きを止めてしまふという、サポート系統の武装である。無論、鈴の放った衝撃砲は10にも及ぶがその全てが見えない壁によって防がれていた。軍人であるからか、小型の腕部プラズマブレード二振りで重量のある青龍刀の猛攻を裁ききっていることから戦闘能力自体も高いレベルであることがわかる。



「っこの、当たりなさいよ！」

「そう言われて易々と当たる馬鹿ではないのな」

既に戦闘を始めて20分、不可視の弾丸の雨は同じく見えない城壁に遮られて意味を成さず。ならばと青龍刀での連続の突き払いを繰り出すも全てが的確な角度、力でいなされる。そして、生まれた隙を狙って実弾砲が火を噴く。ぎりぎりで避け続けているが、こう長時間の集中にさらされてしまえば流石の代表候補生も疲れが出てくる。今では回避もままならずギリギリ掠ってしまっていた、このままではシールドエネルギーが全滅するのも時間の問題である。

「どうした、もう疲れたのか？」

「うっさいわね、いい加減に、やられなさいよ!!」

そう叫ぶと同時に連結させた双天牙月をブーメランのように力を込めて投擲、同時にそれに対して加速とでも言えるのか衝撃砲をピンポイントで撃ち込み更に押し出す。大気を音を立てて切り裂きながら進むそれはもはや命を今にでも刈り取るつかというほどに刃を輝かせていた。

「何っ!？」

「ついでに食らいなさいよ、こんちくしょう!!」

ボーデウィツヒが防ぎきれないと思ったのか両腕をクロスさせて防御体勢に移った途端、迫る双天牙月の隙間を通して衝撃砲の連射をばら撒くように撃ち込み続ける。周囲に着弾した流れ弾が地面で爆

せて土を掘り返し、視界を煙幕代わりに埋め尽くす。

「まあ、良い手だったな。褒めてやる」

しかし、その土煙の中から双天牙月が投げ返され、同時に黒く細い何か。いや、5本ものワイヤーブレードが鈴の四肢、そして首にぎしりと鈍い音を立てて強く巻き付く。そして……上空へと持ち上げられ、そのまま地面へと突き落とすかのように叩きつけられる。まるで、幼子が無邪気に小さなスコップで虫を叩き潰そうとするかのように……。意図に気づいたセシリアが向かうも時既に遅かった。

「っが！ー」

「鈴さん！」

その瞬間、ボーデウィツヒの首筋を青いレーザーが怒りを込めて掠めるように通り過ぎた。

「そこまでですわ、ボーデウィツヒさん。ここからはわたくしがお相手しましょう」

「ほう、ならば来い。こいつにはもう用はない」

要らなくなった物をゴミ箱に投げ入れるように過剰なダメージによって気を失いISが強制解除された鈴をセシリアに投げ寄こす。容態を軽く確認したセシリアはアリーナの端に鈴を横たえ、キツと睨みつけるようにレーザーライフル「スターライトmk3」の銃口を向ける、その目はかつて子を、家を守るために戦った母に重なる。既に、セシリアの頭の中には「容赦」という選択肢は存在していなかった。

「覚悟なさい、ボーデウィッヒさん！わたくしを怒らせたこと、後悔させてさし上げますわ！！」

今この場所に、新たな戦いの火蓋が切って落とされた。

66・傷つく翼、舞い降りる雫（後書き）

どうでも良い作品情報

セカン党の皆さんごめんなさい

67・零、その先へ（前書き）

あんまり上手くセッシー無双書けませんでした

67・零、その先へ

「なんか騒がしいな、遂に鈴ちゃんが青龍でも召還したんだろうか」
「いや、鈴なら白虎だろ。猫っぽいし」

ちなみに今現在、第三アリーナに近づくに連れて廊下を歩く生徒がなんか騒がしい。なんかアリーナ内で候補生同士が模擬戦をしているらしい、心当たりがありまくるんだが・・・主に衝撃砲とかお嬢様とか。また一夏のこと騒いでるんだろうか、まあ、あの二人なら仲良く喧嘩していることだろう。周囲への被害が半端無いけどね。

「なんか、二組の代表が怪我だつてよ？」

「え、あの一組の転校生が行ったの？」

「大丈夫かなあ・・・」

あのさ、良いかな？

「音兄」

「わかってる、急ごう」

一夏の手を掴み、地面を強く蹴る。ISの操縦方法にも通じる徒手格闘での移動方法であり、体格差を覆すことのできる移動系の技術である。通常時の高速移動では実際スタミナの減りを無視すれば最速の域になる、なぜなら子供が大人の懐に入り込み攻撃に移れるように作り出されたものであるのだから。

「悪い、先に行く」

「わかった」

「うん、すぐに僕らも行くよ」

一声かけるのも忘れない、俺がこれで移動を始めると普通に一般人が追いつけなくなる。いやまあ、これはセシリアを助けに入ったあの日もお世話になった。これが無かったらおそらく今ここに俺もセシリアも生きていなかったろう。……。ひとまず、なんか走り際に見えた赤いスーツ姿でこっちに微笑んだ見覚えのありまくるブロンドの女性に手を振って通り過ぎる。一夏が「何に手を振ったんだ？」て顔をしていたがスルーする。

『娘をお願いね』とか聞こえたので呟くように「任せろ」と返事をし、更に廊下を更に強く蹴り飛ばす。床へ落下する勢いをそのまま前進する力へと変えるため、景色が後ろへと流れていく。一夏がうわうわ悲鳴を上げているが今はスマン、急がなければいけないような感じがする。

ダンッ！！

「くっ、久しぶりだからきついな」
「首がががががが！！」

ダンッ！！

「え、如月君？」
「織斑君も！？」

ダンッ！！

そして、1分後、普段ならば20分の距離をありえない速度で移動

し終えた俺は気絶しかけている一夏の頬を軽く叩き意識を覚醒させるとすぐにアリーナ内を見れる観客席へのゲートをくぐった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

アリーナ内を縦横無尽に青と黒の影が対照的に円を描きながら向かい合って銃撃の応酬を繰り返していた、実弾砲が火を噴けば放たれた弾丸をレーザーが撃ち抜き、逆にレーザーが放たればプラズマブレードで弾かれる。そんなイタチごっこの状況が延々と続いていた。

「流石、軍属ですね」

「ふん、貴様がここまでとは思わなかったぞ！」

AICでビット型のブルー・ティアーズを止めるも、その意味も無くレーザーの制射が襲い掛かる。接近すればミサイル型とビットが牽制に織り交ぜながら的確に射撃でシールドエネルギーが削られる。それを見つめる生徒の目には、徐々に押されているボーデウィツヒの姿が映っていた。

「行きなさい、ブルー・ティアーズ!!」

「邪魔だ、消えうせる金属板！」

激高したラウラがワイヤーブレードを武装の耐久限界ギリギリで射出し、目前に迫っていた2機を破断し残りの2機に2本のブレード部分を叩きつけ地面へと無理やり弾いた。そこにはもはや効率を考

えた行動などは無く、ただ目の前の物を破壊するという素人同然の動きだった。そんな隙を見逃すセシリアではなかった、すぐさまスターライトmk3をセミオートバースト（3点バースト分のエネルギーを使う）にモードチェンジを済ませて精密狙撃用モードに機体を切り替える。任意の位置に滞空し、射撃系の操縦に集中できる形態だ。機体操縦ができなくなるのが玉に傷だが、その分射撃精度が格段に上昇するためロングレンジでの戦闘に適している。

「はあああああ！！」

「あなたこそ、冷静に対処することをおすすめ致しますわ！」

直線的にプラズマブレードを展開したまま突っ込んで来るラウラ、セシリアはふうと息を吐くと再びスコープを覗き込み照準をラウラの頭に合わせる。標的が自身に向けて真っ直ぐ迫ってくるのだから狙うのも造作はない、それに今は狙撃重視の状態、外すわけがない。セシリアが今こそと引き金を引こうとした途端、なにかの影が二人の間に入り込んだ。

ガキンッ！

「そこまでしておけ馬鹿者、自分を見失えと教えた記憶は無いぞボーデウィツヒ」

「・・・・ハッ！・・・・はい、申し訳ありません」

「そこまで勝負をしたいのならトーナメントで決着を付けろ、オルコットも良いな？」

「はい、問題ありませんわ」

「了解しました・・・・」

ISを待機状態のイヤークラスに戻し、アリーナを出て保健室へと

向かう。プライベートチャネルで音羽から「鈴は保健室に連れてくぞ」と先ほど伝えられたからだ。

「さて、と。鈴さんはご無事ですわよね？」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「まったく、無茶はよしとけてのに」

「仕方ないでしょ！？その、あの、うにゅう……」

「あはは、一夏は鈍感だなあ」

保健室から鈴たちの元気な声が聞こえる、どうやら無事なようだった。ひとまずノックし声をかける。

「鈴さん？お身体の具合はどうですか？」

「あ、うん。身体は少し打撲だってさ、ごめんねセシリア」

「いえ、早く助けられなくて申し訳ありませんわ」

「いやいや、気にしなくても良いわよ。おかげでこれで済んだんだし」

音羽が言うには、ISがダメージレベルがD寄りのCらしくトーナメントへの出場は事実上不可能。機体の稼働データを取るためでもあるため、候補生の身としてはとても危うい。本人は自業自得と苦笑しているが、そうまでさせたラウラが許せずにいた。それに気づいた音羽がばんばんと頭を撫でてくる。

「まあ、今はゆっくり休め。それが一番だ」

「うん、ありがとね音羽」

「運んだのは一夏だ、俺は・・・まあ、特に何もしてない」

「な、治療の手もがあ」

「まあ、ゆっくりしとけ。じゃあ、俺は行くかr・・・・・・なんだ？」

なぜか、地面が揺れる。それも徐々に大きく、それにつれて多数の足音が響いてきていた。音羽が訝しげにしながらも保健室のドアノブに手をかけた途端。そのドアが吹き飛んだ。

「なにガッ！！ほぶふわあ！！」

なにか人体から鳴ってはいけないような、ベきぐしゃという音声と同時にドアに押されて反対側の窓の間の柱に叩きつけられる音羽。それと同時に視界を埋め尽くすほどの女子・女子・女子。目前に差し出されるなにかの書類を持った大量の腕。その気迫に気圧されてしまったのか、一夏とシャルルは軽く後ずさりしていた。ベッドに座る鈴は目を見開いてばかんと口を開けたままだった、ちなみに相変わらず音羽は柱とドアのサンドイッチ状態である。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「あれ？如月君は・・・まあ良いか」

『私と組んで！！』

一夏の目の前に差し出された何かの申込書、一夏が軽く頷きながら読み上げたところタッグ戦へとルールが変更された学園別トーナメント戦のタッグ申込書であった。困り顔のシャルルと一夏が視線を

交わし一夏が口を開く。まだ音羽はry

「あゝ、ごめん。俺はシャルルと組むからさ」

「・・・まあ、他の女子よりは良いわね」

「男同士つてのも絵になるげふんげふん」

「じゃあ、こうなったら残るは如月君よ。行くわよ!!」

おー、と元気な、もとい騒がしい女子が再び地面を揺らしながら嵐が過ぎ去るかのように走って出て行く。途端、静寂に包まれる保健室、ついでに音羽はry

「じゃ、じゃあ俺たちは行くぞ。頑張れセシリア」

「んな、なあっ!?!い、一夏さん!?!」

言い返そうとするも既に二人は気づいた頃には部屋から出て行っており、ベッドに座った鈴からは温かい視線が向けられていた。

「ぐ、うお・・・げほっ、げっほ・・・ああ、ったく」

「あの、音羽?」

「な、なんだ?」

「トーナメント、わたくしと組んでくださいまし!」

「・・・あ、ああ良いぞ・・・なんで飛び回ってるんだセシリアは?」

「音羽も大概ね」

「え?」

その日、大浴場で普段は見られないくらい浮ついた状態のセシリアが見受けられたとか。

67・零、その先へ（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズは原作とはもう別物

68・接戦の行方（前書き）

まあ、それだけの話

68・接戦の行方

さて、ドアと仲良く壁に平行ダイブ（強制）させられてからセシリアにタッグの相手を申し込まれてから1週間。5年の時間があつたにも関わらず、あの頃のように以心伝心で動けるようになった。え、そのころの話が聞きたいって？良いぞ、ミリアさん（幽霊）に許可取れたらな。

「で、今日に至ると」

「誰に言ってるの？」

む、どうやら久しぶりになにかしらの電波を受信してしまっていたようだ。まあとにかく言うことはセシリアとまた肩を並べて戦えると、それにしても相手は初戦誰になるんだろうな。一夏とシャルルがタッグらしいから油断できないな、それ以前に鈴ちゃんをあそこまでやりやがった駄兎をとつちめたいが。ちなみにジャックに報告したところ、「mjk」とだけ返事をして寝やがったので御礼にスタングレネード5個の詰め合わせ（ピン抜き済み）を置いてきた。その後に汚い花火と悲鳴を背景に紅茶を飲んだのは記憶に新しい。ついでに言えば今俺ら男子三人組みがいるのは男子に宛がわれた更衣室である。

「それにしても……一体女子はなにで騒いでるんだろうな？」

「あゝ、そうだね。なにか聞いても教えてくれなかったし。優勝したらなにかが手に入るらしいけど」

「へへ、それは気になるな」

できればセシリアと添い寝権だったら個人的に嬉しい…….な.ん.で.お.前.ら.は.そ.ん.な.に.微.笑.ま.し.い.ね.みたいな感じの目で見てくる

んだ？なんか一夏が「セシリア、あと一歩だぞ！」ってはいやいでいるが、セシリアがどうかしたんだろうか。ハッ！まさか一夏はセシリアを狙っているのか！？お前には世界が許しても俺が許さん、むしろ俺g・・・・・・・・どうやら色々疲れてるんだな俺は。

「ま、まあ今はトーナメントに集中しよう。うん」

「そうだな、音兄に勝てる自信が無いけど・・・・・・・・」

「お前なあ、俺は一応普通のIS動かして数ヶ月の高校生なんだが」
事実、候補生相手ではなんとか勝てているという状況だし。油断すれば一夏に普通に負けるし、生身ならば余裕のような気がするが結局ISでは変わってきてしまう。今回は色々生身で覚えさせられた技を試していく予定だけでも。

「あ、そろそろ組み合わせ結果が出るんじゃないかな？」

「お、そうか」

急にタッグ戦にルール変更されたため、今まで使っていたシステムが正常に動いてくれなく急遽運営係によるアナログ抽選会での試合組み合わせの決定になった。それが一からの手作り作業をタッグ分、組まなかった人の分と大量になってしまうために予定ギリギリにまで食い込んでしまったのだ。今は第一試合の開始予定時刻まで20分、本当にギリギリだなオイ。まあ、一学年全員分を手作業でやっていればここまで遅くなるのも仕方はないことであるのだが。そりゃあ約300人ほどなのだから・・・・俺だって無理だわ。



「所変わって女子更衣室ですわ!」

「お前は何を言っているんだ……」

むう……。なにもボーデウィツヒさんとタッグを組むことになつてしまつたからとは言えそこまであからさまに態度に出さなくてもよろしいのでは無くて? まあ、私が同じ状況だとしたらそうならない自信はありませんが。ですが、それはそうとして5年ぶりに音羽と共に戦えるとは……。嬉しいものです。二度と会えないと思つていましたが、今はISに心から感謝ですわ!……。一番は鈴さんの仇取りですが、音羽も静かにキレていましたし問題無いでしょう。

「さて、そろそろ組み合わせの発表ですわね」

「そうだな、どうなるうと。真剣に勝負だ!」

「望むところですわ!」

□ ■ □ ■ □ ■ □

そして、遂にその瞬間がやってきた。

「え?」

「は?」

「何?」

「なんてことだ……」

「まさか、そんなことが」

「フン」

三者三様の驚きを示す6人、その視線の先には抽選結果が大きく映し出されていた。

第一試合「如月音羽&セシリア・オルコットVS篠ノ之箒&ラウラ・ボーデウィツヒ」

68・接戦の行方（後書き）

どうしても良い作品情報

本当は番外の予定だった

69・番外I F その3「新生活」(前書き)

今回は中途半端なところで番外編です

69・番外IF その3「新生活」

ひとまず、紫さんに俺が選ばれた理由を聞くことに。

「で、真意のほどは？」

すると、困ったような申し訳ないようなよく分からんがとにかく明るい方向ではない表情をする。ちなみに食うためとか言ったら全力で逃げさせてもらう。確実にスキマで無理だろうけど、この年で妖怪の食料にはなりたくない、それに美味しくないと思うぞ？血中に医療用ナノマシンが流れてるから、無機物飲んでも味は保障できん。

「実はね、少し、いや正直困ってることがあるのよ……」

「困り事？金銭的な物ならすぐに融資はできますよ」

「いや、お金では無いんだけどね。あなたの力が必要なの」

「はぁ……それで困った事とは？」

「あなたは、式って知ってるかしら？」

「式？」

なんだったか、確か陰陽師とかの使役する使い魔みたいなものだったと思うが。有名なものには十二神将だったか、だが今ではそれも廃れてしまっていて陰陽師も数えるほどしかいないと聞くがな。

「まあ、そこそこには」

「そう。それで私には藍式神とその式神の橙という式神がいるのだけれど……」

なぜかそこでその先を躊躇う紫さん、どうしたんだろうか、まさか

そこまで言いにくいことなのか？これは真剣に聞かなければいけない。

「……………その……とあることがあって……二人に……俗に言う……家出をされちゃったのよ」

「……………what？」

「それで……あなたにはその二人を探してきてほしいのよ……」

「……………つまりは家出人探しってことでオッケー？」

「まあ……………そうなるわね」

「……………その仕事って俺である必要性が全くと言って感じられないんだが、それこそ幻想郷の知り合いとかに頼めば良い話じゃないか？」

「それができないからあなたに頼んでるんじゃない」

「んな、どこに不可能な点があるんですか、俺には全然見当たらないんですけど」

「知り合いは誰も面倒くさがりでそんなことに構ってくれないのよ、……………それにね」

そう言つて紫さんがギリギリまで顔を近づける、うう、免疫無い俺には心臓に悪いんですけど。凄いドキドキしちゃうんですが（心臓的意味で）

「式は主に対して絶対服従なのよ。主のためなら例え火の中、水の中厭わない」

「まあ、そりゃあ従者は確かにそうですが。（俺は無茶な命令は即刻無視してたが）」

「それに、私は一応妖怪の賢者と呼ばれてるのよ。その妖怪が自分の式に逃げられたなんて言ったら……………」

「……………まあ、それはまずいな色々と」

「そうなのよ……はあ」

そう言うとき紫さんが頭を抱えて困ったようにため息をつく……まあ、賢者と呼ばれているほどのならばその大きな威厳が崩れてしまうよな。一度崩壊したら元に戻るまで多大な時間がかかる、やらかしたら2代、3代もかかってしまうという事実があるしなあ。元従者としては……まあ、なんとかしてあげたいがなあ。

「だけでも、その二人はどうして家出したんですか？訳もなく家出するなんてありえないでしょう」

「それには深い訳があつてね……」

「深い訳……それは一体？」

「えつと……それは……」

すぐにはつきりと言えは良いものの、言葉を濁す紫さん。そこまでに深い訳なのか？それならば躊躇ってしまうのも頷ける、そういえばセシリアは元気かなあ、頑張ってるかなあ。最近雅にも会えないしなあ、ドイツの秘密組織さんも忙しいし。俺の家は大丈夫だろうかなあ。

「うちって……基本家事は藍がやって……それで私はこの幻想郷の結界の管理をやってるんだけど……」

「けど？」

「ここ数年間……いえ、もっと前からその仕事を藍に任せっぱなしにして……」

「……それで？」

「あと、お使いとか細かい仕事は橙に任せて……」

「じゃあ、紫さんは何をやってたんですか？」

「私は……基本寝てるか遊んでるか宴会に行ってるかで……」

「……（ダメだこいつ）」

「それで先日・・・神社の宴会から帰ってきたら手紙が置いてあって・・・。その手紙を読んだら『家出します、探さないでください』って・・・。」

「確か日本の言葉に『自業自得』っていうのがあってだな」
「はうっ!!」

笑符「積紙の祝福」
ハリセンストライク

「そんな扱い受けたら当たり前だボケエ!!」
「なんで教えてもないのに使ってるのよ!!」

□ ■ breakするまでお待ちください □ ■ □

はあ、まったく。なんか知らんが

「うう・・・だって仕方ないじゃない。宴会には必ず出席するのが義務でしょう!?!」

「初めて聞くな、それ。日本来てまだ2年と少しだがそんな聞いたことないぞ」

「幻想郷ルールよ!」

「・・・いや、普通に嘘付くな。目が泳いでるぞ」

「むう・・・。」

「せめて家事くらいやりましょう?」

「それはそうなんだけど・・・。」

「家出の理由聞いたらどの俺である必要性が余計感じられないんだが、というか、自分で探してください」

「だって、私が探して見つけたって絶対帰ってきてくれないもの」
「・・・俺が仲介役をしろと?」

「平たく言えばそうなの……」
「マジか……」

こんな不思議な世界に連れて来られてきた理由が家出人の搜索、橋渡し……なんとも理不尽な気がしないでもないが、呼ばれた以上やるしかない。戻る方法なんて無いし。

「ところでその二人が居なくなってから食事とかはどうしてたんですか？」

「そこは……ほら、博麗神社のお菓子をスキマを使って……ね？」
「お菓子かよとか、人様のところから盗むなどか良いたいが……馬鹿か」

「まあ、最近じゃもうそれも無理になってきたけど」

「だったら何か適当に作りましようよ……」

「だから……その、ね？」

「……俺に料理もしろと？」

「だって、結界の管理ならともかく一人で家事なんか無理なもの」

むう……。まあ、一人暮らし長い間続けてるから家事は一通りはできるが……。ミアさんだって全部一人でできてたぞ？メイドと一緒に談笑しながら皿洗いしてたもの。でも……。やらないわけにはいかないな、元の世界に帰る前に飢え死にとかは避けたい。

「分かりました、引き受けましょう」

「ホント!？」

「やらなきゃ俺が終わるからな……」

「ありがと、じゃあしばらくの間よろしくね？」

「はい、よろしく願います」

こうして、高校一年の夏。幻想郷という不思議な世界での生活が始

まった、もう就職は決まってるようなものだし……もう良いや。吹っ切れなきゃやってられない……ああ、セシリア分が足りない。

69・番外IF その3「新生活」(後書き)

どうでも良い作品情報

作者の東方知識は二次創作と某笑顔百科のみ

70・風と雨、刃と雫の合奏（前書き）

気づけば作品中で一番長かった

70・風と雨、刃と雫の合奏

「どうせなら一夏にやらせてあげたかったんだがな」

「ふん、ならばここでやられておけ」

「残念ながら、俺も後輩やられてキレてるんでな。悪いが、駄兎は狩らせてもらう」

「ならば、『騎士』の動き、見せてみる」

「お、それを知ってるとは嬉しいねえ」

お互いにISを纏ったままで睨み合う、殺気には嫌と言うほど当てられたからこれくらいじゃ怖くもないな。いや、殺気に慣れちゃうつてのも悲しいような気がする・・・もし俺が普通の行き倒れだったとしても普通の子供ではないな。実際はどうでも良いけど、あ、試合終わったらボーデウィツヒにキャベツ56円のこと聞いてみるか。

『叩き潰す!!』

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・・・・・・」

「やあああ!!」

お互いに相手に向かっての加速、音羽は近接用ブレード二本、ボーデウィツヒは両腕に装備されたプラズマブレードを起動して切りかかって行く。確かに、攻める方向性では目を見張るものがあるが、逆に言えば、守りに徹した攻撃で返されればどうか？それも、護衛

を生業にし、返しと往なしを主としての複雑難解な技法で。

「良い攻撃だな、流石軍人だよ。まあ、それだけだが」

ブラズマ刃を滑らせるようにして振られた近接ブレードが、音羽の喉元を狙った一閃を地面へと叩き落す。それに追撃するように0距離からのサブマシンガンによる正確すぎる銃撃、抵抗するように残った左腕の刃を突き出すも、返しの刺突で押さえつけられた。

「…………ハッ、静かになったな？ほら、後ろががら空きだぞ」
「何？ぐあっ！」

蒼穹のレーザーが背後からボーデウィツヒを貫く、その先にはスターライトmk3を構えたセシリアが威風堂々とたたずんでいた。しかも、片手で横から襲い掛かる打鉄を纏った箒をビットによる牽制で引き離して。

「この試合はいつから2対1になったんだ！！」
「このおー！」

瞬間、音羽の身体が空間に縫い付けられたようにその躍動的な動きを止める。かすかにボーデウィツヒの周囲の大气が揺らいでいるのが慣性停止結界「AIC」の発動した証拠であった。

「なるほど、こう止められるのな？凄いなボーデウィツヒ」
「お褒めに預かり光栄だ、礼をしてやろう！」
「そりゃあ、嬉しい限りだな」

ボーデウィツヒの専用機、シュヴァルツェア・レーゲンの右肩部に搭載された80口径リニアカノン「ブリッツ」が砲口から雷を幻想

的に噴出す。最大出力時に発生するオーバーステークの兆候である、しかも装填されているのは対IS用徹甲弾、訓練機、装甲が薄い疾風ならば一撃の下に葬り去ることができるほど。しかも最大出力ならば、汎用的な物理シールドすら貫く。正に絶対絶命の状況であった。普通ならば、それこそ絶望に沈むが・・・生憎、音羽は色々と普通ではなかった、機体も然りと言ったところではあるが。

ズガン！！ ドカーン！！

「おお、こわいこわい」

「AICの拘束から逃げただと！？」

「ふふん（どやあ）」

まあ、簡単なこと。AICのエネルギー波での抑制より大幅に大きな力で無理やり動けば良い事なのだ、抑えられたら強い力で押し返す。疾風の規格外な出力のブースターがあるからこそその力技ではあるが、その結果、操縦者にもそれなりのダメージが行ってしまう。それこそ、ISで考えればシールドエネルギーの多大な消費として。

「じゃあ、こつちからも行くぞ」

何時の間にか格納されていた二振りの近接ブレードの代わりに、疾風専用武装「ステイル・ハーツ」が力強くその右手に陽光を眩いほどに反射して輝いていた。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「く、やはり候補生は一筋縄ではいかないか・・・！」

打鉄の基本装備である日本刀型の近接用ブレードを自身の剣道で培った技術で手加減無く振るう。無論、剣道をしたことすらないセシリアには有効であるのだが、生憎、機体の相性が悪かった。基本形態の打鉄は二枚の物理シールド非固定部位^{アンロックユニット}を装備した防御重視の近距離対応型。盾で防ぎ懐に入り込んでからが独壇場であるのだが、対するブルー・ティーズは中距離射撃型。それも全方位からのビットによる視覚外からの射撃に、無慈悲なまでに正確なレーザーライフルによる射撃。どうにか物理シールドと持ち前の反射神経を生かして避け続けているが、それも時間の問題になってきていた。物理シールドは幾数回もレーザーに焼かれてボロボロ、ビットを2機叩き落したとは言え数が減っただけ。

「なにおお!!」

「つく、強引ですわね!」

先日、音羽がアリーナへの移動の際に使っていた移動法「跳歩」。実際はステップングアクセルというらしいが今はそこは重要な事項ではない。どれだけ接近できるかであるのだから。

「やああああ!!」

「くう、ああっ!」

機体の重量さえも斬撃へと転化し、一撃必殺の一太刀を浴びせる。袈裟懸けになったその一瞬の隙を見逃さず続けて二の太刀、三の太刀へと刀を振るう。嵐のように間を置かずに放たれる煌めきはそれを受けているセシリアでさえも魅了した、鮮やかに円を描くような切っ先。しかし、そのまま黙っている者などいるはずがなかった。

「素晴らしい剣技のお返しですわ!」

途端、セシリアが携えていたレーザーライフルが持ち手の形を変え、銃口がスライドしレーザーの奔流が流れ出す。これこそ、セシリアが不得手としている近接戦闘への対応策として開発させた光の槍。通称「スターライトmk3・ランサーカスタム」である。

ところで、近接戦に限らず。武器には得意とする間合いというものが存在する、そして、それは同時に一番攻撃力が高いという位置。刀剣ならば懐など、そしてその間合いを制したものが攻撃を加えることができる。剣は懐に入らねばならず、反して槍ならば離れた場所からの攻撃が可能。槍に限らず、弓や銃などもそうなる。間合いが長い武器は同時に相手からの攻撃から自動的に引き離されるのだ。

「くうっ!!」

「やああああ!!」

洪水のように荒れ狂うような連続の突き・振り・払い、力があれば刀で抑えることも可能ではあるのだが、運悪く槍先は全てを焼き切るレーザー。一度横へ振られてしまえば意図も簡単にレーザーの弾丸が自身を貫く。だが、だからと言って諦めるようなことをする女でも、理論的に打破する方法を考える女でもなかった。

「ならば、ただ突き通す!! 道理などいらん!!」

「なあ、箒さん!？」

レーザーに碎かれる物理シールドを知らぬと機体制御下から切り離し、そのままの加速のまま投げつける。そして、刺突の体勢のままでセシリアへと全力の加速で・・・上空から、それこそ捨て身で突っ込んでいった。その一閃はセシリアのシールドエネルギーを大きく削ったのだが、同時に打鉄が糸の切れた人形のようにその動き

を止める。見れば、腹部にレーザーの刃が突き立てられていたのだから。

「……くう、無茶を致しますわね篤さん」

「こつというのが柄でな、いや、スツキリしたぞ。礼を言う」

「いえ、わたくしこそ」

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「どうやら、残りはお前だけみたいだぞ？」

「最初から数になど入れていない！さつさと落ちろ！！」

アリーナ内に響き渡っているのではないかと思う程の叫びと同時に、合計4本のワイヤーブレードがそれぞれ意思を持つかのようにバラバラに今すぐに食らいつこうかとも言うように音羽へと先端に禍々しく感じる鈍い光を讃えて縦横無尽に襲い掛かる。いくら、機体の速度が速くてもここはアリーナという限定的な閉鎖空間。挟み込むように上下左右からの噛み付くような斬撃が逃げ場を失った疾風へと切りかかった。

「まだ、終わってない！」

「小癪な奴めえええええ！！」

独楽のように刃を外へ向けて回転しながら、アリーナの外壁を蹴りつけてそのまま4基のブースターを限界まで噴かす。三次元軌道でステップングアクセルの跳躍加速であつた、それも音速を易々と超えた証拠に円錐状に衝撃波を出しながら。連続で吐き出されるリニアカノンからの砲弾を物ともせず、周囲に迫るワイヤーブレードを回転しながら振るうス

ティール・ハーツで微塵に文字通り切り裂きながらボーデウィツヒの目前へと迫る。

「good night!」

「……つぐ、あぁっ!!」

エネルギーカートリッジを5本全て消費したスティール・ハーツの衝撃波という武器を付加した音の壁を越えた一撃必殺の一閃、リニアカノンがその巨体を碎かれ、腕部プラズマブレードはその意味も無く児戯だと言わんばかりに衝撃波で四散し、機体を散々に切り裂かれて満身創痍の身体で反対方向のアリーナの特設合金壁へと叩きつけられる。奇跡的にシールドエネルギーは雀の涙の5が残っていたが、既に機体各所からは強制解除の兆候である紫電が暴れるように迸っていた。

「へっ、ざまあみろってんだ」

すぐ傍にはどうにかスティール・ハーツを杖代わりにして立っている音羽、機体各所には衝撃波の脅威をありありと示すように線状に細かい傷が大量に走っていた。攻撃時に自身もシールドエネルギーを大量に消費してしまつたために、こちらもボロボロ。両者慢心相違であるが、音羽が有利であつた。ボーデウィツヒはいまだ立ち直れずに、動きを止めて壁に倒れ掛かつたまま。すぐに音羽が銃器を展開して一発でも入れることができれば勝利であつた。操縦者保護があるとはいへ、全身に痛みを感じるために行動に移せないでいるが……。



如月の最後の一撃を食らった途端、私の心を悔しさが覆い尽くしていた。鉄の子宮から生まれ兵器としてそだてられ、ISの登場と同時にすぐさま今度はIS用の操縦者としての毎日。それまで部隊内トップだった私は、ISの適正を上昇させるためということでの左目への補佐用ナノマシン移植が行われた。その際に、絶対に失敗しないと言われたそれが私だけ常時稼動状態、制御不能。それにより、実績は転落するかのように最下位へ。出来損ないの烙印を押された私はある日、世界最強「ブリュンヒルデ」に出会った。

「安心しろ、私の言うとおりにしていれば一ヶ月でまた元に戻る」その言葉通り、教官に従い日々を過ごして行った結果、前以上に力が実感できるほどに身についていた。それこそ、部隊内で名実共にトップへと。教官は私を闇の中から引きずり出し、光の中へと出してくれた。教官がいたから今の私がいる、だからこそ、あの弟とやらが気に入らなかった。教官の栄誉ある二連覇を無に返してしまっただあの男が。そして今、あいつに一矢報いぬまま兄と言われている男に倒されようとしている。

『力が欲しいか？全てを破壊できるほどの力が』

ああ、欲しい。この男も、あの弟とやらも倒せるだけの、力が！！

『ならば、与えよう。その力を振るえ！！』

寄越せ、力さえあれば。力さえ！！

『Damage Level・・・D・』

Mind Condition . . . Uplift .
Certification . . . Clear .

《Valkyrie Trace System》
boot .」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「これで、俺らの勝ち「うあああああ!!」 なんだよ、奥の手か?」

やっと痛みも和らいでサブマシンガン「ネフェルテム」をどうにか展開し、両手で構えて照準を合わせた。引き金を今この瞬間引こうとした途端、ボーデウィツヒが奇声を上げて機体から紫電をばら撒くように放つ。ギリギリのタイミングで空へと回避したは良いが視線の先ではありえない光景が繰り広げられていた。

ボーデウィツヒの専用機「シュヴァルツエア・レーゲン」がその漆黒の装甲をどろどろに溶かして装儒者であるボーデウィツヒをその中へ飲み込む。まるで高温にさらされた蠟人形のように形を変えるそれはもはや面影を失っていた。流動的なそれは徐々に人の形を取り、一つの固体へと姿を変えた。その仮定はISでのフィッティングやファーストシフトとは違い、形そのものを作り変えているようなものだった。確実に、異常事態だった。

「これは 暮桜! ?」

体躯はボーデウィツヒを拡大したかのような形、その右手には千冬

さんが現役時代に使っていた雪片、こちらを見下ろす顔には不気味な赤いラインアイセンサーがあった。そして、異様なまでに巨大。歩き出したかと思ったら既にその場には存在していなく、軽々とその刀を振り、俺の身体をISごと吹き飛ばしていた。その衝撃で眼鏡が外れてしまう、それに応じてか普段は停止状態の「死神の瞳^{リバーズアイ}」が強制的に起動する。どういうことだ！？

「つく、くそ、どうなってやがる！」

『緊急事態発生、試合参加生徒は即座に退避してください！』

「そう簡単に言われてもなあ、困るんだよ！」

唯一新品同様の最後の近接ブレードを展開し、構える。セシリアもスターライトを構えて頷いている。

さあ、第二ラウンドと行こうか。

70・風と雨、刃と雫の合奏（後書き）

どうでも良い作品情報

次回に持ち越しです、すみません

71・Vなんとかシステム

「ああもう！のうわあっ、へぶっ！」

さつきから灰色の巨人inボーデウィツヒの剣の猛攻に防戦一方である、セシリアの援護射撃のレーザーを剣で切り裂いて拡散とかしやがったときには凄いビビッた。今も、重い一撃をブレードで受けて転んでしまった、もう疾風のシールドエネルギーはゼロ、機体稼働のエネルギーをブスターからのバイパス接続で動かしている状況。そのために空は飛べない、教師の増援はまだか？ 箒は先ほど俺の顔を見て驚いた表情を見せるも急いで管制室に報告に行った。ああ、これは説明会の開催決定ですね、わかります。

「うおおおおー！！」

「あ？一夏！？」

「一夏さん？」

見れば威勢の良い声を上げながら、ピットから白式を展開して飛び出してきた一夏の姿であった。どこか、あの灰色に対しての強い怒りが感じられるんだが・・・武器が雪片に酷似しているとからへんのことだろうか？まあ、自分や家族関係のことに関してのことならば俺が介入すべきことではないか・・・弾いた後に跳ね返されているのが無ければの話だが。

「いいいちかあああ、無事かあああ？」

「お、おう・・・どうしたのその顔？新しい変装か？」

「まあ、それは後で。アレ、やるんだろ？」

向こうで仁王立ちのままこちらを睨みつける（表情が窺えないのでわからないが、殺気っぽいものは感じる）それを指差す、まったくもって趣味の悪いシステムだな。なんか噂に聞くV・・・C?いや、Bか?ああ、どれでも良いや。ちなみにビタミンCって単体だと凄い酸っぱいらしいぞ。そんなことを考えていると灰色のそれがずっこけたように見えたが気のせいだろう。

「決まりましたわね?でしたらわたくしは後方から援護しますので、お二人で止めてくださいな」

「了解。一夏、お前が決めるよ?お前のしたいこと、なんだろう?」

「ああ、ありがとう」

セシリアはブルー・ティアーズを精密狙撃モードに変形させる、脚部関節と姿勢制御が自動に切り替わり、セシリアのヘッドセットが右目へと光学照準機を展開する。

同時に白式が握る雪片式型が刃先をスライドさせてエネルギーを消滅させる最強の光刃を伸ばす、俺もステイル・ハーツの薬室に5本の予備カートリッジをスピードローダーで装填する。奇跡的に1セット残っていたことに感謝だ。あれ、でもさっき残弾0って表示されてたような・・・まあ、いいや。

「じゃあ、ささつとやるか」

「ええ!」

「ああ!」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「な、あれは・・・!?」

「く、VTシステムか・・・よりによって」

国際条約で禁止され、今では開発・研究をしている機関はどこにも無いはずのIS用内臓型兵器。IS世界大会である「モンド・グロツソ」での部門優勝者であるヴァルキリーの戦い方全てを鏡写しにトレース、状況に応じて対応した攻撃を自動で行うというもの。起動時には搭載しているISの装甲をトレース先のISに擬似的な作り変えを強制的に行い、可能な限り近づける。その際に操縦者はISを起動するためのキーとして扱われるため、VTシステム起動時には装儒者の安全など考慮されない動きをする。ISが動くために生きてさえいればいいのだから。

「試合中止、アリーナから退避しろ！山田先生、教師部隊の準備を！」

「は、はい！え、織斑君!?」

見ればアリーナへと入るピットの一つから一夏が飛び出していたのだ、それも白式を展開して。確かに、あのVTシステムはかつての専用機「暮桜」に酷似している「雪片」まで真似ている。確かにコピーとはいえ、あのころの私のコピーだ、生半可な技量では簡単にあしらわれるのは確実だ。

「一夏・・・」

ただ、弟の無事を祈りながら私は作業へと戻った。頼むぞ、如月・オルコット。

□ ■ □ ■ □ ■ □

Vなんとかと幾数回も切り結び、大振りになったところにセシリアの関節を狙った正確な射撃で翻弄する。どうやら、やはり機械らしく変則的な射撃に対応しきれずに数発も受けていた。加速したステイル・ハーツの刃で受けている。そして、最後の一発で思い切り切り上げる、弾かれた雪片が空を仰ぎ胸部がから空きになる。そこへ疾風の残存エネルギーを込めた蹴りをお見舞いして後退させる。

「一夏ああ!!」

「任せろお!!」

サーカスのように地面に垂直にジャンプし、その降下時に雪片を握る右腕を切断。その勢いを殺さないまま、最大の零落白夜の刃が灰色の偽者を一太刀に切り伏せる。ばくりと割れてその中から助けを請うような弱弱しい目をしたボーデウィツヒを一夏が抱きかかえている。

「・・・殴るのは我慢してやるよ」

まあ、ここにいるのは誰も非情に追い討ちをかける人間はいない。あ、俺だけは時と場合によるがな、害成す存在が相手ならば手加減しない。だから財政界では裏で悪魔って言われるんだが・・・お前らだって今まで散々やってただろうがって話になるんだがね？別に、そう待遇は悪くないところに左遷したりグループに取り込みしてるだけだし。現場の意見を反映してるだけだしなあ、って気づけばここどこよ？

□ ■ □ ■ □ ■ □

なんだ、ここ？無駄に眩しいのはわかるんだが……。あ、向
こうに一夏とボーデウィツヒがいるな。

『強さつつーのは心の在処。まあ、自分がどうしたいかっていう信
念だと、俺は思う』

—そう、なのか？

『そりゃあ、そうだろ。自分がどうしたいかも決めていないんじゃない、
強さ以前に歩き方も知らないだろ』

—歩き……。方……

『どこへ向かうか、どう向かうか。さ』

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねえ遠慮なんか
しないほうが儲けものだぜ』

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

—では、お前は。なぜ強くあろうとする？

『強くなりたいから、それに強くなったらやりたいことがあるんだ』

—やりたいこと？

『ああ、誰かを守ってみたい。俺の全てを使って、ただ誰かのため
に戦ってみたい』

―あの人のようだな・・・

『だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデウィット』

あ、あいつ、またフラグを建てやg（ry

□ ■ □ ■ □ ■ □

気づけば一夏は手を振って退場、何時の間にかスッキリした顔のボーデウィットと向かい合っていた。

「で、どうよ。色々人の意見知って」

―ああ、どうやら私は嫉妬していたのだろうな。

「そりゃあ、また。千冬さんも言うねえ」

―まったくだ、教官も一人の姉だったのだと理解していれば・・・

「今、すっかり分かったんなら。それで良いんじゃないか？人間誰だって間違いはあるさ」

―そうなのか？

「おう、あの千冬さんでさえ緊張すればコーヒーに塩を入れるしな。まだ若いんだし、間違いがあってもいいのさ。一個上の俺が言え

ることじゃないがな」

「う、うあ……」

気がつけば見知らぬ天井の部屋、そのベッドに横たえられていた。近くの窓からはオレンジ色の陽光が流れ込み、淡い朱色に床を染めていた。どうやら、長い時間眠っていたようだった。

「目が覚めたか」

「は、はい」

ベッドの傍にある椅子に座っていたのは、敬愛してやまない教官。その声を間違うことなどない。

「全身に無理な負荷がかかったことによる筋肉疲労と打撲がある、しばらくは無理しないでおけ」

「了解しました」

「おいつす、ラウたん元気かい？」

突然ドアをバシンと音が響くほどに開けて部隊内騒がしいGP一位のジャクリーヌが入り込んできた、相変わらず騒がしい。正直このテンションは苦手である……が、どこことなく嫌いではない。

「ウエルキン……丁度良い、アレの件は説明任せる。まだ仕事が残っているのではな」

「あいあいsへブンツ!!」

「教師には敬意を持って接しろ馬鹿者」

幾度も聞いた出席簿の振り下ろされる音が鳴り響く、思わずそれを見て笑ってしまった。

「ああ、ボーデウィツヒ。言っておくことがある」

「は、はい!」

「お前は私にはなれないぞ、こう見えて心労が絶えないものでな」

□ ■ □ ■ □ ■ □

その後、終始騒がしいジャクリーヌの説明によるとレーゲンにVTシステムが秘密裏に搭載されていたらしい。それも、私の心が引き金となって起動したと。今になって後悔しても、もう遅い。事は重大で近々にドイツ軍にIS委員会経由で調査が行われるらしい。

「そうか、わかった」

「おろ、素直だねえラウたん?」

「ああ、『音兄』とやらに教えられたからな。次は無いようにするさ」

そう、二度と今回の過ちは犯さない。次へ生かせと、教えられたかな。

71・Vなんとかシステム（後書き）

どうしても良くない作品情報

一夏のフラグ立てが無理やりになってしまいました、すみません

72・事件の後は（前書き）

なぜか、この作品お風呂シーンが多いんですよ

72・事件の後は

「……まあ、つまり俺自身良くわからないと」

「音兄が調べてもわからないんじゃないかとしようもないか、でも、身体に害は無いんだろ？」

「おう、全部調べたがそういうのは無かった」

現在、右目のアレを見ちゃった一夏に説明にならない説明中（結局これってどこのだよ？）知っている限りの情報を確認の意味も兼ねてだが、5年前からはば進歩無し。名前が「死神の瞳」^{リーバースアイ}っていうのとドイツの越界の瞳に比較的に機能が似ているというくらい。製造IDも無かったから事実上不明、正直はつきりしてほしいところであるのも事実だ。

「なるべく不確定情報を人に言いたくないんでな、スマン」

「良いよ、何も無いようにって黙ってたんなら責めやしない」

「まあ、何事も無くて安心ですわ」

まあ、セシリアの言うとおりか。平和に過ごせるのならば身体のことなんて細かいこと気にしなくても良いものな、おや、山田先生が走って来て……。転びましたね。慌てて走って転ぶ程度の能力でもあるんだろうか？なにその役に立たない能力。

「あ、丁度良かったです。今日は男子の皆さんに朗報があるんです！」

む、朗報か？はて、なんだろうか……。まだシャルルが（女）ってことはバレてないからそれは違うとして、部屋割りは今で問題ないし、一体なんだ？

「今日から毎週一回はお風呂に入れるようになりました!!」

「・・・・・・・・」

「あれ、音兄？」

「・・・・・・・・」

「いいいいやつはあああああああ!!風呂だってえ、よしじゃあ早速!お先に一番風呂貰うぞー夏!」

あまりの嬉しさに色々忘れている気がしてならないが、細かいことなど気にせず俺は地面を蹴って風呂用具を取りに自室へと向かった。まあ、凄い重要なことをすっかり忘れてしまっているような気が壮大にするが・・・・まあ、大丈夫だろう。一夏が後ろでなんか焦っていたがどうしたんだろうな？

□ ■ □ ■ □ ■ □

「お、音兄・・・・・・・・行っちゃったし・・・・・・・・」

「やはり風呂好きは変わってないですね・・・・・・・・」

どうやら、音兄はイギリス在住時から風呂好きらしかった・・・・そんなセシリアがなぜか「今がチャンスですわ!」とか言っていたのは気にするなとい本能が言っていたのでそうしよう。まあ、何をするかはわからないが頑張れセシリア。

□ ■ □ ■ □ ■ □

カポーン

IS学園一学年用大浴場、その第二を一人で豪勢に貸切状態で総ヒノキの浴槽に浸かっていた。一度に100人が余裕で入浴できるといふほどの広さであり、声が良く響く。しかもこれが二つもあるのだから驚きだよなあ、あゝ癒されるゝ」

「ゝ」

IS学園にはほぼ強制的に入学されて早くも2ヶ月、その間ずっと毎日シャワーだけの生活だったのだからテンションが上がって歌も歌っちゃうというものだろう。銭湯で近所のおっちゃんといわい今でもやってるがな、はゝ、疲れがとれる。

「あ、そういえばシャルルはどうしたろ？・・・第一に力スタム？の反応、間違いないシャルルだ（キリッ）」

まあ、別に一夏ならいかがわしいことなんてしないだろう。あのヘタレなら、誘いどころか据え膳すら食わないだろう。まあ、俺もしないが。今はこの貸し切り状態を楽しもう。風呂は命の洗濯とかのレベルじゃないよな、うん。

カラカラカラ

あゝ、そうそう銭湯でもだけこの戸が開けられるときの特徴的な

音。これもまた一つの癒しである、しかも浴場が広いから良く響く。ぴたぴた綺麗な足音がするが、誰だろうか？一夏は・・・違うな、シャルルも・・・うん、第一に反応あるから違うな。・・・・えーと、IS反応がするのはわかるんだが、専用機持ちってことはわかった。

「湯加減はどうですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ガフツ！！」

濃い湯煙の中から突然現れたのは、髪をほどいてその身にタオルを軽く巻きつけただけのセシリアだった。制服を着ているだけでも美しかったそのボディラインは薄いタオルのおかげで際立ち、どこかドキツとさせる。そんなものがいきなり視界に入ってきたものだから、思わずどこぞのメイド長みたいに少し鼻から忠誠心を出してしまった。

「な、なんで？今日は男子だけのはずだが」

「いえ、お背中流してさしあげようかと思いましたが」

「マジか、それは是非とも頼む！」

まさか、念願の夢がここで叶うとは・・・・・・初めて神とやらに感謝したよ。シャワー台に移動すると、早速セシリアがボディソープを適量付けたタオル・・・・・・にしてはどこか柔らかいような気がするが。まあ、そういうタオルもあるんだろう、いつだかスーパ―で「ふわ ふわバスタオル！！」とかいうのがあったことだし。はあ、幸せだ。

「はあ、はあ。どうですか？」

「うん、気持ちいい、ありがとうなセシリア」

「いいえ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

その後、浴槽に並んで浸かる。セシリアが寄りかかってきたので優しく受け止める。

「それにしても、こうやってゆっくりできるのも久しぶりかもなあ」
「そうですね、音羽はいつも動き回っていましたもの」

執事兼護衛としてオルコット家に仕えていたころは、毎日のようにセシリアを狙う襲撃者を本邸で一回・出かけ先で三回・やりかけを未遂で終わらせるのに5回と慣れてはいたが傍目から見れば忙しい日々を送っていた。それこそ、セシリアと二人で話しをしたりしてまったりできるのも1週間に一回あるかどうか、神経張り詰めての毎日だったから一日の仕事が終わればすぐ就寝。我ながら良くやってたなあ……。

「まあ、まさかここで再会できるとは夢にも思ってたからなあ」

「それは私だって同じですわ、喉と会えないと思っていたのですから。……今はこうしていても良いですか？」

俯いてはいるが、涙を流しているのを俺は見逃さなかった。ああ、俺が思っていた以上に寂しかったんだろうな、俺だって寂しかった……。って、俺まで泣いてやがる……こんなに、安心して。やっぱ、セシリアの存在は大きかったんだな、俺にとって。

「ああ」

セシリアが体を俺の胸に預けてきたのを強く、強く抱き締めた。二度と、どこへもいかないと言わせないでここに居ると言い聞かせるように。 恩人の娘だからという理由だけじゃない、俺が一番守ってやりたい大切な人として。

今は、この小さな幸せをしっかりと享受しよう。

72・事件の後は（後書き）

どうでも良い作品情報

第一浴場で例の二人は原作通り

73・波乱の終幕・・・か？（前書き）

後半がさびってしまった

73・波乱の終幕・・・か？

まあ、あの後ゆっくりしたよ。今まででおそらく一番、ジャックがすれ違いざまにニヤニヤしていたんだが・・・まさか、混浴状態だったこと見られたのか？俺の裸体なぞ、見られようがどうでも良いが例えジャックとはいえセシリアを見たのならば生かしておけん。見れるのはお互いに心に決めた者だけ・・・あれ、それだと俺もだな？

□ ■ □ ■ □ ■ □

あれから一晩明けて、何時もどおりの朝がやってきた。普通にセシリアと並んで登校、一年一組の教室へと入る。なぜか自然に腕を絡ませてきたが、そう気にも留めず歩いていたのだが・・・それを見たらしい周囲の女子がキヤーキヤー騒がしかった。普通女性をエスコートするのが男の役目だったと記憶しているが、なにか間違っていたんだろうか？

「おはよう一夏。あれ、シャルルはまだ来てないのか？」

「おお、おはよう音兄、セシリア。なんか先に行つててだつてさ」

「はい、おはようございます」

そういえば、なんかセシリアが昨日。正確には風呂上りからテンションが高い、変なものでも食べたんだろうか、そういうのを食べはしないだろうが・・・心配だ。あれ、ボーデウィツヒもない。まあ、全身に筋肉疲労だったか、しかもあれだけの攻撃食らって普

通にするのが難しいか。さあて、そろそろSHR始まるし席に着くとするかな。

「ふう、窓側つてのは落ち着くな」

なにせ、広大な敷地を持つIS学園の自然満載な景色を一望できるんだものな。どこぞの高層ビルの上階にある高級レストラン（2流）の夜景より綺麗だぞ、日が沈んでから一杯杯を傾けたいものだが生憎俺は未成年。あれ、でもIS学園って治外法権だからもしかしてオツケーじゃね？よし、そのうちにでも千冬さんや山田先生でも声かけてみるか。

「ふむ、そうなるとワインと日本酒の調達が必要だな。よし、白と赤一本ずつにチューハイケースでももっつ！」

瞬間、頭にマグナム弾でも撃ち込まれたかのような衝撃が襲った。視界が回復したところには円を描いて出席簿が世界最強でブラコンの鬼の厳しさを持つ我らがクラスの担任、千冬さんの手元にパスツと音を立てて収まっていた。絶対に出席簿の正しい使い方じゃないと思うんだ、頭に当たったときに音が鳴らなかったし。どこまで違う使い方を極めるんだろう・・・？

「貴様が教師を無視するからだ、馬鹿者」

「はい、すみませんでした」

ナノマシン配合整髪剤で整えたサイドテールを揺らしながら本気で謝罪する、ちなみにこの特殊整髪剤を使えば約十日間手入れをしなくても良い。忙しい朝にも化粧を欠かさない世の女性の髪の手入れの味方だ、まあ、忙しいからっていう理由で自分のために作ったのを化粧品会社が商品化したいってやったやつだがな。近所のスーパ

「で500mlのボトルで1200円だ、キャッチコピーは「働く女性の味方、誕生！」だったわけか。まあ、今はどうでもいい。どこまで産業進出するんだとかいう声が聞こえるが気にしない。」

「さて、今日は転入生を紹介します。いや、もう皆さん会っているというか、紹介済みと言いますか・・・」

いや、紹介済んでるんなら転入生とかではないと思うんだが。日本語おかしくないか？というか、会ってるって、それだしたらこれは一体何よ。クラスの大半が状況を理解してないらしく、あちこちで「どういうこと？」とか「どういう状況！？」とか聞こえる。俺だって知りたいがな、まあ、その転入生が出てくれば全部解決だろう。

「それでは、どうぞ」

凄い山田先生が疲れきってるんだが、よろよろという擬音語がピツタリなくらいに。良い温泉でも後で紹介してみるかな、っとその話題の転入生が入ってきたな・・・。

「改めてよろしく願います、シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです！」

あ、あゝ、性別本来ので再転入ってことね。思ったより早かったな、まあ、別に何時でも俺にはそう影響は無いから良いけど・・・。クラス的女子が騒ぎ出したな、昨日の男子の浴場利用に話に移り始めて視線が一夏と俺に刺すように集中する。痛い、痛い、睨みつけるような視線がズキズキ痛い。遂に視線も物理干渉ができるようになってたのか、全然嬉しくないぞ。

ドカーンッ！！

すると、突然教室前方の扉が爆発、そこからIS「甲龍」を展開した鈴ちゃん（怒りモード）が侵入してきた。扉が「解せぬ」って言うて吹き飛んだ気がしたが、修理はどうするんだろうか。というか、学校の施設を壊すなよ。

「いいいちかあああああ！！」
「な、わ、やめ

衝撃砲が上下にスライドし、空間が歪む。やべ、不可視の弾丸があるな2、3歩の距離で撃たれたら一夏が赤いシミになってしまう。後の掃除が大変だ、即刻止めなければ！！

「そつち！？」
「鈴ちゃん、それはダメだ！！」

しかし、聞く耳もたず。一夏へと弾が――

届かなかった。

「間に合ったな」
「あ、ら、ラウラか。助かった」
「礼には及ばん」
「いや、ありがとむぐう！！？」

残っていたスペアパーツで組みなおしたレーゲンを展開し、ラウラがAICで一夏を衝撃砲から守った。あの状況からの即座の展開と目標捕捉、流石だな。なんで一夏の胸倉掴んで見てるこっちが恥かしくなるようなディープなキスをしているのかは知らんが……

一夏はパニックで動きが止まってるし、その後ろでは腹を空かせた金魚のように口をパクパクしている鈴ちゃんがいた。

「お前を私の嫁にする、異論は認めん!!」

「・・・ボーデウィツヒ、そこは婿じゃないか？」

「ツツコミ所はそこでは無いと思いますが・・・」

あれ、一夏を抱きかかえたままボーデウィツヒが俺の方へ歩いて来た。ひとまずISは待機状態にしようか。脚部パーツが接触した机がヒビ入ってるから。

「音羽お兄ちゃんと呼ばせてください!!」

「は!？」

「いえ、あれこれ調べた結果。お兄ちゃんであると判明いたしました!!」

「・・・あ、そう。そうなら良いんじゃないか？」

クラス中の視線が突き刺さる、ズキズキどころかガリガリになってえ、というか、お兄ちゃんって、調べたらってどういうこと!!？

「・・・お前ら全員吹き飛ばやあ!!」

「ふふふふ（ギロリ）」

「へへ、キスしちゃうんだ？」

「どういう意味か、教えてくださいますね？」

ひとまず、考える暇もなく少女4人にボコボコにされたと言っておこう、あとお兄ちゃんの意味って何？教えて、妹（仮）よ!!！

73・波乱の終幕・・・か？（後書き）

どうでも良い作品情報

お兄ちゃん（仮）の説明は次回に

74・シリアスはあっさり消化（前書き）

あとがきにしっかりとした要約あるので、ほぼ飛ばしてもok
説明回です、そういうのがダルイ方は普通にスクロールしてあとが
きで

74・シリアスはあっさり消化

「……で、調べたらお兄ちゃんってどういうこと？」

「はい、これを……」

現在、俺の部屋でベッドに腰掛けてラウラ・セシリア・俺が座っていた。丁度、ラウラが「お兄ちゃん」発言をするにいたった理由が記されているらしい書類を手渡してきた。あ？これって遺伝子強化体の開発計画書と系譜……へへ。

「私は、遺伝子強化体ですが、その計画の前身がこれです」

そう言つてラウラが指差したのは『抹消済み』の印が押された一つの紙の束……「戦闘特化^{エクステンデッド}遺伝子強化披検体計画」という物、抹消済みとかつてことはこれ持ち出して良いものだったのか？そして、ラウラが淡々と説明を始めた。

□ ■ □ ■ □ ■ □

兵器開発、それは戦乱が起こるときに必ずと言っていいほど一番発展する分野である。それ以外には軍備増強による外交・国防を有利化するため、人類の歴史にそれが載らないことはなかった。

そして、それはここドイツに置いてても例外ではない。しかし、兵器開発は世界中で停滞期を迎えていた、銃器は基本構造はほぼ変わら

ず、新たなシステム機構も開発されず。戦闘機は高速化にも限界が近づき、艦船は基本部分は変化無し。索敵装備も技術の限界、兵器と名の着く物は発展を止めていた。

そんな時、ある科学者が言った一言がそこへ希望の活路を見出しました。

「使う人間を高性能化すればいい」と。

そこから人体の一部機械化、感覚・運動神経の光ファイバー化による身体能力の上昇など。およそ、人道的ではない悲惨な研究が始まった。ある者は脳内にコンピュータを埋め込まれて異常な計算能力を、またある者は全身の筋繊維を人工の物に置き換えられて異常なまでの筋力を、さらには当時実用化されたばかりのナノマシンを使って身体への負荷を考えずに人外的能力をもたらされた者。

そんな、人の命を弄ぶような実験・開発・研究が幾数年も一度も目の見ないまま続けられた。失敗作は殺処分、成功体は研究用のモルモット。それも、死刑が決まった囚人だけに留まらず、浮浪者から、捨て子、育児放棄され施設へ預けられた子供まで。必ずと言って良いほど、実験に使われた者は誰一人として人の形を残していなかった。

しかし、それも長く続かない。実験材料の人間を調達することが難しくなってしまったのだ、そしてそこで新たに提唱されたのが「人間を造る」方法。後天的にやらず、最初から求めるスペックを持った人間の形をした物を作れば良いと。

そうして持ち上がったのが戦闘特化遺伝子強化披検体計画、要望さ

エクステンデッド

れるスペック通りに世界中からサンプリングしたDNAを組み合わせ、
せて培養液内で人の形に造りあげる。視覚を強化したければ、視力
が良い人間のDNA配列の部分を組み込む。反応速度が欲しければ、
神経のパルス伝達速度が早い配列に組み換える。

「欲しい機能を選んでコーディネートする」

それが開発計画の目標であつた、しかし、そこで一枚の大きな壁に
ぶつかる。いくらDNAの配列がしつかりと完成しても、その通り
に細胞が定着、成長しない。設計図が仕上がってもその通りに製品
が組みあがらないのだ、人として出来上がっても能力設定が反映さ
れない、能力が反映されても奇形で生まれて使い物にならない。ス
ペックが希望通りに定着しても、培養液から出した途端に大気圧で
細胞の結合が崩れて即死など日常茶飯事であつた。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「そこで、再び一人の開発者が禁忌に手を出したんです」

「禁忌？」

「はい、最初から基本的な細胞が定着している胎児を素体に使った
んです」

□ ■ □ ■ □ ■ □

ほぼこれから人になっていく胎児、それも中絶されて排出された物を
大金を積み口封じして手に入れた。成長途中であるその遺伝子

配列をそれまでのデータから最適な設定にして、人工子宮で通常の胎児のように育てる。これまで以上に無いほどの設定の定着に、開発者たちは狂喜した。

それから、10ヶ月、無事に生まれた^{完成し}35番目の披検体。要望された高い身体能力と自然治癒能力、人間の1.3倍に設定されたそれは兵器運用とすれば十分な範囲であった。すっかり感情を持ち、思考して自身の意思で行動する。計画が持ち上がって8年、やっとな成功体一号の誕生であった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

そして、それに味を占めた研究者たちは平行して進めていた二体目を同時期に製造。36番目の披検体も同じく成功、しっかりと成長し実用化可能なレベルまで二体が育った。本当の兄妹のように育った二体が配備されるというその日、上層部からの命令があった。

「ISに対抗できるように作り直せ」

そう、そのころは既に白騎士事件によりISが普及しはじめた頃。強化兵士ではなく、高性能なIS操縦ユニットを欲していたのだ。それにより、成功したうち、女性体である36番が性能調整のために調整槽へ。男性体35番は、当時の技術を使用した擬似ハイパーセンサーを移植。

しかし、非人道的な研究が政府の表組織に露呈。外交への影響を懸念し、研究所を秘密裏に処分。エクステンデッド計画は事実上の消

滅、奇跡的に二体の披検体は事前に察知した善意を持った新人研究者につられて兵士を迎撃しながら移送された、その後消息は途絶える。

アドヴァンスド

残された開発要項などが後に遺伝子強化体の開発の骨格として流用された。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・で、その35番目が俺だと？確かに右目のこれはそういう類だが」

「ですから、最終確認です。うなじの管理コードを見せてください」

仕方ないので、制服を上着を脱ぎ捨ててうなじのバーコード（キャベツ56円）を見せる。セシリアが沈鬱な表情だったのが一気に瞬間湯沸かし器のように沸騰して真っ赤になる、昨日風呂入ったんだからそれくらいで恥かしがられても困るんだが。

「では」

「頼む」

ラウラが研究所から回収された識別用端末のリーダーをかざす、スピーカーで良く聞く読み取り音がピツと聞こえる。画面に表示されたのは・・・「N-35」の文字列だった。良かったあ、キャベツじゃなかったよセシリア。

「はあ、じゃあドイツの謎の組織がたまに遊びに来たのは・・・」
「国益になる存在ではないですから抹消のためかと、しかし大きな

影響力を持ったから」

「手出しを止めたと？まあ、何も無いにこしたことはないか」

はあ、まあ、そりゃあアナログ媒体で無い事にされてれば調べてもわからないわけだよ。

「まあ、これではつきりしたあ」

「ええ、長年の胸の悶えが取れましたわ」

「……お義姉さまは気にしないのですか？」

「はい、何だったとしても受け入れる。それに、音羽は音羽ですわ！」

「心配ご無用でしたね、でも、良かったです」

心から安堵しているのが良くわかる、まあ、普通は嫌悪されるか差別されてしまうかだからなあ。え、正体があっさりしすぎだって？世の中そんなものだろう、十分深い気がしなくもないがな。

「まあ、これで一件落着……か」

「はい、私が政府に正式に書類を送ればお兄ちゃんは今大丈夫です！」

「うふふ、可愛い妹ですわね」

「じゃあ、その可愛い妹連れてご飯行こうか」

「はい！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

まあ、読者向けに分かりやすく要約すれば「生まれた順番的な意味で実質のお兄ちゃん」らしい……。読者ってなんだ？また俺は電波でも受信したんだろうか、どうでも良いか。

「ところで、嫁ってのはどこから来たんだ？」

「部隊の部下だ、クラリッサという頼りになる仲間に教えてもらいました。日本では好意を持つ相手にそう宣言するものだ」と

ひとまず、お兄ちゃんとしてやる仕事が増えた……。

74・シリウスはあっさり消化（後書き）

補足

ラウラのような遺伝子強化体の計画の前身で生まれたのが音羽、前身の計画のノウハウが生かされたために実質、妹のようなもの。

腹違いの兄妹のようなもの、と考えればわかりやすいです（不謹慎な説明のしかたですが、作者の説明力の限界です。申し訳ありません）

生かすため、その過程に音羽はイギリスへもう一人は・・・

75・来ないと思ったら・・・（前書き）

運の悪さスキルが久しぶりに発動です

ギャグにしようとした結果がこれだよ！

75・来ないと思ったら・・・

た~~~~り~~~~り~~~~（ネクロファリー）　ガスッ！

目覚まし時計のボタンを叩き、永遠に音を止めてあげた。身体のことを俺を知る人物、一夏・鈴ちゃん・美月・千冬さんに説明したところ、「そうか」だけ言われて普通に流された。一夏に至っては「良かったじゃないか、家族が見つかった」だとさ、リアクションが薄すぎてこっちが驚いたよ。いや、あからさまに相手の仕方が変わったらそれはそれで嫌だけどさ。で、この状況は何？

「・・・・・・んう・・・・・・んふう・・・・・・」

「はふう？」

いやあ、シャルル・・・・・・シャルロットが本来の性別を明かしたために一夏と同室になった、のは良いのだが・・・・・・。一夏がもそもぞ動いたのと俺が目覚まし時計を粉碎したのとで誰かの声が聞こえたぞ。しかも女の、いや、男だったら怖いけど。俺にも一夏にもそういう趣味はない、というかIS学園に俺ら以外に男子はいない。

「・・・・・・なあ、一夏」

「・・・・・・なんだ、音兄」

「俺は今、非情に幸せだ」

「死ね」

だ、だって、あのセシリアがなんかネグリジェで乱れちゃってるけどがっしり抱きついてきてるんだぞ？これ以上の男の幸せがあるものか、って・・・・・・一夏のほうはラウラ・・・・・・パジャマとかちゃ

んと着ておこうね、風邪引いちゃうから。身体健康管理は大事だぞ、今の頃にお腹を冷やすと将来子供を産むときに良い事が無いからな。俺だって妹の子はしっかり健康に産まれてほしいからな、そのためにもちゃんと服を着て欲しいぞ？

「うん？もう、朝か・・・」

「ば、馬鹿！隠せ！」

「しかし、夫婦は何事も包み隠さないものだと教わったぞ？」

「ラウラ、将来良い子を産みたいなら裸は止めなさい。あと、それは物理的な意味じゃない」

「・・・はい、わかりましたお兄ちゃん！」

うんうん、しっかり言うこと聞いてくれる妹が俺は大好きです。え、たった一晩でなんでそこまでって？家族だぞ、家族、時間なんて関係無いのさ。ただ、ラウラがセシリアをお義姉ちゃんと呼んでいたのが気になる、満更でも無さそうだったから別に良いけどな。・・・ひとまず、セシリアを起こさない限り俺が動けない。

「セシリア、朝だぞ。起きろ」

「ん、んう・・・んにゅ、音羽あ？」

「はうぐああ！！」

ギリギリと音がするほどに抱き締められるのは正に本望なんだが、如何せん場所が間違いだった。首に手をかけてられているために息が出来ない、く、空気が、酸素が足りない。うぐお、緊急時用のナノマシン

まで起動しやがった！って、時間稼ぎ以外の何物でもないっての・・・

「――！！！！きゅう」

「わー！！音兄！！」

「お兄ちゃん！！お義姉さま、お放してください！！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「うぐ、朝から酷い目に会った……」

「う、すみません……」

早朝にセシリアが抱きついた状態という幸せの絶頂（大げさか？）に遭遇していたにも関わらず、そのセシリアに抱き締め（首的意味で）を食らい、緊急時用のナノマシンまで起動する事態になるも時間稼ぎにしかならず酸素不足で気絶。始業時間ギリギリに目を覚まして今、教室へ向かって飛んでいるところ。

一夏とmyシスターは置手紙とおにぎりを残して先に行ってしまった、いやまあ、仕方ないだろう。遅刻したら鬼の洗礼を受けることになる、逆の立場だったら俺も先に行く。

「ぬおうああああああああ！！！！」

まだ寝ぼけているセシリアを着替えさせるのに手間取った、おにぎりを「はい、あーん」して食わせるのに時間かった、まあ、何が良いたいかっていうと。時間が半端なく危険域ってことだ、ISを展開しようにも先日にもトーナメントの中止が決まったと同時に疾風は返却、まあ、事前にトーナメントが終わったら返却予定だったのが早まったただけなのだな。

「ブーストオオオ!!」

まあ、正確にはジェットパックのアフターバーナー装備っただけだな!? その速さは、時速450kmに相当する。すっかりゴーグルを装備しているから問題もないし、こういう速さには生憎慣れている!! 間に合え、あともう少しで着くんだ!!

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

音兄は大丈夫だろうか、もう始業時間まであと30秒。千冬姉が珍しくまだ教室に来ていないからまだチャンスはあるかもしれないが、いつ状況が変わるかも知れない。さっきからラウラがせわしくなく、小型無線機で音兄に連絡をとろうとしている。急いでくれ音兄!

「くっ、応答しないな・・・お兄ちゃん・・・」

「いや、諦めるな。まだ時間はある!!」

「フッ、そうだな。嫁の言うとおりだ、もう一度!!」

俺はどうにかすることはできないが、祈ることはできる!

そして、始業5秒前、奇跡は起きた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

「っだああああ！！到着ウ！！」

覚醒（起床的意味で）したセシリアを勢いそのままに席へと放り投げ、俺もジェットパックを格納して床を蹴り跳ね上がる。そして、放物線を描きながら自分の席へとストンと着席。この間5秒。フツ、この程度の動きなんぞ朝飯前だ、もう朝食食べたけど。というか、執事時代に泣いたセシリアを笑わせるために無茶をし続けた結果だな、そしておそらくミリアさんのありがたい教えのおかげだと思う。

「おおー！！」

「凄い、凄いわ音羽君！！」

「流石音兄だ！」

「お兄ちゃんカッコいい！！」

「アレって人間にできる動きなのか？訳有りの身体だとかの問題じゃない気が・・・」

「流石、音羽。私の鍛え方は間違ってたようね」

なんか、最後に良く見知ったゴーストさんがいらっしやるような気がするがスルーしとかないと色々大変だからスルーしておこう。というか、最近出すぎじゃないか？シリアスがシリアルどころかコメデイになってるぞ、いくらなんでもおかしいだろう。

「む、揃っているな。SHRを始める」

千冬さんがいつもどおりに入ってきた、何故か山田先生がいない。話を聞くには臨海学校の現地の下見に行っているらしい、帰ってきたら温泉の感想でも聞かせてもらおうかな。山田先生も温泉大好き

って言ってたし、仕事とはいえ一風呂入ってくるだろう。というか、もう今週末か早いな。

「あ、すると水着を買いにいかねばならないか……むう」

ひとまず、今日も一年前に修めた普通科目か……。単位は藍越のが引き継がれているから参加はしなくても良いのだが……。他にすることも無いから情性で受けている。まあ、ノートに書いているのはナノマシンの新案とかばかりで仕事モードになってしまっているんだがな。

「さて、始めるぞ」
『はい！！』

まあ、今日も頑張ろうか。

75・来ないと思ったら・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

身体能力が基礎的に高いことよりミリアさんに鍛えられたことのほうが影響は大きいw

76・お買い物♪（前書き）

わ
い、短いやw

76・お買い物♪

「いや、天気良くていいお出かけ日和だなあ」

「そうだね、お兄ちゃん」

「そうですね、せっかくですし今日は昼食もどこかで摂りましょうか」

今日は臨海学校に合わせたの準備期間、前日であるが臨時の休日とされている。三人で来た駅前のショッピングモール「レゾナンス」にはちらほらとIS学園の生徒の姿が見える。持つて行く物などはほぼ全てが揃ってしまっただろう、なにせ「レゾナンス」に無いのなら市内どこにも無いとまで言われるほどなのだから。まあ、一般的な物に限られるがな。ついでに言えば、セシリアの「はぐれないように」の一言で三人して手を繋いで歩いている。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「うゝむ、水着というのも選ぶのは難しいな」

「そう悩まなくても、気軽に選べば良いですよ？」

季節に合わせてなのだろう、どここの衣服店もショーウィンドウに色とりどりの水着を惜しげもなく店の前を通る人々に見せ付けていた。ほぼ女性用のばかりだがな、まあ、女尊男卑の社会とは言え男の物よりかはビキニなどのほうが見栄えするだろう。そんなことを考えながら一つの店の中であれでもないこれでもない俺の水着を吟味していた、いや、これは普通逆の立場なんだろうがなあ？適当な物で良いと言ったらセシリアが「もう少し考えなさい！」と怒られてしまった、申し訳ない・・・。

「よし、せっかくだから青のこれでいいか」

「ふふふ、似合ってますわよ」

「よし、じゃあ次はセシリアのでも・・・あ、俺は邪魔か？」

「いえ、できれば音羽に選んでほしいですわ」

「わかった、ラウラ、行くぞ」

「はい」

ラウラの手を引き、歩き出したセシリアを追いかけるように俺は女性用の水着売り場まで移動するのだった。ちなみにラウラは「お揃いが良い！」とのリクエストで俺と同じレフトサイドテールにしている、陽光を反射して輝く銀髪はとても美しかったと言っておこう。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ねえ？ジャック」

「はいはい？」

「音羽、手繋いでない？しかも二人と・・・」

「そうだね・・・それが何か？」

「何かじゃないわよ、あの妹ちゃんならともかくあのドリル・・・許すまじー！」

傍目からは仲の良い家族に見える三人組をあからさまに尾行しているのは、IS学園生徒会長「更識楯無」とラウラの子守を任されているはずの「ジャクリーヌ・ウエルキン」だった。手つなぎに嫉妬しているのは言わずもがな楯無であり、ジャクリーヌはそれを愉快そうに見ているだけだった。

「というか、ドリルは無いでしょ？」

「うぐぐぐ、こうなるんだっただら去年のうちに触らせておくべきだったわ」

既に嫉妬の禍々しい渦を出しかけている楯無を見てため息をつきながら、ジャクリーヌは先ほど自販機で購入した缶コーヒーを一口飲んだ。

「ふふふふ、うふふふ。でも、それもここまでよ！！ふにやつ！？」

ついでにISを部分展開して高笑いする楯無をひっぱたくのも忘れずに、だらしなく崩れ落ちた幼馴染を見てジャクリーヌは再びため息をつくのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「それでね、私の部下の一人がね。『標準装備では、色物の域を出ない！！』って言ってたの」

「・・・ジャックでは無いことは確かだが、その部下さんが心配になったよ」

「でしたら、私におまかせあれ」

セシリアがパレオとビキニの合体したみたいなもの（名前はわからん）を気に入ったようでお腹いっぱいになるまでワンオフファッションショーを堪能したあと、最後にラウラのもの・・・となったのだが。ドイツの黒うさぎ隊って色々大丈夫なのか？ジャックも「H A H A H A」としか言わなかったし、ひとまず長期休暇のとき

にでもその部下さんとお話しなきゃいけなくなっただがな！

「これはどうかな？」

「大胆すぎやしないか？」

「？」

5分ほど経ってセシリアが少々興奮気味に戻ってきた、その手に持っていたのは・・・まあ、その「大人の下着」、ランジェリーのようなそれなりに露出度が高いものだった。確かに力強さの中に可愛さと妖艶さが散りばめられているが、果たしてラウラに合うだろうか？ いや、似合わないことは無いだろうがなあ。

「これ？じゃあ試着してくる！」

「ああっ、入っちゃった・・・」

「これくらいじゃなきゃ、落とせませんでしょ？」

「・・・まあ、あの鈍感にはこれくらいが丁度良いか」

実際、そこまでアクティブに攻めて行かなければ一夏は思い気づくどころか「これなんの罰ゲームだ？」とか言い出しそうだ、いや、中学時代にそういう事件があって女生徒を慰めたことがある。あのときほど憤りを感じたことは無かったな、いや、俺も大概らしいがな。自分でも努力はしているが、やはりまだまだみたいだ。俺がモテることも無いに等しいだけかもしれないが・・・。。。

『ラウラは可愛いよ』

「「！！？」」

どこからか聞こえてきた一夏の声、そろっと聞こえた方向へと覗き込むように見てみると千冬さんがニヤニヤした表情で一夏を見てい

た。対する一夏は頬を少し染めながらそんなことを言っていた、
これは……!!

「脈アリですわ!」

「よし、これなら行ける!」

セシリアと向き合ってガッツポーズをしていたら、背後から遮蔽用のカーテンが開け放たれる音が聞こえた。揃って振り返ると……
・・まあ、そこに可愛らしい小悪魔が居たとでも言っておこう。

76・お買い物♪（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽、シスコンに進化

77・顔から火を噴くってこついつこと（前書き）

流石に「はい、あゝん」はここで使うことは断念した

77・顔から火を噴くってどういうこと

「お兄ちゃん、ここお？」

「おう、俺の行きつけだ」

「中々歴史がありそうなところですね」

そんなことでやって来たのはモノレールに乗って5分、歩いて・・・
・うん、日本移住時からの行き着けの「五反田食堂」。ラウラがここに来るまで凄いニコニコしていたし、それをセシリアはまるでやんちゃな娘を見守る母親のようにしているし・・・まあ、良いんじゃないかな？本当の親は知らないが、ミリアさんが親代わりに世話焼いてくれたしなあ、俺にとってはミリアさんが育ての親・・・そのおかげで身体能力がガチセバスとかになっではいるが・・・。

「おゝっす、弾君いるかい？」

「あ、音羽さん・・・！！？」

「・・・どうした？」

なぜか店の引き戸をがらがら開けて入ると、五反田家長男の弾君がいきなり口をぽかんと開けたまま固まってしまった。なんか、ぱくぱくやっているがどうかしたのか？ひとまず手を目の前で振っても応答しないので奥の四人がけの席に座る、いつまで硬直してるんだろうか？

「音羽さん、遂にハーレムルートを・・・」

「何を言っているんだお前は、妹と元主人だ馬鹿」

「IMOUTO？」

「おう」

「・・・そうですか、遂に音羽さんも妹持ちに！」
「そうなるな」

なにやら、弾君が見たことのないようなテンションでラウラの自己紹介を聞いていた、セシリアも続いたが異様なまでのテンションに驚いてしまったようだ。お前も妹いるからってのはっちゃけすぎだぞ？さつきから周囲の客がやれやれみたいな顔してるし・・・
・一応お前店員だろうがよ。

「あゝ、弾君、注文良いだろうか」

「はいはい、なんでもござんしょ？」

「業火野菜炒め3つ頼む」

「はいさ」

伝票に書き込み、それを持って厨房へと消えていった。まあ、その手際の良さは流石長男であると言ったところであるな、事実、本人は気づいていないがその器用さと不器用な兄貴気質は人気であった、一夏と中学時代に人気を二分していたというのも頷ける。本人は一夏のモテさに呆れて自身の状況を知らずにいたが・・・勿体無かつたんだよな。噂では高校でもそこそこらしいから頑張ってほしいものだな。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「あ、ここらがつつくな。ほら、ついてる」

「ん、ありがとうお兄ちゃん」

「わかったからゆっくり食べなさい」

思ったよりもラウラががつがつ美味しそうに食べていた、それは良

いのだが口の端に特性タレが飛んでしまっていた。見てられないので仕方なく拭き取る、セシリアがそれをニコニコと見ているのがどことなく恥かしい、いや、これはただ兄として妹の世話をしているだけであって……なんで言い訳を考えたんか俺？まあいいや。

「こういう食堂に入るのも久しぶりですわね」

「ああ、そうだな。向こう立つ前の日に寄ったのが最後か」

たしか、あのときはまだ小学生のセシリアの手を引いてたっけか。俺は茶色の長いコートにセシリアはフリルが付いた可愛い青のドレス、似合ってたよな。

「あのときはセシリア凄い泣いてたよな」

「当たり前ですわよ、永遠の別れになると思っていたのですから」

「……でも、再会できた。俺はそれがとても嬉しい」

「ええ、まさか義妹ができるとは思っていませんでしたが」

「……字面が違う気がするが、気のせいかな？」

「気のせいですわ」

「……そうか」

そういえば、明日から三日間の臨海学校……結局ラウラの荷物の準備は俺がやることになりそうだ、「代えの下着があれば十分です！」とか言っていたからな。軍事演習で何日もやりに行くわけじゃないから、あともう少し女の子らしくしようよ。おしゃれとかさ、俺は良く分からないからどうしようもないかな。

『ごちそうさまでした』

「ごちそうさまでした」

あ、いくらか声が弾んでいるのがラウラな。どうやら連れて来て正

解だったみたいだ、セシリアも満足気な顔してるし、良かった良かった。兄としても、一人の男としても上手くやれたかな？こういう経験が無いから自信はなかったが二人の表情を見れば成功だということが良く分かる。

「よし、弾君。おあいそ頼む」
「はーい」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ふふつ、今日ははしゃぎ過ぎたか」
「ずっと楽しそうに見て回っていましたからね」

現在、IS学園へと向かうモノレールに横に並んで乗っている。ラウラを挟むようにして俺が左側、セシリアが右側だ。疲れてしまったのか、ラウラは幼子のように笑みを浮かべながら俺によりかかって寝てしまっている。安心しきっているのか、いつものような鋭い気配は無く、ときどき小さな笑い声を上げながらすすうと寝息をたてていた。

「むにゅ、お義姉ちゃんとお兄ちゃんキスしてるゝ、えへへ」
「！！？」

な、なんて寝言を言ってくれてるんだこやつは……。一瞬想像しちゃったじゃないかよ、あゝ顔が熱い！セシリアの方をちらつと見るがすぐに恥かしくてお互いにそっぽを向いてしまう、あうあう、寝言とはいえ爆弾投下しやがってこいつは……。ほら、セシリアも顔真っ赤にして俯いてるじゃないかよ、いきなりそんなこと言

われれば当たり前だろうがよ。

「ま、まあ、ただの寝言だ。うん」

「そ、そそそそうですね！ええ！！」

心なしかセシリアが慌てている気がするが俺にそれを気にする余裕など無かった、いや、普通そうなるんじゃない？なんで俺がこんなに恥かしい思いしてるのかは知らんが・・・・・・あうあう。

どこか気恥ずかしいまま、二人してそっぽ向いてそのままモノレールに揺られたのだった。ひとまず、ラウラに後でお置きしておかなければとか同じように思っていたことなど俺らは知ることは無かった。

77・顔から火を噴くってこついつこと（後書き）

どうでも良い作品情報

お兄ちゃん〓音羽

お義姉ちゃん〓お察しください

78・博士は「犠牲」になったのだ

「おお、あれが海ですか？」

「そうだぞ、綺麗だろう？」

現在、一学年全員はクラスごとにバスに乗って移動していた。ラウは窓側の俺の膝の上から窓越しに見える青々とした海を好奇心満々で楽しそうに見つめていた。ちなみに俺とセシリアは昨日のことはまあ落ち着いたし気にも留めずに並んで座っている、まあ所詮は寝言。細かいことをいつまでも気にしているほど俺らは子供ではない。

「すう、すう」

「・・・」

まあ、静かなのはセシリアがなぜか俺に身体を預けて寝ているからなのだな。前日だからって楽しみで興奮して寝られなかったのだろうか、そこまで子供ではないと思うが。気にしても仕方ないか、着いたら起こしてあげれば良い話だし。ひとまず、この座席の下にある馬鹿い長を始末しなければいけないが。ステルスモードだからって分からないと思ったたら大間違いだぞ？

「久しぶりの海だな、楽しみだ」

「そうなの？」

「おう、去年は受験勉強とかで無理だったからな」

ちなみに、俺らの前の席は一夏とシャルロットである。なんだか一夏が先日プレゼントしたブレスレットの影響か見たこともないほどに笑顔だった、箒がそれを見て嫉妬どころか軽く引いていたのは記

憶に新しい。それにしても、海か・・・去年は夏休みずっとイレズドに缶詰で仕事してたし、精々休憩時に職員とキャッキャウフフ（水浴びの意味で）だけだったからな。ナターシャ（ISパイロット）が散々弄ってきたので背負い投げで海へと叩き込んだ記憶がある。

「ほら、もうすぐだ。しっかり座っている」
『はい』

千冬さんの一声で立ち上がっていた生徒や身を乗り出していた生徒がそれぞれの席へと座る、あゝ専用機の譲渡は明日だったつけか。重要人物が来るとか言われているけど、誰だろうか？

「セシリア、もう起きろ」

「ふみゆ・・・？」

まあ、ひとまずは初日の自由時間を楽しむとしようか。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

ほどなくして、山に囲まれた自然のビーチの中央に居を構える旅館の手前でバスが並ぶように止まった。なんでもこの「花月荘」は毎年IS学園生の臨海学校の宿泊先らしい、しかも創業50年という歴史の深さ。温泉もなんと日本の名湯百選に入っているほど、そんなところを学園生のために貸し切り状態とは・・・国立SUGEEE！と言う奴だろうか。挨拶を程ほどに済ませ、千冬さんの言論封殺（物理）により俺と一夏は黙ったまま後を着いて行くのだった。

「それにしても、俺らは部屋どうなるんですか？」

「ここだ」

痺れを切らして俺が口を開くと、千冬さんはある部屋の前で指差しながら止まった。

「教員室ですか？すると先生方と同じ部屋になるんですか」

「ああ、しかし他の教師では意味が無いのでなお前らは纏めて私と同じ部屋になった」

さらっと他の教員を役立たず扱いしたことは気にしない、そりゃあ千冬さんが同室と知れば誰だって近づかないだろう。虎穴に入らずんば虎子を得ずというが、そこに鬼神が居ては危険を冒すところか逆に狩られてしまう。逆の立場だったら俺も行かない、というか行きたくない。

「ふう、荷物はこれとこれっと」

「千冬姉はこの後どうするんだ？」

「織斑先生と呼べ、まあ、打ち合わせが終わったら海にでも行けさ。どこかの弟がせっかく選んでくれたものだしな」

ほお、弟に水着選ばせるとは・・・やるな千冬さん、流石世界最強のブラコン剣士だ。いやまあ、俺は一夏に「世界最強のシスコン」とかいう誇るべき称号をもらったがな、え、褒めてないって？ああ、そうかい。そんなこと考えている間に俺は着替えなどを展開して纏めて置く。

「じゃあ、早く行こうぜ音兄！」

「わかったから急かすな、時間はあるんだから」

水着などを持った一夏が待ちきれなくて足踏みをしている小学生のように戸を開けていた、ふう、いつまでもお前は男の子だなあ。ため息をほうと吐きながら俺も荷物を持って歩き出したのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「なんだ、これは」

「さあ？」

目の前の中庭に聳え立つ地面に埋まった機械的なうさみみ、某座薬が埋まっているわけでも無さそうだがなんとも珍妙奇天烈だ。その隣にはご丁寧な「引っ張ってください」の立て看板。誰だこんなの配置した奴、勝手に許可無くこういうの生やしたらダメだろう。いや、許可が出てもうさみみを地面から生やそうとする人間なんていないだろうが。

「よいせつと、よし、行くぞ一夏」

「あ、あゝ、うん」

「へ？」

気のせいだろうか、上空から空気を切り裂いて何かが落下してくるような音が。それもミサイル爆撃のように荒れ狂う音を立てて・・・いつからここは戦場になっちゃったんだ？ ひょいと上空を見上げるとアニメチックな巨大にんじんが落下してきていた・・・を危険なのでジャンプして海の方へと譲って貰った「ステイル・ハーツ」で叩き飛ばした。少し、いや、べこりと凹ませてしまったがまあ問題ないだろう。未確認飛行物体は災難の種になるまえに弾く、避けることができる災難は早めにその芽を摘んでおく、ミリアさんから教わった経営指南の一つである。生活にも生かせるからひ

とまずはにんじんを除外しておくことにした。

「うええ！！？あああああああああああああ――」

なんかになじんから声が聞こえるが、不法侵入者の声だろう。おそらく落下地点は沿岸から10km、どうでも良いがな、どうせ緊急時の対策くらいしてあるだろう。それ以前に侵入者に情などかけてやる気は更々無いが……。まあ、いいや。叩いたときに「ベキグシヤ」とか聞こえたのは気のせいだ。

「あら、そんなもの持ってどうかしましたの？」

「おお、セシリアか。なぐに、侵入者に退場願っただけだ」

「そうですか、うふふ」

なんか一夏と同じく通りかかったであろう箒が「いや、待て待て待て待て！！」とか五月蠅く言っているがどうかしたのだろうか、俺は邪魔なにんじん（＝侵入者（笑））を打ち上げたただぞ？千冬さんの仕事も増えない、手間もかからない。良い事づくめだと思うのだが……。ダメなのか？

「まあいいや、早く行くか」

「音羽、跡でサンオイル塗ってくださいませんか？」

「了解、じゃあ後で」

「はい」

箒が「姉さん……」とか言っているがなんでだろうか、どこにもあの思考破綻者など見なかったが……。一夏が言うにはあのにんじん型のアレの中に篠ノ之東博士が入っていたんだとき、個人的に一人の科学博士的に言えば製作者の「責任」を放棄しているから嫌いなんだよな。後悔はしていないが、姉だったのならば申し訳な

いことをしたな。家族の邪魔をするなど愚の骨頂、申し訳なくて箒に土下座しようとしたら止められた。

「いや、許すから止めろ」

「そうか、すまないな箒」

「気にするな」

なんとか許しが出されたので箒とセシリアと分かれて、気を取り直して一夏と男子に宛がわれた更衣室へと向かったのだった。

78・博士は「犠牲」になったのだ（後書き）

どうしても良い作品情報

束さんは出番お預け

79・夏の昼のr y（前書き）

今回は、少し人によっては不快に感じるかもしれません

79・夏の昼のry

ざくり ざくり ざくり

「熱っ！熱っ！！熱すぎるぞおい！」

「ははは、素足でいきなり行くからだ馬鹿者め」

ビーチサンダルを履き、水着に着替えてサングラスをかける。今日は体内の医療用ナノマシンをオーバーヒート回避のために抜き取っている、じゃなきゃまともにこの暑さの中で長時間居ることなどできないからな。別に怪我をするような原因も見当たらないし、自ら怪我しにいく予定もない。というか、これまででナノマシンが治療に稼動したこと自体無い。身体能力がガチセバスとか言われるとまあ、うん、いいや。

「ふう、ナノマシン抜いて正解だったなこれは」

暑がっている一夏を無視して腕時計型格納領域から空中に浮かぶビーチパラソル（一人用）を展開して海の家の木製ベンチに腰掛ける、やっぱ日本の暑さはきついわ。慣れてはいるけどやっぱりじわつとしてなあ・・・仕方ないので自作「超 保冷ボトル」に入れておいたアイステイー（ストレート）を一口飲む。しっかり温度は4度に保たれていて丁度良い。

「土君、しっかり仕事してくださいよ！」

「なんで俺がバイトしなきゃいけないんだよ、しかも学生のかよ・・・」

なんか、暑さで幻聴でも聞こえてるみたいだ。別に10周年の仮面

付けたライダーがいてもどうでも良いや、そういえばセシリアに「サノイルをry」って言われてたな。そろそろ着替え終わっている頃だろう。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ふふふ、遂に来ましたわ！」

「これでセツシーも音っちを誘惑できるね」

ビーチパラソルをぐさつと念入りに砂浜に突き立て、座るためのシートをふわりと敷き終わったとき、ふいに後ろから声をかけられた。振り返るとクラスメイトであり、簪さんの従者であるという布仏本音さん。いつもだばだばでサイズが確実に合っていないであろう動物の服を（今回は水着の上に着るタイプらしいですが）着ている通称「のほほんさん」ですわ。そのあだ名の通り、いつものそつとゆつくりの動きをしているのですが・・・誘惑って・・・。

「確かに少し露出は多いですが・・・こ、この程度淑女の嗜みですわ！」

「わゝ、セツシー顔まっか」

「馬鹿にしないでくださいまし！」

すると視界が真っ暗になった・・・・・・・・え？

「だゝれだ？」

「！！！？」

聞き慣れた声、細いが力強さを感じる指、考えずとも分かる私の思

い人、如月音羽であつた。

「ちえゝ、つまらんなあ。なあ本音？」

「つまんなゝい、えへへゝ」

「そうよ、もう少し焦らさないと面白くないわ」

途端、音羽が見たことのない笑顔で水色の髪をした女性・・・あれは会長さんに見えましたが・・・の頭を鷲掴みにしてフルスイング、がっちりと踏み込みを決めてプロ野球のピッチャー顔負けの投降をしました。

「うおおおおおらあああ！！！！」

「いやああああああ！！！」

「まったく、今日は乱入者が多いな」

スツキリしたようにこちらを振り返る音羽、その凛々しい顔に思わずドキツとしてしまいましたわ・・・不意打ちは卑怯ですわよ！無意識にそうさせるような行動ばかりされるからこそこちらが困るのですわ！

「さてと、サンオイル塗れば良いんだっただな？」

「は、はい。お願いしますわ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

セシリアがそう言うとパレオを外し、ビキニの上のブラ部分を外し

てうつ伏せになった。その際に少しはみ出てしまっている豊満なそれに一瞬視線が奪われてしまったのは俺の心の中に秘めておく秘密だ、早く無心にならなければ俺のステイル・ハーツがフルバーストになってしまう。女子ばかりのこの場所でそんなことになれば社会的に終わるどころかセシリアに殺される・・・無心だ無心、be cool be cool・・・。「もつと！熱くなれよお！！」五月蠅い、それがダメだって言ってるだろうが！

「？お願いしますわ」

「あ、あああ、ああ。わかった」

サンオイルを少量ボトルから垂らして手の中で温める、こうしなれば塗った途端「パーフェクトフリーズ」になりかねないほどの冷たさを味わうことになる。「ブリザド」でも可。とにかくヒヤツと冷たいのは身体にも心臓にも悪い、逆の立場になって考えればわかるだろう。

「じゃあ、塗るぞ。準備良いか？」

「はい」

ゆっくりと均等に塗り広げるようにして背中から腰にかけてすうすうと塗って行く、この時に例えアレな声が相手の口から漏れていようと、聞こえようと無心でただ塗り続けることが重要である。今、俺はオイル塗りマシーンだと暗示をかけてやらねば真のオイル塗りはできないとだけ言っておこう。

「ひゃんっ、はふう・・・あんっ・・・」

「（無心無心無心無心無心無心）」

「んひゃうう！？・・・にゃんっ、やあ、ん・・・」

「（無無無無無無無無無無）」

無心だ無心、何があるうと！俺は！セシリアに！サンオイルを！塗り続ける！……ふう、終わったぞ。なんか「はあ……はあ……」とか息が荒いセシリアが居るがどうかしたのだろうか？

「お、音羽（ゴゴゴゴー！）」

「は、はい（汗）」

なにやら怒っていらっしやる、何か悪いことしただろうか……。サンオイルはしっかり全身に……。あ、やべ、男が女性の尻を触るとか……。いかん、無心でやりすぎてしくじった！！

「やり過ぎですわ！」

「……申し訳ありませんでした、命だけはお助けを」

□ ■ □ ■ □ ■ □

競争で運悪く足が攣って溺れ掛けてしまった鈴を助け、休ませるために旅館へと送って帰ってきたところ一つのビーチパラソルの近くに女子ばかり（当たり前ではあるが）が大勢「うわ」とか「これはEROI！」とか口々に遠巻きに見つめながら喋っていた。一体どうしたのかと覗き込んでみると、「無心」でサンオイルをお尻に塗り続けている音兄とそれを受けて少しアレな声を上げてしまっているセシリアがいた……。なにがあっただんだ？

「やり過ぎですわ！」

「……申し訳ありませんでした、命だけはお助けを」

気づけば音兄が跪いて頭を垂れ、水着を着なおしたセシリアが腰に手を当てて説教していた、その身体はとても丁寧サンオイルが陽光を反射していたのだが、如何せん顔がそこそこに赤い、まあ、そうだよなあ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「もう、仕事丁寧なのは良いですがもっと注意を向けてくださいな」

「・・・・・・はい」

どうしようもなく、ご無沙汰すぎる主人への跪き（謝罪）を無意識でしたまま立腹セシリアのありがたいお説教を受けていた。「そうしなきゃナニがry」とか弁明しちゃダメだよなあ、普通に考えて、「キモい、氏ね」とか言われておしまいだ。そうなった暁には俺は生きていける自信が無いな、俺の生きる理由の大半がセシリアで埋まっているからな。セシコンとか言った奴前に出ろ。

「まあ、いつまで言っけていても仕方ありませんわね・・・・あら？」

その声に釣られてセシリアの向いた方向を見ると、シャルルがタオルお化けを連れて一夏と話していた。あの特徴的な眼帯は・・・・ラウカ、いくらなんでもあれは熱いんじゃないかなるか物理的に。ひとまず、セシリアに「今後は気をつけてくださいまし」とご慈悲を頂いたのでお詫び代わりにセシリアをお姫様だっこでラウラたちの元へ歩いた。セシリアが耳元で「もう・・・・／＼」とか言ってくすぐったかったのは秘密だ。

79・夏の昼のry(後書き)

どうでも良い作品情報

まだまだ初日は続きます

80・楽しい夕食（前書き）

誰得サービスシーン有り

80・楽しい夕食

「わ、笑いたければ笑えっ!!」

ばさりと全身に巻き付けていたバスタオル数枚を剥ぎ取るようにして脱ぎ去り、堂々とした出で立ちで頬を染めながらラウラがこれでもかと大人の下g・・・ランジェ・・・少し際どい水着姿を晒す。どうやら一夏も少し不意打ち気味に「可愛いぞ」とか「似合ってる」と褒めてくれている、けして俺が後ろから目だけで「貶したら・・・ね?」という視線を無意識に送っていたことは関係ない。

「うん、ラウラ凄いい合ってるよ」

なんと、シャルルのお墨付きとは・・・流石ラウラだな、え、シスコン乙って?そうか、それは光栄だ馬鹿野郎、家族を大事にして何が悪いことがあるだろうか。俺には親はいないし、ラウラは俺以上にんだから俺がしっかりと愛してやらないでどうするっていうのだ。ああ、戸籍でしっかり正式な家族になる予定だ、手続きをしなければいけないからな。

「お兄ちゃん・・・似合ってる?」

「ああ、最高に可愛いぞ。自身持て」

「似合ってますわよ、胸張ってくださいな」

「うん、ありがとうお兄ちゃん、お義姉ちゃん!」

すると、一夏の手を引いて嬉しそうに走っていった。一夏とシャルルはそれを一瞬驚いたような顔をしたがすぐに微笑みながら追いかけて行った、うん、一夏の視線が家族団らんを眺めるおじいちゃんみたいだったのは気にしないでおこう。アイツが偶に年寄り臭いの

は昔からのことだからな。

「さて、セシリアはどうする？俺は少しモーターボートでも借りて来るが」

「わたくしも乗せていただけませんか？」

「っ、あ、ああ、良いぞ」

そんなことなので海の家で某もやしみたいな人にレンタル料を渡して一台モーターボートを借りる、なんか「最高速度120km」とか書いてあったが大丈夫だよな？ひとまず、その日一日中はモーターボートで大海原を疾走しまくったと言っておこう、クラスメイトのアル・ティグレイルさん（灰色がかったショートボブのスレンダー眼鏡伊少女である）が「はやくけっこんするんだな」とか言っていたがどういことだろうな？セシリアは「け、けっこん……」とかしゃべって蒸気噴出していたが……？

□ ■ □ ■ □ ■ □

そして楽しい時は流れて日も沈み満月が美しいころ、大広間にて賑やかな夕食時になっていた。普通はこういう場合は逆に浴衣はダメではなかったのだろうか、不思議なことに浴衣着用が義務付けられていた。そういえば、温泉は素晴らしく良かったぞにこり湯で保温性が高く、源泉で温泉卵も作ったし。後で千冬さんに差し入れてもしょうか？

「くう………っう……」

「………」

その前に俺の右隣にいるブンド少女に提言でもしようか、さつきからぶるぶる震えて苦しそうにしてるし、まともにせっかくの力ワハギも食べれてない。今では高級魚扱いらしいんだよな、滅多に食べる機会が無いから知らないけど。

「なあ、セシリア。そんなに正座苦しいんならテーブル席に移ったらどうだ？」

「・・・あう・・・それは・・・無理な、相談ですわ。これくらい、ここを勝ち取った苦労に比べれば・・・」

どうやら何があっても移動はしないらしい、世界中の国々から生徒が集まっているES学園ではそれぞれに対応させるため、今が良い例だがテーブル席と座敷というふうにしていたりする。俺は勿論日本人だから座布団に正座で座って食事をしている、反対側には一夏とシャルロットが並んでいたりする。あ、俺の左側はラウラだ「この程度、拷問訓練に比べれば・・・」とか言っていた、うん、違ってから。

「・・・セシリア」

「No thank you」

わざわざ英語で返すほど移動するの嫌か、そんなにか・・・なにがそこまで駆り立てるのだろうか、女子って不思議だね。まあ、こうなったら仕方ない、最後の手段だ。

「セシリア、いつまでもそのままだと美味しく食べれないだろ。俺が食べさせたあげようか？」

「!!!? は、はい!」

おお、ここまで食いついてくるとは思わなかったぞ俺。そんなに身を乗り出して・・・頼むから一回座ってくれ、目の行き所にこっちが困る。ああ、座ったな。よし・・・誰も見てないな。

「わさびはどうする？」

「少なめでお願いしますわ」

「了解、はい、あ〜ん」

「あ、あ〜ん／＼・・・お、美味しいですわね／＼」

「だろう、どうやら獲れたてのカワハギみたいだからな」

箸で皿に円形に盛り付けられていたカワハギを一枚、わさびをほんの少し載せて醤油（どうやらお高いところのらしい）にさらっとつけてセシリアの可愛い口口に手を添えて運ぶ。ちらつと反対側に視線をやるとシャルロットと反対側に居た簪ちゃんが一夏に頬を染めながら「はい、あ〜ん」をしていた。聞いた限りで週1のペースだが一夏も訓練の合間に専用機の製作を手伝っているらしい、今は確か武装の開発途中だとか。やったねかんちゃん！

「あ〜！織斑君がデュノアさんに食べさせてる〜！！」

「私も私も〜！」

「こうなったら如月君に・・・」

「お兄様、私にも」

ひとまず、ラウラには一口キモを食べさせてやった。さて、この群集をどう散らせようか・・・あ。あることを思いついた俺はサイドテールを纏めている髪留めを外して、髪を散らせる、そして浴衣をだけさせて肩を少し露出させて上目遣いで一言。

「やさしくしてね？（裏声）」

「うふう・・・」

「我が生涯に、一片の悔い無し！」

「あふ、あふふふふ・・・（バタム）」

「あばばばばばb b b b・・・」

「ぶはっ（ピチューン）」

俺のハニートラップ（Ver 恥じらい乙女）にクリティカルで撃墜された女子数名が鼻から大事な何かを噴出すもなにも汚さないという妙技をやってから、他の生き残った女子に連れられて席へと戻っていった。生き残った数人には残っていたマグロの赤身を小さく切って一口食べさせた後、戻らせた。広間に近づいてくる千冬さんの足音が聞こえたからな、一夏はいまだに攻め寄られているが・・・まあ、頑張れ。俺は浴衣を直してセシリアと膝に座ったラウラに再び食べさせ始めた。既に俺はほぼ食べ終わったからな。

「お前たちは静かに食事を取ることでもできるのか！」

まあ、騒がしいのは一夏の周囲だけなんだがね。俺の周りやさつき俺が食べさせてあげた女子は満足そうな表情で普通に談笑しながら箸を動かしている、遠目からではあるがどうやら丁度一夏がお返しに簪ちゃんにカワハギを食べさせているところだった。一夏は少し恥らいながら簪ちゃんの口へと運んでいる、対する簪ちゃんは嬉しそうにしていた・・・あいつら良い雰囲気出してるじゃないか、こっち側に文句たらたらであろう空気を放っている筈がいるが。

「織斑、あまり騒ぎを起こすな。沈めるのが面倒だ」

「は、はい。すみません」

まあ、一夏はほぼ悪くはないんだがな。近づいていった女子がまあ、

うん、同い年の男子だからあれこれしたくなるのは分からなくもないんだがな。自重というの必要だぞ、ナノドクターの開発チームのメンバーはそんなの塵も感じられないがな！

80・楽しい夕食（後書き）

どうでも良い作品情報

ラウラは素晴らしいきづなコンになりかけです

81・今宵の酒は良い酒だ（前書き）

未成年はお酒飲んじゃいけませんよ！

81・今宵の酒は良い酒だ

あの後、千冬さんが戻ってから、も責め続けられていた一夏を「アデュー」だけで放置し、宛がわれた部屋へと戻って来ていた。どうやら俺が一番早かったようなので、つまみ用にと適当にベランダへ出てガスコンロの炎と燃焼後の排ガスだけを展開するという手品のよくなものをやりながら冷蔵しておいた鰹を金串に刺して高火力で表面を炙る。炎と排ガスだけを存在する状態にすることでガス台が無くても調理ができる、便利だろう？

「ふむ、正装とは誰が来るんだろうかなあ」

空中投影ディスプレイで明日の専用機受理の日程を確認しながら表面が焦げ始めた鰹に包丁で切れ目を入れていく、呼び出して空中に浮かばせているサブアームはねぎをそのマニピレーターが小型高周波ナイフで小口切りにしている、久しぶりの出番であるmk？はワイヤーアームでポン酢の蓋を開けようとしていた。良く考えたらカオスだなこれ、一人の人間の近くで1.3mほどの流線型の機械腕が同じく空中に浮かんだまな板の上のねぎを押さえて切ってるし、足元では二脚の膝くらいの大きさのロボットが細長いワイヤーアームでビンの蓋をぐりぐり動かしている・・・まあ、慣れてるけどな。

「正装って言うたらあの息苦しいあれか？あれ気密性高くて嫌なんだけだなあ」

「私も重要人物が来るとだけしか知らされていない、正装ということとはそれなりの人物なのだろう」

何時の間にか戻って来ていた千冬さんにmk？が脚部のパンクレス

タイヤを動かしてワイヤーアームで冷蔵庫から某伝説上の生き物が描かれた缶ビールを取り出して手渡す、浴衣姿の千冬さんが一瞬驚いたような顔をしていたがすぐにふう、と吐息を漏らしてベランダ側の椅子に座った。

「ですよねえ、はいどうぞ。鰹のたたきです」

「ああ、すまん・・・・相変わらず美味そうだな」

「ふふん、美味そうじゃなくて美味いんですよ」

サブアームを操作して冷蔵庫にあらかじめ入れておいた山デューを取り出してプルタブを捻りながらコンロと包丁・まな板を格納して小さなテーブルを挟んで千冬さんと向かい合うように座り、夜空に浮かぶ月を眺める。千冬さんはお構いなしにビール片手にたたきをつまんでいた、いつでも美味しそうに食べてくれるから作り甲斐があるんだよね。

「お？もう二人とも戻ってたのか」

「誰も連れ込まないとはつまらないな」

「いや、俺はそういうのはまだ・・・・なあ／＼」

おお？千冬さんも少しニヤニヤしている、これは良い弄りのネタを見つけたぞ・・・・ふふふふふ、まあ、俺は弄らないがな。一級フラグ建築士の惚気など面白くないわ、普通に・・・・さて、と、行つて来いミニREX、屋根の上でさっきからこつちを観察している権限乱用馬鹿を始末してこい。少しして「いやあああああ！！」とか某生徒会長らしき声が聞こえたが気のせいだろう。ちなみにISの装甲に使われてる特殊合金と防弾シールド用の硬化ナノマシンの複合装甲だから簡単には破壊できない、結局逃げるしかないのだ！！ふううははははは！！ついではISにも量産機程度ならば互角だ、ほ

載だから有視界戦闘以外ではISにも量産機程度ならば互角だ、ほ

ば自衛用に作ったやつだな。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「そついえば千冬姉、明日って一日中実習だよな？」

「ああ、候補生はパッケージの運用試験に如月は専用機の受理だ。粗相はするなよ？」

一夏が本当に久しぶりに千冬さんにマッサージをしている、肩揉みと言えど一夏の腕は驚くほど確かなため本当に気持ち良い。それこそ、あの千冬さんが目を細めてリラックスした表情を浮かべているほどだ、いつだか俺もやってもらったときは気持ちよさで寝てしまっていたものだ。

「ふう・・・」

「せめて少しくらい威厳出しましょうよ、一応臨海学校なんですから」

「今くらいはゆっくりしていても良いだろう？」

「そりゃあ、日頃を考えればそうですね」

実の弟と親しかった隣家の少年が唯一のIS操縦者になり、クラス対抗戦では未確認所属不明機に侵入・攻撃を受け、学年別トーナメントでは第一試合で違法のVTシステムの発動・暴走により中止。なにかある度に始末書を書きながら後始末を深夜まで作業し、落ち着いたところには転校生の一人が女子だとバラす。落ち着く暇などほとんど無かった、生徒のために苦労するのが教師の仕事と言えはそれで終いだ、いささか問題が起こりすぎる。そりゃあ疲れるわな・・・。

「じゃあ、これでもどうです？」

「ほお、ヒレ酒か。うむ、貰おう」

女将さんから頂いたふぐのヒレを指先から出した炎で炙り、それをmk?の中に展開して温めておいたとつくりの中に入れて風味が移るまで待つ。十分ヒレからにじみ出たそれにより、名酒は旨みを増していく。古来から伝わる酒を愉しむ方法の一つである、それを少量お猪口に注いで顔を綻ばせた千冬さんに渡す。ついでに柿ピーも皿に盛った状態で出す、個人的に料理用に買った日本酒であるが名酒だけあって香ばしい香りとともに風味ある空気が広がる。

「、はあ。良く用意できたな」

「女将さんが快く譲ってくれたんですよ、一夏、ヒレせんべいあるぞ」

「これってふぐのдаро・・・滅多にお目にかかれないな」

あれこれ懐かしい話をしながら、一夏と俺はヒレせんべい（ヒレを高温の油でカリッと揚げたもの）を千冬さんはヒレ酒を飲みながら久しぶりの団欒を楽しむのだった。・・・・・・・・まあ、ここで終わらないのがお約束なんだよなあ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

その後、一夏に久しぶり（何回も使っているが実際そうなだけ）に俺も指圧マッサージをしてもらっていた。その際に少しアレなあえぎ声が口から漏れてしまうのはいつものことなので一夏も気にしていない、まあ、髪を散らしているから傍目から見れば男女に見えな

くもないんだがね。

□ ■ □ ■ □ ■ □

なぜかグループの部屋から出て行く際に「頑張れセツシー！」とか「エロくない・・・だど!？」とか聞こえましたが、一体どういったことでしょうか？わたくしはただ用を足しに行くだけなのですが、まあ、音羽に少し明日のことで話を聞きに行ってもいいですね。・・・そんな陽気な考えをしている時期がわたくしにもありましたわ。

「「「「「・・・」」」」」

「!？」

なぜか、「教員室」と張り紙がされた男子と織斑先生の部屋の戸に張り付くようにして聞き耳を立てている篤さん、鈴さん、シャルロットさん、ラウラさんが居ましたわ。しかも全員死んだ魚のような目をして・・・何がどうなればこんな状況が起きるのでしょいか・・・？

「あの、どうかna「静かに」なんですの？」

すると、ラウラさんが手招きを顔面蒼白でしていましたわ・・・だから一体何が（ry

『あはは、音兄久しぶりだったな』

『そ、そうだなあつ!』

『・・・結構溜まってたんだな』

『おう、最近は特にイイ！ねえッ！』

『ほら、力抜いて・・・よいせ』

『ふあああん！！・・・はあ、はあ・・・』

指示されるがままに耳を近づけて聞こえてきたのは・・・え？・・・
・これは・・・日本で言う腐った女子が好むと言われているボーイズラブ・・・鈍感ではなくそういうことでしたね・・・は
う（ボタン

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・？誰か戸の前で倒れたのか？」

「まあ、待て」

千冬さんが抜き足差し足で気配を殺して戸に近づき、何かに悟られないようにして一気に開け放つ。指圧による激痛が弱まって上半身を起こした俺が見たのは『へぶっ！！？』とか言う女子が発しちやいけないような声と、絶望しきった表情で「終わった・・・、なにもかも・・・」とうわ言のように文字列をリピートし続ける倒れたセシリアの姿であった。・・・なんだこれ。

81・今宵の酒は良い酒だ（後書き）

どうでも良い作品情報

某人たらしはどこかでREXとお戯れ中（こんな予定じゃなかったのに・・・）

82・上りし月夜に少女は言う（前書き）

さて、空気と化していたあの人がちよこつと出てきます。
賛否両論ありそつで凄い怖いです

82・上りし月夜に少女は言う

なぜか一夏だけではなく、俺まで汗を流してこいと部屋から閉め出しを食らった俺ら・・・解せぬ。まあ、あの後「大丈夫だって、俺はセシリアのこと好きだよ」って言ったらビンタ食らった、しっかり普通の男であることを明言しただけのことなんだがダメだったらしい。俺の本当の気持ちをそのまま言っただけなのだがなあ、なんでだろうな？

「いや、いきなり言われればそうなるだろ」

「・・・そんなものか？それは悪いことをしたな」

漆黒の夜空に浮かぶ満月を見上げながら俺と一夏は露天風呂に浸かっていて、湯の温度は高めであり遊びつかれた身体をほぐすには丁度良い温度であった。湯には俺の長い黒髪が放射状に広がって一つの芸術のようになっていた、一夏はおじいちゃんみたいにほう、と吐息を着いていた。

「あゝ、明日は水分補給必須だな」

「ん？なんでだ？」

「・・・重要人物、英国、専用機受理・・・確実に政府関係者が開発チームだろ」

「うわあ、めんどそうだな」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「まあ、これで良いだろう」

そう言つて私たちを引き止めて部屋に招きいれ、簪さんも連れて来てなぜか更に一人ひとりに飲み物を渡してきましたが・・・何か狙いでもあるのでしょうか？わたくしは紅茶を貰いましたが・・・織斑先生の飲んでいるのはヒレ酒ではありませんの？就業中に良いのでしょうか・・・。

「なに、そのための飲み物だ」

『あつ！』

なるほど・・・とは思いますが、ラウラが現状を理解できていないようでさつきから目をぱちくりとしていますわね。確かに普段の嚴格で強く頼れる教師の姿は無く、ただの酒飲みのお姉さんのようなどうやら開いた口が塞がらないのはわたくしだけではないようすが・・・。簪さんは大丈夫なようですわね、少し前に聞いた一夏さん宅にお泊りと言うのが原因でしょうか？

「そ、それで一体このメンバーでどうしたのですか？」

「ふむ、まあ単刀直入に聞こう。あいつらのどこが良いんだ？」

「「「「「「！？」」「」「」「」」

まさか織斑先生がそのような話題を自分から出してくるとは、お酒の影響でしょうか？別に恥かしがることではないと思うのですがどうやら私以外の皆さんは恥かしいご様子、自分の気持ちを素直に表せばいいのでは・・・？オープンすぎるのも考え物ですが。

「べ、別に私は腕が落ちているのが腹立たしいだけです・・・」

「あたしは腐れ縁だし・・・」

篤さんも鈴さんも素直ではないですわね、ラウラに聞いたツンデレというものでしょうか？ 良くはわかりませんが「違う！」「違うわよ！」「・・・そういうところがツンデレの特徴だと聞きましたがいずれ以上は野暮ですわね。

「ふむ、そうか。それではそう伝えておこう」

「言わなくて良いです！！」「」

しれっとそんなことを言う織斑先生、口角が上がっているのから推測するにこの反応を楽しんでいる様子・・・ラウラはいまだに固まっていますわね。いつになったら再起動するのやら。はははと笑って一蹴しているのを見ればそうなって・・・しまうのでしょうかね。

「僕、私は優しいところです。心から自分を思いやつてくれるところがある・・・／＼」

「ほう、しかしあいつは誰にでも優しいぞ？」

「はあ、まあそこは・・・」

ぼそつと小さな声で呟くように語り、すぐに恥かしげに俯いてしまったシャルロットさん。確かに一夏さんは誰にでも平等に優しいですわね、それこそ自分のことなど省みずに首を突っ込んでいって無理矢理にでも相手のために動く。

「・・・わ、私は・・・いつも影で支えてくれるところです・・・さり気なく手を貸してくれる、それに助けてもらった・・・」

簪さんは過去にいじめられていたところを一夏さんと鈴さんに助けていただいたそうですわ、それも生徒会長だった音羽が解決に動き出すよりも前に。並み居るいじめっこ達を目の前で蹴散らし、怪我

の手当てまでしてくれたとのこと。それ以後はお互いに困ったときは支えてくれる存在だとか、正にヒーローだったのですわね。

「・・・強いところが、でしょうか」

「あいつは弱いだろう」

「いえ、私よりはずっと強いです・・・」

確かに、真っ直ぐな気持ちは今の時代には珍しいほどですわね。音羽も「あいつには本当の意味で勝てない」とまで言っていましたものね「で、お前は？」はうつ！？

「・・・わたくしの幼いころからの「騎士^{ナイト}」ですわ。どんな苦境でも心と身体を守り抜いてくれた、唯一の人・・・」

「・・・ほう」

わ、わたくし何か変なこと言ったのでしょうか、織斑先生とラウラ以外は俯いて震えていらつしやるのですが・・・それも「くっ、これほどまでに純粋な・・・」「ぞ、ゾッコン過ぎじゃない」「流石お義姉さま！」・・・しかも呟くように小さな声で叫ぶという。

「ふむ、如月はまあ、努力次第だが。さてお前らはどうだ、欲しいか？」

「「「「「くれるんですか！？」」「」「」「」

「フツ、やるか馬鹿。奪うくらいの気持ちでいかなくてどうする、自分を磨けよ少女共」

そうして残り少ないヒレ酒をぐいっと傾けた織斑先生、ぼそつと「如月め、良い女に惚れおつて」呟いていましたが良く聞こえませんでしたわね。まあ、今は何時のまにか寝てしまっていたラウラを撫

でましようか。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「そついやさあ、一夏。お前は好きな子いるのか？」

「・・・ノーコメント」

「そうか、つまり簪ちゃんはい物に二人で行ったりするけどただの友達と・・・」

「なっ！？なんでそれを知ってるんだよ！」

「おろ、鎌をかけてみるものだね？」

掴みかかってくる一夏を右腕で押さえつけて夜空を見上げると、後ろから戸を動かす音がした。カラカラって音って良いよね、趣があるってさ。

「ふう、ふう。やっとたどり着いたわよ・・・」

「・・・おお、REX倒したのか。流石だな楯無」

ボールペンサイズのレールガンミニチュア

こちらに投げつけられたミニREXの待機状態を掴み頭の上に乗せたタオルにくつついたチップに格納する。一夏は「楯無さん！？なんでここに、というかなんで男湯に！？」とか叫んでいたので日本の伝統H A R I S E Nで静かにしておいた。

「それで、何用だ？・・・ひとまずは入れよ」

「そうさせてもらうわ、一夏君も良いかしら？（ちよつとお話させてくれないかな？）」

「は、はいどうぞごゆっくり（わかりましたから通信回線介して力ールマイヤー流さないでください）」

そういえば初めてだな、こうやって三人で風呂つてのも。一夏は目のやりどころに困ったのか慌てているが・・・俺はなぜか左腕絡まされて柔らかいアレが当たってるんだよ！いや、こいつのことだから「当たってる」んじゃないくて「当ててる」んだろうがな、俺の慌てる反応見たさにとかで。もちろん俺のmy近接ブレードが一閃打突ギリギリで理性総動員で押さえ込んでるわけだが。

「・・・できればやめてほしいんだが「じゃあごゆっくり」!!」
あ、一夏お前逃げんな!!」

拘束されていない一夏は耐え切れなくなったのか、即刻退散。居なくなる理由はのぼせてるっただけじゃないよな? てか、俺を犠牲にして逃げるな・・・行っちゃったよ。せつかく年上のお姉さんの鑑賞しないでいくのかあいつは、あれでも男か? まあ、ベッドの下にそういう本はあったから正常か。

「・・・で? 何か襲撃犯でも見つかったのか?」

「なんでそういう話にすぐなるの・・・」

「違うのか?」

「仕事の話をごんな場所でゆっくりするわけないでしょうが・・・」

「まあ、当たり前か」

さて、更識の関係でもない話じゃないとしたらこうまでして来るとは何事か。別に話くらい学校でも好きなだけできるだろうになあ、
「楽しそうだから」って理由で来てるのだろうか?

「ねえ、音羽って好きな人いる?」

「いきなりなんだ敷から棒に・・・って酒臭いぞお前」

「むう、そういうのは突っ込まないものでしょ？」

「・・・そういうものか？」

「そういうものよ」

ふむ、一つ勉強になった。いや、未成年の飲酒はいけなげな・・・
・酔いが冷めるまでは動けないじゃないかよ・・・こいつはまったく・・・。

「・・・あのさ・・・」

「なんだ？」

「・・・私さ・・・」

「ああ・・・」

なんだ、この歯切れの悪さは？酔ったからってこうなるような奴ではないと思うが・・・まあ、時間はあるしゆっくり聞こうか。おそらく部屋ではガールズトークで賑わっているところだろう。

「音羽のことがね・・・」

「うん、俺が？」

「好き」

「そうか、俺も美月のことは好きだが・・・？」

「I Love you」

「・・・え？」

「じゃあね！！それだけ」

「・・・え？俺の聞き間違いじゃなければ「I Love you」って・・・」

82・上りし月夜に少女は言う（後書き）

どうでも良い作品情報

誰が純粋な元執事と元主人の物語と言っただろうか？

83・重要人物（笑）襲来（前書き）

原作ではリアル年代が明らかにされていないので西暦の提示はしませんでした

ツッコミ満載・・・ですね（汗）

紅椿のお披露目は反対側でやってるらしいよ（原作準拠で進行中だと思ってください）

ヨーロッパの皆さんごめんなさい

正装は個人的なイメージです（ISⅡ剣の受理だからこうなるんじゃない？という想像です）

上記の内容が許容できる方はどうぞお進みください

83・重要人物（笑）襲来

「・・・・・・・・・・ふう」

昨日の美月のあれっというものの俺のリアクション目当てのそれだと思いつた俺は・・・吹っ切れることもできなくて睡眠薬を飲んで昨日無理矢理に床に着いた。そして翌日朝5時、まだ目覚めないでふとんをただけさせている千冬さんにかけて直し、一夏をそつとふとんに戻した後一人で浴衣姿で海岸に来ていた。

「冗談だとはいえ、意識しちゃうのはなんともなあ・・・」

波打ち際の丁度良い形の岩に腰掛けて脚をブラブラさせながら朝日を眺める、下から吹き上げる潮風に誘われて結ったサイドテールが荒々しく揺れる。朝日に照らされてか、俺が火照ってるのか、どちらにせよ俺の色素がそこそ足りないような頬がほのかに朱に染まっていた。

「結局、俺も本当に一人の男だったってことか？・・・なんとも困る検査方法だよ」

どうやら、昨日の一件で俺は今まで深く意識していなかったことへの最終耐性ロックが壊れたらしい。それもよりによって良く知る人物によって、帰ったらどう相手しろと言うんだ。経験すらないから分からないじゃないかよ、まさか今まで通りには・・・いかなかったらう。意識しないようにと生きてきて突然なんだ、無理もないか・・・。

「ふう、まさかこんなことだけでうろたえるとはなあ・・・気に

しても仕方ないか・・・」

旅館に戻り顔を洗った俺は朝食もそこに実習会場であり、「専用機受理」が行われる場所へと異動するのだった。もちろん、『正装』をして。

□ ■ □ ■ □ ■ □

SF映画の一舞台のように地下を一回くぐってから再び地上に出てくるとがけに囲まれている開けた場所に出る、バイ。ハザードとかでありそうだな、ボスフラグで。そういえば同じような地形で銃撃戦したこともあったな、謎の組織b y ドイツの特殊部隊とS & a m p ; W の M 5 0 0 をぶっ放して応戦した。もちろん死傷者無しで・・・良く考えると人間の1・3倍とかの域じゃないよな・・・似たようなのを「想定」した「訓練」をミリアさんにやらされたことはあった。あれ、俺って身体がどうかの前にミリア式訓練でのほうがチート化してないか？

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

現在、某ベルサイユのローズもかくやというほどの服・・・黒い長袖に白の薄い手袋、その上に特殊軽量合金製の胸部甲冑。乗馬用の防弾・防刃繊維の動きやすいズボンに地上戦用の脚撃用鉄板が入ったぴつちりの長靴。左胸には青い盾に槍が交差した『認定騎士』の証のバッジに、緊急権限用の黒枠青線が平行に4本の『大佐』の袖章。レフトサイドテールは髪留めではなく、白枠青線の模様のリボンで留めている。極め付けは左腰に某セイバーさんのような洋剣を

帯刀していることくらいだろうか。

「うわぁ……何アレ？」

「音兄すげえ……」

横に並ぶセシリアは随所に剣撃を受けるための防刃プレートが並べ
て縫いこまれている青の白フリル付きの偽装外装ドレスに身を包み、
普段と程遠いマツトブラックの硬質ブーツを穿き、綺麗なブロンド
の髪は同じく白桦青線のリボンでポニーテールに纏められている。

「……ふう、肩こるなあこれは」

「ええ、候補生任命式以来ですわ……」

さつきからずっと右側にずらりと並んでいる一般生徒の皆さんの
視線が突き刺さる。英国出身者の一部は目を見開いて俺を見ている。
・まあ、王室騎兵隊を構成する「ブルース・アンド・ロイヤルズ」
の制服に見えなくもないからな、一人はバッジを見て「粉 バナナ」
とか周囲の目も気にせず叫んでいたがな……。山田先生は驚きす
ぎてさつきから予定表と俺達をきよきよと見比べている。

「……よりによってあの人なのか」

「……また公務をサボって来てるのでしょうか……」

はぁ、とため息を着きながら遙か上空をこちらに向けて飛んでくる
STOVL機であるF-35B（メタリックブルー塗装）を眺める
のだった……。

「何！？F-35B・・・なぜここに？」

「えふ・・・35？あれのことか？」

ISが世界中の国防を担うこの世の中でも、一国家の国防全てをISが代替できるわけではない。英国は保有コア数は12、そのうち機体運用されているのは4機でありその一つがセリアの専用機「ブルー・ティアーズ」に使われている、他のコアのいくつかは新型機開発に使われていてそのうちの一つが俺に「専用機」として渡される。まあ、結局ISが登場しても技術フィードバックされた現行兵器群が前線に立っているのだから問題ない・・・わけではないよなあ。まあ、英国には凄腕の戦闘機乗りが多いらしいから問題ないのか？ISを落とした人も数人いるらしい・・・最近PICが使われたVTOL機が開発されたらしい・・・。

「F-35B、あれは・・・最新鋭のGC型ゲームキューブじゃないよかよ、また『借りるぜ』とか言つて空軍からふんだくったんだろうな」

「・・・まあ、何時もよりはマシですね」

生徒がいない空き地に垂直着陸した蒼穹の金属の鷹、そのキャノピーを跳ね上げてはしごもかけず飛び降りて来た白いフライトジャケット姿・・・現イギリス連邦王国女王「クイーンエリザベス3世」その人であった。陛下は俺を見つけるとぱあっと輝くような笑顔を見せて飛び込んで来た、陽光に晒されて光をキラキラと反射する健康的な白髪は腰まで伸びている。女王が戦闘機を乗り回すのも大概だが、歴代女王最若年の21歳での即位である（現在28）。勿論そうなったのも名実共に実力があつたからこそ、なんと旧世代のF-15Aを内部部品の新規パーツ入れ替えしただけの機体でラファール・リヴァイブ3機をM61A1 20mmバルカン砲によるヘ

ツドシヨットとA I M - 9サイドワインダーの至近距離限界での接射のみで撃ち落したのだ・・・「I SでしかI Sを倒せない」その世界的に有名な製作者の言葉を見事に打ち砕いた努力チート的人物である。

「やあ、元気だったかい二人とも」

「はっ、陛下こそお元気なようで」

「あゝんもう、セシリアちゃんも固くならなくて良いってのに」

正装した俺とセシリアの頭をがしがしと抱き寄せながら撫でているこの人が、かの有名な「エリザベス3世」である・・・『国民と並んで歩く』という高位者には珍しい考えの持ち主である。2世の場合はまだ高貴さが残っていたがこの人はそれを余裕でぶち壊している、なにせ日没後に護衛も着けずに市街へ自転車で繰り出してバーでビールを飲んでいるほどののだ。時には近所のおばさんよろしく託児所で手伝いをしていたりと『王室の人間』とは思えない、血筋はそれでも王室だというのだから不思議なものだ。まあ、その自由奔放さが国民に人気の理由の一つでもあるのだが・・・。

「陛下、もう少し威厳を出してくださいな。皆さんが驚きすぎて固まっていますわ」

「あら？ホントね」

もう一度言うが、このロング白髪ナイスバディのお気楽お姉さんに見えるこの人が「エリザベス3世」である。なんか反対側では赤いI Sが落下してきたカプセルから出ているが、それに注目しているのは一人不思議に国のアリスをしている女性と箒と一夏と千冬さんだけである。最新・最高性能とか聞こえるがそれに驚いているのは一夏だけで他の生徒はこっちを見て呆けていた。

「じゃあ、自己紹介でもしようか」

きりつと姿勢を正して随分ご無沙汰だった「真面目モード」になった女王、何時の間に着替えたのかラフな水色のタンクトップに青色が濃いGパンになっていた。その隣で米神を押さえている二人の騎士、シユールにも程があつたが女王の威厳により気にならないほどになっていた。

「初めまして、現イギリス連邦王国女王、エリザベス3世です。今日は彼の専用機を渡しに來ただけだからみんな普通にしてね？ 気軽にえっちゃんって呼んでね」

そう言つてウインクをする女王陛下、結局真面目顔は名前言う間しか持たなかつたか。イギリス出身の一部生徒は普通に「えっちゃん本物よー！」とか「ここくらいしつかりしようよー」とか言っている、他の生徒は『これが女王？ そんな馬鹿なw』みたいな表情を浮かべている、まあ、俺だつて騎士認定式の後の晩餐会でいきなり女王に「はい、あ〜ん」なんてステーキ一切れ食わされたときは驚いたよ。今は「こういう人」って分かつたから動じないがな、セシリアもそんな感じだし。

「じゃあ、音羽君。今日の本命始めるよ！」
「委細承知」

真夏の太陽に負けないな、と思えるくらいの笑顔で手招きされて俺は女王の元へ歩き始めた。

83・重要人物（笑）襲来（後書き）

どうでも良い作品情報

えるしってるか、まだ「じょおうとつじょう」しかしてないぞ

84・番外IF その4「事件（笑）」（前書き）

番外編の音羽は本編と違って体のことをすべて知っています。

また、本編とは身体の設定が違いますのでご注意ください。

番外だからあれこれおかしくても許してね

作者の東方知識は二次創作と某笑顔百科程度の知識しかありませんので「これがおかしい」などのツッコミは遠慮ください。

84・番外IF その4「事件（笑）」

ひとまず、適当に残っていたもので昼食を作り二人（いや、この場合一人と一体か？）でとっていると思ひ出したことを口に出す。

「そついえば紫さん」

「あら、美味しいわねこの味噌汁」

「そうでしょう？腕が違ふんですよ。・・・じゃなくて」

「どうしたの？」

「俺がスキマに落とされたときに近くにいたあの女の子大丈夫なんですか？」

「女の子・・・ああ、チルノのことね」

チルノ？そついえばオルコット本邸の近くに散野つて名前の和風の屋敷があつたな、確か槍術の家元だったか、なんでイギリスに居を構えているのか知らないけど。まあ、幼い俺にミリアさんが不在のときにセシリア共々そこそこに教えてもらつてたな、おかげで塩ビパイプでも刀とやり合えるようになったし。女王陛下もそうだが、イギリスつてどうして規格外な人ばかりいるんだろうね。わけがわからないよ。

「あの子、チルノつて言ふんですか」

「ええ、あのへんの湖を縄張りになっている氷を操る妖精よ」

「妖精か・・・」

俺が知つてるイメージとは違ふな、まあ、まさか氷弾を撃つてくるとは思わなかつたがな。本物と伝承は違ふということか、あまりに差異がある気がするがな。

「まあ、チルノなら大丈夫でしょう。あのあと起き上がってどこか行ったみたいだから」

「そうですか、なら良かった・・・」

ふつつ、かたつむり（ドラムマガジンのこと）を当てられて大丈夫な人間はいないがな。あれ、実質金属の塊だし。あのまま草原で倒れているままだったらどうしようかと思った、妖精とはいえ女の子を気絶させて放置は嫌だからな。

「さて、と・・・」

昼食を残さずに食べ終わると、俺は腕時計型格納領域から大切に冷蔵して仕舞っておいたプリン大福を一個展開しようとイメージをする。ISの武装展開と同じでイメージが大事なんだよな・・・

「あれ？」

「どうしたの？」

「いや、しっかり冷蔵しておいたプリン大福が見当たらないんですよ」

仕方なく、イメージを止めて空間投影ディスプレイに格納している物の食料系の一覧を映し出す。カロリーメイトやカップラーメン、米300kgに小麦粉200kg、各種調味料に野菜や果物など色々入っているが・・・『冷蔵』のリストの中には魚と練り物などの低温保存が必要なものであり「プリン大福」のプの字も見つからなかった。昨日3時間も並んでやっと買って仕舞ってから手をつけてないから無くなるわけがないんだが・・・

「プリン大福・・・ねえ・・・」

俺が視線を向けるとちらつと目を背ける紫さん、常人では気づかないかもしれないが偵察・拷問・その他諸々のスキルを身につけさせられてしまった俺には見逃すことはできなかった。いや、常人でも気づくかこれは？

「紫さん」

「な、にやにかしら・・・はう／＼」

「スキマ使って俺のプリン大福食いましたか？」

「えっ！？・・・そ、そんなこと・・・」

「目が左右に45・37度ずつ泳いでますが？」

「・・・ごめん」

「やつぱり・・・」

「いや、本当は食べるつもりは無かったんだけど、その・・・」

「MsYukari・・・」

「な、何？」

「覚悟は良いか？」

「え！？ちよつと待つ、その、とりあえず私の話を・・・」

俺は武器用格納領域から刃渡り（？）5mとあるつかというほどのハリセンをわざとゆっくり展開する、目の前で巨大な何か剣のようなものを光の粒子が像を結びながら今正に現れようとしているのだ。そしてそれを恐怖を浮かべながら見つめる妖怪の賢者、逃げることもできなくその一閃を食らう羽目になったのだった。

「きゃふうつ！！！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・・・・・・」

返事がない、ただの賢者（笑）のようだ。叩きのめされて床に伸びている妖怪の賢者を見下ろしながら乱れた服を整える。

「仕方ない、買いに行くか・・・」

「一つ・・・良いかしら」

「なんだ？」

「幻想郷にプリン大福は無いわよ？」

「なん・・・だと・・・」

そういえば、そうだ。大福はあるだろうが、カaramelや生クリームがあるかどうかも怪しい、それ以前に冷蔵設備も無さそうだ・・・
だいいち売ってたとしたら俺が知っているわけもない・・・不覚！
ならば・・・最終手段か。

「自分で作るしかない！」

「作るって・・・そんな変わったもの簡単に作れるの？」

「本格的なものは無理だけでも、似たようなものなら作れるはず。
原料くらいなら幻想郷にもあるでしょうし」

「ちなみに原料は？」

「んゝ、砂糖と白玉粉に卵くらいですかね。後は一応持ってますし」

「それなら、全部人里で揃えられるわよ」

「おお、それは良かった」

「ええ、人里まではスキマを使えば一瞬で行けるわよ。行く？」

「お願いします」

「じゃあ、スキマで送るわよ。その間私は・・・」

そろっと思案顔の紫さん、なにかよからぬことを考えているよう

な・・・

「何してるんです？」

「・・・お昼寝してるわ（キリッ）」

「却下」

「ええっ！？」

「ええっ！？じゃないですよ、寝るんだったら買い物手伝ってください」

だめだこの賢者、早くなんとかしないと・・・。なんか一日12時間寝なきゃあゝだこゝだ言ってるし・・・なんてこったい。

「そんなんしてたから式に逃げられたんでしょうが・・・。とにかく買い物には来てもらいます。異論は認めません」

「ひどい・・・」

「ひどくないです。さあ、行きますよ」

「はい・・・」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ここが人里か。思ったより賑やかだな」

「そうね。お昼時つてのもあるけど、ここは市が近いから人も多いのよ」

「市ですか？」

「そう、大体の食材はそこで売ってるわよ」
「なるほど、じゃあ早速行ってみましょう」

そういつて市の方へと向かおうとしたとき・・・

「待て、その二人」

「ん？」

聞いたことがない声（当たり前だが）がした方向に振り返る、そこに居たのは青髪のなんとも不思議な形の帽子をかぶった女性だった。美月よりは髪の色が薄いかな、どっちかっていうと青みがあったとしても言おうか。・・・うん、ひとまず初対面だな。

「見覚えのある姿かと思ったが、八雲紫か」

「あら、誰かと思ったら慧音じゃない。奇遇ね、こんなところで会うなんて」

「それはこちらの台詞だ。なぜ妖怪のお前がこんな真昼間に人里にいるんだ？」

どうやら、紫さんの知人らしい。気兼ねなく話しているところから察するに友人といったところか。

「いやね、彼の買い物に付き合わされているのよ」

「買い物の原因を作ったのは紫さんですがね」

「うぐっ・・・」

「その君は？見たところ妖怪ではないようだが・・・」

「あ、俺は外の世界から来た如月音羽と言います」

「そうか、外の世界から・・・。私は上白沢慧音、この町の寺子屋で教師をしている。よろしくな」

「こちらこそ、よろしく願います。音羽って呼んでください」

そう言つて俺は慧音さんに向かってお辞儀をした、どうやら俺の身体のことまではわからなかったらしい。まあ、当たり前か。

「わかった。ところで音羽、君は何を買いに来たんだ？」

「俺はプリン大福の材料を買いに来たんです」

「プリン？大福はわかるが・・・」

む、まさかプリンすらここには無いのか？ふむう、これは由々しき事態だな・・・仕方ないといえば仕方ないのかもしれないが。まあ、説明をすることにした。

「えつとですね、卵と牛乳や砂糖を使った甘いお菓子です。それも子供からお年寄りまで世代関係なく人気な、外の世界だと専門店まであるんですよ」

「ほお、それだけの材料で作れるのか」

「はい、ただ、作るのには冷やすものが必要なんですけどね」

量子化して冷やしてもいいが、調理過程のものを本格的に冷やせないからな。冷却中に変質するものは入れられないし、やったら展開したときに展開座標が狂ってどろどろになって使い物にならない。あくまで冷却保存は完成したものに限られるからな、どろどろ不完全プリン生地ジュースなど飲みたくない。

「なるほどな、ふむ・・・」

プリンの説明をした途端、腕組みをしてなにか考え事をしはじめた慧音さん。どうかしたのだろうか、まさか、プリンは好きでない？

「なあ、音羽。一つ頼みがあるのだが、聞いてくれないか？」

「頼み、何でしょうか？」

「良ければ、そのプリンとやらを私の寺子屋で作ってくれないだろうか」

「え？プリンをですか？」

「ああ、実は家庭科の授業で調理実習をやるのだが・・・何をやるうか悩んでいてな。それでそのプリンという食べ物ならいいんじゃないかと思ったんだ」

「なるほど、そういうことですか」

まあ、プリン大福も好きだが。そのままのプリンはもっと好きだからな、良いかもしれない。プリンの素晴らしさを知ってもらうこともできるだろう。

「どうだろう？材料はこちらで揃えるし謝礼もするが・・・」

「そうですね・・・」

人に物を教えるのはそこそこにやれる自信はある、伊達に約三年間生徒会長をやってはいないからな。応用ということでプリン大福を作っても良いかもしれない、甘い物とすれば子供が好きなものでも上位に入るものだ。

「わかりました、やってみます」

「本当か？ありがとう、感謝するよ」

俺の返事を聞くと、慧音さんは嬉しそうな顔をしてお礼を言った。良い笑顔だな、久しぶりに女性の笑顔を見た感じがする。最近はずっとあれこれ学校でも私事でも忙しくて見てる暇なんてなかったかなあ、相変わらず男子勢の突き刺さる恨みがましい視線はあったがな。

「話はまとまったみたいね。じゃあ、私はこれで」

「Wait, Yukari」

紫さんがその場を華麗に離れようとしたとき、俺は即座に紫さんの肩を掴んだ。しっかり逃げないようにがっしりと。

「わひゃう!？」

「Where are you going?」

「・・・いや、そろそろおいとましようかなあ」と

「駄目ですよ、紫さんにもちゃんと手伝ってもらいますから」

「なにい!？」

「そうだな、人手は多いほうが良い」

「ですって♪」

「・・・仕方ないわね、昼の件もあるし手伝うわよ・・・」

「決まりだな、では、私の寺子屋に案内しよう」

渋々承諾した紫さんの手を引き、俺は慧音さんの後ろを着いて行くのだった。寺子屋と言えば日本の昔の学校の名前だったと学んだ、どのようなものなんだろうな。まだ見ぬ寺子屋に思いを馳せながら歩いて行くのだった。その間、紫さんが俯いて「あう、手を繋ぐなんて・・・」とか言っていたがどうしたのだろうか？まあ、いいか。

84・番外IF その4「事件（笑）」（後書き）

どうでも良い作品情報

考えた結果、本編とは逆にフラグ建築士・・・の予定？

85・フエイント作戦（前書き）

展開が遅いこと遅いこと・・・すみませn

85・フエイント作戦

「さあて、はい音羽君」

「・・・？どうしろと？」

女王陛下がF-35Bのコックピットをこそごとと漁りながらこちらに一本の鞘に収められた剣を投げつけてきた、これって俺が今帯刀してるのと同じやつだな・・・輝き方がこっちのほうが良いけど黄金に輝くそれは、歴代最高と言われていた騎士「ゲルフエイム・シリア」の愛用していた剣に似ていた。レプリカと言われればそれで終わりかもしれないが、それからは気迫が感じられている。聖剣は紛い物にすら命を与えるとは良く言ったものだ。

「いや、専用機をただ渡すのはつまらないから。私が直々に試験をしてあげようかなあと思ってるね！！」

「だったら、『正々堂々』仕掛けるものじゃないか！！」

突然、5mも離れていたはずの距離を、一瞬で両刃剣を抜き放ち切りかかって来た女王陛下の一閃を鞘を抜き捨てた聖剣の端面で受ける。ガキーン！！と金属がぶつかり合う音に背を向けて筈の専用機を見ていた一夏が振り返る。

「『騎士』なんだから不測の事態にも対応できなきゃいけないでしょ？」

「相手がアンタだったら無理ゲーだったの！！」

なにせ、単機・指揮での戦闘能力は目の前にいる女性「女王陛下がトップクラスなのだから、」上に立つものが一番でなくて何が王か」とドイツ首相と柔道で3秒で倒すという荒業をやったのけたその際

の言葉を聞けばわかる。国民を誰よりも愛し、誰よりも守りたいという気持ちが強い、誰よりも強い人。そんな人に認められたのだからソレ相応でこちらも相手をしなければいけないのだが・・・ヴォーダン・オージェもアドヴァンスドでもないのに生身で一個大隊の銃撃を回避してあまつさえ銀食器だけで無力化した人を相手にどうしろと言うのか。天然ではなく努力の末に手に入れた力だということだから凄いが。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ふう、よっ、ほっ」

「・・・・・・！」

幾度とも無く響き続ける真剣の衝突する音、同時に騎士の服が身体の動きに釣られてふわりと舞い踊る。剣士同士の本気でのぶつかり合い、互いに命を狩る刃を振るうその姿はその場にいる全ての者を魅了してしまうほどであった。切り下ろせば払われ、払えば間髪いれずに突きが襲い掛かる。陽光に照らされる刃は打ち合ったびに火花を散らし、振るわれるごとに煌めきを見せ付ける。

「これが本物の騎士、か。見事なものだな」

「これって・・・実戦の動きなのか？」

「お兄様、カッコいいです！」

そんなことを外野が口から漏らしている間も剣撃の応酬はひたすらに続く、鏑迫り合いに発展したところには右腕で相手の剣を押さえながら左腕で殴りにかかるという剣の勝負とは程遠いものへと変貌していた。あまつさえ、女王は音羽が放った踏み込みの袈裟懸けを回

し蹴りで往なして自身の剣の持ち手で首筋を突いている。英国軍で「女帝」と影で呼ばれている理由の一つである、曰く「武器を己の身体のみで無と化す」、矢はすれすれで手刀で叩き折り弾丸は剣で切り裂く、噂ではミサイルはその上を走り抜けて回避したとまで言われている。無論、それが噂かどうかは剣撃を素手で往なし続けている女帝を見れば明らかではあるのだが・・・。

「いや、また強くなったかな。流石だね」

「一応鍛えてはいるからなあ、貰ったあ！！」

全力の切り上げが女帝の握る剣の刃を両断して跳ね上げる、同時に女帝の身体を後ろから腰に伊田リ腕を回し抱き締めるようにして右腕に握る聖剣の一度も打ち合わせていない切れ味抜群の刃部分を女帝の首筋に触れるかどうかの距離で突き当てる、少しでも右腕を動かせば首が切れる、見事なまでの決着であった。結果的には。

「・・・うん、流石だねえ。うふふ、大きくなった音羽君、良いね」

「手加減されてる状態で勝っても嬉しくないんだが、それとちやっかり手を胸に寄せようとするな」

途端に崩れ去る緊張感、勝負を観ていた生徒と教師陣がはあと吐息を漏らして座り込む。斬られて弾き飛んだ刃の一部が足元に突き刺さって一夏が「うわあっ！！」と驚愕の悲鳴を上げたのを観て簪が苦笑していたのは秘密である。



「さて、じゃあ合格だね」

「……………そ、そうですか」

いまいち手加減されての勝利ということで納得できないという考えが浮かぶが、じゃあ本気出されて勝てるのか？と聞かれれば俺がどんな強力な武器や身体を持っていたとしても「不可能」と答えるに違いない、「女帝」とはそんな相手だ。まあ、手加減でもこのレベルで10%しか出していないのだから全力はどうなんだと聞かれれば答えたくはない。確実にISの存在が危ぶまれるはずだ、というかそれ以前に人間とは何だったのかと日々悩むことになる……女王王ってなんだたのかとは会う度に考えてしまうがな、俺は。

「あ、篠ノ之博士。見ます？」

「……………いない」

「あら、残念。まあ、いないなら良いか、はい音羽君、得とごらん有れ!!」

俺がいるからってそんな不機嫌にならなくても良いと思うがな、それに俺は突然来たmk?への秘匿メール（自分の作ったもの 責任を果たさな 製作者）東博士から「楽しいことしない?」に「子供への世話をしない親は失格だぞ?」と返信したことが原因で嫌われているらしい。俺は市場を制圧してしまわないように他企業には別の支援をして良きライバルとして争うような関係にしているため悪い影響は無い、ソレに対して東博士はただISを作った後はほぼ放置、存在によって発生する影響を無視して世界中を逃げ回る。正直言ってその姿勢は褒められるものではない、別にそういうスタンスを全否定するわけではないが一人の財界の人間として考えればあんまりなあ、と言ったところである。一度しっかり話したいが嫌われているから無理なんだがな。

「……………で、今回はどこから来るんです?」

「ふふん、上よ（キリッ）」

言われてからふいに上空を見上げる・・・接近する機影も無し、どこだよ。まだ最適化も初期化もしていないISは待機状態になることができない。つまりそれまではコンテナだろうがなんだろうが格納状態で運搬しなければいけないのだ。・・・しかし四方八方を見回しても運搬車は見当たらず、コンテナらしきものも無い。上からとは聞いたが・・・なにも来ないぞ？

「あ、来たみたいね」

「はい？・・・！！？」

ふと陛下が指差した上空にはアグスタウェストランド・リンクスが底部に楕円形のコンテナを吊り下げて飛んできていた、それに気づいたところには女帝が無線機で指示を出していた。無線機からはヘリのパイロットであろう人物の声がローターの騒がしい回転音に混じって聞こえてくる。バラバラバラとけたたましい機械の作動音が響く、波風と相まって吹き付ける風に思わず右腕を上げてしまう。

「よし、降ろしちゃって！」

『了解！投下します！』

ヘリの底部に固定されていたコンテナが威勢の良い返事とほぼ同時にロックが外されて降下を開始する、ISを積載しているであろうそれはその重さを感じさせることなくゆっくりとこちらへ向かって降下してきていた。どうやらそれには興味があるのか東博士も私は別になんでもありませんよという仕草をしながらそれを見ていた、別に普通に見れば良いんじゃないか？

「さて、音羽君。来たわよ、あなたへのプレゼント！」

底部に搭載されていたのであろうブースターによる逆噴射で地面へふわっと着地した卵型のコンテナ、なにかが胎動しているような感じがするのだが気のせいだろうか。そのの前面に取り付けられている小さなコンソールパネルを女王がカタカタと操作をし、ISを包み込むキャノピーを蕾が開くかのように開いていく。すると、二枚目のキャノピーなんともとや顔で現れた。

「ええ、なにそのぬか喜び」

「宅急便の衝撃吸収剤みたいなものよ」

「そうですか……」

このフェイントに東博士すらすっころんでいたことをここに明記しておく、え、二枚目とか……ここは一枚で終わって欲しかったよ。

「さて、ブレイクザチェーン!!」

そして、女王が指を高々と鳴らした瞬間。最終カバーが幾千もの筋を走らせた後に瓦解する、そこに現れたのは……

——一つの蒼だった——

85・フエイント作戦（後書き）

どうでも良い作品情報

実はこれを書いている11/19の時点で専用機の名前が決まっ
てないという事実

86・騎士の剣（前書き）

機体の名前の相談に乗ってくれたジョナサンさまありがとうございました！

86・騎士の剣

遂に、この場に姿を現した俺の専用機。

「こいつが・・・俺の・・・」

「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国、IS開発チームが音羽君のこれまでの稼動データを使用して苦心の末組み上げたBT三号機、『ブルー・ドラグーン』」

騎士として、戦うために与えられる唯一の剣。蒼穹に染め上げられた鎧が目の前で纏いし主を今かと跪いてそのコックピットを開け放っていた。BT一号機より増設させられた多目的複合兵装ビツト^{アームド}「アサルトハウンド」が4基の非固定部位にフィンアーマーとして下部に接続されている、そのフィンアーマーは背部に二枚重ねで固定されており、翼を閉じた鷹のような落ち着いた中の凶暴さを示していた。

「さあさ、ちゃちゃっと仕上げちゃうよ」

「は、はい」

日本刀が持つような武器の気迫とでも言うのだろうか、それに気圧されてしまった俺は女王のその声に返答を詰まらせながらそこに鎮座する蒼い騎士へと歩を向ける。一步、一步と近づいたびに身体に感じる気迫が強くなる。そして、手を伸ばせば触れるという場所まで来た瞬間、IS自身に呼ばれたかのような気がした。

『さあ、共に行こう』

それに返事をするかのように一度頷いてコックピットへと飛び乗る、

自動的に正装の騎士服からISスーツへ自動的に着替えさせられ、それとほぼ同時に脚から順番に操縦者である俺の身体を包み込むようにして装甲が閉じていく。四肢がまるで元から自分の身体のように感じるほどにフィットした全身、最後にバイザー型ハイパーセンサーが後方からせり上がって俺の顔の半分を包み込み固定される。一瞬視界が真っ暗になるが、すぐに肉眼以上のクリアな視覚と聴覚が神経を通じて俺に伝えられる。ハイパーセンサーが起動した証拠だった。

『全システム フィットティングとフォーマットを開始します』

意識に直接届く合成音であろう女性の声、視界いっぱいには大量の数列が羅列され洪水のようにスクロールされていく。耳にはハードの最適化をしているかすかな機械音が聞こえる、ソフトウェアとハードウェアの両方を調整しているのだからこの程度で驚いてはいけない。立ち上がって周囲を見渡すと機材やISを運んで実習の準備を始めている生徒たちが目に入った、今日いっぱいにはIS実習や候補生は本国から届いたISの追加装備セットとも言える「パッケージ」という物の試験をすることになっている。某VFのスーパースターの性能テストと言えばわかりやすいか。

「これって思ったより時間かかるんですね」

「まあ、特殊装備とか全部試験的なものばかりだからね」

しかも高性能だからその最適化にも時間がかかる、ソフトごっちゃに入れたパソコンの入ってるソフト全部を自分が使いやすいように微調整し続けるようなものだ。それも設定画面からじゃなくてソフト自体を弄ってというものの、事前にマニュアル読んだけどやっぱり半端無いなこいつ。というか、こんな最先端技術を個人に渡して良いのだろうか、悪用する気は無いが万が一ってこともある。

「あはは、大丈夫よ。もしも強 奪ってことになったら男のロマンが守ってくれるから」

「……嫌な予感がするんですが、というかあなたは女でしょう」

「大丈夫よ、まあ、その時のお楽しみってことで」

この人が何か企てるような表情をしてけけら笑っているってことは、なにかと通り越しての何かをやらかしてるときが多い。物理法則然り、世界の技術然り、常識然り。そしてその度にそれを知った国民は「またかww」で済ませるのだ「女王なら仕方ない」みたいに、そんな人が女王やってられるあたりこの世の中は思ったより平和なのかもしれないが。っと、そろそろか？

□ ■ □ ■ □ ■ □

キイイイン

そんな金属音と同時にその音の発生源、IS「ブルー・ドラグリーン」が青白い閃光に包み込まれる。上空へと噴き上げるそれは機体から放出されるBTエネルギーだった、竜巻のように噴き上がるそれが消え去った中心には機体のエネルギーラインが青く光る一機のISが神々しく四基のフィンアーマーを左右に翼のように大きく広げて立っていた。正に『竜』騎兵の名の通りに……。

『system All complete』

滑らかになったシステム音声フォーマットとフィッティングの終

了を知らせる、1号機であるブルー・ティアーズを思わせるような中に鋭角的なスカートアーマー、中世の騎士を思わせる風貌にセシリアがほう、と吐息を吐いていた。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ふふふ、さあ、あとは自分で頑張つてね、お姉さんは帰るから」

「・・・え、マジで渡すだけですか」

「うん、だって・・・面倒ごとはお姉さん嫌いだもん、じゃあね」

そう言つて手を振りF-35B-PIEカスタムのコックピットに飛び乗る女王、だったらなんで開発者でも担当したメンバー連れてこなかったんだよ、確かにマニュアルはこれでもかって言うくらいに説明書つてレベルの情報以外に整備方法とか諸々書いてあったけどさ。設計図まで折込で入ってたし、部品の調達先とか連絡先・・・ISを自動車か何かと勘違いしてやしないかね？

「じゃあ、たまには顔出しに来てね音羽君！」

「わかりましたよ、少しは周りに気を遣つてあげてくださいよ！」

「善処する、バイバーイ！！」

手を振つて離陸・・・できなかった、いや、しそこねたと言つたところか。千冬さんが無線機で『離陸は許可できない』と叫んでいた、そつえば気づかなかつたが一般生徒が俺以外居ないな。・・・あれ、実習はしないのか？パッケージの試験は？しないと本国から直々にお叱り受けるぞ、俺だってまだ機体動かしてすらいらないのに・・・。あ、千冬さんがなんか「空域封鎖」だの「特務」だの言ってる・・・なにがあつたんだろうか。

「ブルー・ドラグーン、待機モード」

瞬間、全身が蒼い光の粒子に包み込まれてふわりと地面へ正装で着地する。ひとまずISを展開したままでは話もまとみにできないし、現状把握には必要ない。すると、腰になにやらスラスタと小さな蒼いエネルギーラインが入ったウイングの模様が入ったブルーメタルのダブルデリンジャーだった。BTエネルギーでも撃てるのだからか・・・今はどうでもいいが。ひとまず、太腿の空っぽのホルスターに入れて帰ろうとしていた女王とその前を歩く千冬さんと呼ばれて旅館へと歩くのだった。

86・騎士の剣（後書き）

どうでも良い作品情報

なんで三号機かは・・・わかるよね

87・機体説明（前書き）

はい、先に分かりやすく今日は機体説明です

87・機体説明

・「機体名」

φ『ブルー・ドラグーン』

イギリス次期国防対策ISチーム開発BT三号機、高機動・高火力による対象の迎撃を目標として建造された。欧州統合防衛計画「イグニッション・プラン」のトライアル提出候補、その試験機である「ブルー・ティアーズ」の稼動データと「認定騎士」である如月音羽のIS学園でのISの稼動データをシュミレートして設計された「騎士」の剣としての一機。

・「武装」

φ『78口径BTレーザー複合ライフル「スターガーディアン」《星の守護者》』

実弾・レーザー弾の発射、ビットと同じく偏向射撃が可能。セミ・フルオート・三点バースト切り替え可。BTエネルギー系の兵装では全武装中では単体で最高出力を誇る、また二号機に搭載されたスターブレイカーの改良版であるためにBTエネルギーレーザーを纏わせた実体弾を発射可能である。エネルギーの任意での収束チャージが可能であり、追加エネルギーアキュムレイターの装着によりアウトレンジからの高火力狙撃が可能になっている。本機体の主武装である。

φ『^{アームド}多目的武装ビット「アサルトハウンド」』

一号機に搭載された遠隔操作の射撃ビット、二号機に搭載された防

御・牽制システムに続けて提案されたBTエネルギーの多様の使用を目的に開発されたビットシステムの第三案。稼動時の操縦者の移動が不可能になる不可から来る欠陥は二号機に続いて改善されており、また、PICの内臓数増加によるPICのみでの高速機動が可能になりエネルギーチャージのための退避までの時間が延びた。また、イメージインターフェイスの運用の活用として牽制射撃以外にも運用できる。

φ『複合近接ブレード「ダーインスレイヴ」』

北欧神話で魔剣と言われているそれをモチーフにしたBTエネルギーを実剣の刃に纏わせて使うブレード。斬撃力は最高性能を誇り、剣撃を繰り返すたびにBTエネルギーの放出量が増加し威力を増していく。しかし、限界まで収束された一撃を放つと急激なエネルギーの減少と冷却のための強制格納が起こる。

・『エネルギーの供給「ヒートコンバーター」』

搭載された武装のほぼ全てがBTエネルギーの使用を前提とした仕様になっっているため、通常のエネルギー供給ではすぐに底をついてしまうため「ブルー・ドラグーン」には試験的にエネルギー回復システムが組み込まれている。機体稼動時に蓄積された高熱を機体各部に内包されたナノマシンでの放熱冷却による熱変換により、理論上はエネルギーが切れてしまうことはない。しかし、過度なシステム利用によるエネルギー回復はナノマシンのオーバーヒートを引き起こし、通信・武装使用・機体制御に影響を与えて最悪の場合、ISの強制解除・待機状態からの強制離脱が行われる。機体内部に放出される熱による操縦者へのダメージを抑えるためである、しかし、戦闘中に空中へ投げ出される場合があるために改善の余地がある。

・『機体譲渡による問題点』〈英国特務外交官記録文書より抜粋〉

本来は国防のために国家代表候補生やIS開発企業にしかコアや機体は譲渡されない、アラスカ条約でコアの売買・譲渡は禁止されているからである。しかし、この場合「英国認定騎士」、つまり緊急権限とはいえ「大佐」の階級を持つ『一人の兵士』への専用機譲渡扱いになっている。また、現在でも「如月音羽」の戸籍は残されているために一市民としての特例扱いにされているため、国際的な問題には条約・法律上ではならない。また、如月音羽自身が世界各国の税収の一角を担う医薬品企業の技術ライセンス保持者のため、大きな税収を失うわけにはいかないよう口出しを避けている面もある。

87・機体説明（後書き）

どうでも良い番外情報

番外I Fの幻想入りを別個で纏めておこうと思います（本編には挟みませんが幻想入りはそれで一つの小説にしておこうということです）

88. ひしいてそついつと（前書き）

今回はちょうどいい切りどころで分けた

88.らしいってそういうこと

女王が「帰れない、あ、そっち入って良い？」とか「お姉さんと良い事しない？」とか五月蠅いのを「今度でお願いします」とだけ返して衛星回線仕様携帯電話で『イレイスト地図にない基地』のとある名を知らぬ管理官（司令官は自分の立場しか考えてない馬鹿だからどうでもいい、というか解雇されてほしい）から届いた秘匿メールを確認していた。もちろん、千冬さんに呼ばれたので大広間へと歩きながら・
・え〜と、何だって？

『二時間前にハワイ沖で試験稼動していた新型機が暴走、コントロール不能に陥り試験空域を離脱。注意されたし』

・・・・これは、やつちゃったってやつか、洒落にならんがな。軍用の、しかも試験機ということはスポーツ用のISとは比べ物にならない性能、それこそ耐久力から攻撃能力、稼働時間にシールドエネルギー保有量まで制限を解除されているおかげで破格のものに仕上がっている。スポーツ用で倒せないことも無いが骨が折れる作業になるのは確実だ、多分女王なら鼻歌交じりにフィッシュチップスでも齧りながら戦闘機乗り回して対等に戦ってそうだがな。いや、軍用機が弱いんじゃないかって女王が規格外チートってだけだな。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「失礼します、如月来ました」

「ああ、遅かったな。適当に座れ」

「了解」

一応制服に一瞬早着替えをして大広間の戸を軽くノックして中へ入る、中には巨大な空間投影モニターが千冬さんの後ろと候補生（ジヤックは専用機持ちじゃないからいない、簪ちゃんはまだ武装が完成してないから出れない）＋一夏と箒が外周を包み込むようにして畳数枚ほどの大きさが展開されていた。・・あれって確か良い値段するんだよな、いくらかは言わないけど。ひとまず空いていた千冬さん近くの場所に携帯電話を格納しながら座る。

「では始めるか、山田先生モニター操作お願いします」

「はい、わかりました」

それぞれが手前のモニターに映し出されたISとそれに関する資料が表示される、機体名と進行予想ルートだけであるが・・情報足りなく無いか？だいいち何を始めるんだよ・・・嫌な予感しかないがな、あれ、この機体って確か稼動試験の招待受けてたのじやなかったか。たしか名前は・・シルバニア・・ファミリー？・・それは女の子向けのお人形だったな、なんだったっけか、まあいいや。

「では、現状を説明する」

千冬さんが中央に配置された空間投影モニターを指揮棒で指しながら説明を始める、やっぱり嫌な予感しかない。しかも俺の嫌な予感つてのは当たることが多い、結果が大なり小なりなにか厄介ごとが発生する、悪ければ空港のテログループによる占拠事件・良くても角から飛び出してきた小学生の乗った自転車に真横からぶつかる最近ハワイでレンタルしたセスナが燃料漏れで墜落した。厄払いでもしにいかと最近良く思うんだよな・・・厄神でも俺

に憑いてるんだろうかなあ。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動中であつたアメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が突然制御下を離れて暴走。監視空域から離脱、捕獲を試みた米軍機三機を先頭不能に陥らせて逃走したとの情報が入った」

・・・ああ、名前それか！一人シリアス・・・一夏と篤は状況が飲み込めないように呆けているが、俺はポンと納得したために手を叩く。勿論緊急事態つてことは理解できたがな、試験稼動つてことはもう最終調整に入つてたんだな、たしかイスラエルからの技術協力はIWIが一枚噛んでるんだつたっけかな。射撃武装技術のアドバンテージとロボティクス技術を持つアメリカとの技術交流つて名目での開発行き詰まり解消だな。スランプになつたら人に聞けと言うが国家レベルでそれを実践する辺りらしいがな。

「その後、衛星での追跡の結果、福音はここから二キロ先の海上を通過することがわかった。時間にして50分後、。米軍の要請と学園上層部の判断の結果、我々がこの事態に対応することになった」

この場合は実力がある教師陣が対応することが多いらしい、生徒を作戦要員として参加させればなにかしらの国際問題に発展しかねない。国防の要にもなりうる卵を失いたい国家など今の時代にがどこにもいない・・・はずだ。

「教員は学園の訓練機を使用しての空域及び海域の封鎖を行う。よつてこの作戦の要は専用機持ちに担当してもらうことになった」

学園上層部は頭が狂つてるのだろうか、たしかに情報から判断するに適所かもしれないが・・・。世界各国から預かっている重要人物

とも言える代表候補生、しかも新型である第三世代型機を持つ専用機持ちを実戦の参加要員として出撃させて軍用の、それも新型に対処させようとするなんて・・・たしかに候補生はそれこそ技量は並みの一般兵よりは力を持つているがもしものことがある。それこそ最悪死亡の可能性もありえる、米軍も何を考えているんだか・・・。

「織斑先生、質問があります」

「なんだ如月」

右手を上げてしっかりと拳手をする、中途半端な拳手はしてないと同じだからな。

「各国は自国の候補生の作戦参加を容認しているのですか？確認として質問致します」

「・・・緊急時のため学園に所属する現在動ける人員の参加として特例で許諾されている」

「了解しました、以上です」

むう、それならば俺が口出しできることではないな。まあ、今から軍属部隊は間に合わないから仕方ないか、このまま逃がせば行き着いた都市が火の海になる。そうなれば候補生の命どころか何万人、ひどければ何十万人の人命が失われることになる・・・それは流石に避けたい、けして候補生の命が軽いというわけではないんだがな。

「さて、作戦に関して質問はあるか？」

「はい、目標の詳細スペックの提示をお願い致します」

「わかった、だが二カ国の最重要国家機密だ。口外した場合は査問委員会による裁判と最低でも二年間の監視が付けられる」

全員（いまだに状況が飲み込めていない一夏と箒を除く）が頷くと

同時に目の前の大型平面投影モニターにスペックデータと稼動時にモニタリングされたであろう稼動データが表示される。流石軍用、半端無いぜ！いや、本気と書いてマジって読むくらいには、IWIの参加の影響が射撃武装が主体になっていた。

「広域殲滅を主体とした特殊射撃型・・・わたくしの機体と同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と防御特化の両方特化ねえ、正直厄介ね。しかもスペック上だとあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利・・・」

「この特殊武装が厄介そうだね。丁度本国から防御主体のパッケージが届いてるけど連続での防御は無理そうだよ」

「このデータからは格闘性能が未知数だ、持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

「・・・最高速度が時速2450キロを越えるとある、現在も超高速飛行中ということだからアプローチは一回が限界だろう」

「となると一撃必殺で仕留めるしか方法はないんだな・・・そうなれば」

全員（一夏と箒以外）の視線が一夏へと向けられる、やっと状況を理解したのか一回びくつと肩を震わせて驚くと目を見開いて慌て始めた・・・一回落ち着けよ、焦るとどうしようもないぞ？

「お、俺え！？」

間抜けな一夏の声が大広間に響き渡るのは、予想するにかたくなかった・・・まあ、そうじゃなきゃ一夏じゃないというかそういう感じはするがな。

88. らしいってそういうこと（後書き）

どうでも良い作品情報

実は番外編のほうで筆が進むという事実

89 天災Ⅱ馬鹿（前書き）

は
う
い、東さん大好きな皆さんお待ちせいたしました♪

89・天災Ⅱ馬鹿

一夏が「俺え!？」とか?なことを口に出してから数分、千冬さんのブラコン発言「織斑、これは実戦だ。覚悟がないのならば無理強いはいしない」により吹っ切れた一夏が作戦参加を承諾、詳しい話し合いに入るようになった。ちなみに俺は持ち運び用液晶モニターで後頭部を叩かれたところをさすりながら話を聞いている。あれって重量が余裕で2キロ越えてたと思うんだ、いくら相手がエクステンデッドだからってその仕打ちはないでしょう。いや、これ以上考えてたら今度は近接ブレードで斬られかねない・・・。

「そうなるとうやうやって一夏を運ぶか、エネルギーをどれだけ使わせないかな」

「しかも目標に追いつける機体でなければいけない、高感度ハイパーセンサーも必要だ」

そうなれば、パッケージ装備も加えて最高速度が出せるのは・・・モニターに指を滑らせながらデータを見比べる。もちろん戦闘能力・連携も含めてだ。戦場では一人より二人、追撃戦ならば少数精鋭での連携が有効的だ。戦闘のノウハウは使用する兵器が何になるうと変わらない、いやまあ、これもミリアさん情報だがな。小学生になに教えてるんだとは思うが護衛ならば必要な情報だ・・・うん。実際それのおかげで追跡者を下水へ叩き落してm9ができたからな。

「現在最高速度を出せる機体所持者は誰だ？」

「はい、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうど本国から強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、高感度ハイパーセンサーも搭載しています」

「俺もです。ブルー・ドラグーンの高機動モードを使用した場合」

ストライク・ガンナー』と同等、また高感度ハイパーセンサーもモード変更で対応できます」

ついでに言えば死神の瞳とのシステム同期も可能らしい、ナノマシンのシステムリンクがどうこう言っていたがそこまで情報あったのか……。そりゃあ、戸籍の本登録もしたしそういう情報も一応女王経由で伝えたださ。まあ、使えば便利だろうけど身体への負担がシャレにならない、無理矢理人体に高速情報伝達で動かしてるようなものだからな。

「……ふむ、超音速戦闘訓練は何時間だ？」

「はい、20時間です」

「……6時間です」

関係ないことだが地図イレーストにない基地で暇な時間に改良型X-15で耐久8時間レースをした覚えがある、擬似格納領域で燃料補給をしなからアメリカ本土を飛び回った。正直とても楽しかった、なにせ最高速度時速7000キロオーバー、衝撃波を出しながら挑発……。怖いのか？臆病なのか？死ぬのか？「だ、誰が怖いものか！」ほいほい乗ってくれた司令官と二機で空の旅をした。そのあとビビッて一時間でリタイアした司令官に青汁を渡して驚かせた。いや、あれは楽しかった。

「ふむ、如月は疾風の高速戦闘をしていたな……戦闘機での音速訓練は経験あるか？」

「……言わなきゃ駄目です？」

「参考にな」

「F-35Cで35時間、最高速度マッハ5.3での無人機撃墜訓練です」

なにか後方から驚愕の声が上がるが気にしない、ついでに言えば35Cは独断で開発中のプラズマブースター搭載試験機なので音速は余裕で5→6は行けるんじゃないか？「文字通りの近接戦闘」ってことで発生する衝撃波を武器にしてミサイルだの無人機だの碎き落としたからな。まあ、耐G用特殊スーツ着てなきや今頃俺も鉄の匂いがほのかに香るできたてほかほかケチャップになっていただろうがな。イレイズドにはそれを生身でヒヤッハーしていたBA KAもいたけどな。まあ、気にしたらいけないんだろう、アメリカだし。

「・・・経験ということでオルコット、お前に任せる。如月はまだ機体に慣れていないからな」

「了解しました」

「了解」

まあ、機体を動かしての試験なんかしてないからな。いくら俺のデータ使って組み上げられたとはいえ、別物の機体だ慣れなきゃアームドビットもまともに運用できないし武装のクセも掴めない。まあ、当然の結果ではあるか。どれだけ強い兵器でも使いこなせなければ意味が無い、俺だって銃器の使用訓練を嫌になるほどやってきたからな。

「よし、では決定」

する、と千冬さんが言い終わる前に俺は天井のあるところに向けて「修理費は出す！」と叫びながら天井板を蹴り上げるするとある人物の姉にして世界を変えた元凶である天災が「ぶへっ！」とか叫びながら落っこちてくる。すぐに板をはめ直して何食わぬ顔で膝を曲げて着地する。そして首根っこを掴み千冬さんへ一言。

「不法侵入者を捨ててきます」

「ああ、すぐに戻って来いよ？」

「Ya」

そのまま襖を開けて連行しようとするその天災馬鹿が引きずられていたはずなのにそのまま俺の背後に回り、俺の首筋をいやらしくべろりと舐めてきやがった。あ、この野郎・・・うあ。そのまま力が抜けてしまった俺の身体が弱弱しく床へと座り込んでしまう、お化けと幽霊にもう一つ、首筋は俺の物理的弱点である、しかもそこを不意打ちでやられると力が抜けてしまうのだ。

「ひゃうつ！ふわあ！！」

「ぬふふ、その程度じゃ意味無いよ？」

力が抜けて動けない俺をニコニコ笑顔で見下ろしながら、その天災は勝ち誇ったように告げたのだった。相手が大人の女性とはいえ無力化されてしまった俺・・・情けないな、セシリアはなにか悲鳴に近い叫び声を上げてなにか言っているが。展開したmk？のワイヤーアームで無理矢理起こしてもらい目の雨の天災を見つめる。

「何の用だ、部外者は立ち入り禁止だぞ天災」

「良いアイデアがあつたから言いに来ただけだよん」それとももう一回イク？」

「やめてくれ、もう十分だ」

「じゃあ、私と楽しいことしてくれる？」

「メールのアレをやったなら考えておいてやる」

「うん、残念」

回復しきっていない状態で後方へステップして離れる、少しよろけてしまったがまあ問題ないだろう。というか、こいつに嫌われてたんじゃないのか俺？違うのか？いや、そうならそれで俺は良いんだ

がな、みんな仲良く、それが一番だ・・・あれ、なんで一夏と箒と千冬さんが驚いてるんだ？俺も現在進行形で驚いてるところだが。なんか「束が私達以外に話をまともにしている？」だの「姉さんが・だと!？」とか言ってるし。

「ん？私がいつおっくんを嫌ったというのかね？」

「・・・最初で最後の直接メールだとおもったが？・・・おっくん？」

「音羽だからおっくん、おk？それにたかが一回で諦める束さんじゃないのだ オツケー貰えるまで何回もやるよ？」

「だったら毎日のように匿名でウイルスメール送らないでくれるか、毎回各所に対応するのが面倒なんだが」

「むう、毎回簡単に駆除していくから毎日の楽しみなのに」

腰に手を当ててぶくうと頬を膨らませて文句を言う天災、そのポーズ似合っているが自重しろ20代後半、妹が信じられないものを見ているような目でこっちをガン見しているのだが。というか一夏「友達できたのか、良かったなあ」みたいな微笑ましい目で見えるなこいつが五月蠅くなる・・・そういや実際に会うのはこれが初めてか。既に「しっかりしてほしい技術者」から「五月蠅い馬鹿」に評価は変わっているがな。はあ。

「・・・それで、良いアイデアとはなんだ束」

「ああ、ごめんねちゃん。つい夢中になっちゃった、ええとね」

開放された俺はどかと床に座る、もちろん天災が立っている正面モニターから一番離れた場所に。またやられたらたまったものじゃない、今でさえしっかり座ってるのもきついというのに。

「ここは断然、紅椿の出番なんだよ」

「どういうことだ束」

「ん」とねえ、ほいさ」

いつのまにディスプレイのシステムに侵入したのか、正面も手前のモニターも箒が渡されたIS「紅椿」のデータ表示に切り替わる。千冬さんも言ったがどういうことだ？

「じゃあ説明しよっか」

そこから始まったのは世界のIS開発者の努力を粉碎 玉砕 大喝采するものであったなどとその時の俺には予想もできなかったのだ。

89・天災Ⅱ馬鹿（後書き）

どうでも良い作品情報

睨んでいたのはにんじんロケットを前日に吹き飛ばされたから
（子供が拗ねているようなものですw）

90・フラゲブレイカー（前書き）

はい、最後までへんごり注意報です

90・フラグブレイカー

「・・・で、紅椿には第四世代のシステムである『展開装甲』が装備されているから適任だと？」

「もちのろん！」

この天災が言うには第四世代、つまり「パッケージ換装を必要としない万能機」、ちなみに現在絶賛机上の空論中のものである。イギリス以外は・・・ね、アームドビットとか意図せず使用方法によってはそうなるらしいし、つくづくイギリスという国が分からなくなってきたぞ俺は。まあ、俺がそうなるように運用できればとかっていう理論上だからな、実際は第三世代機だ。「しかも全身に搭載したし、全開だと更にスペックデータは倍プッシュ」はあい！？

「・・・はあ、せめて世界中の技術者の仕事を取るな馬鹿」

「いやゝ、つい調子に乗っちゃったんだよね・・・あれ、なんで静かなの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大広間は、天災の発言のおかげで絶賛通夜状態になってしまっていた。候補生全員が「orz」状態でため息をついている、気持ち痛いくらいわかる。なにせ本国で大きな予算を毎年かけてまでやっている今の研究開発が全て無駄になってしまったのだ、それもISの生みの親によっていとも簡単に。これはあれだ、世界中のナノマシン技術者を置いてけぼりにして俺が最新技術を売り込みに行ったときのナノドクターの常務さんの纏ってた空気だ。「なん・・・だと」ってやつだ、うん。悲壮感たっぷりしていたのを覚えてる。

「やり過ぎるなと言っただろう・・・」

「大丈夫だよ、紅椿はまだ完全じゃないし。まあ、教えるつもりはないからね」

どうやら世界にはまだ開発を続ける意味はあるようだ、正直量産されたらどうしようもないからな。国家予算の大幅な無駄になることはないようだった、ふう。まあ、対人能力が末期なこいつならば元からそういうことは自己完結で済ませてしまうことが多いだろう、大抵そんなものだ。

「それにしてもあれだね、海で暴走って言うと十年前の白騎士事件を思い出すね」

千冬さんがしまった、とても良いたそうな目で天災を軽く睨む、どうかしただろうか？

□ ■ □ ■ □ ■ □

『白騎士事件』

この世界に住む人間ならば小学生のころには必ず教えられる大事件である、今の世界の基盤を変えてしまったISの世界への実質的なお披露目でもある。

10年前に学会に発表された「宇宙探査用マルチフォームスーツ」ISはその出鱈目な性能から世迷言扱いされて認められなかった。いや、認めるわけにはいかなかったとも言うべきか。

その一カ月後、全世界に存在する日本を射程内に収めるミサイル2341発。それが全て何物かにハッキングされ日本へと発射され、日本は恐怖のどんぞりに追いやられたのだ、平和ボケしていた日本人にはその脅威は経験になく、また、逃げる時間も無いに等しい。正に日本建国以来最大の危機だった。

そんな中現れたのが白いISを纏った一人の女性。

顔は初期型のハイパーセンサーのおかげで見えることはなかった。しかし、空想でもあるかのような突然現れたそれは飛来したミサイルを次々とその手に握った剣で『ぶった斬った』のだ。それも人には不可能な超音速で縦横無尽に空を駆け巡り、あまつさえ当時試作型がやっと開発できた陽電子砲を空中に召還、遠距離を飛行するミサイルをなぎ払った。

「超音速での飛行・急旋回などの機動力」「第質量の兵器を粒子から構成する機能」「ビーム兵器の実用化」そのどれもが現行の兵器を凌駕するほどのものだった。

もちろんそんな「危険物」を無視するほど世界は馬鹿ではなかった、条約を無視し空母に戦闘機などと自国の軍を出撃させ「捕獲」、それが無理ならば「撃墜」と動き出した。しかしそれも死傷者0、当時最新鋭の兵器が大量に投入されたにも関わらずたった一機のISに世界は敗北したのだ。

「相手を生かしたまま無力化することができる」までの性能をまざまざと見せつけ、最後にはまるで最初からいなかったと思わせてしまったようなステルス性能を見せてその消息を絶ったのだ。



「それにしても白騎士って誰だったんだろうね？ね、ちーちゃん？」

「そうだな」

「私の予想ではバスト88センチの・・・ぶへっ！」

箒と一夏がこそつと教えてくれたが二人は幼馴染らしい、どうりでさつきから賑やかにしているわけだ。・・・そんな暇もそうないな、邪魔をするのは忍びないが仕方ないか。作戦開始はできるなら早めのほうが良い、それに準備時間も必要だ。エネルギーとか機体調整にも時間がかかる。

「・・・織斑先生」

「わかってる。束、調整はどれくらいかかる？」

「遅くても7分だよ」

「そうか、ならば作戦参加は織斑・篠ノ之両名で行う。各自準備を始める」

セシリアが抗議しようとしているが止める、まだパッケージの量子変換トールが終わってない以上準備には時間がかかる。早期決着が求められるために早いのであればそちらが選ばれる、それに篠ノ之博士謹製のISだ、毎日打鉄で特訓を欠かさず頑張っていた箒ならばISが助けてくれるだろうし問題ないだろう。

「作戦開始は30分後、準備を各自始めろ」

『はい！』

□ ■ □ ■ □ ■ □

まあ、準備と言っても俺はやることなし。直接参加要員ではないため、俺はブルー・ドラグーンを装着したままなにかあったときの備えとして慣れることにしていた。いや、援護指示が出た場合に備えてだな・・・フラグ立てるなとか言うな。備えあれば憂いなしと日本のことわざにあるだろう、超高速戦闘のレクチャーなんて俺にはできないし、おそらく一夏が理解できない数値説明になるからな。だいいち8時間じゃあ役に立たない、ISと戦闘機じゃ動き方も違うしな。「一応動きには慣れておけ」と言われたしな・・・。

「高速戦闘用に調整された高感度ハイパーセンサーとはですねー」
「・・・ふむふむ」

一夏がセシリアに高感度ハイパーセンサーの説明を受けていた、じやあ俺はフラグブレイクでもしに行くかな。レクチャーを大勢に受けている一夏を一瞥し、俺はその場を後にした。

□ ■ □ ■ □ ■ □

開けた海岸、そこに二人の人影があった。作戦の実働要員の一夏と第である、既に準備は万端であり白式と紅椿をその身に纏っていた。既に教員は司令室に宛がわれた大広間で配置にしている、モニターは開始されていて、機体が作戦準備完了していることが映像で映し出されている。

「両機、発進準備完了。いつでも行けます」

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

千冬さんの呼びかけに対して、頷きで返す二人。

「本作戦の要は一撃必殺だ。^{ワンアブローチ・ワンダウン}短期決戦を心がける」
「了解」

「織斑先生、私は状況に応じてサポートをすればよろしいですか？」
『そうだな、だが無理はするな。お前はその機体での実戦経験は皆無だ、突然なにかしらの不具合が出るとも限らない』

「わかりました、できる範囲で援護をします」

織斑先生が一夏へプライベートチャネルで注意をしているころ、俺は通信回線を紅椿へと繋いでいた。

『あゝ、あゝ。聞こえるか篤』

「どうした音羽、お前は実働要員じゃないだろう」

『まあそう堅いこと言うなって、一つ言いたいことがあってな』

「なんだ？」

『力が手に入ったからって調子に乗っていると《死ぬ》ぞ？間違いない』
『く』

「調子になど乗っていない、真剣だ私は」

『客観的なお前見せてやるからちよい待ち・・・よいせ』

先ほどまでの専用機を手に入れてからの篤を撮影していた映像を見せる、するとすぐに静かになった。その顔には焦りがあった、まあ、狙い通りってとこだな。

『どうだ？』

「あ、ああ、すまない・・・やはり私は・・・」

『あゝったく、気づいたならオツケーだ。なからは自分でわかるな？』

「勿論だ、力を間違えないで全力で行く。ありがとう音羽」

『ははは、じゃあ行つて来い！！』

「了解！」

「了解だ！」

吹っ切ったような表情で返事を返し、頷いて空を見上げる。よし、これで良いかな？

『これでオツケーです千冬さん』

『・・・お前は本当に高校生か？』

『ごく普通の男子高校生ですよ、あくまでね？』

90・フラゲブレイカー（後書き）

どうでも良い作品情報

楯無さん空気とか言わない、しっかり捕まって司令室で仕事させられてます

9 1・番外IF その5「プリン教室」(前書き)

カスタードプリンって作るの大変ですけど、美味しいですよ。今回はそんなお話。

9 1・番外IF その5「プリン教室」

紫さんの手を逃げないようにがっちり握って引きながら慧音さんに連れられて寺子屋に到着、まさに中学時代に歴史で習ったような和風の建物だった。個人的には洋風の屋敷で過ごしたことが一番多いために日本に着たばかりの外国人のようにきよるきよる見回してしまった。まあ、日本に越してきてからは一般住宅に住んでるからなうーん、やはりこういうのを見て落ち着くあたり俺は日本人ってことが実感できるな。

「到着したぞ、ここが私の寺子屋だ」

「ここがかぁ・・・」

「相変わらず賑やかなえ」

寺子屋の中からは子供達の賑やかな声が響いて聞こえてくる、あゝ、セシリアも小さいころ可愛かったなあ。今どうしてるだろうな・・・別にロリコンなわけじゃないぞ、セシリアが大好きなだけの紳士だ、前に変態ってつかないほうの。それにしても楽しそうな声が聞こえるな。

「まあ、人間だけでなく妖怪も来てるから自然と賑やかになるんだ」

「妖怪も来てるんですか・・・はぁ」

「ああ、けど安心してくれ。人は襲わないように教えているから。」

まあ、この寺子屋にいる大半の妖怪は大人しくて、人を襲おうとするのはごく一部――

ふむ、なら安心だ「あゝ！あんたはゝ！！」なんだ、幻想郷に知り合いいないぞ、来たばかりなんだから当たり前だし。ひとまず慧音さんの背に隠れてしまっているらしいそちらに視線をちらりと向

ける。あれ、今の声はどこかで聞き覚えがあるな。どこでだったか？

「何だ？」

ただだつと寺子屋の中から走って出てきたのは、見覚えどころかこの世界で最初に出会った相手だった。

「君は・・・チルノだったか？」

「そうよー!!」

腕を組んでどや顔でこちらを見上げる青い服を着た少女、やはりチルノだった。やはり小さいな、下できゃんきゃん叫んでいるがそれすらも可愛らしく思えてしまう。

「ここで会ったが??年目!今度こそ凍らせてやるから覚悟しなさい!!」

「まあまあ、まずは平和的に話をしようよ」

「問答無用よつ!!」

弾幕を出そうと構えるチルノ、ふと反射で身構えるが弾幕が来ることはなく。慧音さんがチルノの手を素早く掴んでいた、見た目優しくしてあげているがチルノは動けずにいてじたばたしていた。元気だなあ、一夏もそこに元気だったがチルノはそれ以上だな。まあ、元気なのは良い事だ。

「こら待て」

「ひゃ!？」

「寺子屋での弾幕ごっこは危険だから禁止だと言ったはずだぞ?」

「・・・ごめんなさい」

しょぼんとして頭を下げて謝るチルノ。おお、根は良い子なんだな。たまに無邪気が過ぎるといったところか、それくらいが子供は丁度良いものだな。誰だって幼いころは無邪気に暴れまわっているものだ、いや、子育ての経験はないけどな。

「それとだ、話から察するにお前はまた人を凍らせようとしたな？」

「えっと・・・それは・・・」

「お仕置きだな」

そういうと慧音さんは自分の頭をぐいつと後ろへ反らし、勢い良くチルノへと某出席簿もかくやと言えるほどの轟音を鳴らしながら頭突きをお見舞いした・・・今、ズゴーンとか聞こえたんだけど・・・大丈夫なのか？というか、紫さんが軽く引いてるあたり中々の威力なのだろう、絶対食らいたくない。

「へぶっ！！？」

「これに懲りたらもう人を襲うなよ」

「は、はい・・・」

ふらふらとおぼつか無い動きをしながら返事をするチルノ、かたつむりより大幅に威力あるなこれは。「はれひれほれはれ・・・」とか言つて目を回してるもの、絶対エクステンデッドだからって大丈夫とは言えない・・・おお怖い。

「oh・・・dear・・・」

「いつ見ても凄く痛そうねアレ」

「さて、すまなかったな。それでは早速で悪いが中に入って実習の方を頼む」

「分かりました。任せてください」

胸を張って答えると、そのままくるくる回っているチルノを抱きかかえて寺子屋に入って行ったのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「はふう・・・」

仕事を終わらせて縁側に腰掛ける、寺子屋の生徒たちが色々お手伝ってこなしていったために上手く行った。冷やす行程は少々心配だったがチルノが頑張ってくれたおかげで予想以上に早く終わった、氷精って便利だなあと少し思った。今はそれぞれが腕をふるって作ったプリンとおまけで俺が作ったプリン大福を食べているところだ、大福のほうもプリンアイスのように中身が出来上がったため中々に好評であった。

「一年ぶりだったが、疲れた・・・」

誰かに教えるということもそうだが、これほどまでに大量のプリンを作ることなど今までに無かった。やったとしても精々10個程度だった、今回はその倍以上、生徒たちが残したたまを俺が丁寧に砕いて混ぜていったりと大変だった。カラメルも焦がしそうになっってしまったところを急いで止めたりしていたし、まあ、隣にもっと疲れている人がいるわけだが・・・

「・・・・・・・・」

「紫さん、生きてます?」

「も、もうだめぼ。・・ギブ・・」

力尽きてぐでぐと倒れている紫さん、慧音さんは勿論経験が無いから俺が先頭に立って指導。紫さんは慧音さんと並んで生徒たちのサポートをしていた、まあ、火に気をつけながら卵だ牛乳だと分量間違えずに入れて更に動きに注意しなければいけない。慣れていようとそれは大変なものだった、お疲れ様です。

「二人共、ご苦労さん。おかげで今日の実習は成功だよ」

「どういたしまして、力になれたのなら嬉しいです」

「・・・・・・・・同じく・・」

「ものの見事に力尽きているな・・」

「そうですね・・まあ、もう少し休めば大丈夫だと思いますけど・・」

「それもそうだな、しばらく休ませておこう」

そう言っただけで慧音さんは紫さんに薄い毛布をかけた、こういうちょっとした気遣いって嬉しいよね。俺も見習いたいものだが、ほとんど「女心を知れ!」とかって言われる。雨の日に二本目の傘を渡しただけなんだがなあ、美月が風邪でも引いたらいけないと思っただけなのに・・やはり俺は勉強不足なのか。

「さて、生徒にはほとんど行き渡ったみたいだし。私達もそろそろ食べるでしょうか」

「そうですね、難しい工程も上手くクリアできたみたいです。出来は良いと思いますよ」

慧音さんからスプーンを受け取ると、早速良く冷えたぷるぷるなプリンをでさくつと少しすくって一口食べる、うん、カスタードの甘さが口当たりに丁度良い。舌触りも滑らかで粉っぽさもない、どうやら思った以上の素晴らしい出来上がりだった。店で買うものも美味しいが自分達の手で作ったものはまた違って格別だ、頑張った甲斐があるというものだろう。

「おい、音羽〜！」

チルノがプリン片手に縁側へと元気に駆けてくる、どうやら残っていたプリンも冷やし終わったらしい。労いも込めて優しく頭を撫でる、しっかり「ご苦労様、ありがとな」と言葉も忘れずに。感謝の思いは口に出してこそ意味がある、お礼は大事なことだ。

「ふふん、アタイにかかればこんなの楽勝よ！」

「そうだな、頑張ったじゃらプリンは二倍だ♪」

「ホント！？みんなより多く貰えるなんてアタイったら特別ね！」

プリンを多く貰って上機嫌のチルノ、やっぱり良い子なんだなあとしみじみ思う。・・・人の話はあんまり聞かないけどな。まあ、なんにせよ何事にも純粹みたいだし、迷惑かけなければ良い事だ。

「・・・・・・・・」

プリンを笑顔で美味しそうに食べているチルノをいついつ見ているそんな彼女を見ていると、やはりプリンを作って良かったとつくづく思った。

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

やっぱりプリンに限らず甘い物は素晴らしいものだな、子供から大人まで食べた人を例外なく笑顔で楽しい気分にする。そんなことを考えながら自分のプリンを再び食べ始めるのだった、口の中ですうっと溶けていくそれはやはりとても美味しかった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「おー、なんか今日はいつも以上に寺子屋が賑やかだな。何かイベントでもやってるのか？」

その人影は寺子屋を覗き込むようにそうつと物陰から頭だけをのぞかせる。

「んー・・・みんなで何か食べてるようだが、ここからじゃあ良く見えないな」

視線をめぐらせて更に覗き込む、傍目から見れば不審者Aになりそうなおことは本人の知るところではない。

「・・・おや？ 慧音の隣にいるあの男は誰だ？ 今まであんな奴に会ったことないな・・・」

すると、風につてなんとも良い甘い香りが流れてくる、それが鼻腔をくすぐるのは考えるまでも無かった。

「・・・もしかしたら外の人間かもしれないな。・・・これは面白い

「ことになりそうです」

9 1・番外IF その5「プリン教室」(後書き)

どうでも良い作品情報

音羽は「プリン布教者」の称号を手に入れた！(テッテレー♪)

92・不運の知らせ（前書き）

はい、原作ブレイク・・・しちゃった

92・不運の知らせ

まさに第四世代ということを示すかのように目を見張る速度で一夏を背負ったまま出撃していく筈、浮つきも迷いも吹っ切れた表情をしていたからあとは大丈夫だろう。一人納得して俺は海岸近くの木陰から出て見送り、肉眼で見えなくなったところで旅館へと戻るのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

姉から与えられた力「紅椿」をその身に纏った筈、その背中に背負われるようにして遙か上空を飛んでいた。それも第四世代機だからか、それとも紅椿だからかは分からないが瞬時加速並みの速度で飛んでいる今の状況に驚くしかなかった。流石束さん、今の音兄に負けずとも劣らずのシスコンぶりを遺憾なく発揮している、なにせ世界中にこの紅椿を越える性能を持つ機体がほぼ無いらしい・・・ほんとにチートだなあの人。

「一夏、しっかり掴まれ。確実に仕留めるぞ！」

「ああ、もちろんだ！」

どうやら、何があったかはわからないがいつもの真剣な表情で声をかけてくる筈。その瞳にはさきほどまでの気分の浮つきも無く、吹っ切れたかのような清々しさが感じられた。どうやら俺の心配は杞憂だったみたいだ、嫌な予感もすでに今の晴れ晴れとした快晴の空のようにすっきりとしている。遙か前方にいる敵を見据えるようにして右手に握った雪片にぐいっと力を込めなおす、失敗は・・・でき

ない。

「暫時衛星リンク確率・・・情報照合完了。目標の現在位置を確認、準備は良いか一夏？」

「おう、いつでも行ける！」

人工衛星から送られて来た座標データが機体のシステムリンクにより白式へと送信される、そこには既に会敵まで30秒を切っていることが示されていた。他にも戦闘空域の天候状態、付近の状況などが示されている。

「さあ、行くぞ一夏！」

「了解！援護頼む」

紅から離れた一つの白い機体が残像を残しながら飛翔しその手に持つ光の刃で開幕の証とばかりに天使の片翼を？ぎ取るようにして切り落とした。すぐさまにそれに感付いた福音はスラスターを噴かし、後退する、しかし目前には白と紅の上空からの交差するような斬撃が迫る。

「合わせろ篤！」

「任せろ一夏！」

斜め十字を刻み込むように鏡写しの高速機動で二刀の剣撃がざつくりと深く刻み込まれる、それこそ獰猛な獣の一撃のような豪快さでありながらその中に計算された切込み。残された左翼から豪雨のような青白いエネルギー弾がばら撒かれるが、その中を掻い潜るようにして二振りの刀からピンク色の弾幕を放った紅椿を先頭にして白式が物理刀に戻した雪片で接近したエネルギー弾を斬りつけて霧散させながら突き進む。

「La a」

機械音らしき声が響き渡る、福音の背部に搭載された複合武装「銀^{シル}の鐘^{バベル}」の起動した証であった。さつきより勢いと量が増した弾雨はしかし向けた標的に迫るも空しく一つは弾幕で弾き返され、また一つは一太刀に切り伏せられて四散する。それでも命中しなかったエネルギー弾が海面に衝突した途端に水柱を立てて爆発したことからどれほどの威力かが良くわかった。しかしそれに怯んで立ち竦むほどに柔に鍛えられていた二人ではなかった、時にはP I Cを高稼働状態に一瞬だけして空中を蹴って接近し斬りつける。またあるときは紅椿から放たれたレーザーを糧にして瞬時加速と機体重量を乗せた蹴りをお見舞いする。

「うらあっ！！箒、今だ！」

「わかった、離れているよ！」

そして、今も三発目の白式の上空からのかかと落としからの零落白夜を発動した雪片での返し刀が決まり、瞬時に後退した白式の傍をすれ違いながら紅椿の二刀の連撃が休む暇も与えずに襲い掛かる。弾雨で牽制し、回避した先で挟み込むように逃げ場を無くした斬撃が何度も叩き込まれる。福音はその美麗だった純白の装甲を見るも無残に傷だらけにしていた、反撃とばかりにヒビが入り始めている片翼からエネルギー弾をこれでもかと撃ち放つがそれもただ空を切るだけでお返しに二機の連鎖攻撃が四方八方から嵐のように迫る。

「それくらい、今の俺達には効かないぞ！」

「一夏、これで決めるぞ！」

「了解、サポート頼むぞ箒！」

「当たり前だ！」

正反対からの勢いを乗せたキックを左右から食らい、福音がその衝撃に耐え切れずにその動きを止める。たった数秒の間であったがそれを見逃す手は無い、瞬時加速で後退しながらありったけのレーザの弾幕を滝のように撃ち放ち、その中を白式が雪片を振りかぶって突き進む。

「俺達の勝ちだあああああああ！！！」

最大出力の零落白夜が、福音へと打ち降ろすように振るわれた。

□ ■ □ ■ □ ■ □

一夏と筈が出撃してそれを木陰から見送ってから旅館に戻ってきた俺は「専用機持ち待機」ということで宛がわれた一室に入った、ずっと座って暇人が続けていても仕方ないと思案していたらラウラが俺の首筋を狙って来たので反撃にとラウラVS俺こちよがし大会が始まり・・・なぜかwithセシリアという状況になり、三人してお互いにくんずほぐれつで騒いでいた。まあ、ずっと黙っているよりは緊張感もほぐれるかと思ったのだが・・・どうしてこうなった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ふう・・・ふう・・・」

「ぜはあ・・・ぜはあ・・・」

「あはははは、音羽の格好どうなってるのよ」

「なんとも情けない格好だな・・・はあ」

結果、鈴ちゃんとシャルロットの目の前で動けずに倒れた俺の出来上がりであった。途中から俺弄り大会にシフトしていたのか、4対1の状況で攻められた俺はちゃっかり首筋をやられて動けなくなっていた。ちなみにトドメを刺したのはセシリアだった、相手がセシリアだというのもあってか俺は天災にやられた以上に弱っていた。

どうやら俺の弱点はピンポイントである分、効果が強いらしい・・・
・うあ、動けん。俺って常人の1.3倍だったよな？騎士だよな・・・
・なんでこんな簡単に無力化されるの・・・。

「あゝ、まったく。ぬぐぐぐぐ・・・むはあ・・・」

無理矢理全身に力を入れると少し起き上がるのだが、柱に身体を預けるくらいしかできなかった。全身を疲れからではない脱力感がゆったりと襲う、なんだろう・・・この空しさ。年下の女子4人に無力化させられる男って・・・。そんなことを考えながら哀愁に浸っていると、mk？がきゅらきゅらと脚部に付いたタイヤを回して近づいてきた。横に取り付けられている「やあ、スネーク。僕だよ」のモニターが開き「m9」とだけ表示して逃げて行った。ちよつとしたAIを積んでる分こういうことが出来る辺り凄いのと思うがなんで馬鹿にするためだけに来たし・・・。

「うん？誰か来たみたいだな」



零落白夜による一撃を浴びせられた福音は糸が切れた人形のように海面へと落下していく、既に一夏も筈も息が上がりエネルギーもギリギリまで消費しきっていた。雪片は零落白夜の光刃を消し、ただの物理刀になっていた。紅椿の二刀も今は具現限界までにエネルギーが消費されていた。

「よし、早く操縦者を――」

筈がそう言い終わる前に福音が落下していった海面が爆ぜる、それとほぼ同時にその場所からエネルギーで構築された巨大な竜巻が発生する。ISがそれぞれの操縦者に警告をけたたましいほどに伝える、ハイパーセンサーには高エネルギーの放出が伝わっている。

「な、このタイミングで二次移行だ！？」
セカンドシフト

「この状態じゃ無理だ、筈、戻ろう！――」

しかし、返事をさせる暇もなく。先ほどまでとは比べ物にならないほどの弾雨をセカンドシフトしたからか頭部から生やしたエネルギーの翼をはためかせて福音がこちらを無機的な殺気を放ちながら見つめていた。切り落とされた翼は消え、代わりに機体全高を越えるエネルギー翼、機体の装甲面に付いた大量の傷は何も無かったかのように綺麗さっぱり消滅し、両腕には鍵爪のような形で五本二対のエネルギーブレードが伸びている。エネルギーが底を付きそうになっている機体で撃墜はおろか、逃げ切れるかどうか怪しい状況に追い込まれていたのだった。

「くっ、このまま逃げても意味が無い……どうすれば……」

「一夏、一度くあつ――！――」

エネルギーが危険域に入っている状態でどうにか飛行していた紅椿にエネルギー弾がいくらか掠る、助けに行こうにもその進路を福音が弾幕で塞ぐ。シールドエネルギーが一桁になってしまっている状況ではまともな防御も期待できない、事実上の負けであった。

92・不運の知らせ（後書き）

どうでも良い作品情報

まあ、特訓相手（主にセッシーと音羽）が強ければその分強くなってるよねって話

93・敵討ち（前書き）

はい、ちよいとあつてしまいました・・・orz

93・敵討ち

「山田先生？」

なぜかとても焦った表情の山田先生が専用機持ち詰め所に戸をバシッと開けて入ってきた、もう少し静かにしましょうよ・・・と言ってる暇も無さそうだな。

「織斑君と篠ノ之さんが落とされました。先ほど運び込まれましたが織斑君が気絶中です」

山田先生の話によると、一度福音を仕留めたもののそれに合わせてのセカンドシフトが発生。エネルギーが残り少ない状態での戦闘になってしまい、エネルギー弾を当てられて撃墜。シールドエネルギーがほぼゼロになってしまった一夏は火傷、助けに入った篤も墜落ギリギリの状態で戦闘不能。福音に逃げられてしまったらしい・・・運が悪かったとしか良い様が無いな。

「それで、専用機持ちは連絡あるまで待機だそうです織斑君は今治療中ですので安静にさせてあげてください」

そう言つて山田先生が戸を閉めて去る、まあ、そんなこと言われて黙ってる人の集まりでは残念ながら無い。すでにラウラはどこからか端末を出して通信しているし、鈴ちゃんとシャルロットにセシリアは部屋を出ていった。それを見送る俺もポケットから待機状態のダブルデリンジャーを取り出してコンディションの確認を始める。左手はmk?を呼んで回線を米軍の人工衛星に接続して索敵を始める。全員が考えていることは同じだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「箒さん、こちらにいらっしやいましたのね」

砂浜へ見当をつけて足を運んでみましたら案の定箒さんがいつもの髪留めを外したままで立っていましたわ、遠目からでも相当落ち込んでいらっしやるのが良くわかります。あともう一步で理不尽なまでに逆転されて負けてしまい、一夏さんも負傷ですものね。わたくしも悔しいですが、箒さんにはしっかりといていただきたいですね。

「・・・わたしは・・・もうISには・・・」

項垂れてそんなことを悔しさいっぱいに呟く箒さん、一夏さんを守れなかったことからでしょうか・・・そんな苦しい精神状態にいる箒さんには申し訳ありませんが。

「箒さん、お隣よろしいですか？」

「・・・なんだ、私を笑いに來たのか。力を手に入れても大切な人を守れなかった私を・・・」

□ ■ □ ■ □ ■ □

パアンツ！！

容赦無い平手打ちの音が銃声のように響き渡った、セシリアの肩は

ふるふると震えたまま箒の制服の首元を掴んでぐいつと力強く引き寄せる。その瞳からは悲しみと怒りが見て取れる。

「甘ったれてんじゃないですわ！いつまで落ち込んでいますの！」

我慢ならないのか普段からは想像できないほどに激昂した声色のセシリア、その鬼気迫る表情に気分が沈みこんでいた箒は呆気に取られる。自らの首元を握り締める手は強く握られているからか、血の気が失せて白くなってしまっていた。

「確かに箒さんは少々危なっかしいところがありますわ、初対面の時点でわかるほどに」

さきほどと一変して柔和な表情を浮かべて語りかけるセシリア、成すがままに箒はその言葉に耳を傾ける。波が打ち寄せる音が静寂を余計に引き立てる。

「ですが、道を誤っても必ず反省していましたじゃないですか、そうでしょう？」

箒の手を引いてゆっくりと立ち上がらせる、そこにはいつもの優しい笑みを浮かべるセシリアがいるだけだった。少しの間何かを考えるような表情を浮かべた箒は一度こくりと頷くと顔を上げて口を開いた。

「ああ、そうだな。まだ私は前へ進める。まだ完全に負けたわけじゃない」

「ええ、それでこそ箒さんですわ。では、行きましょう？」

「もちろんだ！」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「座標が出た、行けるぞ」

「おし、こつちも観測体制は整った。そつちの準備は？」

「オツケーよ、篤もね」

「ああ、もう大丈夫だ。行ける」

「僕もオツケーだよ」

「わたくしも準備は終わりましたわ」

端末からデータの転送をし終わった俺とラウラが声を上げると同時に戸を開いていつもの声が聞こえてくる、どうやら篤も大丈夫そうだ。他の専用機持ちもパッケージのインストールが終わったみたいなのでそれぞれに目標の現在地点のデータを転送する、ついでに本来は秘匿されている米軍の軍事観測衛星を国防庁長官に奥様に不倫バラスZO?と脅s・・・紳士的な交渉をしてシステム使用を許可してもらった。目標捕捉はこれで完璧だ。使える手段は使うべきときに惜しみなく使う、それが一番だ。

「よし、じゃあ行きましようか」

『おー!』

こうして、命令違反なんのそのでの福音追撃作戦が始まったのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ああっ！」

「どうした山田先生」

あわあわと慌てふためいてコンソールの画面を指差す先には、今まさに飛び立っていくIS6機のレーダー反応であつた。しかもその中には普段常識人でありストッパー役の音羽の駆る「ブルー・ドラグーン」すらあつたのだ……。

『あ、千冬さん。全部秘匿は米軍に任せたのでご心配無く。じゃ、そういうことで』

返事をさせる暇も与えずに切れる一言だけの通信、山田先生は「なんだあ、じゃあ問題ないですね。つてええっ!？」と遅いリアクションをし、それを見てため息をつく千冬だけが残されたのだった。

「まあ、音羽が行つたのなら大丈夫ですよ織斑先生」

「……あいつもまだ機体に慣れていないのだぞ?」

「へへん、音羽君のデータを元に設計したから問題ナッシング!」

「女王陛下、ご退室願います」

「あんもう、いけずう」

出席簿が振り下ろされる音が響き、女王が崩れ落ちるのと心配そうな目で飛び立っていった方向を見つめるのはほぼ同時であつた。

93・敵討ち（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽は疾風のころからフルマニュアル（じゃないとまともな制御で
きない）

94・反撃（前書き）

少し短いと言っちゃダメですよ、ええ

94・反撃

それぞれ母国から送られて来ていた今日一日かけて性能試験する予定だったパッケージを装着して遥か高くの洋上を高速で飛行していた。ちなみに俺と篤以外はパッケージ装備である、俺は8機のアサルトビットをウィングブラスターに固定して2基一対で連結、背部に固定してのエネルギー節約高機動モードにしている。まあ、ビットは固定しなくても高機動モードにはなるのだがそれだとビットがすぐにエネルギー切れを起こしてしまう。ギリギリまでエネルギーは節約しなければいけない。

「なんとも化け物を貰ったものだなあ・・・」

「感慨にふけるのも良いですが、行きますわよ！」

「了解！」

今頃地表の無人島でラウラが砲戦用パッケージ「パンツァー・カノニア」に搭載された二門のレールカノン『ブリッツ』でアウトレンジからの狙撃を行っているところだろう。遠距離からの攻撃に対応するために左右・前方と二枚ずつの物理シールドを装備しているため防御力も十分だ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

海上二百メートル、穏やかな天候の中、福音はまるで胎児のように自らの身体を丸めて滞空していた。朱色に染まり始めた陽光に負けじと青白く眩いほどに光り輝くエネルギーの翼は福音自身を包み込むようにして閉じられていた。まるで巢で母鳥の帰りを待つ雛のよ

うに。

「？」

ふと何かに気づいたように頭を上げるが、それを狙ってか超高速の砲弾が二発間髪入れずにエネルギー翼に撃ちつけられる。エネルギー翼がそれによって綺麗な円形の穴を開けて貫通するがすぐに再生して塞がる、遠方に突然の襲撃者を見つけた福音は獲物に襲い掛かる獣のように翼を広げてその場を飛び立った。

「くっ、予想より速い！」

レーダーには福音との距離がどんどん短くなっていく事実がただただ映し出されていた、本来砲戦仕様の機体というのは反動や防御力の増加のために機動力を犠牲にしている。機体の安定性向上のためにスタビライザーが装備されていることがそれに更に拍車をかけたいた。本来ならばこの状況、不利であるのだがにやりと顔を歪めて笑ったラウラは叫ぶ。

「フッ、セシリア！！音羽！！」

「了解！！」

「任せなさい！！」

ステルスモードで上空に待機していた二機の蒼い機影が降下して左右に移動したまま高出力Bトレーザーライフルをフルオートで撃ち放つ、更に同じタイミングで射出されていた合計12機のビットが編隊を組んで休ませる時間も与えずにBトレーザーを追い込むようにばら撒く。無慈悲なまでに正確に福音の全身を穿つ。

「D38・F45・B58ミラー！！スピア！」

「了解、散開！^{ブレイク}！」

福音を逆方向から挟み込むように円軌道を描きながら上下の高速機動にビットの多角射撃を織り交ぜながらレーザーライフルで牽制する、その間も隙を狙って地上からのリニアカノンの砲撃が襲い掛かる。ブルーティアーズの正確な射撃とアサルトハウンドの猛獣のような乱射、傍目からは蒼い網のように見えるそれは掠っただけで触れた物を焼く危険でありながら事実とは逆に空に綺麗な模様を作り出していた。

「危険度レベルA、現空域より退避を優先」

「逃がすかあああ！！」

「行け、鈴！」

突如海面が大きく爆ぜる、そこから紅椿の背に乗った甲龍が火力強化パッケージ「崩山」の増設された衝撃砲合わせて四門が上下にスライドさせ不可視の弾丸ではなく赤く燃える炎を吐き出す。福音に負けずとも劣らずとも思える弾雨を放つそれは「熱殻拡散衝撃砲」とも言えるものであった。畳み込むように放たれるそれは福音の放つエネルギー弾をことごとく精密な射撃で相殺していく、視界を埋め尽くすかのようにあちらこちらで爆発が起こる。

「せやああああ！！」

その影から紅椿が二刀を抜き放ちピンク色のレーザーの弾幕を放ちながら突撃していく、後方にはミサイルコンテナを構えたシャルロットがスコープを覗き込んで今か今かとトリガーに指をかけて待っていた。

そして、すれ違い様に筈が一閃で右のエネルギー翼を切り落とす。そのまま蹴りつける。バランスを崩した福音へシャルロットが防御用パッケージ「ガーデン・カーテン」のエネルギーと物理シールドを左右へスライドして9×9小型ミサイルコンテナ二基のトリガーを引き絞る。通常のロックオンシステムで発射されているが規格外の量のミサイルは福音のエネルギー弾によって撃ち落されていくが、その中を掻い潜って次々と迫っては爆炎を上げる。

「さあ、僕からのプレゼントだよ！」

まだ、反撃は始まったばかりであった……。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……どこだ？」

見たことのない真っ白な景色、地面には白くてさらさらと感触が心地良い砂浜が広がっていた。いつ脱いだのか分からないが靴が左手に握らされていた。目が覚めたと思ったら訳分からない場所にいましたとか、どういうことだよとか思ったがどこか嫌にならないというところもあってか景色を楽しむように歩いていく。

「~~~~~」

数分歩いて既に景色を楽しむのにも疲れた、いや、綺麗だけど変化が無い景色に飽きたとも言った方が正しい。というか、あれだ、

大好物を毎日食べてたら三日目くらいからもつ要らないってなるみたいな・・・そんなところだ。音兄の場合セシリアの写真ずつと飽きずに見てそうだがな、あそこまでののに何も気づかないとかそろそろセシリア可愛そうに思えてくる・・・。

「お？」

「~~~~~~~~」はあ、はあ・・・」

「だ、大丈夫か？」

さつきから視界に入っではいたのだが考え事をしていたために放置状態だった白いワンピースを着た女の子が流石に歌うのもきつくなってきたのか休憩していた。まあ、あれだけ長い時間歌ってれば息継ぎもしたくなるよな。とても澄んだ綺麗な歌声だけど・・・すまん。

「遅いわよ！まったく、鈍感どころか鈍重じゃないのよ・・・」

「申し訳ない」

どこか拗ねたようにぷんぷんと腰に手を当てて怒ってくる腰まで伸びている白髪の女の子、いや、遅いと言われてもここがどこかかなんでこんなところにいるのかとか良いたいんだけどね！というかどこにも俺に負い目無くないか？反射でつい謝ったけども・・・聞こうと思ったけど再び歌いだしたため、傍にあつた白木の流木に腰を下ろす。あれ、なんか今さらりと貶されたような気が・・・。

「ふむ・・・」

何時の間にか少女の声に聞き入ってしまったのは仕方の無いことだと思う。

94・反撃（後書き）

どうでも良い作品情報

ビットを初使用者がなんで使えてる？

イギリスと音うちパネエで許してください

95 少し前の日常（前書き）

主人公と某人たらしがストーカーっぽいですが気にしないでください

95・少し前の日常

「ふう、あゝ疲れた。もうやってる頃合いか？」

いつもどおりの4対1とおまけ一人のISの放課後訓練を終わらせて俺、織斑一夏はアリーナ付きのとあるIS整備室に向かって歩いていた。自分の専用機である白式の軽い整備という目的もあるが、それとは別にちょっとした用事があるのだ。ほぼ毎日訓練後に二時間ほどであるが……。

「簪、いるか？」

そう、誰がなんと言おうと俺の幼馴染である更識簪の未完成の専用機の製作の手伝いを微力ながら出来る範囲で手伝っているのだ。なんでも男のIS操縦者である俺と音兄が出てから、俺の専用機開発ということで倉持技研が人員を白式側に大半をなにとち狂ったか回してしまったのだ。その結果、代表候補生である簪の専用機である「打鉄式式」の製作がほぼストップになってしまい、いまだに未完成という状況になってしまったのだ。それを聞いてなんとも申し訳なくなり、専用機製作を手伝うことにした。

「うん、今日も来てくれてありがとう」

「いや、気にしなくていい。俺の義務みたいなものだから」

実質、結果的にとはいえ簪の専用機開発の原因は俺だ。いや、男という特異ケースが出たからって普通は人員割いてもそうなるとかありえないとか音兄はとても憤慨していた。確かにそうんだけど、じゃあ俺は何もしなくても良いというのもなんか嫌なんだよなあ、というか簪と一緒に空を飛んでみたいというのも少しある。中学の

ころからあれこれ一緒に遊んだりしていたからかもしれないが……
ちなみにそういうことを言つと音兄がなにか微笑ましい物を見る
かのような視線を向けてくる。

「えつと、じゃあここはこうすれば良いのか？」

「大きくやりすぎ、もう少しゆっくり」

「わかった……こうか？」

「うん、そう」

簪があれこれ教えてくれた通りに工具を動かしたり部品を組み込んだりする、正直こういう機械的なものは苦手な分野であるが簪のためなら何故か気にならないほどに頑張れる。たまに楯無さんが覗きに来て「これはこれは将来の義弟よ、いつもすまんね」ははは」とか言うだけ言つて去つていたりする。せめて来たなら何か手伝つてくださいよと言いたいが楯無さんは国家代表、そう簡単には国が許してくれない。まあ、簪は日本の代表候補生だからライバル国ということだろうか。規則や決まりごとがあつてもたまにアドバイスをくれたりするところは楯無さんらしいけど。

「よし、あとは……」

「武器だけど部品の削りだしお願い。私一人じゃ材料運べないから……」

「了解、じゃあ材料庫行こうぜ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ふん、すれ違いというのも見てる分には中々に面白いな」

「そうね、まあ、チャンスはあるけどね・・・つていたの!？」

失礼な、さつきから二人を物陰からニヤニヤ見つめてる美月の後ろにいたぞ。まあ、対暗部用暗部の現当主もびつくりの隠密行動してたけどな。ところでこんなの身に着けなきゃいけない執事ってなんなんだろうね、本当にエクステンデッドとかより鍛えられ方のほうが影響は大きいのか？ラウラも「ここまでのレベルになるわけがない」って言ってたし、平均スペックデータ（俺の）より大幅に上だったし。ドイツに電話で問い合わせても「なにか特別なトレーニングでもしたんじゃないすかww」とかって言ってたし・・・そういうえばミリアさんも人間離れしてたよな・・・おお、怖い怖い。

「それにしても、簪ちゃん良い笑顔してるな」

「ええ、たまに話しても一夏君のことばかり。なんか妬けちゃうわよ」

「ははは、妹離れはしなきゃいけないぞ」

「・・・重度のシスコンには言われたくないわね」

「お前なあ・・・たしかに言い返せないような気が凄いするけど」

まあ、重度のシスコン馬鹿は俺の目の前にいるわけだがな。美月曰く「同志が増えてなによりね」とか言っていた、俺は重度のブラコン教師を一人知ってるぞ・・・言ったらホーミングで出席簿が飛んできそうだから言わないけど。

「そうね、織斑先生でも交せて同盟組まない？妹（弟）を守り隊みたいな」

「わゝ、そこまで行くともうなんかアレだな。これが更識当主の言葉とは・・・信じられないな」

「いや、それを言うなら世界有数の企業人がシスコンとかのほうが信じられないけど」

「言うな、最近なにか会談で会う度にそれで弄られるんだから」

ちなみにシスコン・ブラコン・その他諸々で世界各国の重役や大臣、大統領とか外交官など男女織り交ぜて仲が良い人も多い。それが原因で和解したこともあった、いくら女尊男卑の社会でもやっぱ誰でも家族が大好きということだろう、その分なにかあったらと心配になったりしてしまうこともあるんだがな。世界平和は家族への愛から・・・なんと良い話じゃないか。まあ、結論を言えば今の医療界は一人のシスコンが一部の手綱を握っているということだ・・・どうしてこうなった。この世界はこんなんで大丈夫なのか？

「まあ、なにかあったら一夏君が守ってくれるわよ」

「・・・好きな女の前じゃ男は強くなる・・・ねえ・・・」

「あら、言うようになったわね音羽も」

「まあな、少しは学んだ結果とでも言っておこうか、まだまだ精進が足りないらしいが」

「そうね、いまだにね」

「まあ、簪ちゃんはそれだけじゃないみたいけどね」

95 少し前の日常（後書き）

どうでも良い作品情報

→の状態なので原作より登場は早くなります

9 6・夢(?)の中で(前書き)

わーい、シリアスブレイクですよー

96・夢(?)の中で

IS6機による猛攻に付近地形は見るも無残に変わり果て、今も弾幕の応酬が延々と繰り返されていた。

蒼穹のレーザーが縦横無尽に走り、マイクロミサイルが飛び交い、刃の煌めきが放たれ、不可視の拘束が来狂いし人形を空に縫い付ける。さらに炎の弾丸が吹きすさび、再びレーザーの豪雨が放たれる。それは騎士の的確すぎる指示によって操られ、兵がそれに答えるように各々の武器でこれでもかと襲い掛かる。

「兎 雫 疾風
R・T・W、トライアングル、アップグレイズ!!!」
『了解、攻撃!』
アタック

逆三角形を描きながらラウラを下に上空から包み込むような軌道を描いてシャルロットのスコール以上のマイクロミサイルとセシリアの大型BTレーザーライフル「スターダスト・シューター」の高火力BTエネルギービームが福音に向かって放たれる。もちろん回避のためにエネルギー翼から視界を埋め尽くすほどのエネルギー弾が放ちながら低空飛行をする福音。待ち構えていたラウラのフルチャージされたりニアカノンがいとも容易く命中する。

「兎 椿 炎
R・C・F、レイン・バースト!!!
雫 疾風 竜
T・W・Dサイス・クロー!
!」
『了解、アサルト強襲!!!』

高速飛行状態にあった福音が体制を崩した途端、後方から箒と鈴の縦隊による炎弾と高出力レーザーの嵐が隙有りとばかりに叩き込まれる。その間にラウラからのニアカノンと腕部プラズマ射出ユニットからの熱複合プラズマビームがランダムでいながら体勢をどん

どん崩しに行くように撃ち込まれる。

「いつけえええ!!」

「それでも、食らえ!!」

「まだまだ行くぞ!!」

続く猛攻が小休止し、福音が上空へ退避しようとした途端、青白い光を禍々しいほどに放つ剣撃が外周をなぞるように放たれる。音羽の「ダーインスレイヴ」のBTエネルギーを纏わせた狂気の威力を持つ斬撃であった、それも瞬時加速を超至近距離での連続発動、生身でのステップングアクセルを応用した超高速移動「トライディメンショナル三次元加速」であった。通常のIS操縦者には不可能な操縦者保護でカバーできないほどの負荷がかかる正に「エクステンデッド」だからこそできる荒業である。

「はああああ!!」

続けてセシリアが上空からの急降下にあわせて「スターダスト・シユーター」をランスモードに銃身をスライド変形させて銃の全長の三倍はあろうかというBTエネルギーの槍を作り出す。ストライクガンナーの固定されたビット、ミサイルビット全てが大爆発を起こしたかのような急激な加速で福音に肉薄する。

そして、次の瞬間にはすれ違ふと同時にエネルギー翼の出力部がBTエネルギーの刃によって打ち碎かれる。更に落下しながらのスターライトmk?による武装内のエネルギー全てを放つカートリッジバースト射撃で打ち上げられる。

「シャルロットさん!!」

「オツケー!!」

上空へ打ち上げられて行く福音の進行方向には大型80口径エネルギーパイルバンカー「エンジェルブレイカー」がその全長2メートルもある巨大な姿をまじまじと見せ付けて構えていた。完成された実績に杭先へのP・I・C搭載による瞬間的な破碎力を上昇させたデュノア社武装開発部の渾身の名品、防御重視の機体でも当たり所によれば一撃で粉碎できると言われているそれが無慈悲にも狙いを定める。唯一の弱点である「重量による命中率と運用時の機体負荷」があるが、標的は真っ直ぐに直線軌道を描きながら迫ってくるのだ、今はそんな欠陥何の意味も成さない。ただ、打ち砕くだけ。

「やあああああー!!」

放たれた杭は重い音を出しながら福音の背部ウィングをばらばらにするほどに砕け散らせた、周囲に破壊力のすさまじさを見せ付けるかのように文字通り「破裂」したかのように破片が飛び散っていく。それでも止まらない杭はそのまま福音を海面へと上空400メートルから叩き付けた。それを追うように破片が海面へと降り注ぐ、機械部品特有の匂いがほんのりと潮風に乗って流れた。

「やったか？」

「いや、第二ラウンドのお誘いみたいだぜ」

海面で起き上がった福音は全身の破損した装甲の代わりに機体に内包されたエネルギーを鎧とでも言うのかと思うほどに全身に纏わせていた。破損したエネルギー翼の出力部からは動脈を切ったときのようにエネルギーの翼があふれ出していた。噴出すように生えている翼は生物的なものではなく、機械的な針以上に鋭利な棘が伸びた大きな羽と化していた。頭部のラインアイは怒りを彷彿させるかのように青から赤へと変貌していた。この場にいる誰もが知りもしないが、福音に搭載された戦闘強制続行用プログラムが発動した証拠

であつた。

「対象の殲滅を優先、最終安全装置解除。操縦者保護レベル最大」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「~~~~~」・・・何点？」

「100点、上手いな君」

「ふふん、そうでしょうそうですね・・・ってこんなことしてる暇無いじゃない！」

なぜかいきなり大事な用事を思い出したかのように目の前の少女が慌て始めた、まずは落ち着こうぜ、焦ったら良い結果は出るわけがないって音兄も簪も言ってたし。そういえば、今までのISの試合も負けたりしたのはシールドエネルギーが残量ギリギリで突っ込んで叩き落されるってのが多かったな・・・はあ・・・

「・・・い・・・おい！」

「そうだ、冷静になれば勝機が見えてくる・・・」

「聞けよこの鈍感男！」

「おわあっ！？・・・な、なんだ、聞いてないぞ？」

「話を聞いてないことを真面目に言うな馬鹿」

思ったよりこの少女は容姿に反して口が悪い、というか鈍感ってどいうことだよ。それは音兄の特権だろう、俺が鈍感・・・まあ、そうかもしれないかもしれないけど良いや、今は関係ない。というか、なんで夢(?)の中で年下の女の子に罵倒されなければいけないのだろう、俺にはそういう趣味でもあるのだろうか。そうだった

らマリアナ海溝以上に深く落ち込むが・・・。

「はぁ、まったく。ほら、あんたを呼んでるよ・・・誰がかは言わなくてもわかるね？」

「・・・遂に俺は中二病か、はぁ、鬱だ。良いから覚めてくれこのおかしい夢」

「夢じゃねえよこの馬鹿が!!」

「ほぶっ!!!?・・・なにしやる!!」

なぜかいきなり顎を蹴り上げられた、しかも身長差を関係無いと言いたそうなくらい飛び上がって。そういえば、顎を強く殴ったり蹴ったりすると脳震盪で動けなくなるらしいね。実際俺も現在進行形でそうなった、身体から力が抜けて砂浜に後ろへと倒れこむ。うぁ、なんていう夢を福音に落とされてから見てるんだろつか、というか早く起きたいんだが。でも、動けない、どうやら意識はすっかり残ってるみたいだ。

「あ、やべ」

「何をする気だったお前え!!」

「いや、ちよいとツッコミ（物理）をやろうとしたら力入れすぎた」

「・・・ツッコミのレベルじゃないと思うんだが、方法からして」

世界のどこにツッコミで相方の顎を蹴り上げて脳震盪にする方法があるつか、というか命の危険もあるから危ないだろ。危うく夢の中で殺されるところだった・・・というか、女の子に見下されて（物理的に）砂浜に倒れこんで会話してるとかシニールだしなんか無性に悲しくなってくる。

「・・・はぁ・・・」

「あ、あゝもう、メンドイ男だなあこいつは・・・」

こつした原因を作ったのは誰だよ・・・あ、俺か・・・orz

96・夢(?)の中で(後書き)

どうでも良い作品情報

ドラゲーンの出番は次回に持ち越し・・・

97・騎兵奔る（前書き）

初の音羽無双

97・騎兵奔る

「システム干渉波散布開始」

瞬間、朱に染まった福音のエネルギー翼から文字通り視界を埋め尽くすほどの霧が放たれる。

いや、霧状のエネルギー体だった、それは警戒して回避を始めた6機をあつという間に包み込んでいく。

血のような色をした不気味なそれは飲み込まれるも退避しようとするISそれぞれに対して吸血鬼が血を求めて襲い掛かるように逃がすまいと追いかける。

「な、なんなのだこれは！」

「ダメ、逃げ切れない！うわあっ！」

「システムダウン！？なんで！」

「皆さん、緊急着陸を！」

「ダメだ、飛行システムがいかれた！」

おいおい、何が起こってるんだよ、バイザー型ハイパーセンサーはモニターモード以外センサーシステムは死んでPICもシステム保護で機能停止、視界は相変わらず紅い霧みたいなものに塞がれている。どうやら他の声を聞く限りはISのシステム全体に障害が発生しているらしい、しかも、性質が悪いナノマシン・・・よりによって患部に直接薬品が行くように作った操作型ナノマシンだった。あのいい年した爺司令官め、軍事利用したらライセンス取り消して契約書の中にでかかと明記してあるのにやりやがったな。俺が医薬品だけ売ってる商人だと思って舐めてやがるなあ野郎、これだから腐った軍人は・・・！！しかし、アサルトビットを回収しておいて良かった、まだ推進器としては使える。

「キヤー!!!」

「な、なんあのよ〜!!!」

「くっ、墜落する・・・」

「衝撃に備えてっ!」

「うわあああ・・・!!」

途端、海面に何かが落ちる音だけが聞こえる、視界はいまだに紅い霧状のナノマシンに覆われて状況確認すらままならない。どうやら声から推測するには俺以外全員がシステムダウンで墜落したらしい、一気に形勢逆転か、なんとハードな現実だな。おそらくシステムの復旧には時間がかかるだろう、ISのコアネットワークによる所在確認では起動が確認されるから一時的な無力化みたいだが電子攻撃というのに機械はめっぽう弱い。それに俺だけがなぜか無事というのも不思議だが喜んでる暇もなさそうだ、なにせ6機で挑んでやっとな追いつめた相手だ、一人で対抗するのも苦しい。やるしかないんだがな、これは久しぶりにアレを使うしかないかな、死にたくはないし。

「ふう・・・リバーズアイ死神の瞳起動」

バイザーを一度跳ね上げて素顔を晒す、頬を撫でる潮風が心地良いがそれを楽しんでいる暇もない。右目の瞼を一度閉じて、格納して生身になった右手で触れながら呟く。瞬間、視界がクリアになり顔の右半分を覆うほどの漆黒の闇の花が開く。右目は虹彩が異彩を放つように深紅の光を讃えている、さらに周囲の状況が手に取るように理解できる、どうやら久しぶりの起動だったが問題無かったようだ。この紅い霧にも干渉は受けていないところを見ると創世記の初期型はこれとナノマシンの世代が違っらしい。

「疲労くらいで済むなら良いか、Full Operation!」

モニターモードになっているハイパーセンサーのバイザーを降ろし、イメージインターフェイスの端末を介してリーパーズアイのシステムを強制的にリンクさせる。同時にドラグーンのハイパーセンサーのハード側とシステムリンクが開通し、膨大な量の視覚と聴覚情報が頭の中に流れ込み一瞬だが意識が飛びそうなくらいの痛みが襲った。脳が処理できない量の情報が一気に流れ込んだ故の拒絶反応であつたがそれを無視し徐々にIS自体とのリンクを無理矢理確立していく。順番に腕の感覚が、足が、指が、目が、耳が、皮膚が感覚をISとシンクロしていく。ラウラが渡してきた資料の一部にあつた電子機器との強制リンク機能、初代型に詰め込まれた中の一つ。どうやらISも例外無く対象としてできるらしい、今この瞬間、俺はISと繋がつた。

「さあ、行くぞ福音。エネルギーの蓄えは十分か？答えは聞かないがな!!」

アサルトハウンド全機をそれぞれの視点で照準を合わせて心の中でトリガーを引く、同時に右手に「星の守護者スターガーディアン」、左手に「ダインスレイヴ」を携えて高火力の射撃を放ちながら紅い霧を切り裂いて突撃する。福音も両腕にエネルギーブレードを展開して反撃しようと海面から飛翔する。

「ああああああ!!!!」

「□□□□!!!!」

機械的な叫びを上げながら福音が上方から切りかかるところをビームスパイクにしたアサルトビット3機で連続の切りつけで弾きながら残りのアサルトビット5機を花びらのようにPICによるレー

に固定しビットとブレード両方からのＢＴエネルギーで構築した刃渡り４メートルはあるかという刃を叩きつけるように振るう。更にスターガーディアン銃身を上下にスライドさせてチャージ状態にし、回収した三機を銃身周囲に座標固定し雷撃と見まがうほどのＢＴビームを放つ。かすただけに終わったが、その先の海面に着弾した途端、上空からでも視認できるような巨大な水蒸気爆発が起る。

「まだまだあつ！」

「対処レベルS、最大攻撃力使用」

瞬時加速で後退した福音が背部から生えた深紅の結晶のような翼を鋭利な欠片に砕いて周囲に散布、そのままばら撒いてきた。更にそれだけに留まらずに両腕部のブレード発振部分から紅いレーザーを次々と放ってくる、夕焼けの空は不気味なほどに紅く染まり、降り注ぐ。それに対抗するようにブルー・ドラグーンの右腕部周囲に魔方陣を描くようにして8機のアサルトビットが滞空する、マニユピレーターの手前には八角系を描くようにビットが並び蓄積されたBTEエネルギーを放出と同時に収束を始める。福音のそれとは対極に神々しさを感じる青白い輝きが少しずつ増して行き、眩いほどの光球を作り出す。

「Rail! !」

「つく、ア、ア、ア、ア、!!!」

右腕を突き出すようにして押し出した蒼竜騎兵の右手から、同じく視界を埋め尽くすような閃光が福音を飲み込もうと限界まで圧縮されたＢＴエネルギーの奔流が大気を焼きながらダムが決壊したかのような激しさで吐き出されていく。紅い爆炎を引き起こす弾雨を巻き込んで直進するかつての竜の火炎を彷彿とさせる一撃、言うなら

ばB Tエネルギー収束火線砲「竜騎兵の業火」と呼べる終局への誘いと言える必殺の一撃であった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

操縦者保護により肉体的なダメージはほぼ無いに等しいが、ISとの強制シンクロによる内部への負荷、特に頭脳と神経へのダメージにより音羽はもはやぼろぼろであった。通常の戦闘時の思考に加えて、ハイパーセンサーを介して緩和されない直接的な高度情報処理の平行、エクステンデッドという強化された身体であつても内部の改良はされていない。まっとうな人間には耐えられない負荷で音羽はそのままの意味でオーバーヒート一步手前であつた、現状で無理をして動いていたのだからこれ以上の負荷はそのまま命の危険に直結する。ビットは熱変換によるエネルギーの回復による冷却と回収が自動で行われ、頭部バイザー型ハイパーセンサーは強制的に展開される。その途端にかすかに熱気が漏れたことからどれだけの負荷がかかったかは分かりきつたことであつた。

「グ・グ・グ……ガ……」

機体の装甲は大半が吹き飛ばか熔解して焼け落ちていた福音はシールドエネルギーを全て残すことなく消費し、糸が切れた操り人形のように力を無くして落下していく。残されていたPICにより直下の無人島にふわりと操縦者が横たえられ、それを見届けた音羽も追いかけるように着地した。既に余力は残っていない、回復したらしい専用機持ちたちと遠くに見える白い機影を見届けて意識を手放したのだつた。

97・騎兵奔る（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ、終わってない

98 少年の答え（前書き）

はい、原作ブレイク警報発令中だよ！

98・少年の答え

「おや、あの男がどうやら仕留めるみたいだね」

「……音兄か？ そうなのか？」

ふと、何時の間にか変わっていた夕焼けの空を見上げた少女が呟く。
「……仕留めるって、福音だよなあ……。大丈夫なのだろうか、
どうやらこの子が「おっしや、そこいけ！！ 斬りかかれ！！」一体
この子は何を見ているのだろうか、プロレスの試合中継を見て楽し
くなってきちゃった風呂上り酒飲んだ親父みたいなことをしている
いや、親を見たことないけど。」

「って、そうだったらそれで早く返してくれよ。いくら音兄がセシ
コンとはいえ一人じゃ無理がある」

「……随分な言い草だね、まあわかったよ。その前にな」

「ん、なんd!？」

突然、足元に真つ暗な穴がぽっかりとその口を開いていた。もちろ
ん、人間が重力に逆らうことなどセシリアとラウラになにかあった
時の音兄じゃない限り無理だ。つまりどういうことかと言えば、落
とし穴に俺はそのまま飲み込まれたのだった。

「なんなんだよー！！」



そうして文句を良いながら数キロは落とされたのではないか、と思いを馳せながら綺麗な夕暮れの海岸に突き落とされたのだった。夢とか夢じゃないとか関係無しに滅茶苦茶すぎてつい海を見ながら体育座りで途方に暮れる、ああ、夕日が目にしみる・・・俺は一体何をしているのだろうか・・・。

「あゝ、早く誰でも良いから起こすかしてくれ」

るゝ、と朱色に染まつた景色を一人寂しく眺める、なんだか凄じい。来たことのないような場所であるため、無下に歩き回って行くこともできないし、色々疲れて歩くほどの元気も無い。おそらく今頃皆してリベンジしてるんだろ？うなあ・・・俺は一体ここで何をしているんだろ？か、というか何をさせたいんだ見知らぬ誰かよ。

「随分と沈んでいますね」

「誰のせいだと思ってるんだよ、誰の」

いつからそこにいたのか分からないが、白い鎧・・・いや、ISっぽいなにかを身に着けた女性が目の前に膝から下を海面に浸からせながら立っていた。顔は旧世代のバイザー型ハイパーセンサーのよくなものに隠されていて見えないが、流れるような長い黒髪とその声で判断できた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

いきなり黙りこまれてしまったので、それに影響されてか俺も口を閉ざしてしまう。どこか近寄りたいたいような雰囲気を感じているか

らか、その周囲に発散される気迫に少々怖気づいてしまった。どうやら、この程度ですら俺には耐えられないレベルらしい。鈴のように自分から食いかかっていくこともできず、セシリアのように信念で打ち砕けもせず、今までもその場だけの勢いで進んだだけ。まだまだ未熟者ということが顕著に自覚してしまう。

「・・・あなたは力を欲しますか？」

「・・・え？」

いきなり言葉を紡いだその人に対して確認の意味も込めてか聞き返す。

「織斑一夏、あなたは力を欲しますか？」

「そ、そんなこといきなり聞かれても・・・返答に困るな」

「どうして？あなたの中にはしつかりとした考えがあるはずです」

「いや、確かに答えも理由もある」

あの時、誘拐されて千冬姉に助け出された時から心に決めたこと。自分の持てる全力で大切な仲間達を守りたい、ずっと幼いころから守られて来たからこそ、今度は自分が守る側に立って行きたい。それだけが、今も昔も変わらない俺の夢。

「ならば、どうして？」

「俺には、まだ『力』は相応しくない。心が確固として固まっていない状態で力を手にしても、持て余すだけだ。勢いだけで行動してるとなまじや、力を手にしても意味が無い」

なぜかすらすらと言葉が紡がれる、考えている時間も無かったのに出た言葉に思わず「そう思っていたのか」と自分で自分に納得して

いた。

「そうですか・・・」

「ああ、だから今はその力は受け取れない。本当に必要な時、俺が俺としてしっかり自分で進めるようになったときで良い」

目の前の女性は少し俯いてなにか思案するように顎に手を当てる、その姿に今は胸を張って俺は立っていた。納得してくれたのか、女性性は顔を上げてこちらを見据える。

「わかりました、再び会える時を待っています」

「おう」

「・・・それでは、頑張ってくださいね」

返事を返そうとした途端、再び俺は即席落とし穴に落つことされた。幸いにして、その女性が姿を消した後だったのが救いか。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「いつてえ!!・・・くおおおお・・・」

「お、戻って来たわね」

「せめて安全な移動のさせ方しろよ!なんで真っ逆さまに砂浜に墜落しなきゃいけないんだよ!？」

「・・・まあまあ、めんごめんご。細かいことは気にするなよ」

「するわ!というか細かくない!」

マッハでやっぱ受け取ったほうが良かったかなと思った、主に目の前のこの子にお仕置きするために。

「まあいいや。それで、決まったかな少年？」

「ああ、しつかりな」

「それは良かった、じゃあ、またね純情鈍感馬鹿」

「おう、またな！………つてオイ！！」

結局最後までちゃっかり馬鹿にされたのだった……解せぬ。

□ ■ □ ■ □ ■ □

そんなわけで、俺は目が覚めた後にこっそりと女王さんの手伝いもあつて白式を纏って旅館を飛び出して行ったのだった。その途中になにか青く光る大きな光線が見えたがなんだったんだろうな？

98 少年の答え（後書き）

どうでも良い作品情報

音っちのおかげで原作より成長している一夏君でした、というお話

99・罪と罰（前書き）

ヒヤッハー、血糖値がヤバスになりそうです（本編的な意味で）

予約日時間違えてしまっていました、すみませんです

99・罪と罰

「・・・・んあ？」

確か福音をマスタースパ。クもどきで撃ち落してその後身体が負荷に耐えられなくて気絶したはず、フルオペレーションでISがやってくれるはずの演算を自分で強制的にやったようなものだから当たり前なんだがな。まさか、対象がISでもできたとは思わなかったが・・・・だからこそその負荷か、医療用ナノマシンも入れてなかったから普段よりダメージが大きい。

「はあ、やり過ぎたな確実に」

まだあちこちが痛む身体を無理矢理起こして何時の間にか寝かされていた部屋を見渡す、右側には福音のパイロットであろう金髪の女性が安心してきつたような笑みを浮かべて眠っていた。どうやら福音も自身の操縦者はしっかり守ってくれていたらしい、それを見て安心した俺は起き上がって戸を開けた。もちろん身軽なジャージ（青地に白線）に着替えて、某ユニ。口の軽い防寒着よりも保温性と重量が優れているナノドクター衣料開発部の新商品だ。しかも高硬度繊維で編まれているために小口径の銃弾なんて余裕で防ぐ、財界の人間の一部には「僕、満足！」と中々に好評だ。

「時間は・・・・ああ、飯時逃がしたなこれは・・・・orz」

時間は既に午後10時、スケジュールに予定されている夕食は7時から普通に食い損ねた。確か今日は近海で取れた新鮮な海老三昧だったっけか・・・・食べたかったなあ、特に美味いと評判のビッグエビフライ（30センチ）。まあ、意識を取り戻すまでこんな時間

になる分のダメージを身体にかけたのは俺だから自業自得なんだよねえ、それでも名残惜しいのは・・・うん、なんか寂しいや。あれこれ嘆いていても仕方無いために俺は海へと歩を進めたのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・・・・・・のか？」

「あ・・・・・・・・う、うん・・・・・・・・」

なにか一夏と筈の声が聞こえたので見えないくらい離れた場所へ移動して近くの岩場に腰掛ける、ざざぁんという打ち寄せる波の音を聞きながら夜空に浮かぶ満月を見上げる。そこには視界いっぱいに広がって輝いている大きな月が満面の笑みでもしているかのようにこちらを見下ろしていた。先ほどまで洋上で命がけの戦いがされていたことが嘘だったかのように、静けさがその場を満たす。そよ風がさあーっと吹き抜けるそれが、更に静けさを感じさせた。まるで、自分以外にこの世界に誰もいないと思わされてしまうくらいに。

「もう大丈夫ですか？」

「まあ、な。もう動けるよ」

何時の間に来ていたのか、浴衣姿のセシリアが傍に来ていた。その黄金色に光る長い髪は俺と正反対に右サイドテールに纏められていて、ふふふと笑ったびに揺れる。笑ってはいるが、その顔には涙の痕があり、俺がどれだけ心配をかけたかが言われずともわかった。どうしようもなく、申し訳ない気分になり軽く俯いてしまう、泣かせないと決意したのに今回泣かせたのは俺のせい・・・俺も未熟者

か。

「わたくし、本当に心配しましたわ。またあなたが居なくなってしまうのではないかと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう、身体にかかった負荷はそれこそ人類の身体には到底耐えられないほど、死神の瞳リバーズアイのサポートがあったとはいえ一人の人間の脳で高度演算処理を行い、さらにその状態で超高速戦闘。いくらエクステンデッドという強化体だったとしても脳はただの人間、演算能力は結局はISに劣る、それなのに処理不能なはずの演算をやっていたのだ。成功したから良かったものの、失敗すればただの生体コンピュータに成り果てる、意識が無くなり機械の一部になる可能性もある。そんな危険な機能、そんなものをやったのだから当たり前だろうな。

「お願いですから、また居なくならないで・・・・・・・・！わたくしを一人にしないでください！」

「ごめん、考えが甘かった。すまないセシリア」

隣に座っていたセシリアをそうつと抱き寄せる、包み込むように、優しく。俺の胸に耳を当てて心臓の鼓動を確かめるようにセシリアが身体を預けて来た、それを離すまいと力を込めて抱き締める。気持ちに歯止めが効かなくなったのか、俺の腕の中から嗚咽が聞こえてきた。

「うううううう・・・・・・・・音羽あ」

「俺はここにいて、どこにもいかない」

「あなたがあの時去ってから、わたしは・・・わたしは寂しかった」
「うん、うん」

「でも、また会えた。二度と会えないと思っていたのに！」

「俺も、そうだった」

「なのに、なのにまたあなたがどこかへ行ってしまうそうだった」

「ごめん、ごめん・・・」

「もう、大切な人が居なくなるのは嫌なんです！」

ああ、俺はこんなにも愛されていたのかと実感した、俺が思っていたよりも俺という存在は大きかったようだ。それこそ、一人の少女の心の支えという場所にいたくらいに・・・どうやら俺は灯台下暗しだったらしい、身近な人が俺をこれまでに大切に思っていてくれた。・・・まだまだ俺は子供なんだな、結局一人でオトナになっただけだっただけか。

「俺は、もうどこにも行かない。しっかりと生きる」

「そうじゃなきゃ、許しませんわよ！！」

いつもの調子に戻ったセシリアとどちらともなく笑い出す。

どうやらこの世界もまだまだ捨てたものじゃないと確固としてそう思った、なにせ、目の前で少女が笑っているのだから。

「わあゝ！？いや、助けて！！というか逃げるぞ第！！」

「え、うわっ！？」

どうやら向こうでは唐変朴の粛清が始まったらしい、簪を筆頭に少女達が箒をお姫様抱っこで走る一夏をISで追いかけていた。みんなが笑ってられる、いつもの日常がそこにはあった。どうやら俺は、日常を守ることができたらしい。

「さあて、戻ろつかセシリア」

な、なにか柔らかくて温かいなにかが唇に触れる・・・な、なんだ、なにをされているんだ！？視界を確保すればわかるのだろうが、生憎、指示には背けない。なにかgggggggggg

「ん・・・」

「ん!？」

しかもなぜか離れないようにと頭を抑えられている、仕方なくセシリアの腰に手を回す。なんかそうしたほうが良い感じがした、勘には今まで世話になっているからな、無碍にできない。

「（な、なあ、いつまでこれを）」

「（わたくしとキスするのは嫌でして?）」

プライベートチャネルでなにかトンでもない答えを聞いた気がする・・・え、ということは・・・そおつと気づかれないだろうと確認の意味も込めて微かに右目を開く。そこには瞼を閉じて俺にキスをしているセシリアの顔があつた・・・。。。。。

「・・・。。。。」

「・・・。。。。」

突然セシリアと目が合う、それと同時にそれとなくお互いの唇を離す。あゝうゝ、凄じ恥かしい、どうやらセシリアも同じようだ。

「こ、これは・・・その・・・罰ですわ！ええ、罰ですの！心配させたあなたに対しての罰ですわ！」

ビシッと腰に手を当てて右手で俺を指差すセシリア、その顔は羞

恥からか紅く染まっている。な、なんだと・・・これが罰だということか、羞恥心と罪悪感での二重苦・・・なにか期待した俺が馬鹿だったのか！？やはりセシリア、考えることが違うな・・・罰だと言う割にはどこか嬉しそうに明後日の方向を向いてくねくねしているが・・・なにも見なかったことにしよう。

「でもあなたはわたくしが撃ち落してさしあげますわ、必ず」

どうやら、心配させた罰はまだ続くらしい・・・優雅に立ち去るセシリアの背中を見つめながら俺は一人頬を染めながらも落ち込むのだった。

99・罪と罰（後書き）

どうでも良い作品情報

告白？そう簡単にさせるかよ！ゴールはまだ先ですよ！！

100・臨海学校辺（前書き）

今回で「臨海学校」はお終い、でもまだ問題が残ってますよ旦那！

あの後、様々な手段（夜の海へダイブ・煩惱退散のために木への頭の打ち付けなど）を行って冷静に無理矢理自分をさせたあとに自室へと一夏の悲鳴と少女たちの声を背景にしながら戻った。夢の中で俺の理性が瞬時加速しそうなシチュでセシリアにライフルで撃たれるという色々な意味で恐ろしい夢を見てしまったのは仕方のないことなんじゃないかと俺は思う。ベッドの上でのしかかられながら、口にドラグノフを突っ込まれるという、ナニが溜まっているからかそんな夢だった。俺は一体なにを考えているんだ。

「はぁ、そろそろ発散しなきゃいけないのか？ いや、朝っぱらからこういう話題を一人展開するのもアレか・・・」

「無理に溜めると良くないよ、お姉さんが相手になるつか？ それともいっそのこと筆お「ふんぬ！！」ぴぎゃっ！！」

突然天井から飛び出して来た女王（笑）をそのまま床に叩きつける、一瞬「それも中々・・・」とか考えてしまった俺を殴りたい。やつたら最後、英国中を敵に回すことになる。というか、この人相手にそんな思考に行き着くあたり俺はそろそろ危ないらしい。・・・・なんだか臨海学校で色々変わったような気がするな、主にナニ方面で。全然嬉しくないけど。

「おお、愛が痛い。しかし、イイ！」

「込めてないぞ、というかそっちの淑女にあんたがなるなよ・・・」

「大丈夫、攻めもできるから問題ナッシング！」

「そういうことじゃ無いから、絶対に」

今のこんな状態を英国国民が知ったら・・・悲しまないな、確実に

「女王だものww」とかって笑い飛ばしそうだな、確実に否定できないような感じがするってことはそういうことだ。いつから英国は大英帝国からこんな緩いのに変わったんだか、いや、この人からか？ちなみにこの人が即位してから「はっちゃけすぎ、イギリス王室の実態!？」とかって週刊誌などで当時は日本でも話題になっていたらしい。そんな懐かしいことを思い出しながら、女帝へと書いて馬鹿と読む）を頭を鷲掴みにして引きずりながら木作りの廊下を歩く。程なく歩いたところで女王を振りかぶって昨日戦闘機が置かれていた場所へISのパワーアシストを使って放り投げる。

「わ〜ん、音ちゃ〜ん……」

「よし、さあて朝食は何だろうな〜」

大英帝国（旧）のトップのかすれて行く声を無視して俺は食事どころである大広間へと歩いていったのだ。できれば次に会うのは夏の晩餐会くらいにしておきたい、嫌いなわけじゃないがまあ、余裕があるときじゃないと大変だからな。あ、一夏も起こしてくるんだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

時は過ぎ、もう生徒が朝食を終えてバスに乗り込み終わったところ。俺はあの福音のパイロット、ブロンドのナイスバディなお姉さんナターシャ・ファイルスさんとイレイズドの司令官の悪口を延々と話していた。どうやら聞いた限りでは、司令官が俺に隠して技術書を「許可がとれた」と嘘の情報とともに米軍IS開発部門に渡していたらしい。俺の許可がとれたということに疑問を感じつつも「別の書類にしたサイン」を丁寧に写したそれにより騙されたらしい、な

んとも要らないところに頭が回る馬鹿だな。まあ、書類があつたんじゃないあ仕事上やらなきゃいけないから仕方無いか、「開発部」と「政府」は。

「ええ、ごめんなさいね。あなたの大切なものを」

「いえ、こちらこそご子息をいくら任務とは言え大破させてしまい申し訳ありません」

どうやら福音のことをナターシャさんは自分の子供のように大切に思っているらしいのだ、「あの子」と呼んでいることと慈愛に満ちた目からそれが感じられる。そりゃあ、誰だって初期のころから開発に携わって操縦者になつたのだ、自分が育てたも同然だろう。

「いいえ、あの子を拘束から助けてくれてありがとう。感謝するわ」

「お気になさらずに、それと当分は安静にしてください。上が五月蠅いですから」

「そうね、そうするわ」

「福音はこつちでも便宜図りますので凍結は避けられるはずですが、それまでは大変ですけどね」

「あら、お優しいのね」

「空を飛びたいのは俺も同じですから、それじゃあ」

「ええ、こつちに來たらその時はまたお話ししよう」

「楽しみにしてますよ」

握手をしつかりとし、笑顔で別れる。ナターシャさんに見とれていたらしい一夏がバスの中でラバーズたちに500m1ペットボトルをなぜか5本投げつけられていた。あれ、何時の間にか簪ちゃんと鈴ちゃんがいる・・・あ、出席簿g「ズドン」・・・なんでブーメランみたいに飛んでいったのにそんな音が聞こえるんだろうね、おかしいよね。

『せえつのお!!!!』

「うぎゃああああああ!!!!」

まあ、賑やかな日常の一風景というものが、一夏の首がありえない曲がり方してるのが気になるが。

「ふう、あゝなんか疲れた」

「はい、アイスティーですわよ」

「おお、ありがとうセシリア。助かった」

その後、セシリアがぼかぼか陽気に当てられて俺に身体を預けて眠ってしまったが、うん、こういうのも偶には良いかもな。そんなことを考えながら、騒がしくも楽しかった臨海学校を終えた俺達を乗せてバスは走っていくのだった。あ、なんか忘れてるような気がする。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「ま、待つてゝ！置いていかないでよゝ!!」

寝坊してバスに忍び込み遅れた生徒会長がその後林道沿いの道で目撃されたとかされなかったとか。

100・臨海学校辺（後書き）

どうでも良い作品情報

そろそろ番外編も上げたいですねえ

101・帰って来た元高2（前書き）

i n i s 学園食堂！

101・帰って来た元高2

三日ぶりに帰ってきたIS学園、いまだに身体には高負荷のダメージが残っているため身体能力的意味で一般人レベルに下がっている。身体にダメージ残存状態のため、医療用の活性化ナノマシンを使うのこともできない。人間観点での医者の見かけによると、全治1週間らしい・・・ドイツのエクステンデッドの資料の情報から推察しても6日間の低負荷による安静が必要。つまりは1週間身体能力一般レベルでの生活を強いられることになる、ドイツの秘密機関に追い回される心配が無くなったとは言え、長年続いていればおのずと心配になってしまうのは仕方が無いことなのだろう。

「そんなわけで1週間松葉杖（特殊超合金製フレーム）での生活をする羽目になったとさ」

「誰に言ってるのよ」

「いや、なぜか言わなきゃいけないような気がする」

まともに長距離歩行ができないので、結局松葉杖片方突いての生活だ。今の状態じゃ5分も歩けないほどだ、なにせそれ以上無理して歩くと全身の神経がバリバリ痛むし、筋肉痛で想像以上にきつい。パワーアシストフレームの装着も考えたがあれは万全な状態での介護補助システムのため、運動補助目的じゃないから無理。というわけで、今までの人生で最弱の状態での生活を強いられているんだ！（集中線）

「くっそ、これじゃあまともに動けない・・・」

「・・・つまり今が襲う（性的な意味で）チャンス!？」

「頼むから止めてくれ、更識現当主と既成事実なんかあったら何かと死ぬ」

「私が相手じゃ嫌なの？」

「……正式な関係だったら喜んでつてところか？、まあ、お前が相手に嫌がる男はこの世界にいないだろうがな」

事実、中学のころから見ないうちにこいつは綺麗になった。例えば、中学のころからほとんど美人になっていった気がする、それこそ道を歩けばあちらこちらの男女が振り返るくらいに。しかもそれで、出るとこ出てさらには魅力的に引き締まった体つき。学園でも憧れの対象であり、薄い本もそこそこに流通しているらしい。……しかも、18の数字に×が引かれているような内容で。あれ、IS学園って世界中からデキル（けして変な意味ではない）人が難関潜って入学してるんだよね？ねえ？

「ああ、こんな状態だと出かけられないじゃないかよ……」

「手伝ってあげようか？私どうせ仕事はほとんど無いし」

「いや、俺のことだからお前は自分のことを優先さ」

「少しは頼りなさい、悪い癖よ？」

「……むう」

ただでさえ、イレイズドで司令官と楽しいお話（物理・法的・社会的・精神的制裁）をしなければいけないのに。ちなみに今は昼時、午前で授業が終わったのだが、いつもの専用機持ちメンバーはいそいそとIS訓練に行ってしまった。気にしないで良いと言っているのに俺は一人遅めの昼食を摂っていたのだが、いつのまにか美月が隣に座っていたのだ。まあ、よろよと頼りない歩き方をしていたからサポートをしてくれたので助かった。その時に臨海学校のことを一人思い出して顔が赤くなっていなかったかどうか焦っていたのは秘密だ、初心の娘じゃないんだがなあ……。

「心は初心でしょ？身体も……ふふふ」

「・・・言つな」

なんでだろうか、久しぶりと言っていいほどこいつに弄られているのだがどこか安心できる。いや、マゾじゃないけどさ。なんというのだろうか、いつもの日常を過ごせているというか、落ち着いた平和な時間の中にいる安堵感というか。いつも街中でも命がけの戦闘だったり、逃走だったりで中々本当の休息が無かったからか。まあ、弄られるのは基本的に好きでないがな。

「それはさておき、どうする？私は時間あるけど」

「むう、確かに一人じゃ普通に生活はできないなあ・・・」

「気軽に決めちゃいなＹＯ、こんな美少女が介抱してくれるんだから」

「自分で言うかそれ？」

うーん・・・ハッ、簪ちゃんが向こうからなんか俺に向けてカンペ出してる。なににな・・・「お姉ちゃんと偶には一緒にいてあげて？ね？」・・・確かに最近は滅多に話とかもしないでいたけども・「頼んでいるんじゃない、命令だ」・・・簪ちゃんってあんな性格だったつけ？そりゃあ一夏と会ってからは明るい性格にはなったが、あそこまでアクティブだったか。というか、プライベートチャネルで話せば良いのでは。

「どうしたの？」

「あ、いや。じゃあ、悪いが頼むよ美月」

「そうよね、あなたはセシリアちゃん一筋・・・え、ホント？」

「嘘を言つてどうするよ・・・」

「わかったわ、じゃあね」

「え、あ、おい・・・行っちゃったよ・・・」

なんか、「やった、やったわ！これで一步リードよ！」とかどこか嬉しそうに飛び跳ねながら走って行った。それこそ、「なにがあった」みたいに周囲の生徒の視線が大量にあつたが・・・なんで俺を見て「ああ、そういうことね」みたいな目で見てくるんだ。そして、微笑ましい視線を向けるな・・・今までに何回かこういう経験があるが一体なにがどうしてこうなるのだろうか。まあ、いいや。

「よつこ・・・」

俺は断じて年寄りじゃないぞ、まだ17の少年のはず・・・だ。まだおじいちゃんとは呼ばれたくない、いや、呼ぶ人いないだろうけどさ。まさかこの年でこれが口から出そうになるとはショックだ。ひとまず、美月が来ても良いように休日片付けに行かなければいけないな、散らかっているわけでは無いが・・・まあ、女子にはちよいと見せられないものがそこそこあるからな。ちなみに前に一夏の部屋を強制家宅搜索したら、ベッドの下に無かった。もしかして鈍感以前に枯れているのか？とか心配になったりした。

「ああ、なんとも情けない」

その後に、MINIREXに運んでもらったのは言うまでもない。ああ、今の俺はおそらく中学生より弱いぞ・・・はあ。

101・帰って来た元高2（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ、夏休みじゃなああああいいいい！！

102・姉と兄（前書き）

今回は短いです

102・姉と兄

あの後、なんとか無事に動かせる両腕を動かして昼食を摂り終えた俺は再び松葉杖をカツコツ突きながら自室へと歩いていった。道中、ずっと見かけなかったジャックがこつち向いた途端指差して笑っていたのでスピン松葉杖で空の星にしてあげた。なんか「作者に忘れられてるんだもん！」とか喋っていたが、ひとまず病人を会った途端笑うのは非情に失礼だと思うんだ。だから打ち上げてあげたわけだけでも、ああ、節々が痺れる……。

「ふう、これは思ったよりきついな」

一応P I Cによる身体補助が特別に許可されたがそれもほとんど有って無いようなものだ、結局松葉杖使って歩かなきゃいけないし。フルオペレーション使うのは今後自重しよう、使ったびにこんなよぼよぼ老体になったんじゃない。襲撃とか以前にまともな生活を送るのも大変だ。ああ、なにが悲しくて常時老化学験を地で行かなければいけないんだか。まあ、注意書きにあったリスクとか負担を無視したからなんだがなあ。

「……………はあ」

文句を言っても現状が変わらない事実には辟易しながら、俺は一人自室へと足を向けるのだった。



「はあ、無理をしおって」

一仕事終えた私、織斑千冬は寮長室へと歩きながら視界の端に入り込んだIS学園に所属する少年「如月音羽」を見かけた。おそらくあれこれ改造されているであろう松葉杖を突きながら普段見ることができないような弱弱い姿に、自業自得の結果だとは言え放っておけなくついつい足を向けた。

「大丈夫か如月？」

「あ、ちふ・織斑先生。まあ、歩けますので問題は無いといえば無いです」

どこか無理をしているような雰囲気駄々漏れしていたその姿を見て内心ため息を吐く、普段からどこか周囲が年下だからか強がりを見せている感じがしていたが。それは周囲の関係では無いらしい、境遇と経歴故の強がりか・・・そういう無茶は好意を寄せる人間くらいで良いだろう。そんな普段はしないような思考に行き着くあたり、こいつが弱っていることが珍しいのだろう。

「うえっ！？千冬さん！？」

「静かにしろ馬鹿者、生徒が困っていて助けない教師がどこにいる」
「・・・いや、でも・・・」

「だったら何時もの礼とでも思っておけ」

「はあ・・・」

掬い上げるようにして如月を抱き上げる、細身のその身体は見た目以上に軽くとも簡単に持ち上げられた。観念したのか松葉杖を腕時計の擬似格納領域に仕舞った如月は大人しく腕の中に収まった、まあ、17にもなって男が女にお姫様抱っこことやは恥かしいのだろう。顔を背けているが、頬を少々染めていたのは見逃さなかった。

こいつも年相応に羞恥心があつたことには驚きだったが。

「結構恥かしいですね、自分がされる側というのも」

「なんだ、したことはあるのか？」

「まあ、昔にセシリア相手にですけどね。どっちも子供でしたけど」

「ほお、ならばまたしてやれば良いではないか」

「俺は何時でもオッケーですけど、もう年頃でしょう。嬉しくもあり悲しくもありますけど」

「親のようなことを言うなお前は」

「一応、執事つて名目で世話係でしたから。少しの間だったけども」

感慨深く、その日々を懐かしむような表情を浮かべる如月。そこには、一人の父親のような面影があつた。ついその見慣れない表情に驚いてしまう、まだまだこいつのことは知らない事のほうが多いらしい。一応、「音」兄と一夏が呼んでいるのだがな。

「つと、そういえば千冬さんも最近無理してませんか？」

「いや、なにも」

「そう返すつてことは確定ですね、なにか誤魔化するときいつも一言返答でしょ」

「・・・仕事だから仕方あるまい、わかるだろうお前なら？」

「そうですね、だからつて無理のし過ぎは禁物ですよ。身体のこととは一番に考えてください」

「わかつている、薬学者に言われたらどうもしっくり来るな」

「まあ、そんな俺もこんな状態ですけどね」

他愛無い会話をしながら、男子に宛がわれた部屋へと歩く。気づいたころには既に戸の前へと来ていた。

「ありがとうございます千冬さん、助かりました」

「なに、気にするな。ではな
「はい」

如月を降ろし、戸を開ける。礼を言ったその顔に一瞬だがドキッと
してしまった私は悪くないはずだ・・・おそらく。

102・姉と兄（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアのターンだと思った？違うな、千冬さんのターンだ。
いや、フラグが立ったわけじゃないですけど。そういえばこの組み
合わせで書いたことって無いな〜というわけでした

103・番外IF その6「魔法使いと元騎士」（前書き）

久しぶりの番外です

103・番外IF その6「魔法使いと元騎士」

「そうですか、ありがとうございます」

ここ、幻想郷に来てから早くも1週間が過ぎていた。この世界に連れて来られた理由である式神探し代行に今日も今日とて精を出していた。九尾の狐と猫又だつてさ、いくらエクステンデッドという強化人間だからとは言え、結局は人間。妖怪を探して連れ帰るというのは無理っぽい気がしなくもないが頼まれた以上やらなくてはいい、さつさと済ませて元の世界に俺は帰りたいのだ。いくら転校&長期休暇届けを出して問題無い状態にしたとは言え・・・外聞的には長い間慣れ親しんだ町からアメリカへと引越し、一夏や美月が別れるときに空港で泣いていたが仕方無い。まだまだ謎の組織の襲撃もあつたりするから、安全のためでもある。

「はあ、そうですよね。すみません」

人里で聞き込みを続けているが、やはり妖怪の情報など役に立ちそうなことは聞けなかった。妖怪探しに人に情報を求めても仕方が無いのかと思う。・・・調査方法を変えるしかないか。

「ふう。でもまあ、これで今日の調査も終わりだ」

ぐっつと背伸びをする、朝から続けていたためそこそこに疲れた。なにせ今まで実地調査はmk?や街中の監視カメラの情報を強奪・・・もとい拝借・・・頂いて・・・お借りしていたから自分で動くことも無かった。いや、動けなかったが正しいんだがな。とまあ、そんなことを考えながら俺は人里にある本屋へと足を向ける。今日出てきたのは調査以外にも目的があつたからだ、それこそ手作りスイーツ

を保存できる冷蔵庫を・・・ナノマシンの注射器も冷温保存が必要なもののは仕舞っておきたいし。格納しきれない程の量を持ってきたから保管しておきたいんだよな。

「はあ、食材の保存をしときたいんだよ俺は・・・」

まさか、お菓子を作るたびに冷蔵庫でチルノを呼びつけるわけにもいかないし。常時食材を格納して持ち運んでも生体発電方式だから微量ではあるが体温を奪われる、もしもの戦闘でそれこそ体温を奪われて動きが鈍ってて美味しく頂かれました（食事的意味で）とかになつたら冗談じゃない。まだ俺は死ねないのだから、妹である俺の後に作られたエクステンデッドを引き取り、セシリアに再び仕えて平和な中で生活するのが俺の目標なのだから。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「そんな・・・馬鹿な。何も無いだろ？」

本屋の中に置いてある本を全て関係無いようなものまで中に目を通したが、冷凍は勿論のこと、冷蔵すら無かった。良くて氷を入れて冷蔵するお粗末な町の郷土館などで展示されていそうな、なんちゃって冷蔵庫のみ。プリンはおろか、ナノマシンの保存さえもできないレベルだった。というか、これじゃあ常時俺は歩く冷蔵庫&p・武器庫&p・洋服タンス&p;科学技術オールの薬箱じゃないか。幸いにして冷蔵とかは薬と食材だから良いけど、それでも身体能力の低下は避けられない。体温が5度は奪われるのだから当たり前だろう。

「何悩んでいるんだ？」

「はい？」

声がかけられた方向に振り返ると、そこには黒いとんがり帽子（けしてこれを見て某コーンのお菓子が食べたくなったわけではない）を被り、箒を持ったまさに魔法使いのような女の子がいた。忘れ去られたものが幻想となって行き着くとは聞いたけど、中二病まで幻想入りしていたのだろうか。いや、もしくはジャパニーズサブカルチャー・・・ではないか。

「君は？」

「私の名前は霧雨魔理沙。ただの魔法使いだぜ」

そう言っただけで彼女は帽子をすつと被りなおした、呪術師は一度ロシアで会ったことはあるが魔法使いは初めてだ。そのときは怪しさ満点で俺を「呪ってやるう！！」とか叫んだので素晴らしきミリアさん直伝のかかと落とし3Gをお見舞いしてやった。素早すぎて爪先が3Gの重力負荷を持つ力を持つ技らしい、流石ミリアさん、人間離れしてる。そこに危機感として痺れるが、憧れは・・・微妙だ。

「名前は確か・・・音羽だったよな？」

「そうだけでも、どうして俺の名前を。初対面のはずだが？」

「慧音から聞いたんだ」

「慧音さんから？」

「ああ、外の世界からnice bo a・・・ナイスガイが来たとかって」

「ひとまず、前者にはツツコまないぞ。いや、ナイスガイでも無いと思うが」

「いや、あながち間違っと思ってないと思うぜ」

「そうかねえ？」

今まで、nice shotと言われた経験くらいしかないぞ。というか、ナイスガイって・・・コセキナイの間違いじゃないか？主に日本に限るけどもさ。

「ところで、ここで何を調べてたんだ？」

「うむ、実はな・・・」

ここに来てから、好きなスイーツを作れないこと、冷蔵庫が無いこと、薬の保存ができないと緊急時にあれこれ大変だから冷蔵庫が必要で資料を探しに来ていたことを説明した。ナノマシンとか、量子変換とかの単語は流石に理解できなかったらしい。当たり前の反応ではあるけどもな、外でも分かる人はほとんど専門家以外は居ないし。

「なるほど、物を冷やす装置か・・・」

「何か良いアイデアとか無いかな？」

「うゝん。私には思いつかないが・・・あそこなら何か情報があるかも知れないな」

「あそこ？」

「ああ、今からそこに行くんだが。一緒に来るか？」

「是非とも頼むよ」

すると、魔理沙は箒にまたがり、ふわりと地面から少し浮く。おお、PICも無しにマジで浮かんでるよ、流石魔法使いと言ったところだろうか。

「よし。じゃあ箒の後ろに乗ってくれ」

言われたとおりに魔理沙の後ろに並ぶようにして箒に乗った、その途端ふわりという浮遊感が感じられた。バランス感覚には日々ジェットパックで空の旅をしていたから問題は無い、やろうと思えば綱渡りもバランス棒無しで行けるぞ。

「乗ったな？じゃあ出発するぜ！」

まあ、乗り心地は中々のものだった。とても言うておこつ。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「よし、到着だ「そうか、わかった」おう、少し待って・・ええっ！？」

すたりと箒から飛び降りる、続いて魔理沙も着地。ちなみに俺が飛び降りたのは地上3メートル地点である、ちょうどオルコット家本邸の壁と同じ高さだった。「さあ、飛び降りても死なない特訓よ！」とかって言われて何百回とミリアさんに突き落とされた在りし日の思い出がよみがえる、感慨深さよりも恐怖が先に出てきたのは仕方が無いことなのだと思理矢理自分に納得させた。

「ここは？」

どこか懐かしさがこみあげるような洋風の巨大な屋敷、もしかしたらオルコット家の別邸よりも大きいのでは無いかと思わせる真っ赤な外壁の館。見渡す限り全てが赤かった、それにしても窓が少ないように感じるが・・建築様式にさほど詳しいわけでは無いので気にしないことにした。

「ここは紅魔館つて所で、この中にでかい図書館があるんだ」

「図書館？」

「ああ、そこならなにかしら役に立つ本があるはずだ」

「成程な・・・ところで魔理沙。質問があるんだが？」

「何だ？」

「さっきからそこで寝ている人は誰なんだ？」

視線を向けた先には緑色のチャイナドレスのような服を着た女性が
門の横で立ちながら幸せそうな笑みを浮かべながら寝ていた。

「ぐ〜す〜、むにゃむにゃ・・・ふみゅう、す〜す〜」

なんとも、睡眠を素晴らしいほどエンジョイしていらつしやる、門
番がこうしていられるほどに平和なのだろうか、それともこの門番
が職務を全うしていないだけか・・・。ここ紅魔館の門番、紅美鈴
と言うらしい・・・いかん、護衛をしていた経験からかどこかイ
ラツと来る。主人のためにいつでも万全な体制で居なければならな
いのに、こんな状態では有事の際はどうするつもりなのだろうか。

「門番・・・ねえ？」

まあ、ここにミリアさんが居ないだけ天国だろう。いたら愛の籠つ
たナイフ投げを泣きたくなるほどにされるからな・・・ああ、恐ろ
しい。

103・番外IF その6「魔法使いと元騎士」（後書き）

どうしても良い作品情報

明日にでも番外のまとめを別作品として投稿しようと思います

104・番外IF その7「いざ、紅魔館内部へ」(前書き)

「弾幕はパワーだぜ」は実は本編のブルー・ドラゴンの考察で使っていたりする

104・番外IF その7「いざ、紅魔館内部へ」

「こんなのが門番で意味あるのか？」

「・・・無いぜ（キリッ）」

「だろうな」

どうしてくれようかこの門番、英国認定騎士&元オルコツト家セシリア嬢付き執事兼護衛人として指導を行うべきだろうか。例え平和であろうとしても、いつどこで何が起きるか分からないのだ。そのために主人を守り抜く最前線の役職、それが門番、主人のみならず屋敷に暮らす者たちの安全を司るのだから本来ならばこんな風にぐっすり仕事そっちのけで寝ていられるはずもないのだがな。まあ、侵入者が居た場合に迎撃できれば良いのだけでも・・・。

「まあ、私は入りやすく良いんだがな。じゃあ、入るぜ」

「あ、ああ・・・」

居眠りをしている門番を雇っている主人に注意喚起をしておかなければいけないな、と考えながら魔理沙に続いて紅魔館に入って行くのだった。あのような門番に自分と従者の命を任せるような主人は失格なのではないだろうか。なあ、事実、職務怠慢していた門番にミリアさんは直々に指導を行って叩きなおすか、即解雇にしていた。俺も同じ立場だったらそうする・・・それにミリアさん亡き後は警護人数を大幅に増やした。それも選りすぐりの軍人上がりの人を・・・臆病なくらいが丁度良いんだよ。



「ここが図書館だ」

「おお、凄い広さだな。王立図書館にも負けないぞこれは」

連れられてやってきた図書館はまるで壁のように巨大な本棚が大量に並び、それぞれに所狭しと様々な本が詰め込まれるように納められていた。一つ一つの本棚が大きいこともあるがそれが遠くまで整然と列を成しているためか、それだけで圧倒されてしまった。日本の国立図書館は余裕で越すし、英国王室の地下図書所蔵庫にも引けをとらない。まさに大図書館と呼ぶにふさわしい場所だった。

「しかし、この図書館暗すぎないか？本を読むのも一苦勞の明るさだぞ、確実に照明を増やしたほうが良いと思うが」

「私もそう思うんだが・・・ここの図書館の主の趣味がこれだから仕方無い」

「そうなのか・・・貴重な資料を保存するには最悪な環境なんだからあ・・・」

広大な図書館を見回す、その特徴的な暗さに微かな恐怖を覚えるが・・・気のせいだろう。この暗さから図書館の主の性格を推察すると・・・やっぱ暗いのだろうか。それ以前に資料保存の役割も兼ねているのだから、この暗さを換気の悪さをどうにかしたほうが良いと思う。・・・紅魔館つてもしかして全体的に改善点が多いのか？

「ま、それは考えててもどうしようもないぜ。さっそく目的の本を探そうぜ、私も自分の本のついでに探すからさ」

「ありがとう、助かるよ魔理沙」

「何、気にするなって。じゃあ探すとするか」



「なあ、音羽。こんなのどうだろう？」

あちこち回って目的の本を探して2時間半、広すぎる図書館で探し回っているうちに結構疲れてきていた。なにせ視界の遠くにも本棚の行列ができているのが見えるのだ、どこにこれだけの大きさの図書館が納まっているのか不思議に思いながら本棚の柱に背中を預けて吐息を吐いていた。もう、終わる目処が立たないんだよ・・・そんなことを考えて絶望しかけていたら魔理沙が本を持って飛んで来ていただ。

「・・・ん、どれどれ？」

手渡された本をぱらぱらとめくり内容を確認する、するとそこには冷凍機能がついた箱らしき物の概要が設計図も記載されていた。

「・・・ふんふん、これなら冷やす機械が作れるな」

「本当か？それは良かったのぜ」

「助かったよ魔理沙、ありがとう」

「なーに、借りる予定だった魔導書の近くに偶然あったただけだし、礼なんて要らないぜ」

魔理沙は年相応の少女らしく笑顔で応えると、おそらく自分の物であろう本を入れて背負った。いやまあ、俺は年相応の反応したりとかは少ないしな。ポーカークフェイス（仮）が不完全だったりするし、企業人だし、元執事だし。こういう風に相応に自分を表せる魔理沙

が少し羨ましく思ってしまったのは経歴故か・・。

「さて、お互いに目的の本も見つかったことだし。帰るとするか」

そう言つて魔理沙は意気揚々と本を持って出口に向かおうとした。

「ところで魔理沙」

「どうかしたか？」

「本って勝手に持つて行つて良いのか？さっき言つてた図書館の主に一言言つて行つたほうが良いんじゃないか？」

「めんどくさいから良いんだぜ」

「そういう問題では無いと思うんだが・・」

「そういう問題さ、じゃ、帰るとするか」

魔理沙が一步を踏み出そうとした途端、どこからか声が聞こえた。

「そこまでよ！！」

「誰だ？」

声が聞こえた方向に視線を向けると、そこには一人の少女が立っていた。髪も服も、全体的に紫一食のコーディネートをしていた。せめてどこかアクセント入れようよ、とそういう関連に疎いながらも思った。いや、彼女に似合っているからそれで良いのかもしれないけども。

「彼女が図書館の主か？」

「ああ、動かない大図書館こと、紫もやし先生だ」

「紫もやしじゃないわよ！ちゃんと本名で呼びなさいよ！」

「しっかり敬称で先生は付けてるぜ、何が問題なんだぜ？」

「先生付ければ良いわけ無いでしょうが！」

「かくて、貴殿の本名は？」

「パチュリー・ノーレッジよ！」

そう言っただけで彼女、パチュリーは俺をビシッと集中線が出るんじゃないかというくらいに指差した。なんか、見た目と違って元気だなこの人、馬鹿にしてるわけじゃないけどもやし系だと思ってました。すみません。

「それで、私達に一体何の用だ？」

「『何の用だ？』じゃないわよ、何勝手に私の本盗もうとしてるのよ！」

「盗むとは失礼な、借りていただけだぜ。私が死ぬまで」

「・・・人、それを盗むと言う」

「その通りよ！その持っている本を今すぐ返しなさい！」

「断る」

「断るな！」

「何と言おうと私は本を持っていくぜ、こっちには事情があるんだからな」

「そういうなら、力づくで止めさせてみせるわ！」

そう言っただけで彼女は洋服の裾から一枚のカードを取り出した・・・あれがスペルカードという奴だろうか。俺は弾幕を出せるわけでもないし、やろうとしたら殺傷能力パーフェクトのリアル弾幕になるから無理。だいいち空を飛べないし、擬似PICのフレームでも作れたら良いな。

「今回こそ、あなたを倒して本を守る！」

「そういう割りにはいつも負けてるじゃないか」

「余計なお世話よ！あなたに本を盗られる気持ちが悪くない？」

「・・・なんか気持ち悪くなる気がする」

たまに家に置いてある防衛資料を美月がさっきの魔理沙のごとく更識の仕事サボりで勝手に持つていくことが偶にある、毎回警護の月光を切り壊されたりして大変なんだよな。主に修理で。

「毎回あなたに負けて本を取られるたびに私はお酒を飲みながら悲しく一夜を過ごしてるのよ!？」

「自棄酒するなよ、身体に悪いぞパチュリーさん」

「でも今日もそれで終わりよ!ここであなたを倒し、私は次の日まですぐ飲み明かす!！」

「結局飲むのかよ!不摂生も大概にしなよ!？」

「さあ、覚悟しなさい魔理沙。今日こそ引導を渡してやるわ!」

「・・・仕方無いな、やるからには本気だぜ」

その声と同時に二人の少女が高く舞い上がった、もはや常識とでも言うかのように簡単に飛ぶね皆さん。外の世界では生身で飛ぶのはISかフライトユニットじゃないと無理なのに、どうやら物理法則とかは気にしちやいけないらしい。というのがこれまでの幻想郷での生活から俺が学んだことだ、帰るときに俺の中の常識が摩り替わっていないことを祈るばかりであるが。それ以前にこの状況をどうにかしなければいけないような・・・。

「ちよつと、二人とも待つて・・・。」

「魔符「スターダストレヴァリエ」!」

「日符「ロイヤルフレア」!！」

「なっ!？」

時既に遅し。それぞれのスペルが発動して大量の弾幕が展開された、

綺麗だなぁ・・・と余裕をこいてるわけにもいかず。ぶつかり合う弾幕による爆発を持ち前の騎士の身体能力で避ける、幸いにも空中戦だから弾幕にさらされてしまうという事は無い。しかし、流れ弾は文字通り弾雨として降り注ぐ・・・恐ろしいなこれは。避け続けるのは大変だが、だからと言って死神の瞳を使うのもこのタイミングでは不審者扱いの種になりそうなので悪手。弾幕に自分からさらされに逝くのは気が引ける。それに、俺の話も届かないくらいに二人は弾幕勝負に集中してしまっている。

「これは・・・避難したほうが良いか」

しかし、どうやら俺の発言はなにかしらの引き金になってしまったらしい。歩き出そうとした途端に目の前の床にぶつかった。既に流れ弾でぼろぼろになってしまっていた床が崩れるには既に十分だったようで、びしびしと音を立ててヒビが入っていく。しかもその中心付近にいたため、回避は不能。

「嘘・・・だろ？」

足場が崩れ去り、空中に一瞬浮遊した瞬間。真っ暗な穴へと重力に引かれて俺は落下していったのだった、このときほど物理法則歪めと思ったことはおそらく無いだろう。

104・番外IF その7「いざ、紅魔館内部へ」(後書き)

どうでも良い作品情報

セッシーも幻想入り・・・させようかなw

105 将来のために1（前書き）

最近、書く時間が中々取れない日が続きます。

今までの作品のように凍結はしませんのでそこはご安心いただける
と嬉しいです

105・将来のために1

カタカタカタ

とある町の一般住宅、その中で半怪我人の如月音羽はその身体を酷使しながらも備え付けられた量子コンピューター5基をフル稼働させながら今日も今日とて外部から侵入するコンピューターウイルスの駆除に追われていた。もはや約束となりつつある世界の揺るがした天災、篠ノ之束の猛烈なラブコールであった。

「まったく、少しは休ませろってんだあの駄兎め・・・」

介護兼様子見で泊まりに来ている更識家党首も寝付いたころ、一人監視システムに送られた本人にとっては忌々しいプレゼントによって就寝できずにいた。ひたすらにキーボードを叩き続け、ウイルスの駆除と防壁の展開にネットワークの再構築をそれぞれ平行して続けていた。自作の学習型AIを搭載した量子コンピューターが作業の補助に当たってくれているのだが、それでもギリギリの状態。流石ISを作り出しただけある、と内心舌を巻きながら眠い目をこすりながら手を動かし続ける。

「対消滅プログラムランダム書き込み開始、ネットワーク防壁多重展開ランクB。・・・もう寝させてくれよ・・・」

時刻は日付が変わり、午前2時。夏休み前の期末テスト（皆は地獄だったらしいが）を終えてIS学園の遅い夏休みに入っただけの初日。美月が先日の話通りに俺の家に全快まで宿泊しに来て、高校生にもなって羞恥心全開での二人で入浴（一人じゃ身体も洗えないし、水没のおそれ有りということ）だったり花嫁修業ということの上達

した料理の腕を拝見したり、なぜか口移しでスープを飲まされそうになったりしていた。他には・・・何かあつたらと同じベッドで寝ようとしてきたり、まあ、結論を言えば疲れはしたが昔みたいに戻ったみたいで楽しかった。

「怪我人くらい労わってくれないかねえ、あの天災さんは・・・」

まあ、止めさせるための方法が現状のままでの篠ノ之博士との協力責任放棄が納得できない俺はそんなのするはずが無いのでこうしてウィルスと言う名の嬉しくないし、疲れるラブコールが週1で届くんだがな。住居周辺からライセンス提供先の動向までリアルタイムで探査&監視をしている高度ネットワークシステムに直接送信してくるから、市販の対策ソフトは勿論、自作してもすぐに書き換えられる。機械任せにできないからこそ毎回リアルタイムで根気勝負が続くんだがな、ちなみに敗北するとデータが全て持つていかれる。別のに移すのもなぜか無意味らしいので今は諦めているところだ・・・」

『やっぱ流石だねおつくん、じゃあ身体には気をつけてね』らぶりい束さんより？』

「・・・や、やっと終わった・・・」

画面にそんなメッセージが一つ表示され、ウィルスの配信がぴたりと止まる。今回は終結まで2時間、居間までのに比べれば短いほうだ。長い時は6時間もだらだとやられていたこともある、まあ、天災なりに労わってくれたのだろうが、できたらこんな時間に始めないで欲しいというのが素直な気持ちなんだがな。適度に腕試しにはなるから、腕が鈍らないで良いんだが。

「はあゝ、疲れた。やっと寝れる・・・おやすみ」

ばたんとベッドにそのまま倒れこむ、金属製の松葉杖を放り投げて音羽は寝付いたのだった。しかし、この時にベッドの一部の不審な膨らみがあったことに気づくことは無かったのだった。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・てへ」

朝目が覚めたら幼馴染の少女がベッドの上で布団越しにのしかかっていた、いや、え、どういうこと？ 一体何が今起こっているのだろうか。そして足はほぼ動かないし、腕は力がほぼ入らないから意味無し、朝っぱらから俺はどんな状況に遭遇しているのだろうか。

「おい朝から何をしてるんだ？」

「ん、おはようのキス「mk」、こいつをつまみ出せ」なんでよ」

「俺が簡単にはいそうですかってやるわけないだろ、つか奪おうとするな馬鹿」

「ちえゝ、せつかく忍び込んだというのに・・・」

「なんか言ったか？」

「なんにも」

PICのみを起動させて、無理矢理擬似的な身体に合わせたフレームを作って起き上がる。慣性操作するのはなんとも便利なものだな、まさかISの機能を生活補助で使うことになるとは思わなかったけども。

美月をmk？のワイヤーアームで引き摺り下ろし、抱えたまま一階

の居間へと降りる、誰だ、束縛プレイとか言った奴。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「はい、あ〜ん」

「・・・あ、あーむ・・・むぐむぐ」

今日の朝食は美月特製のスクランブルエッグにブロッコリーとハム、焼きたてのトーストにブラックのコーヒー。ちなみに今はスクランブルエッグを食べさせられているところだ、腕は一応動くんだが、美月曰く「力が入らないなら無理に動かすな」らしい。確かにぶるぶる震えてしかも微かな痛みはあるけども・・・まあ、無理はいけないか。どうも俺は無理をし過ぎる傾向にあるらしい・・・一夏のこともおいそれと注意できる立場じゃないなこれじゃあ、無理して死んだら話にならない。

「美味しいな」

「でしよう？私だって腕上げたのよ」

「まあ、まだまだだな。胃から攻めるには程遠い、精進しろよ？」

「それを音羽に言われたらどうしようも無いわね・・・」

なんでも、誰かは言えないがこいつにも本気で好きな奴ができればいい。ちなみに臨海学校の時のことを聞いたが、良く覚えてないらしい、どれだけ飲んでたんだよこいつは・・・まあ、そんなわけ、好意を寄せている相手がなんと一夏並みに鈍感な男らしく日本古来の方法である胃攻めに至ったとか。しかし、身近な練習相手が見つからなくて俺になっただけらしい。なんでも、更識の人間はおっ

さんか子供、もしくは権力狙いの馬鹿ばかりで嫌らしい・・・まあ、勘違い男とか相手は嫌だよなあ。

「俺が治ってスケジュール合ったら実技指導してやっても良いぞ、月末になりそうだけど」

「本当！？じゃあその時はお願いね！」

「お、おう」

なぜか凄い食いつきだな、そんなに切羽詰っているほど腕は悪くないと思うんだがなあ。だって、一般的には十分過ぎるくらいなもの、そこらの専業主婦の方々には余裕で圧勝できるレベル、一夏には程遠いという点があるがな。いやまあ、それだけ一夏がハイスペック主夫になっているということなんだがなあ、あいつは一体将来どうするつもりなんだろうか。ISに関わってしまったとは言え、あのスキルは将来の嫁泣かせだぞ。

「はい、あゝん」

「ここまで練習する必要も無いもすが」

まあ、楽しそうだから良いか。人の口にねじ込むようにするのはどうかと思うが・・・。

105・将来のために1（後書き）

どうでも良い作品情報

ポメラが届けば執筆時間も取れるはず・・・それまでに辛抱だと良いなあ

106 え、え！？（前書き）

さあ、新婚旅行（笑）の始まり・え？

106 え、え!?

「んふふ」

「はあ、はあ、はあ・・・」

スタンロッド機能内蔵松葉杖（金属製）を今日も今日とて使って住み慣れた何時もの道を美月に支えられながら歩く、道行く中で向けられる微笑ましい視線に俺は納得行かず、反して美月はどこか嬉しそうにさつきからニコニコ笑顔だ。近所のおばちゃんも「あやや、楯無ちゃんも良い人見つけたねえ」とか言ってる、どういう意味だよ？それを聞いても笑ってはぐらかされたけども・・・解せぬ。

「それで、俺はなんで連れられているんだ？安静にしろって言ったのはお前じゃなかったか」

「だからって何もしないのも身体に悪いでしょ、だから・・・これよ」

そう言つて美月が差し出して来たのは・・・

「えーっと、え、怪我人に旅行逝けと？」

「字が違つわよ、まあ、息抜きでみたいな？」

「時間と余裕はまあ、あるけどもな。・・・二人でか？」

「うん、中学の時に二人で行けなかったじゃない。私引越ししちゃったし」

「・・・まあ、怪我人が相手に良いなら・・・というかもう準備しちゃってるんだろ」

「大正解 じゃあ、行きましょ！」

「了解」

そんなわけで一泊二日の旅行（行き先不明、南国つてことは分かつたけども・・）に美月と行くことになった。というか、現在進行形で移動中だ・・。久しぶりに二人きりつてのも良いか、積もる話もあるだろうし。

「あかかかつかかか！」

「なんでお前はそんなに余裕なんだ、っていうか怪我人に使う移動手段じゃねえよ!!」

下、空に反して荒れ狂う海上を疾走させられていた。揺れる揺れる上下左右にぐわんぐわんと。ねえ、ホバークラフトって海面を円錐形に削りながら進んで行く乗り物だったわけ！？さつきから浮遊感ばかりになっただけで、海面を滑るどころか浮かんてるんじゃないか？そりゃあ、怪物マシンにある程度は乗ったことはあるが、原則とか基本を外れた奴は経験ないぞ・・・海面を飛ぶホバークラフトなんて・・・そんな馬鹿な。

携帯のGPSを起動して座標を求めると、ハワイ付近であることがわかった・・・え、どういう速度で照るんだこれは・・・日本からハワイまで二時間って・・・普通に旅客機でも行きで6・7時間かかるのに二時間ってなにそれ怖い。もしかして俺は今結構世界の

常識を越えた場所にいるのではないだろうか、いや、ナノマシンで一部の常識ぶち壊した俺が言えることじゃないけども。ミリアさんの教えどおり「常識に囚われるな！」を実行しているだけなんだがな。今思うと結構アレなことばかりだな俺。

「ね、早いでしょ？」

「確かに時間はかからないと思うが・・・やりすぎだろ」

「使えるものは何でも使う、そうでしょ？」

「・・・（反論できない）」

ぐう、そこでそれを言うてくるかこいつは・・・俺がミリアさんの教えを否定できないし実行していることだからなあ。まあ、なんでも分別付けずってわけではないけども、家族・親しい友人・無関係な人は入れないし。基本、個人的な視点にならざるを得ないが「悪事を働いてそれなりの地位にいる人間」「自己本位の人間」にほぼ限られる。だからこそ、ナノドクターの時も司令官（だったものにする予定）をそそのかして今の状況にいるわけだが・・・考えると俺もそこそこの裏の人間だなあ・・・。

「さあ、運転手さん。もつと飛ばしちゃって!!」

「了解、旦那もすっかり掴まってな!!」

「アホな速度出す時点でおかしいわボケー!!」

結局、その後の30分間は記憶に残る地獄であったことをここに記しておく・・・こんな絶対おかしいよ!!



「・・・・・・・・・・」

「返事が無い、ただの屍のようだ」

「違うわ!!」

「あら、生きてたのね」

「勝手に殺すな馬鹿！死にそうなくらいだったけどさ！」

超音速航行の途中、俺の座っている座席のシートベルトが壊れて外れ、人間スーパースポーツボールとなって10分間船内を跳ね回ることになった。注意書きにあった「荷物は全て船内持ち出し禁止」を身体で理解する羽目になってしまった、まるで高速道路に投げ入れられたかのような状況だ。ISの絶対防御が発動して衝撃だけ受けるという状況になって気持ち悪かったしな、専用機にこれほどまでに感謝したことがあっただろうか。何が悲しくて身体が満足に動かない状態で跳ね回らせられなければいけなかったのか、世界中の人間に聞いても答えは聞けないだろう、俺だって返答に困るしか無いけど。最近何も無かったと思ったらこれかよ、せめて万全な状態で来てほしかった(?)

「で、ここはどこだい？」

「ハワイの外れ、VIPだけが来れる特別リゾート。いや、知り合いにペアチケット貰っちゃってね。てへ」

「知り合いが何者かは聞かないでよくよ・・・」

じわじわと強い日差しが肌に照りつけて焼こうと迫ってくる、うあゝ暑い・・・汗がもう出てきたよ？

「まあ、まずはホテルに荷物置きに行こう。じゃなきゃまともに観光できないだろう」

「流石、マイダーリン」

「・・・いつから決まったんだよ・・・調子良いやつ・・・」

「じゃあ、ささつと済ませて海行きましょ！」

「オッケー」

トランクに詰められた荷物を今更ながら量子変換して格納し、松葉杖（ショットガン機能内蔵・金属製）を突きながら美月の腰に腕を回してエスコートしながら歩き出した。ああ、暑いよこれは・・・右目が早速医療用ナノマシン入れてないから加熱しはじめた・・・。

106 え、え！？（後書き）

どうでも良い作品情報

音っち爆発しろ！by 作者

107・将来のために・・・2（前書き）

季節感完全無視・・・作者的には書いてる間寒く感じましたw

107・将来のために・・・2

ホテルに荷物を投げ入れてこれだけは流石に・・・とPICとmk？のフル活用で海水浴用のパンツ（擬似シールドエネルギー発生装置内臓）に着替え、加熱防止のためにサングラスをかけた俺は菱形のクリスタルの飾りが付いたネックレスを短めにしてISの待機形態をポケットに仕舞い海水浴場に美月と並んで来ていた。

「あゝ、暑い熱い・・・」

「そうね、いきなり移動だからバテちゃうわ・・・」

じわじわと肌をこれでもかと焼こうと輝いている太陽をちらつと見上げて俺達は早速暑さに参っていた、ああ、これは確実に焼けるなふと、美月へと視線を巡らせる、髪に合わせた水色で白いフリルが付いたビキニタイプの水着だった。しかも固定用のホックが後ろではなく前に付いているタイプ、ああいうのって波に押されて外れやすい普通のやつ改善案として作られたらしいよ？本当かどうか知らないけど、いつだかチエルシーさんが言ってたからおそらくそうなんだろう。

「似合ってるな、それ」

「そう？なら良かったかな」

「あ、ああ・・・」

ついついその無邪気な笑顔に見惚れてしまっていて、まごついた返事を返してしまう。・・・うう、こいつも昔は普通の女の子だったのに、臨海学校のこととか大人びたところとかのせいか「一人の女性」として嫌でも意識してしまう・・・なんで俺がこいつにそんなこと思わなきゃいけないのかわからないが。・・・これが普通の思

春期の男の普通の思考なのか？良くわからん。

「うーん、これくらい動けば十分か」

「無理はしちゃダメよ？」

「わかつてる」

どうやら、身体は思っていたよりも回復が早かったらしい、ところどころぎこちない部分は残っているが思い通りに動かせるようになっていた。二日でこの回復って・・凄いなホントに、まあ、一般人レベルで動けるなら今は十分だな。どうやらエクステンデッドは身体の損傷も早急に修復されるらしい、これがミリアさんが教えてくれた異常なまでの自然治癒か・・つくづく普通じゃないことを実感させられるな。別に困らないし、知り合いに差別する人もいないし・・・それ以前にチートスペックをデフォルトにしたミリア式特訓のほうのアレだけだな。使用人の大半がそれのおかげでメイドなのに徒手空拳で海兵隊員を伸していったり、城壁から落とされても無傷だったりっていう状態だったし。今思うと中々にアレだったな、あそこは・・いかん、考え始めたらキリがない。

「じゃあ、早速・・」

「その前にこれ塗っておけ、後で痛むのは嫌だろう」

ぱつと手元に取り出したのはとある化粧品会社で販売されている日焼け止めスプレー、皮膚表面に吸着して専用の薬剤を使わない限り紫外線反射効果を持続し続けるという代物だ。俺は医療用ナノマシンを常時服用状態だから加熱防止として使っているがな、500m1入りで800円という値段だがモデルから芸能人に海水浴客に人気なロングセラー商品・・らしい。しかも、落とし忘れても生体分解性だから人体にも安全という素晴らしさ・・広告乙・・。

「あら、気が利くわね音羽も。良い旦那さんになれるわよ」

「そりゃあ、嬉しい限りで。って、自分でできるか？」

「一人でもできるようにスプレーなんでしょ？」

「まあ、そうらしいがな。いや、使い慣れないと塗り残しとかがあるからであつてな」

「じゃあ、あつたら頼むわ。その前に・・・うふふ」

「なんでそれが手をわきわきさせながら俺に迫ることになるんだ！？わ、やめ、待つてアー！！」

まあ、スプレーを吹きかけられながらしつかり塗るという名目で逆セクハラされたと言っておこう・・・うん。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「海だー！！海よ海！早く泳ぎましょ！！」

「わかった、わかったから腕を無理に引っ張るな馬鹿」

「だって、久しぶりの海よ！？しかも初めての二人きり！」

「なんで二人きりを強調するんだお前は・・・」

しかも、さつきから「カップルみたいにしておかないと危ないのよ？」とかって言われてそれを理由に抱きついて来て歩くたびに女子特有のしかもコイツの場合平均よりあるアレが当たる・・・気づいてないのか？いや、この何か企んでる表情は「当たってる？当ててるのよ、なはははは！！」みたいな感じが、おおかた俺の生娘ばりの反応を楽しもうとしているんだろ？がそう簡単に行かないのが世の中という奴なんだよ、多分。

「どうしたの？さつきから落ち着かないみたいだけど」

「美月さんや、当てるのは少々よしてくださいませんか」

「なんで？気にすること無いじゃない」

「いや、さつきから気になって落ち着かないんですがね」

「なに？触りたい？じゃあ夜にくらでも触らしてあげるわよ？」

「そういう意味じゃねえよ、もう少し男の視点で考えて貰えませんかねえ！？」

誰だって色々思うところがあると思うんだ、今の状況であれこれパニックになりそうになるマイハートとかさあ。こいつは俺に溜めるだけ溜めさせて何をしたいんだ、俺は押さえ付けるので精一杯なんだけども・・・これこそなんでこいつでry

「はあ、心臓がバクバク言ってるし・・・」

「年じゃない？」

「まだ17だったっつの！つか、それが原因じゃねえよ！てか、叫ばせんな！」

「じゃあ、私を意識しちゃってるとか？」

あう、ぬう、むぐ・・・一瞬見えた艶やかな表情についドキッとしてしまう、ああ、美月もこういう表情できる女なんだなと実感してしまった。ううむ、まさかこいつに女を感じるようになるとは・・・俺も変わってきたなあ、というか余計心臓がバクバクしてきてるんだが・・・破裂しそうとはこういうことを言うのか？そうなのか？

「あ、いや、まあ、その・・・うん」

「へえ、音羽も男の子だねえ」。にやははははは」

「・・・ふへ？」

「ん？いやあ、面白い表情見れて私は満足よ？」

「な、な、な・・・お前なあ・・・はあ」

そんな幼馴染の変化を感じて感慨にふけりながらも、俺の心臓は激しい鼓動を止めなかった・・・orz

107・将来のために・・・2（後書き）

どうでも良い作品情報

ポメラ注文したおかげで懐が冷え切ったw

108・将来のために・・・3（前書き）

キャラクターナシサーン！！そんなお話

ポメラ執筆のです

108・将来のために・・・3

そして抱きつかれたままそれこそ美月だけ嬉しそうにして海水浴場に到着したのだった。その間中ずっと俺の心臓がバクバクして大変だったのは言うまでもなかった。

「着いたわよ」

「やっぱ賑わってるな、夏期休暇に入ったからか？」

ビーチは水着を着た男女があちらこちらに見えている、あ、あれは確かS.O.Yのヨーロッパ支社の最高経営責任者じゃないか？あつちには太陽光発電の第一人者のエルデリック・ベリアだな、まあ、こういう経済界の重鎮の中に俺も実際は含まれているんだがな。某マイクロなソフトの現CEOともスコン仲間でたまにアメリカの町中のバーガーショップで待ち合わせたりして食事することもあるしな。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「あれって、中野支社長じゃない？」

「おお、そうだな。別にVIP待遇じゃなくても良かったんじゃないか？」

「だって、それだと二人つきりになれないじゃない・・・」

「？・・・何だって？」

「な、なんでもない・・・／／」

「そうか・・・まあ、久しぶりに遊ぼうぜ。——二人きりなんだろ？」

「う・・・うん／／」

なんでそこで顔を赤くするんだ？なにモ下ネタは言つてないし、女子が嫌うような話題もフツテないぞ。俺の中の女子の嫌う話題が猥談くらいしか思いつかないが……。他になにかあるのか？いつだかジャックが「女子のほうがえっちい話は過激なんだよ？」って言つてたからそれもどうなんだろう……。まあ自重はするけども。俺は紳士を目指してるからな、騎士道とかなにそれ美味しいの？状態だけどな。

「それはどうなのよ？」

「いや、据え膳食わぬはなんとやらを実行してるからな」

食事のお誘いは例え敵対組織だろうが、ライバル企業だろうが、スパイだろうが、俺のこと狙ってる謎の組織だろうが必ず行く。だって、タダ飯のお誘いならどこその貧乏巫女だつて行くだろう、多分……。え、意味が違う？知るかそんなこと。

「そう、そうかぁ……。うふふふふ（黒笑）」

「怖いぞお前……」

なんだろうか、俺の経験が警戒しろつて叫んでいるような気がする。主に貞操に……。どういうことだよ。まあ、ハニートラップは余裕でスルーしてるけどな、というか、中学の時に仕掛けられたときは色々驚いたけどな。中学生とそういうことはできないだろうがよ、いや、高校生になつてからもあつたけどさ。まあ、ブロンド美女のときは危なかつたけどな主に命的意味で。決してナニをしそうになつたわけじゃない、懐かしさで警戒心が薄れて危うく俺のじゃなくて本物のマグナムを撃たれそうになつたからなあ。……。最近地の文がアレになりやすいのは気のせいだろう。

「じゃあ、泳ごう?」

「あ、ああ・・・」

いかん、一度意識したら思い出して普通に話せない。このままじゃホントにただの純情少年になっちゃうじゃないか、俺はクールに應對してこそだろう。それこそ、一夏なみの鈍感さで・・・いや、それは嫌だな。あんな鈍感には例えいくら金を積まれたとしてもなりたくない。

「どうしたのよ? 具合悪いの?」

「あゝ、いや、違うんだ。気にするな」

「そう?」

「ああ」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「そうれえ!!」

「んな!? ぼつふえわあつ!?!」

どこか既視感を感じながら俺は美月に海水をぶっかけられていた、さつきから口の中がびっくりするほどしょっぱいんですが、うわ、口の中が急速に渴いていく・・・塩辛いなこりゃ。やられてばっかりでいる俺ではもちろん無いがな、しっかりお返しは3倍にあげますよ。ええ」

「そおい!」

「きゃあゝやったなゝ!」

「フッ、お返しはまだまだあるぞ?」

「なら、私だつて！」

「ハッ、かかつてこい！ 返り討ちにしてやる」

「大口叩いておいて負けないでよね！」

「誰に言ってるんだい！？」

その後も、年甲斐も無く水のかけあいを延々と続けたのだった。周囲の微笑ましいものを見るような優しい視線が向いていたことなど俺らには気づく暇も無かったのは言うまでもなかった。

□ ■ □ ■ □ ■ □ □

「はふっ、気持ちいい」

「そうだな」

日中を水のかけあいからバナナボートに加え、サーフィン二人乗りにスキューバダイビングとで遊び尽くした。正直すでに遊び疲れてくたくたになっているところをホテル最上階のビーチを一望できる大型ジャグジーに浸かっている、吹き出される温かいバブルが適度に身体をほぐしてくれる。ああ、リラックス♪ 美月も緩んだ表情で夕日を眺めていた、良い眺めだな。

「いや、今日は最高に楽しかったわね」

「そうだな、俺も楽しかったぞ」

ぶくぶくとバブルが弾ける音が聞こえる、既に夕日はほぼ沈んで良い感じの雰囲気ができあがっていた。並んで浴槽に沈められたプレート連結タイプのイスに腰掛けている、二人して警戒心ゼロ、とつとつに緩みきった表情からどれだけリラックスしているかがわかるだ

ろっ。あぁ、良いわあ。

「ねえ、音羽」

「なんだ？」

「音羽はさ、好きな人いる？」

「なんだいきなり、藪から棒に」

「いいから、答えて」

「まあ、LIKEならいくらでもいるぞ？」

「・・・LOVEは無いの？」

「・・・誰とは言えないくらいにわからんなそれは」

「・・・そう」

なんだ、そんなに複雑そうな表情して。俺が何か悪いことしたみたいじゃないか、自覚は無いけども。だって、とらウラは妹みたいなものだし、ジャックは・・・うん、あいつは普通に悪友。セシリアは・・・お嬢様、主人、妹・・・、美月は・・・幼なじみ、友人・・・決まらん。二人は・・・気になる人ってところか？親しいからか、長い付き合いだからかはわからないが。

「悪かったな、はつきりしなくて」

「ううん、それだけわかれば良い」

「そっか、さてと、じゃあもう上がろうぜ」

「うん、エスコートお願いね」

「了解」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……………」
「うひゃひゃひゃひゃ！！ばっかばっか」
「……………」

さつきから俺の頭をバシバシと叩いて来る見てくれは良い幼馴染の少女が、対暗部組織の現当主なんて俺は信じないぞ。というか、な
んでワイン出したんだウエイター…。まだ俺ら未成年だし…。っ
て痛い痛い！こいつ、酔ってるのに手刀でちゃっかり脳天狙いやが
って…………って痛い！

「おいこら、いい加減にしろよ…」
「ふん、こんにゃどんかんにはまだたりにゃいもん！ふんふん！」
「な、おまえ…。へぶっ！」
「ふにやははははは！」
「ごぶへっ！ふばっ！バルスっ！」
「ふんぬ、ふんぬ！」
「わ、おい、ごへっ！」

ほかすかと酔っていても学園最強の攻撃の雨が俺の頭部に集中して
降り注ぐこれって力加減してないから軍人が余裕でおねむになる威
力なんだよな。さつきから回避方向に狙って降りおろされている気
がする、俺になにか恨みでもあるのか！？ミリアさんに鍛えられた
おかげで全然気絶しそうな感じはしないけど、でもやっぱり痛い。

「ふんっ！」
「のわっ！？」
「おしおきっ」
「なにす……………」
「…………んっ」

こいつはどうやら相当酔っているらし・・・って、うええええ！！
？・・・なんで二月続けて俺は知ってる女子にお仕置きで唇を奪
われなければいけないんだ、もう、俺の心臓が爆発しそうなくらい
に跳ね上がってるんだが。うぬあああああああ！！！！

「ん・・・んふう・・・」

「・・・／／／／」

しかも、逃げようにも腕は関節捻られて動かせないし、頭に両手回
されて顔すら動かせない。もう、詰んだよ・・・更識の当主とキス
したとか。絶対先代さまがこれを知ったらキレて「責任とれ！」と
か言いかねない・・・どこか嬉しそうに言っている姿が思い浮かんだ
のは気のせいと思いたい。ああ、もうだめだこりゃ。酔いがこつち
にも回って来た・・・ううゝん・・・。ガクリ

□ ■ □ ■ □ ■ □

「んふふ、私だって。負けられないのよ」

「（気絶中）」

なにか聞こえたが、アルコールで気絶した俺にはわかるすべも無か
った・・・らしい。

108・将来のために・・・3（後書き）

どうでも良い作品情報

思ったよりポメラが早く届いたので、ストックは溜まる一方・・・だと良いな

109・胸囲の夜明け（前書き）

けして今回のサブタイは誤字じゃありませんのであしからず・・・
なんで楯無さん書くところなるんだろう・・・

109・胸囲の夜明け

「・・・・・・・・？」

重い身体を起こすと何か視界が極彩色の紫・どこか光沢がきらびやかな、そうだと合成繊維の光り方だやたしか。なんで合成繊維があるのかわからないけども、ワイン飲んで酔った美月にキスされてそのまま気絶して・・・そこから記憶が無い。あいつのことだからそういうことはしていないだろうけど、酔っているとなると心配になる。俺が男の本能を暴発させていないとも限らないし・・・。

「んう・・・・・・・・あん」

「！？・・・・・・・・！？」

どうやら、寝技（物理）をかけられているようだ。腕を引っ張られて関節がggg！視界を塞いでいるのは美月の・・・ブラだったみたいだ、その代われとか言った奴、すぐに代わってくれ。傷口をナイフで抉られるような痛みが連続で襲ってくるがな。ドキドキヨリズキズキが大きいという嬉しくない事実、というかセパレートタイプの部屋だったはずなんだが。仕切りのドアの鍵開けないと入れないはず、まあ、どうやら運んでくれたようだから文句は言えないが・・・ひとまず、肘から180度に曲げないでくれると助かる。

「んあ・・・・・・・・ふう・・・」

左腕がミシミシ言ってるんだけども、一応まだ怪我が完治してないんことわかって・・・ないだろうな。こいつには酒は飲ませられないな、酔ったこいつは酒癖が悪い。これだといつ酔いつぶされて襲われるかわからない。俺は普通の男として過ごしたいんだ、ホントに。

平穩を求めて何が悪いんだ。

「ほ、ほひほ！ひふひ！！（お、起きろ！美月！）」
「んにゅう・・・んあ・・・」

いくらエクステンデッドとは言っても人間にできない関節の動きも、筋肉も無い。結局は「人間」を底上げた身体能力というただだ、それに追従して「一死神の瞳」が移植された・・・らしいけど。って、耳元に届く美月の艶めかしい声が耳をくすぐる、正直、たまりません。でも、幼馴染に欲情するとか・・・普通は無いらしいっぽいです？まあ、確証はとったことない風の噂だけです。

「ッ~~~~~！！！！」
「んっっ」

あばばば、美月の豊富なアレが顔に当たって・・・ああ、俺のマイダーインスレイブが威力増加しそうなんだが。あ、なにかって？お察しください、俺の口から言うともうあれだから。羞恥プレイは嫌いなものでな、あくまでも騎士の俺がそういうのを言うのは無理。女王なら余裕で素面でも言っただけどもさ、俺は違うんだよ。というかぶっちゃけ恥ずかしい、どこの生娘だよって言いたいけど。悪かったな、そういう話題が苦手ですあ！

「うむ、むう〜！？」
「んふふ〜」
「ぷはっ！・・・うあ／＼」

ああああああああ！！！！むにむにと二つの双丘で顔を押しされる、そう思ったら瑞々しい太股で頭を挟み込まれる。今度は頭がミシミシ言ってるんだけど、このままじゃ二重の意味で死ねるんだ

が。どう一つとは言わないけどさ。

「mk2、Help!」

情けないが助けを呼ぶしかない、逃げるためだけに関節を潰すバカにはなりたくない。というか、なるやつもいないと思う。この状況で美月が目覚ますと絶対アレこれ言われる、それだけは避けなければいけない、主に俺の平穏な日々のために。既成事実など作ってたまるか・・・いや、もしもあるかもだからこれ以上重ねるわけにはいかないという回避もあるんだが・・・。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

仕方なくどうにか首を回してmk2を待機させているところを見ると、そこには一刀両断されて転がっている残骸があった・・・えゝ。スペアだから良いけどさ・・・あ、よりによってアクアナノマシンできれいにすっぱり・・・作るのにどれだけ苦労したと思ってやりますか・・・orz

□ ■ □ ■ □ ■ □

その後、美月に無意識の誘惑&羞恥プレイを強いられてしまった・・・。事が片づいたのはそれから一時間も経ってからなのはここだけの秘密である、ああ、もうこれはやばい。

「……………？どうしたの？」

「……………ん、ああ。なんでも無い」

悟られないように紅茶を一口飲む、ちなみに今は移動して屋上のテラスで朝食中。俺は場違いな蒼の上下ジャージ、けしてどこぞの聖徳太子をイメージしたわけじゃない。美月はなぜか紫のスリットが深く入ったチャイナドレスだけど……お前は一体どこへ行くんだ。

「ん、美味しいわね」

「そうだな……」

なんか凄いデジャブ……デジャブだったっけ、ああ、それすらも判断つかないくらいに慌ててる俺。これしきのことですぐまでなるなんて、落ち着け自分！なんにも無かったようなんだし、パニックになる必要は無いんだ。第一、ここが戦場だったら俺はもう死んでるぞ、be cool be cool……なんかいも言うが俺は生（ry

「なんかおかしいわよ？朝から」

「……俺の置かれていた状況を考えればわかるだろうがよ……」

「ああ、だからごめんって言うてるじゃないのよ。不可抗力よ」

「その不可抗力のおかげで俺は変な気分が調子が狂っているんだがなあ……誰かさんの過剰な――清き熱情で」

「熱情なんてぴったりじゃない」

「肉体的にも精神的にも悪いんだが、いやマジで」

「なによ、嫌だったわけ？」

そんな不機嫌な感じでむきゅって顔されても困るんだが、だいいちああいうのは好きな相手にやってやればいいだろ。無意識らしいけど、ねえ？好きな相手がいる少女が……っていうのはアレじゃん

か。というか、最近なんなの・・・週刊誌にあった女難の相は本当だったのか！？難すぎて笑えないわちくしょう。あのインチキ占い師め、こういうときだけ当てやがって・・・。

「じゃなくてな、だから・・・わかるだろ言わなくても」

「・・・はあ、結局音羽は鈍感なのね・・・」

「なんでここでそれが出るんだよ、まあ、物理的にも鈍感だけど」

ナノマシンを使い捨て覚悟で皮膚表層に析出させると高圧電流も600ボルトまでなら一回だけ防げる、まあ、その後は服がすべて某世紀末な物語のように弾け飛ぶことになるんだがな。勿論、身につけた機械もこんがり焼けるし生き残れてもスッパテンコー状態だからもしもの時に限られるだけだな。流石にそうする必要がある極限状況になることはあり得ないと思うが・・・いくら強化人間でもそこまでする必要はあつたんだろつか研究者たちよ・・・。

「・・・笑えないシャレね」

「まあ、そうだろうな。そんな事態にはならないと思うけど」

「そうなるまえに私が全部倒しちゃうわよ、「生徒を守るのが生徒会長の役目」でしょ？」

「おお、良く覚えてたな」

正確にはミリアさんの教えであり信条の「家族を守るのが主人の役目」だがな、俺はそれを生徒の長として置き換えていたが。しかも、「あなたも大切な家族よ」って言われたときは人生で初めてマジ泣きしたけど、あの時はとても嬉しかったのを覚えてる。

「なにせ、ISならまだしも生身で勝ったことないもの。そんな人の言葉を忘れるわけないでしょ」

「そりゃあ、嬉しいことを言ってくれるな」

「有言実行だつたじゃない、全部」

え、だつてねえ。そこで嘘をついても仕方がないでしょ、宣言したからにはそれを守るのが普通・・え、普通はそんなこと有言実行でできない？できないことは俺は言わないですよ、もちろん。いや、無理な時は無理って言っけど、物理的に不可能なときだけ。

「まあ、そこが良いところだけだね」

「ははは、そこまで更識当主に言われるとは嬉しい限りだな」

まあ、更識とか関係なく嬉しいけどな。

109・胸囲の夜明け（後書き）

どうでも良い作品情報

あと2話くらいで楯無さんデイズは終わる予定です、予定だからね
！？

110・GOTO in The・・・(前書き)

原作4巻の@クルーズの話のリスpektです

朝食を終えて内線で外出をホテルのロビー係員に伝えて屋上からジェットパックでフライングしたところだ、どこもおかしいところは無いはずだ。多分。

「いや、十分おかしいでしょ」

「・・・・・・・・？」

「そこからおかしいのよ」

俺の腰をぶら下がるようにして掴まっている美月が口を開く、なんだよ、別に空くらい飛んだって良いじゃないか。ホテルの屋上がちょうど良い高さだったんだからさ、天気が良いから飛行日和、景色も中々なんだし。まあ、上空200メートルを飛んでいるけどさつきから空を見上げて驚いている人たちが増えてるけど。なにか空にそこまで引きつけるものがあつたんだろうか、花火大会は夜だぞ？

「いやいやいや、みんな音羽を見てるのよ」

「・・・ああ、か弱い美少女（自称）をぶら下がらせてるからか？確かにみんな見上げるだろうな、下着丸見えだろうから」

「やあねえ、ちゃんとISスーツ下に着てるわよ」って違う！「こんなので飛んでるからよ！」

「・・・そんなに变か？しっかり飛べるように作ってるぞ、試験も何百回と繰り返したし」

「そういう問題じゃないわよ！」

「月に3台ペースで売れてるぞ、ここ一年で」

主にISのせいで引退させられてしまった飛行機乗りとかに。たしか増設バッテリーモデルがエジプトとかのアフリカ地域で移動用に

売れてるしな、そこそこ覚悟ある人しか買えないけど。たしかネット販売限定で250万だったっけか、ちゃっかり密林にも出品してるし。たしか去年に国連の各国首脳会議で各々がバツクルサイズので並んで空の旅とかやってたし。その後、お忍びで晩餐会に呼ばれたな。

「おお、ってここからじゃ俺だつてわからないだろ」

「だ・か・ら、空を飛んでるのが問題なのよ！」

「・・・・・・ISがあるじゃないか、どこが問題なのかさっぱりだ」

「・・・・・・もう、いいわよ・・・・」

なんだって言うんだ一体、俺の身体以外にツツコむところがあるだろうか。そりゃあ、ISみたいに豪勢に操縦者保護なんて積んでないけどジェットパックはしっかり安全対策（緊急時操縦補助AI・脱出用パラシュート・異常ユニットの切り離しその他etc・）はしてるし。思ってるよりも広告は出してるからな、知名度もそこそこだぞ。開発者の名前はそれなりの重要人物じゃないと知らないけど、販売窓口係として俺の名前出してるけど。

「まあまあ、ほら行くぞ」

「はいはい、どこへなりとも連れてってくださいようだ」「なんでご機嫌斜めなんだよ・・・・まったく」

まあ、それにおかまい無く俺は小型ジェットエンジン4基を全開に噴かすんだけどな。勿論、俺も美月も防護グラスかけてるし、すぐに美月を俺と平行になるように舵機が買えたし安全だ。

「え、ちょ。キャーーーーー！！！」

「無限の彼方へさあ逝くぞ！」

「字が違っうゝゝゝ！！！」

「細かいことは基にするな！」
「いいやあゝ！」

あ、美月はISに慣れすぎて衝撃とか反動には慣れてないんだっただか。まあ、知らんけど。国家代表ならこれくらい問題無いだろう、柔に鍛えてないだろうし。まあ、慣れないときついけどね。

□ ■ □ ■ □ ■ □

「……………ねえ」

「なんだいお嬢さん」

「なにそれ、いきなり気持ち悪い」

「気持ち悪いとはなんだよ！」

「…………でも良いわ、どういう状況よこれは」

「…………ん、GOUTOUって奴が店にいらっしやいましたね。
金出せヒヤッハーって状況だよ」

「うだうだ何言ってるんだてめえ！」

「ついでに言えば俺らが人質というおまけつきだ」

「嬉しくないおまけね…………」

「まったくだ」

まあ、俺らの強盗リーダー空氣にしての状況確認通りに、今日はシヨッピングのはずが突然アクセサリーショップにいかつい190はあろうかという典型的な小火器で武装した強盗ズ6名が押し入ってきたのだ。運悪く入ったばかりの俺ら二人がそのまま手錠かけられてピンチ！……………つばい感じた。いや、手錠後ろ手にかけられたらいくら国家代表と認定騎士とは言え逃げるなんて無理な話だ

よ、うん。ふつうは、ね。

「（なあ、どうせならこれも良い思いでとして楽しまない？）」

「（それもそうだな、その案乗った）」

「（じゃあ、もう少し口上聞いてあげましょ）」

「（ははは、良くわかってるじゃないか）」

まあ、悪役に良いとこ見せてあげようという優しさ（？）だよな。

とつくにミニエネルギー発生装置を足でアクセサリーのガラスケースにmk2で設置しておえたし。流石に賠償金払うのも壊させるのも嫌だし。これ終わったら通常営業にすぐ戻したいしね、まあ、店員さんの「またかよww」っていう苦笑いもあるし。なんか店長っぽい人の「やつちゃってくれよ、youたち！」みたいに期待の眼差しが・・・どれだけ多いんだよ。あ、店員さんが看板下げてる・・・わゝ、まんま風呂敷背負って鉄砲持った人間の絵だ・・・。なんで常備してあるのだろうか・・・。

「ははは、おまえ等さつさと貰って帰るぞ！てめえら下手に動いたらどうなるかわかってるよなあ？」

「はい、そうですよね。そんなもの当てられちゃあ怖いですよ」

「そうだなあ、こんなの撃たれたら痛いもんなあ？」

「ええ、日本人の私にとってはもうそりゃあ！怖いっす！」

「いやゝん、こわいお兄さんばかり！」

なんか、凄いノリノリだな。まあ強盗が日本人相手ってわかると油断してくれるのは嬉しいけど。そろそろ動くか、店員さんが缶コーヒー飲み始めたし・・・随分余裕ありますねあんたら。強盗ズは下っ端がガラスケースをたたき壊せなくて困ってるけど。まあ、RPG食らっても余裕のエネルギーシールドだし、グロックだろうがマチルダだろうがその程度じゃ意味ないというか弾の無駄だな。

「ところでお兄さんはイギリス知ってますか？」

「ああ？いくら強盗働く奴でもそれくらい知ってるだろうが。バカにするなよ！」

「そうですね、じゃあ認定騎士って知ってます？元王室警護剣士さん？」

「なっ、なんでそれを！？のうわっ！！」

ジェットパック一だけを射出させてリーダーさんにぶつける、なんか見た顔だなっって見当つけたら当たったし……。まあ、丁度良い。

「なっ！？兄貴っ！てめええ！！」

金属製の手錠をISのパワーアシストで引きちぎる、おそらくいきなり手錠を生身の腕で粉碎したように見えるだろうね。なにそれ怖い、まあ、そう見えるだけだな。それを目の前でされたから下っ端ABCがビビってるけど……。

「か、関係ねえ！撃て！！撃て！！」

「甘いわよ？」

そこで後ろから三人纏めての残像残しながらの水平蹴りが美月によつて叩き込まれる、首筋を狙ったそれはしつかりと意識を刈り取った。振るわれた脚に釣られて舞ったドレスの裾がぱさりと落ちる。別にスリットから覗いた美脚にみとれてなんかいないぞ……うん。

「さて、一丁やりますか」

「ええ、初めての連携ね実戦ね」

まあ、自信はあるけどな。俺と美月なら、これくらい余裕だ。

110・GOT in The・・・(後書き)

どうでも良い作品情報

次回、無双予定・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335v/>

訳有りの記憶喪失でも生きていける

2011年12月16日20時52分発行